

城久遺跡群

オオ
大ウフ遺跡・
ハンタ
半田遺跡



城久遺跡群
大ウフ遺跡・半田遺跡



大ウフ遺跡土坑墓出土遺物

序 文

この報告書は、平成19～21年度に実施した大ウフ遺跡、平成17・18年度に実施した半田遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

両遺跡は細地帯総合整備(担い手育成型)事業城久地区に伴い発掘調査を実施し、大ウフ遺跡では、須恵器壺に焼骨を納める火葬墓やカムイヤキ鉢・白磁皿・ガラス玉が副葬された木棺墓などの多様な土坑墓の他、15m四方の範囲に製鉄・鍛冶関連遺構が約20基集中して発見されました。また、半田遺跡では、いずれも土葬の土坑墓が4基発見されました。両遺跡で発見された土坑墓は12基で、喜界島の古代から中世段階の墓制の変遷がうかがえる貴重な資料であると考えられます。

今回の発掘調査報告書によって、喜界町民はもとより、多くの方々が大ウフ、半田遺跡について御理解いただくとともに、今後とも広く文化財の保護に御理解と御協力をいただくことができましたら幸いです。

おわりに、発掘調査やその後の整理作業に従事していただいた町民の皆様はじめ、発掘調査から報告書作成にいたるまで、御指導・御協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センター、その他関係機関の方々に対し、深く感謝の意を表しますとともにお礼申し上げます。

平成25年3月

喜界町教育委員会

教育長 晴永 清道

報告書抄録

ふりがな	おおうふいせき はんたいせき								
書名	大ウフ遺跡 半田遺跡								
副書名	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）城久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	12								
編著者名	野崎拓司 松原信之 澄田直敏								
編集機関	喜界町教育委員会								
所在地	〒891-6292 鹿児島県大島郡喜界町湾1746								
発行年月日	西暦2013年 3月15日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
大ウフ遺跡	鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 字大ウフ	469251	90-121	28° 18' 40"	129° 58' 00"	2007.4 ～ 2009.3	11,500	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）城久地区	
半田遺跡	鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 字半田	469251	90-119	28° 18' 45"	129° 57' 55"	2005.2 ～ 2005.7、 2006.2-10	1,500		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項	
大ウフ遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物跡85棟 土坑墓8基 焼土跡35基 土坑4基 溝状遺構26条など	土師器、須恵器、兼久式土器、越州窯系青磁、焼塩土器、白磁、初期高麗青磁、朝鮮系無軸陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、青磁、鉄製品、古銭、ガラス玉、輪の羽口、鉄滓、砂鉄、粘土塊、磨穀石など				本調査後の遺跡については消滅している。しかし、大ウフ遺跡の約半分（約12,000㎡）と本調査をほとんど実施していない半田遺跡については大半が（約20,000㎡）盛り土による保存が図られた。	
半田遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡5棟 土坑墓4基など	土師器、須恵器、兼久式土器、越州窯系青磁、焼塩土器、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、青磁、鉄製品、ガラス玉、輪の羽口、鉄滓、粘土塊、磨穀石など					
要約	<p>畑地帯総合整備事業（担い手育成型）城久地区に伴い調査された両遺跡は、海岸段丘上に立地する古代～中世の集落跡である。集落跡は掘立柱建物跡を中心に構成され、その数は90棟である。</p> <p>また、建物跡に隣接するように土坑墓が検出されている。土坑墓には大ウフ遺跡では火葬墓・木棺墓・土葬墓、半田遺跡では土葬墓のみが見られる。遺物では、中国や朝鮮半島産の陶磁器の他、本土系の土師器や須恵器など島外産の占める割合が非常に高いという特徴がある。また、大ウフ遺跡では15m四方の範囲に製鉄・鍛冶関連遺構が20基ほど確認され、中でも南西諸島、更には鹿児島本土でも事例のない12世紀代の製鉄関連遺構の発見は重要な成果である。</p>								

例 言

- 1 本報告書は、畑地帯総合整備事業（担い手育成型）城久地区に伴う大ウフ遺跡、半田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は主に大ウフ遺跡を平成19～21年度、半田遺跡を平成17・18年度に喜界町教育委員会が、鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備係）の受託事業として、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成は、喜界町教育委員会が主に平成23・24年度事業として鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに実施した。
- 4 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高による。
- 5 遺物番号は全て通し番号とし、本文及び挿図、図版番号とも一致する。
- 6 遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。遺構は10分の1もしくは60分の1、遺物は3分の1を基本とする。
- 7 発掘調査（当時）については文化庁記念物課主任調査官坂井秀弥氏、東京大学史料編纂所教授石上英一氏、熊本大学教授甲元眞之氏、琉球大学教授池田榮史氏、鹿児島女子短期大学准教授竹中正巳氏などの指導を受けた。整理作業（当時）については、文化庁記念物課調査官近江俊秀氏、国立科学博物館人類史研究グループ長篠田謙一氏、沖縄県教育庁文化課主幹盛本勲氏などの指導を受けた。

第VI章自然科学分析については、札幌大学高宮広土氏・千田寛之氏、東京大学大学院新領域創成科学研究科米田穰氏・覚張隆史氏、奈良文化財研究所田村朋美氏、鹿児島大学名誉教授西中川駿氏、土井ヶ浜人類学ミュージアム松下孝幸氏、松下真実氏に玉稿いただいた。

遺物俯瞰写真の撮影については、鹿児島県立埋蔵文化財センター吉岡康弘氏・辻明啓氏の協力を得て行った。
- 8 本書の執筆、編集は野崎、松原、澄田が担当した。
- 9 出土した遺物は喜界町教育委員会が保管し、展示・活用する計画である。

目 次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
道跡位置図
例目

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 大ウフ道跡調査の経過	4
第4節 半田道跡調査の経過	4

第Ⅱ章 道跡の位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第Ⅲ章 城久道跡群の調査概要

第1節 調査の道跡状況	8
第2節 調査の成果	8

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法	13
第2節 発見された遺構・遺物	13
第3節 基本層位	13

第Ⅴ章 大ウフ道跡発掘調査の成果

第1節 遺構	
1 確認・試掘調査	19
2 本調査	21
(1) A地区	24
(2) B地区	63
(3) C地区	76
(4) D地区	100

第Ⅵ章 大ウフ道跡 自然科学分析

第1節 鹿児島県宮野町大ウフ道跡出土の人骨	159
第2節 宮野町大ウフ道跡出土ピットから出土した炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS測定)・炭化村層位同定	161
第3節 大ウフ道跡遺物が出土炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS法) 及び層位同定	165
第4節 大ウフ土坑墓出土炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS法) 及び層位同定	169
第5節 宮野町大ウフ道跡出土のウシ遺体	173
第6節 宮野町大ウフ道跡 (平成19~21年度調査) 出土のウシ遺体	179
第7節 大ウフ道跡出土ガラス玉の調査	186
第8節 城久道跡群大ウフ道跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査	190
第9節 城久道跡群出土骨の炭素・窒素安定同位体分析	204
第10節 大ウフ道跡より検出された植物遺体	208

第Ⅶ章 大ウフ道跡 基礎資料

第Ⅷ章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法	261
第2節 発見された遺構・遺物	261
第3節 基本層位	261

第Ⅷ章 半田道跡発掘調査の成果

第1節 遺構	
1 確認・試掘調査	263
2 緊急調査	274

第Ⅸ章 半田道跡 自然科学分析

第1節 鹿児島県宮野町半田道跡3号墓出土の人骨	276
第2節 鹿児島県宮野町半田道跡出土の中世人骨	278
第3節 宮野町半田道跡出土の動物遺体	298
第4節 半田道跡出土ガラス玉の調査	301

第Ⅹ章 総括

写真図版

挿 図 目 次

第1図 城久造跡群位置図	第57図 焼土跡18号	47
第2図 主な竈内遺跡位置図	第58図 焼土跡19号	47
	第59図 砂鉄ビット	47
	第60図 溝状遺構1号出土遺物	49
<大ワフ遺跡>	第61図 A地区Ⅱa層出土遺物①	50
第3図 大ワフ遺跡遺構配置図	第62図 A地区Ⅱa層出土遺物②	51
第4図 大ワフ遺跡調査出土遺跡	第63図 A地区Ⅱb層出土遺物	52
第5図 表採・焼土等出土資料	第64図 A地区Ⅱc層出土遺物①	53
第6図 A地区Ⅱa層出土遺物①	第65図 A地区Ⅱc層出土遺物②	54
第7図 竈立建物跡①	第66図 A地区Ⅱd層出土遺物	54
第8図 一括遺物	第67図 A地区柱穴内出土遺物①	56
第9図 竈立柱建物跡1号	第68図 A地区柱穴内出土遺物②	57
第10図 竈立柱建物跡2号	第69図 A地区柱穴内出土遺物③	58
第11図 竈立柱建物跡3号	第70図 A地区柱穴内出土遺物④	59
第12図 竈立柱建物跡4号	第71図 B地区遺構配置図	61
第13図 竈立柱建物跡5号	第72図 B地区Ⅱa層出土遺物	61
第14図 竈立柱建物跡6号	第73図 竈立柱建物跡23号	62
第15図 竈立柱建物跡7号	第74図 竈立柱建物跡24号	62
第16図 竈立柱建物跡8号	第75図 竈立柱建物跡25号	63
第17図 竈立柱建物跡9号	第76図 土坑墓4-5号①	64
第18図 竈立柱建物跡10号	第77図 土坑墓4-5号②	65
第19図 竈立柱建物跡11号①	第78図 土坑墓1号①	66
第20図 竈立柱建物跡11号②	第79図 土坑墓1号②	67
第21図 竈立柱建物跡12号	第80図 B地区柱穴内出土遺物①	68
第22図 竈立柱建物跡13号	第81図 B地区柱穴内出土遺物②	69
第23図 竈立柱建物跡14号	第82図 C地区遺構配置図	70
第24図 竈立柱建物跡15号	第83図 竈立柱建物跡26号	71
第25図 竈立柱建物跡16号	第84図 竈立柱建物跡27号	71
第26図 竈立柱建物跡17号	第85図 竈立柱建物跡28号	72
第27図 竈立柱建物跡18号①	第86図 竈立柱建物跡29号	72
第28図 竈立柱建物跡18号②	第87図 竈立柱建物跡30号	73
第29図 竈立柱建物跡19号	第88図 竈立柱建物跡31号	74
第30図 竈立柱建物跡20号	第89図 竈立柱建物跡32号①	75
第31図 竈立柱建物跡21号	第90図 竈立柱建物跡32号②	76
第32図 竈立柱建物跡22号①	第91図 竈立柱建物跡33号	77
第33図 竈立柱建物跡22号②	第92図 竈立柱建物跡34号	78
第34図 A地区Ⅱa層出土遺物①	第93図 竈立柱建物跡35号①	79
第35図 A地区Ⅱa層出土遺物②	第94図 竈立柱建物跡35号②	80
第36図 土坑墓1号	第95図 竈立柱建物跡36号	81
第37図 土坑墓2号	第96図 竈立柱建物跡37号	81
第38図 土坑墓3号①	第97図 竈立柱建物跡38号	82
第39図 土坑墓3号②	第98図 竈立柱建物跡39号	83
第40図 焼土跡1号	第99図 竈立柱建物跡40号	83
第41図 焼土跡2号	第100図 柱穴列	84
第42図 焼土跡3号	第101図 竈立柱建物跡41号①	85
第43図 焼土跡4号	第102図 竈立柱建物跡41号②	86
第44図 焼土跡5号	第103図 C地区Ⅱa層出土遺物	87
第45図 焼土跡6号	第104図 土坑墓6号①	88
第46図 焼土跡7号	第105図 土坑墓6号②	89
第47図 焼土跡8号	第106図 焼土跡23号	89
第48図 焼土跡9号	第107図 焼土跡21号	89
第49図 焼土跡10号	第108図 焼土跡22号	90
第50図 焼土跡11号	第109図 C地区溝状遺構	91
第51図 焼土跡12号	第110図 C地区Ⅱa層出土遺物①	92
第52図 焼土跡13号	第111図 C地区Ⅱa層出土遺物②	93
第53図 焼土跡14号	第112図 C地区Ⅱa層出土遺物③	94
第54図 焼土跡15号	第113図 C地区Ⅱa層出土遺物④	95
第55図 焼土跡16号	第114図 C地区柱穴内出土遺物	96
第56図 焼土跡17号		

第1150号	D地区道橋配置図1)	98	第1750号	地土路29号	142
第1160号	D地区道橋配置図2)	99	第1760号	地土路30号	142
第1170号	都立建物路42号	100	第1770号	地土路31号	143
第1180号	都立建物路43号	101	第1780号	地土路32号	143
第1190号	都立建物路44号	102	第1790号	地土路33号	143
第1200号	都立建物路45号	102	第1800号	地土路34号	143
第1210号	都立建物路46号	103	第1810号	地土路35号	143
第1220号	都立建物路47号	104	第1820号	D地区溝状道橋1)	144
第1230号	都立建物路48号	105	第1830号	D地区溝状道橋2)	145
第1240号	都立建物路49号	105	第1840号	D地区溝状道橋3)	146
第1250号	都立建物路50号	106	第1850号	D地区溝状道橋一括道物	147
第1260号	都立建物路51号	107	第1860号	D地区溝状道橋出土道物1)	148
第1270号	都立建物路52号	107	第1870号	D地区溝状道橋出土道物2)	149
第1280号	都立建物路53号	108	第1880号	D地区溝状道橋出土道物3)	150
第1290号	都立建物路54号	109	第1890号	表板状道橋	152
第1300号	都立建物路55号	110	第1900号	D地区一括道物	153
第1310号	都立建物路56号	111	第1910号	D地区包含掘出土道物1)	153
第1320号	都立建物路57号	112	第1920号	D地区包含掘出土道物2)	154
第1330号	都立建物路58号	112	第1930号	D地区包含掘出土道物3)	156
第1340号	都立建物路59号	113	第1940号	D地区柱穴内出土道物	157
第1350号	都立建物路60号	114	第1950号	掘年校正結果	162
第1360号	都立建物路61号	115	第1960号	掘年校正結果	166
第1370号	都立建物路62号	115	第1970号	掘年校正結果	170
第1380号	都立建物路63号	116	第1980号	たー7区F370出土ガラス玉 (587)	188
第1390号	都立建物路64号	117	第1990号	たー7区包含掘出土ガラス玉 (522)	188
第1400号	都立建物路65号	117	第2000号	たー7区F370出土ガラス玉の蛍光X線スペクトル	188
第1410号	都立建物路66号	119	第2010号	たー7区包含掘出土ガラス玉の蛍光X線スペクトル	188
第1420号	都立建物路67号	119	第2020号	B-7区土坑第3号出土ガラス玉 (66)	188
第1430号	都立建物路68号	120	第2030号	B-7区土坑第3号出土ガラス玉の蛍光X線スペクトル	188
第1440号	都立建物路69号	120	第2040号	B-7区土坑第3号出土ガラス玉	189
第1450号	都立建物路70号	121	第2050号	B-7区土坑第3号出土ガラス玉 (77) のX線透過画像	189
第1460号	都立建物路71号	122	第2060号	B-7区土坑第3号出土ガラス玉 (77) の蛍光X線スペクトル	189
第1470号	都立建物路72号	122	第2070号	〈-99区土坑第5号出土ガラス玉 (263)〉	189
第1480号	都立建物路73号	123	第2080号	〈-99区土坑第5号出土ガラス玉の蛍光X線スペクトル	189
第1490号	都立建物路74号	123	第2090号	城入道跡群出土骨のコーラーゼンの炭素・窒素安定同位体比	207
第1500号	都立建物路75号	124	第2100号	城入道跡群出土骨のコーラーゼンの炭素・窒素安定同位体比	207
第1510号	都立建物路76号	124	第2110号	詳細道橋配置図1)	232
第1520号	都立建物路77号	126	第2120号	詳細道橋配置図2)	233
第1530号	都立建物路78号	126	第2130号	詳細道橋配置図3)	234
第1540号	都立建物路79号	127	第2140号	詳細道橋配置図4)	235
第1550号	都立建物路80号	128	第2150号	詳細道橋配置図5)	236
第1560号	都立建物路81号	128	第2160号	詳細道橋配置図6)	237
第1570号	都立建物路82号	129	第2170号	詳細道橋配置図7)	238
第1580号	都立建物路83号	130	第2180号	詳細道橋配置図8)	239
第1590号	都立建物路84号	130	第2190号	詳細道橋配置図9)	240
第1600号	都立建物路85号	131	第2200号	詳細道橋配置図10)	241
第1610号	D地区都立建物内出土道物	132	第2210号	詳細道橋配置図11)	242
第1620号	土坑第7号	133	第2220号	詳細道橋配置図12)	243
第1630号	土坑第8号	134	第2230号	詳細道橋配置図13)	244
第1640号	土坑2号	135	第2240号	詳細道橋配置図14)	245
第1650号	土坑3号	136	第2250号	詳細道橋配置図15)	246
第1660号	土坑4号	137	第2260号	詳細道橋配置図16)	247
第1670号	古銭出土ピット	138	第2270号	詳細道橋配置図17)	248
第1680号	焼骨出土ピット	139	第2280号	詳細道橋配置図18)	249
第1690号	地土路23号	140	第2290号	詳細道橋配置図19)	250
第1700号	地土路24号	140	第2300号	詳細道橋配置図20)	251
第1710号	地土路25号	140	第2310号	詳細道橋配置図21)	252
第1720号	地土路26号	141	第2320号	詳細道橋配置図22)	253
第1730号	地土路27号	141	第2330号	詳細道橋配置図23)	254
第1740号	地土路28号	142	第2340号	詳細道橋配置図24)	255

第2350	詳細遺構配置図25	256
第2360	詳細遺構配置図26	257
第2370	詳細遺構配置図27	258

<平田遺跡>

第2380	平田遺跡遺構配置図1	262
第2390	平田遺跡トレンチ出土遺物	263
第2400	平田遺跡遺構配置図2	264
第2410	平田遺跡表探遺物	264
第2420	平田遺跡掘立柱建物跡	265
第2430	土坑墓1・2号1)	267
第2440	土坑墓1・2号2)	268
第2450	土坑墓3号1)	269
第2460	土坑墓3号2)	270
第2470	土坑1号	270
第2480	包含層出土遺物1)	271
第2490	包含層出土遺物2)	272
第2500	土坑墓4号	274
第2510	土坑2号	275
第2520	遺跡の位置	279
第2530	人骨の保存区	283
第2540	平田遺跡7丁区包含層出土ガラス小玉	301

表 目 次

第1表 おもな島内道路地名表	6	第57表 掘立柱建物跡31号計画表	76
第2表 城入道路群発掘調査一覧	9	第58表 掘立柱建物跡32号計画表	76
<大ウツ遺跡>			
第3表 大ウツ遺跡トレンチ調査	15	第59表 掘立柱建物跡33号計画表	77
第4表 表探・掘土等出土遺物	16	第60表 掘立柱建物跡34号計画表	80
第5表 大ウツ遺跡一括遺物	16	第61表 掘立柱建物跡35号計画表	80
第6表 掘立柱建物跡1号計画表	18	第62表 掘立柱建物跡36号計画表	84
第7表 掘立柱建物跡2号計画表	18	第63表 掘立柱建物跡37号計画表	84
第8表 掘立柱建物跡3号計画表	21	第64表 掘立柱建物跡38号計画表	84
第9表 掘立柱建物跡4号計画表	21	第65表 掘立柱建物跡39号計画表	84
第10表 掘立柱建物跡5号計画表	21	第66表 掘立柱建物跡40号計画表	84
第11表 掘立柱建物跡6号計画表	21	第67表 掘立柱建物跡41号計画表	86
第12表 掘立柱建物跡7号計画表	22	第68表 土坑第6号	89
第13表 掘立柱建物跡8号計画表	25	第69表 C地区掘立柱建物跡内出土遺物	93
第14表 掘立柱建物跡9号計画表	25	第70表 C地区包含層出土遺物①	93
第15表 掘立柱建物跡10号計画表	25	第71表 C地区包含層出土遺物②	93
第16表 掘立柱建物跡11号計画表	25	第72表 C地区包含層出土遺物③	97
第17表 掘立柱建物跡12号計画表	26	第73表 C地区包含層出土遺物④	97
第18表 掘立柱建物跡13号計画表	29	第74表 C地区柱穴内出土遺物	97
第19表 掘立柱建物跡14号計画表	29	第75表 掘立柱建物跡42号計画表	100
第20表 掘立柱建物跡15号計画表	29	第76表 掘立柱建物跡43号計画表	103
第21表 掘立柱建物跡16号計画表	31	第77表 掘立柱建物跡44号計画表	103
第22表 掘立柱建物跡17号計画表	31	第78表 掘立柱建物跡45号計画表	104
第23表 掘立柱建物跡18号計画表	32	第79表 掘立柱建物跡46号計画表	104
第24表 掘立柱建物跡19号計画表	33	第80表 掘立柱建物跡47号計画表	106
第25表 掘立柱建物跡20号計画表	34	第81表 掘立柱建物跡48号計画表	106
第26表 掘立柱建物跡21号計画表	35	第82表 掘立柱建物跡49号計画表	106
第27表 掘立柱建物跡22号計画表	36	第83表 掘立柱建物跡50号計画表	106
第28表 A地区掘立柱建物跡内出土遺物①	38	第84表 掘立柱建物跡51号計画表	108
第29表 A地区掘立柱建物跡内出土遺物②	38	第85表 掘立柱建物跡52号計画表	108
第30表 土坑第1号	42	第86表 掘立柱建物跡53号計画表	108
第31表 土坑第3号	42	第87表 掘立柱建物跡54号計画表	109
第32表 枕土路4号	44	第88表 掘立柱建物跡55号計画表	112
第33表 溝状遺構1号	51	第89表 掘立柱建物跡56号計画表	112
第34表 A地区Ⅱa層出土遺物①	51	第90表 掘立柱建物跡57号計画表	113
第35表 A地区Ⅱa層出土遺物②	51	第91表 掘立柱建物跡58号計画表	113
第36表 A地区Ⅱb層出土遺物	55	第92表 掘立柱建物跡59号計画表	114
第37表 A地区Ⅱc層出土遺物①	55	第93表 掘立柱建物跡60号計画表	118
第38表 A地区Ⅱc層出土遺物②	55	第94表 掘立柱建物跡61号計画表	118
第39表 A地区Ⅱd層出土遺物	55	第95表 掘立柱建物跡62号計画表	118
第40表 A地区柱穴内出土遺物①	60	第96表 掘立柱建物跡63号計画表	118
第41表 A地区柱穴内出土遺物②	60	第97表 掘立柱建物跡64号計画表	118
第42表 A地区柱穴内出土遺物③	60	第98表 掘立柱建物跡65号計画表	119
第43表 A地区柱穴内出土遺物④	60	第99表 掘立柱建物跡66号計画表	119
第44表 B地区掘立柱建物跡内出土遺物	61	第100表 掘立柱建物跡67号計画表	120
第45表 掘立柱建物跡23号計画表	63	第101表 掘立柱建物跡68号計画表	120
第46表 掘立柱建物跡24号計画表	63	第102表 掘立柱建物跡69号計画表	121
第47表 掘立柱建物跡25号計画表	63	第103表 掘立柱建物跡70号計画表	121
第48表 土坑第4・5号	65	第104表 掘立柱建物跡71号計画表	125
第49表 土坑1号	65	第105表 掘立柱建物跡72号計画表	125
第50表 B地区柱穴内出土遺物①	69	第106表 掘立柱建物跡73号計画表	125
第51表 B地区柱穴内出土遺物②	69	第107表 掘立柱建物跡74号計画表	125
第52表 掘立柱建物跡26号計画表	73	第108表 掘立柱建物跡75号計画表	125
第53表 掘立柱建物跡27号計画表	73	第109表 掘立柱建物跡76号計画表	125
第54表 掘立柱建物跡28号計画表	74	第110表 掘立柱建物跡77号計画表	127
第55表 掘立柱建物跡29号計画表	74	第111表 掘立柱建物跡78号計画表	127
第56表 掘立柱建物跡30号計画表	74	第112表 掘立柱建物跡79号計画表	127
		第113表 掘立柱建物跡80号計画表	128
		第114表 掘立柱建物跡81号計画表	128

第115表	孤立柱建物跡82号計測表	129
第116表	孤立柱建物跡83号計測表	129
第117表	孤立柱建物跡84号計測表	131
第118表	孤立柱建物跡85号計測表	131
第119表	D地区孤立柱建物跡内出土遺物	132
第120表	D地区ビット内出土遺物	138
第121表	D地区溝状遺構内出土遺物	147
第122表	D地区溝状遺構内出土遺物1	151
第123表	D地区溝状遺構内出土遺物2	151
第124表	D地区溝状遺構内出土遺物3	151
第125表	D地区一括遺物	155
第126表	D地区包含層一括遺物1	155
第127表	D地区包含層一括遺物2	155
第128表	D地区包含層一括遺物3	158
第129表	D地区柱穴内出土遺物	158
第130表	測定試料及び処理	162
第131表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	162
第132表	放射性炭素年代測定および樹種同定結果	166
第133表	放射性炭素年代測定結果	170
第134表	大ウツ遺跡出土のウツ遺体の区・遺構別出土量	175
第135表	大ウツ遺跡出土の上、下顎臼歯の計測値 (mm)	175
第136表	大ウツ遺跡 (19年度調査) の調査区別、動物別出土量	182
第137表	大ウツ遺跡 (21年度調査) の調査区別、動物種別出土量	182
第138表	蛍光X線分析法の測定条件	186
第139表	蛍光X線分析結果	189
第140表	城入遺跡群出土人骨の安定同位体分析結果一覧表	206
第141表	城入遺跡群出土獣骨(ウシ)の安定同位体分析結果一覧表	206
第142表	大ウツ遺跡出土の植物遺体	210
第143表	イネのサイズ	213
第144表	コムギのサイズ	213
第145表	オムギのサイズ	213
第146表	アワのサイズ	213
第147表	キビのサイズ	213
第148表	栽培植物の割合	213
第149表	ビット内出土遺物1	216
第150表	ビット内出土遺物2	216
第151表	ビット内出土遺物3	217
第152表	ビット内出土遺物4	217
第153表	ビット内出土遺物5	218
第154表	ビット内出土遺物6	218
第155表	ビット内出土遺物7	219
第156表	ビット内出土遺物8	219
第157表	ビット内出土遺物9	220
第158表	ビット内出土遺物10	220
第159表	ビット内出土遺物11	221
第160表	ビット内出土遺物12	221
第161表	ビット内出土遺物13	222
第162表	ビット内出土遺物14	222
第163表	ビット内出土遺物15	223
第164表	ビット内出土遺物16	223
第165表	ビット内出土遺物17	224
第166表	ビット内出土遺物18	224
第167表	ビット内出土遺物19	225
第168表	ビット内出土遺物20	225
第169表	ビット内出土遺物21	226
第170表	ビット内出土遺物22	226
第171表	ビット内出土遺物23	227
第172表	ビット内出土遺物24	227
第173表	ビット内出土遺物25	228
第174表	ビット内出土遺物26	228

第175表	ビット内出土遺物27	229
第176表	ビット内出土遺物28	229
第177表	ビット内出土遺物29	230
第178表	ビット内出土遺物30	230
第179表	ビット内出土遺物31	231

<平田遺跡>

第180表	平田遺跡トレンチ	266
第181表	平田遺跡表探	266
第182表	平田遺跡包含層出土遺物1	273
第183表	平田遺跡包含層出土遺物2	273
第184表	出土人骨一覧	278
第185表	年齢区分	278
第186表	上腕骨計測値	288
第187表	上腕骨計測値	288
第188表	大腸骨計測値	288
第189表	大腸骨	288
第190表	脛骨	289
第191表	墓定身長値	289
第192表	上腕骨・脛骨・尺骨比	289
第193表	下顎骨	292
第194表	鎖骨	292
第195表	上腕骨	293
第196表	脛骨	293
第197表	尺骨	294
第198表	大腸骨	294
第199表	脛骨	295
第200表	鎖骨	295
第201表	膝蓋骨	296
第202表	墓定身長値	296
第203表	最大長の比	296
第204表	中央長の比	296
第205表	形態小変異	297
第206表	平田遺跡調査区別、動物別出土量	300
第207表	蛍光X線分析法の測定条件	301
第208表	蛍光X線分析結果	301

写真図版目次

<大ウツ遺跡>

図版1 遺跡周辺風景	309	図版11 C地区 空撮①	319
図版2 A地区 空撮①	310	C地区 空撮②	319
図版2 A地区 空撮②	310	図版12 掘立柱建物跡29号検出状況	320
図版3 B-6・7区 土層断面(南から北を望む)	311	掘立柱建物跡30号検出状況	320
B-6・7区 土層断面(北から南を望む)	311	掘立柱建物跡32号検出状況	320
B-6・7区 土層断面近景	311	掘立柱建物跡39号検出状況	320
柱穴完掘状況①	311	掘立柱建物跡38号検出状況	320
図版4 柱穴完掘状況②	312	掘立柱建物跡41号検出状況	320
柱穴完掘状況③	312	土坑墓6号 半蔵状況①	320
柱穴内遺物出土状況①	312	土坑墓6号 副葬品検出状況	320
柱穴内遺物出土状況②	312	図版13 土坑墓6号 半蔵状況②	321
土坑墓1号 検出状況	312	土坑墓6号 完掘状況	321
土坑墓1号 須恵器検出状況①	312	C地区 溝状遺構3号検出状況	321
土坑墓1号 須恵器検出状況②	312	C地区 溝状遺構3号完掘状況	321
図版5 土坑墓2号 検出状況	313	現地説明会	321
土坑墓2号 焼骨検出検出状況①	313	図版14 D地区周辺風景(東シナ海側を望む)	322
土坑墓2号 焼骨検出検出状況②	313	図版15 D地区 空撮①	323
土坑墓3号 検出状況	313	D地区 空撮②	323
土坑墓3号 木棺痕・土層断面①	313	図版16 土坑墓7号 検出状況	324
土坑墓3号 木棺痕・土層断面②	313	土坑墓7号 人骨検出状況①	324
土坑墓3号 木棺痕検出状況	313	土坑墓7号 人骨検出状況②	324
図版6 土坑墓3号 人骨検出状況	314	土坑墓8号 検出状況	324
土坑墓3号 人骨・副葬品検出状況	314	土坑墓8号 人骨検出状況①	324
土坑墓3号 ガラス玉検出状況	314	竹中正巳氏 土坑墓8号人骨美術状況	324
B-6・7区 靴土跡検出状況	314	土坑墓8号 人骨検出状況②	324
図版7 靴土跡1号 半蔵状況	315	図版17 土坑3号 検出状況	325
靴土跡2号 半蔵状況	315	土坑3号 半蔵状況	325
靴土跡3号 検出状況	315	PO521 獣骨出土状況①	325
靴土跡4号 半蔵状況①	315	PO521 獣骨出土状況②	325
靴土跡4号 半蔵状況②	315	PO636 獣骨出土状況	325
靴土跡5～9号 検出状況	315	P1174 古銭出土状況①	325
靴土跡10号 検出状況	315	P1174 古銭出土状況②	325
図版8 靴土跡10号 半蔵状況	316	図版18 D地区 溝状遺構13号	326
靴土跡10号 流動浮出状況	316	D地区 溝状遺構20号	326
靴土跡11号①	316	D地区 溝状遺構22号	326
靴土跡11号②	316	D地区 溝状遺構26号完掘状況	326
靴土跡11号 半蔵状況	316	近世石積み検出状況	326
靴土跡12号 検出状況	316	作業風景	326
靴土跡12号 半蔵状況	316	図版19 土坑墓1号出土須恵器	327
図版9 靴土跡13～15号 検出状況	317	図版20 土坑墓3号出土遺物	328
靴土跡14号 半蔵状況	317	図版21 土坑墓3号出土ガラス玉①	329
靴土跡15号 検出状況	317	土坑墓3号出土ガラス玉②	329
D地区 空撮	317	銅治岡産出土遺物	329
図版10 土坑墓4・5号 焼骨・副葬品出土状況	318	図版22 溝状遺構1号出土遺物	330
土坑墓4号 焼骨・副葬品検出状況	318	A地区 PVE60出土白磁	330
土坑墓5号 焼骨検出状況	318		
土坑1号	318		
土坑1号 土層	318		

図版23	大ウフ道路トレンチ出土遺物	331
	大ウフ道路表探遺物	331
図版24	大ウフ道路包含層・近世溝一括取り上げ遺物	332
	大ウフ道路A地区掘立柱建物跡出土遺物	332
図版25	大ウフ道路A地区IIa層出土遺物	333
図版26	大ウフ道路A地区IIb層出土遺物	334
	大ウフ道路A地区IIc層出土遺物	334
図版27	大ウフ道路A地区IId層出土遺物	335
	大ウフ道路A地区柱穴内出土遺物1)	335
図版28	大ウフ道路A地区柱穴内出土遺物2)	336
	大ウフ道路B地区土坑墓4号出土遺物	336
図版29	大ウフ道路B地区土坑1号出土遺物	337
	大ウフ道路B地区柱穴内出土遺物1)	337
図版30	大ウフ道路B地区柱穴内出土遺物2)	338
	土坑墓6号出土土師器	338
	大ウフ道路C地区掘立柱建物跡出土遺物	338
図版31	大ウフ道路C地区包含層出土遺物	339
図版32	大ウフ道路D地区掘立柱建物跡出土遺物	340
	大ウフ道路D地区溝状遺構出土遺物1)	340
図版33	大ウフ道路D地区溝状遺構出土遺物2)	341
図版34	大ウフ道路D地区包含層出土遺物	342
	大ウフ道路D地区柱穴内出土遺物	342

<半田道路>

図版35	半田道路遺景(奄美大島を望む)	343
	土層堆積状況	343
	遺構検出状況	343
図版36	土坑墓1号検出状況	344
	土坑墓1号人骨検出状況1)	344
	土坑墓1号人骨検出状況2)	344
	土坑墓2号検出状況	344
	土坑墓2号人骨検出状況1)	344
	土坑墓2号人骨検出状況2)	344
図版37	土坑墓3号検出状況	345
	土坑墓3号平葺状況	345
	土坑墓3号人骨検出状況1)	345
	土坑墓3号人骨検出状況2)	345
	土坑墓3号人骨検出状況3)	345
	土坑墓3号1号人骨検出状況	345
	土坑墓3号2号人骨検出状況	345
図版38	土坑墓4号検出状況	346
	土坑墓4号人骨検出状況1)	346
	土坑墓4号人骨検出状況2)	346
	土坑墓4号人骨検出状況3)	346
	土坑墓4号人骨検出状況4)	346
	土坑墓4号完照状況	346
	松下孝幸氏 説明風景	346
図版39	半田道路トレンチ出土遺物	347
	半田道路表探出土遺物	347
	半田道路包含層出土遺物1)	347
図版40	半田道路包含層出土遺物2)	348

第I章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所土地改良課、以下県農政部）は、大島郡喜界町城久・滝川地内などにおいて、県営畑地帯総合整備事業（城久地区）を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について、喜界町教育委員会（以下、町教育委員会）に照会した。

これを受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）と町教育委員会が平成11年に分布調査を実施したところ、事業区域内に複数の遺物散布地（山田中西遺跡、大ウフ遺跡、半田遺跡など）が確認された。

この分布調査の結果をもとに、県農政部、鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）、町教育委員会は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、大ウフ遺跡・半田遺跡について事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施することとなった。確認調査は、町教育委員会が調査主体となり、大ウフ遺跡については平成16年2月・3月、平成17年7月に、半田遺跡は平成17年2～5月・7月、平成18年2月・10月に実施した。調査の結果、大ウフ遺跡で約23,000㎡、半田遺跡で約22,000㎡の範囲で中世の時期のものと考えられる遺構・遺物を確認した。

この結果をもとに、再度県農政部、県文化財課、町教育委員会は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い、現状保存が困難であることから記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

発掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、県埋蔵文化財センターの支援を受け、大ウフ遺跡は平成19年4月～10月と平成20年12月～平成21年12月、半田遺跡は平成18年9月～10月まで実施した。

大ウフ遺跡は発掘調査を進めると、掘立柱建物跡などが集中して検出された。平成19年度の本調査で15m四方の範囲に炉跡が約20基集中する箇所が見られた。これら周辺も城久遺跡群の性格を考えると重要な区域である可能性が高いということで県農政部、喜界町産業振興課、町教育委員会は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行い、この区域を盛土工法で保存することとなった。

また、半田遺跡においても確認調査で掘立柱建物跡や土坑墓が集中して検出され、この部分も城久遺跡群の重要な区域である可能性が高いということで、道路拡張及び水路建設にかかる約50㎡以外の大部分を盛土工法で保存することとなった。

第2節 調査の組織

平成15年度 確認調査

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所土地改良課)
調査主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査責任者	喜界町教育委員会 教育長 平 義哉
調査企画者	喜界町教育委員会社会教育課長 福岡 功彦 * 課長補佐 益 一幸 * 派遣社会教育主事 上原 一宏
調査・事務等担当者	喜界町教育委員会社会教育課主査 澄田 直敏
調査指導者	鹿児島県埋蔵文化財センター 文化財研究員 黒川 忠広

平成16年度 確認調査

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所土地改良課)
調査主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査責任者	喜界町教育委員会 教育長 平 義哉
調査企画者	喜界町教育委員会生涯学習課長 嘉 重久 * 課長補佐 福井長治郎 * 係長 岩松 利和 * 派遣社会教育主事 中尾 奨
調査・事務等担当者	喜界町教育委員会中央公民館主査 澄田 直敏
調査指導者	鹿児島県埋蔵文化財センター 文化財研究員 横手浩二郎

平成17年度 確認調査

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所土地改良課)
調査主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査責任者	喜界町教育委員会 教育長 晴水 清道
調査企画者	喜界町教育委員会生涯学習課長 嘉 重久 * 課長補佐 袴 勇

喜界町教育委員会	
埋蔵文化財調査員	後藤 法宣
＊ 発掘調査補助員	具志堅 亮
事務担当者	
喜界町教育委員会生涯学習課主査	竹内 功
調査指導者	
東京大学大学院情報学環教授	石上 英一
ラ・サール高等学校教諭	永山 修一
鹿児島女子短期大学准教授	竹中 正巳
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財研究員	馬籠 亮道

平成21年度 本調査

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所農村整備係)
調査等主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者	
喜界町教育委員会 教育長	晴永 清道
調査等企画者	
喜界町教育委員会生涯学習課長	益 一幸
＊ 課長補佐	岩松 利和
調査等担当者	
喜界町教育委員会生涯学習課	
埋蔵文化財係長	澄田 直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事	野崎 拓司
喜界町教育委員会埋蔵文化財	
発掘調査員	後藤 法宣
調査等指導者	
文化庁記念物課主任調査官	權宣田佳男
東京大学大学院情報学環教授	石上 英一
国立科学博物館	
人類学研究グループ長	篠田 謙一
太宰府市教育委員会	
文化財課主任主査	中島恒次郎
熊本大学教授	甲元 眞之
ラ・サール高等学校教諭	永山 修一
鹿児島女子短期大学教授	竹中 正巳
鹿児島大学農学部名誉教授	西中川 駿
琉球大学教授	池田 榮史
沖縄県教育庁文化課主幹	盛本 勲
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	川口 雅之
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財研究員	馬籠 亮道
鹿児島県立埋蔵文化財センター	
文化財研究員	森 幸一郎

平成23年度 整理作業

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所農村整備係)
調査等主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者	
喜界町教育委員会 教育長	晴永 清道
調査等企画者	
喜界町教育委員会生涯学習課長	吉本 実
＊ 課長補佐	岩松 利和
調査等担当者	
喜界町教育委員会生涯学習課	
埋蔵文化財係長	澄田 直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事	野崎 拓司
＊ 埋蔵文化財調査員	宮城 良真
＊	亀島 慎吾
調査等指導者	
文化庁記念物課調査官	近江 俊秀
大学共同利用機関法人	
人間文化研究機構理事	石上 英一
愛媛大学東アジア古代鉄文化	
研究センター長	村上 恭通
九州テクノリサーチ	
TACセンター	大澤 正巳
ラ・サール高等学校教諭	永山 修一
鹿児島大学名誉教授	西中川 駿
鹿児島大学教授	渡辺 芳郎
鹿児島女子短期大学教授	竹中 正巳
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	中村 和美
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	川口 雅之

平成24年度 整理作業・報告書刊行

事業主体者	鹿児島県農政部農地整備課 (大島支庁喜界事務所農村整備係)
調査等主体者	喜界町教育委員会
企画・調整	喜界町教育委員会生涯学習課
調査等責任者	
喜界町教育委員会 教育長	晴永 清道
調査等企画者	
喜界町教育委員会生涯学習課長	吉本 実
＊ 課長補佐	岩松 利和
調査等担当者	
喜界町教育委員会生涯学習課	
埋蔵文化財係長	澄田 直敏
喜界町教育委員会生涯学習課主事	野崎 拓司
＊ 委員会生涯学習課主事	松原 信之

調査等指導者

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構理事	石上 英一
東京大学総合研究博物館教授 愛媛大学東アジア古代鉄文化 研究センター長	米田 穂 村上 恭通
熊本市文化振興課 主査 鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事	網田 龍生 中村 和美
鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事	馬籠 亮道
鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員	岩水 勇亮

第3節 大ウフ遺跡調査の経過

1 確認調査（平成15～17年度）

平成16年2月～平成18年2月まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査を実施した。調査は2m×5mのトレンチを基本として実施した。その結果、複数のトレンチで中世と考えられる遺構・遺物を確認し、遺構・遺物の出土状況から約23,000㎡の範囲に遺跡が残存していると判断した。

2 本調査（平成19～21年度）

平成15年～17年度の確認調査の結果を受けて平成19年4月～10月、平成20年12～平成21年12月まで実施した。調査では、まず調査区域内に10m×10mのグリッドを設定し実施した。グリッドは西側から東側方向に96～99・1～12とし、それに直行する北側から南側方向へD～A・あ～てと呼称した。

発掘調査は、確認調査で得られた資料をもとに、遺構検出直上まで（一部の遺物包含層が残る部分はその直上まで）は表土を重機により除去し、その後、作業員を投入して遺物及び遺構の検出作業を行った。

以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

平成19年度

- 4月 調査開始。機材運搬などの環境整備、重機による表土剥ぎ、グリッドの設定、杭打ちなどを行う。
 - 5月～6月 遺構検出作業、包含層掘り下げ、ビット掘り下げなどを行う。
 - 7月～8月 遺構検出作業、包含層掘り下げ、ビット掘り下げ、1/50遺構配置図作成などを行う。
 - 9月 ビット掘り下げ、遺構の写真撮影、1/50遺構配置図作成などを行う。
 - 10月 1/20遺構配置図作成、1/50遺構配置図作成などを行う。
- 平成20年度
- 12月 重機による表土剥ぎ、杭打ち、遺構検出作業、包含層掘り下げ、ビット掘り下げなどを行う。

- 1月 包含層掘り下げ、ビット掘り下げ、1/20遺構配置図作成などを行う。
 - 2月 包含層掘り下げ、遺構検出作業、ビット・土坑・溝状遺構掘り下げ、1/20遺構配置図作成などを行う。
 - 3月 ビット・土坑・溝状遺構掘り下げ、1/20遺構配置図作成などを行う。3月16日、鹿児島女子短期大学竹中准教授による土坑墓の実測・人骨の取り上げなどの現地指導。
- 平成21年度
- 4月 包含層掘り下げ、遺構検出作業などを行う。
 - 5月 包含層掘り下げ、遺構検出作業、ビット掘り下げ、溝状遺構掘り下げなどを行う。
 - 6月～11月 ビット掘り下げ、溝状遺構掘り下げ、土坑掘り下げ、遺構の実測、1/20遺構配置図作成、1/50遺構配置図作成、遺構の写真撮影などを行う。
 - 12月 遺跡の空撮を行う。機材撤収、プレハブ撤去。

3 整理作業・報告書刊行（平成23～24年度）

整理作業は、平成23年～24年度に出土人骨や炭化物の科学分析、注記・接合・拓本、実測・図面整理・トレースなどの作業を行い、報告書を刊行した。

第4節 半田遺跡調査の経過

1 確認調査（平成16～18年度）

平成17年2月～5月、7月、平成18年2月、10月まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査を実施した。調査は2m×5mのトレンチを基本として実施した。その結果、複数のトレンチで中世と考えられる遺構・遺物を確認し、遺構・遺物の出土状況から半田遺跡約22,000㎡の範囲に遺跡が残存していると判断した。

2 本調査（平成18年度）

平成16年～18年度の確認調査の結果を受けて、県農政部、喜界町産業振興課、町教育委員会の協議の結果、半田遺跡は盛土工法にて保存することを決定し、本調査は道路拡張工事及び水路建設にかかる約50㎡の区域のみを平成18年9月～10月に実施した。

以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

- 9月28日（木） 調査開始。重機による表土剥ぎ。
- 9月29日（金）～10月24日（火） 遺構検出作業、土坑墓掘り下げ、遺構実測、人骨取り上げなどを行う。
- 10月25日（水） 調査終了。

3 整理作業・報告書刊行（平成23～24年度）

整理作業は、平成23年度～24年度に出土人骨や炭化物の科学分析、遺物の注記・接合・拓本、実測・図面整理・トレースなどの作業を行い、報告書を刊行した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

喜界島は鹿児島県本土から南へ約380km、奄美大島から東へ約25kmの北緯28度19分、東経130度線上の太平洋と東シナ海の海上に浮かぶ島である。1島で1町をなし、北東-南西方向を長軸に14km、北東部から南西部に向けて次第に島幅を広げ最大幅6.5km、周囲48.6km、面積56.9km²の島である。

概して平坦な隆起珊瑚礁の島で、海岸段丘が形成されている。島内の最高所は、中央東側にある百之台で標高は211mである。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し、広い段丘地形が見られる。これに対して南東部は急峻な200mあまりの崖が切り立ち、海岸線に沿ってわずかな平坦地が見られるだけである。島の大部分が多孔質のサンゴ礁石灰岩に厚く覆われているため、河川の発達は乏しく用水のほとんどは地下水に依存している。

海岸線は珊瑚礁からなっており、砂浜が広がる場所は少なく、また、港として利用できる場所も限られている。代表的な港としては、湾、早町、志戸植、小野津があり、各集落では港を背に必ず砂丘が形成されている。砂丘上では、縄文時代から近世までの遺物が採取でき、古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

気候は亜熱帯気候で、年平均22.4度と年間を通じて温暖である。年間降雨量は2200mmに達する。島にはガジュマルをはじめとする亜熱帯植物が分布しているが、現在、段丘上のほとんどが開墾され、さとうきび畑や牧草地などに利用されている。亜熱帯広葉樹林は段丘崖の部分でよく観察できる。本島の基盤をなしているのは、未凝固のシルト～泥層および凝灰質砂泥の互層から構成される新生代第三紀鮮新世の島尻層で、琉球石灰岩や隆起サンゴ石灰岩、砂丘などが上層を形成している。石灰岩の上には風化土である暗赤褐色土壌(マージ)が島の大部分を覆っている。

大ウフ・半田遺跡は、島内でもっとも標高の高い城久集落を取り巻く8遺跡の総称である城久遺跡群の一つである。遺跡群は喜界島の中央部の標高90mから160mの海岸段丘上に立地している。島内の段丘は、巨視的に見て4段あり、遺跡群は2番目に標高の高い中位段丘の縁辺部に展開しており、天気の良い日には奄美大島が一望できる。大ウフ遺跡の標高は約110m～120m前後であり、半田遺跡の標高は約90m～110mである。遺跡周辺部には河川はないが、近くに湧水点がいくつか存在する。また、近接する滝川集落内には、島内でも有数の湧水量を誇る滝川の泉がある。これらの湧水は崖下にあることが多く、鳥尻層と琉球石灰岩の不整合面から湧き出すと言われている。

第2節 歴史的環境

喜界島における考古学的研究は、戦前は昭和6年の重野豊吉による荒木貝塚の発見に始まり、三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。戦後においては、昭和30年代に九学会連合同調査委員会考古学班による分布調査が行われ、荒木農道貝塚、荒木小学校貝塚、湾天神貝塚、伊実久蔵高神社貝塚、七城などが紹介されている。

島内で一番古い遺跡は縄文時代のものであり、大多数の遺跡が古代・中世期に属している。また、中世における源氏や平家にまつわる伝承や地名が数多く残っていることも1つの特徴である。

以下、喜界町の主な遺跡を時代ごとに記述したい。

1 縄文時代

島内でもっとも古い縄文時代の遺跡は、昭和47年に発見された総合グランド遺跡である。遺跡からは縄文東洞式や嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式など、縄文時代後期を示す遺物が主に発見されていたが、平成13年に総合グランドから約300m南にある砂を採取した跡地の斜面に3層の貝層が露出し、その下層からはほぼ完形に近い2つの砲弾型をした土器が見つかった。

土器に付着していた炭化物から求めた放射性炭素年代値が6998 ± 32y.BP という数値であり、沖縄貝塚時代層に相当する可能性が指摘された。土器の見つかった早期は、縄文東洞式などを出土していた砂丘よりさらに内陸側にあり、砂丘の形成上からも古い可能性が高く、遺跡の範囲確認と共に他の遺物などのさらなる検討が必要となってきている。また、昭和27年に県立喜界高等学校校庭拡張工事に伴って出土した土器は、赤漆系土器と名付けられ、縄文時代前期と考えられている。

縄文時代晩期の遺跡としては、昭和61年に熊本大学による発掘調査で縄文西洞式や喜念Ⅰ式などの土器と共に堅穴住居跡11基が確認されたハンタ遺跡や、平成16年に喜界町役場新庁舎工事に伴って発掘調査された見付山遺跡などがある。

2 弥生時代～古墳時代平行期

弥生時代の遺跡は、発掘調査は行われていないが分布調査などで荒木小学校遺跡などの遺跡が確認されている。

古墳時代平行期の遺跡は、昭和61年度に鹿児島県教育庁文化課による先山遺跡の発掘調査が実施され、兼久式土器や貝斧などが報告されている。その他の古墳時代平行期の遺跡として中里貝塚などの約20遺跡が確認されているが、喜界島においては弥生時代～古墳時代平行期の様相は依然不明のままである。

3 古代・中世

古代・中世の遺跡は、昭和63年に島中B遺跡、平成4年にオン畑・巻畑B・巻畑C遺跡、平成5年に前々遺跡、平成6年に掘り遺跡、平成18年に和早地遺跡・荒木貝塚などの発掘調査が実施されている。各調査とも小規模な試掘調査であるが、重要な成果が得られている。本書で報告する大ウフ遺跡を含む城久遺跡群も古代末から中世の遺跡である。

平成21年度からは、県営畑地帯総合整備事業（手久津久地区）に伴う調査を行っており、新たに4遺跡を確認している。これらは、城久遺跡群の前後段階に相当する遺跡群と見られ、城久遺跡群の評価を考える上で重要であると考えられる。

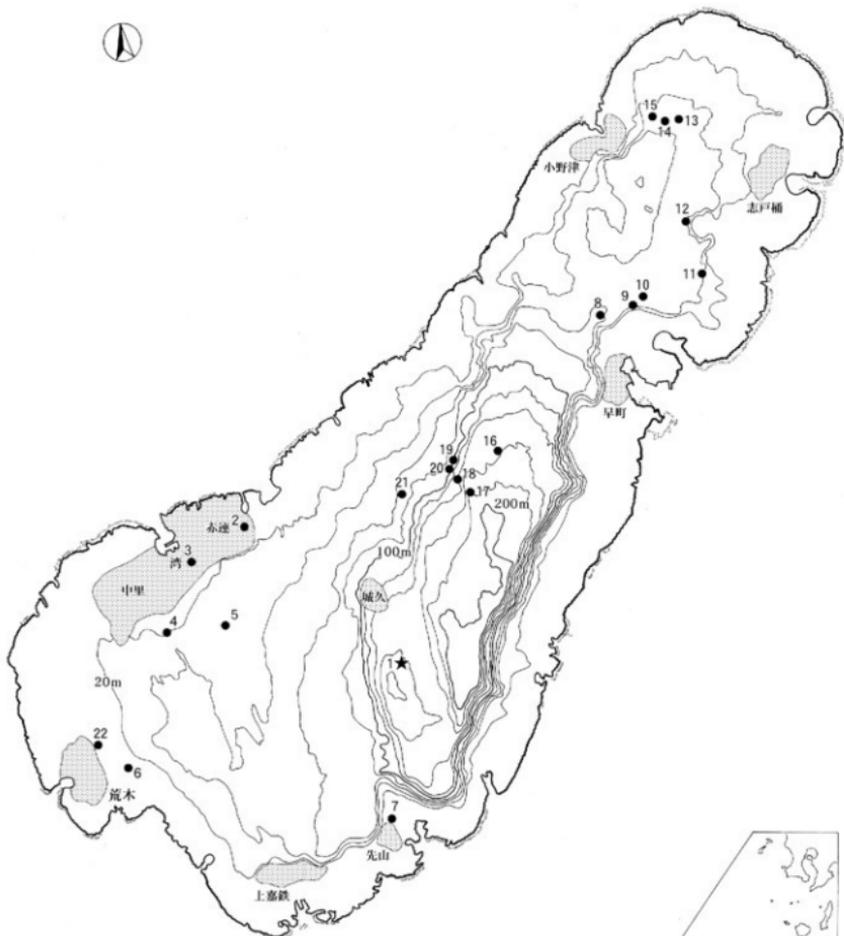
参考・引用文献

- 喜界町 2000 『喜界町誌』
 喜界町教育委員会 1987 『先山遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(1)
 喜界町教育委員会 1987 『ハンタ遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(2)
 喜界町教育委員会 1989 『島中B遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(3)

- 喜界町教育委員会 1989 『島中B遺跡II』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(4)
 喜界町教育委員会 2006 『山田中西遺跡I』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(8)
 喜界町教育委員会 2008 『山田中西遺跡II』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(9)
 喜界町教育委員会 2009 『山田半田遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(10)
 喜界町教育委員会 2011 『前畑・小ハネ遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘報告書(11)
 鹿児島県埋蔵文化財センター 2008 『荒木貝塚・和早地遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財センター発掘報告書 (119)
 澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一 2003 『喜界町総合グラウンド遺跡(弓道場)出土の土器』 『鹿児島考古』 第37号 鹿児島県考古学会
 太田陽子 1978 『琉球列島喜界島の完新世海成段丘』 地理学評論
 町田洋・江波戸昭 1969 『薩南諸島の総合的研究』 平山輝男編 第1編 地理的環境 明治書院
 貝塚典平ほか編 『4. 西南諸島』 『日本の地形』

第1表 主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	城久遺跡群	喜界町城久は小	海岸段丘	古代・中世	掘立柱建物跡、土坑墓、中跡、土師器、須恵器、越州須恵系青磁、布目瓦葺土器、灰地陶器、白磁、初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器、カミイヤキ、滑石製石鏡、青磁、銅製品、鉄製品、輪の引口、ガラス玉ほか	平成14・15・17・18・19・20年度発掘調査、平成14・15・16・17・18・19・20年度本調査
2	赤通	喜界町赤通	海岸段丘	縄文	赤通式土器	現喜界高校
3	清天押	喜界町清	海岸段丘	縄文	土器、石器、貝製品、炊骨	
4	総合グラウンド	喜界町清	砂丘	縄文	土器、石器、貝、炊骨	
5	平ヶ	喜界町清	海岸段丘			陥平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	純地	縄文	石器、貝	
7	先山	喜界町浦原	海岸段丘	縄文・近世	掘立柱式土器・兼入式土器、石器、貝、炊骨 規模・形状：200×200	昭和61年度調査
8	平家森	喜界町早町	山頂	中世	靑磁	
9	後田	喜界町後通	海岸段丘			陥平により消失した可能性
10	水口	喜界町後通	海岸段丘			陥平により消失した可能性
11	堀り	喜界町後通	海岸段丘	古代・中世	須恵器、カミイヤキ、白磁、青磁、滑石製石鏡、石器、炊骨	平成6年度調査
12	七城	喜界町志戸堀	台地	中世	規模・形状：200×200 靑磁	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代・近世	掘立柱建物跡、中跡、漢式遺構、カミイヤキ、鉄器	平成4年度調査
14	巻畑C	喜界町小野津	海岸段丘	古代・中世	土師器、カミイヤキ、滑石製石鏡	平成4年度調査
15	巻畑B	喜界町小野津	海岸段丘	古代・中世	土師器、須恵器、滑石製石鏡、輪の引口、鉄器	平成4年度調査
16	ハンタ	喜界町西目	海岸段丘	縄文	住居跡群、小まど遺構、宇冠土師式土器、土製品、石器、カミイヤキ、青磁	昭和61年度調査
17	前ヶ	喜界町島中	海岸段丘	古墳・中世	青磁、カミイヤキ	平成5年度調査
18	ウ川田	喜界町島中	海岸段丘	縄文・中世	土器、土師器、白磁、青磁、カミイヤキ、滑石製石鏡、染付	平成5年度調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文・中世	柱穴、土器、青磁、カミイヤキ	平成5年度調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文・中世	土器、土師器、白磁、青磁、カミイヤキ、滑石製石鏡、染付	平成5年度調査
21	島中B	喜界町島中	海岸段丘	古代・近世	土器、内黒土師器、須恵器、白磁、青磁、輪の引口、鉄器、石器、染付	昭和63年度調査
22	和早地	喜界町荒木	海岸段丘	縄文・近代	掘立柱式・蓋帯式・鹿児島系青磁、白磁、鉄器、輪の引口、鉄器、石器、魚骨、炊骨、染付、磁器焼	平成18年度調査



第2図 主な島内遺跡位置図

第三章 城久遺跡群の調査概要

第1節 調査の進捗状況

城久遺跡群の発掘調査は、平成14年度の山田中西遺跡・山田半田遺跡を皮切りに本調査と確認調査を並行して行っている。本調査は山田中西遺跡を平成15・16年度に実施し、平成16・17年度と平成19年度に山田半田遺跡、平成18年度に小ハネ・前畑・半田遺跡、平成19年度と平成20年度に山田半田・半田口・大ウフ遺跡の本調査を行っている。

平成15年度以降に数次にわたって実施した確認調査を実施した。これらの調査によって、小ハネ・前畑・大ウフ・半田遺跡で古代末～中世の遺構・遺物を確認し、赤連遺跡を含む8遺跡全体の総面積が130,000㎡に及ぶことが明らかとなった。これにより、現在の城久集落を中心に展開するそれぞれの遺跡を城久遺跡群として位置づけ、一連のものとしてとらえるとともに、本調査を実施している山田中西・山田半田遺跡などで南西諸島では初見となる重要な遺構・遺物が検出されていることから、遺跡の取り扱いについては保存も視野に入れながら開発との調整を行っていく必要が生じてきた。

このため、町教育委員会では平成17年7月と平成18年2月に確認調査を実施したが、保存する地区とそれ以外の地区を分けるにはさらなる情報の蓄積が必要という結果であった。このような状況の中、平成18年～平成20年にかけて、城久遺跡群の詳細な内容把握と範囲確認のために文化庁の国庫補助事業を活用し、さらなる情報収集に努めている。

このように度重なる確認調査で一定の成果も上がってきている。それは城久遺跡群のうち山田半田遺跡の掘立柱建物跡集中箇所や前畑遺跡の石敷遺構が確認された箇所などより重要な遺構などが確認された箇所を開発部局や地元農家の理解が得られ工法を盛土工法に変更し盛土保存の対策がとれた箇所も出てきている。その面積は、約60,000㎡である。

第2節 調査の成果

これまでの発掘調査では、古代～中世の遺構・遺物が多数確認され、南西諸島では他に類を見ない大規模な集落跡であることがわかってきていると同時に、出土した遺物群は非在地的な様相が強いという特徴がある。最も古い遺物は、山田半田遺跡で出土した8世紀代の須恵器の蓋であるが、出土数が少ない上に同時期の遺物は他にない、その様相は判然としない。

山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畑・大ウフ遺跡からは9・10世紀頃の遺物と11世紀後半～12世紀頃の遺物、13・14世紀頃の遺物が出土しているが、中でも11世紀後半～12世紀頃の遺物が圧倒的多数を占める。ただし、城久遺跡群の中でも最も標高の低い大ウフ・半田遺跡では11世紀後半～14世紀頃に位置づけられる遺物が確認されており、その中でも標高の低い範囲には13・14世紀頃の遺物が多い傾向にある。遺跡群全体を見ると出土した遺物からは9

世紀頃～14世紀頃までの時間幅が与えられるが、9・10世紀頃と11世紀後半～12世紀頃、13・14世紀頃の3時期にピークがあると思われる。

以下、各遺跡について概略を述べる。

(1) 山田中西遺跡

平成14年度に確認調査、平成15・16年度に本調査を実施した。調査面積は約6,000㎡である。掘立柱建物跡を約41棟を復元し、土坑墓10基、竈跡3基、土坑3基、溝状遺構2条などを検出している。出土遺物は土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目瓦土器・白磁・初期高麗青磁・朝鮮系無軸陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・青磁・刀子・櫛の羽口・鉄滓・石器などが出土しているが、中世の傾向を示すものが多い傾向にある。

(2) 山田半田遺跡

平成14・15年度に確認調査、平成16・17・19年度に本調査を実施し、平成20年度も一部調査を実施した。調査面積は約18,000㎡である。掘立柱建物跡は113棟復元し、土坑墓8基、竈跡3基、土坑10基、焼土を伴う土坑20基、溝状遺構2条、柱穴5,000基などの遺構のほか、土師器・須恵器・兼久式土器・越州窯系青磁・布目瓦土器・灰輪陶器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無軸陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・鉄製品・櫛の羽口・石器などが出土している。建物には奄美地域特有の1間×1間、1間×2間の掘立柱建物跡も多く見られる。前者には柱穴直径が1.2mと大きく、しかもその四方を30本の柱穴によって囲む特殊な構造のものが1棟確認されている。さらに、柱穴直径が50cmを超える2間×2間の総柱の建物跡や2間×3間の掘立柱建物跡の四方に計34本の柱穴を配置する大型の建物がある。

(3) 半田口遺跡

平成15～18年度に確認調査が実施されている。平成19年度は約10,000㎡の本調査を実施し、平成20年度は約10,000㎡を調査した。掘立柱建物跡は97棟復元し、土坑墓・溝状遺構・土坑などの遺構のほか、土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・カムイヤキ・櫛の羽口・石器などの遺物が出土している。

(4) 小ハネ遺跡

平成17年度に確認調査が実施し、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000㎡。掘立柱建物跡を33棟復元し、土坑墓6基を検出している。また、竈跡6基などの遺構のほか、土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目瓦土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・櫛の羽口・石器などの遺物が出土している。

(5) 前畑遺跡

平成17年度に確認調査を実施し、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000㎡である。柱穴跡約4,000基を検出し、掘立柱建物跡を110棟復元している。土坑墓では、火葬墓2基・土葬墓6基を検出している。また、炉跡3基、石敷遺構などを確認している。遺物としては土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目瓦直土器・兼入式土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・楠の羽口・砂鉄・石器などが出土している。なお、砂鉄は包含層から出土している。

(6) 大ウフ遺跡

平成16・17年度に確認調査を実施し、平成19年～21年に約11,500㎡の本調査を実施した。

掘立柱建物跡を85棟復元しており、土坑墓、柱穴列、溝状遺構などのほか、焼土跡を検出した。土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・龍泉窯系青磁、

楠の羽口・砂鉄・鉄滓などの遺物が出土している。また、砂鉄を集積したピット状の土坑を検出している。その他、蔵骨器と考えられる須恵器を伴う土坑墓や木棺墓と思われる土坑墓など城久遺跡群で初見となる事例が確認されている。

(7) 平田遺跡

平成16・17・18年度に確認調査などを実施し、古代末から中世の土坑墓・溝状遺構・土坑・柱穴などの遺構を検出している。土坑墓は5基検出し、取り上げた人骨は9体を数える(男性3名・女性3名・乳児1名・性別不明2名)。今回の報告では、土坑墓4基、人骨5体分を報告する。土坑墓の形状は、基本的な方形である。全て土葬で、屈葬の状態で見出している。いずれも明瞭な副葬品は確認できていない。その他には、越州窯系青磁・兼入式土器・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・龍泉窯系青磁・ガラス玉などの遺物が出土した。

第2表 城久遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	調査の種類	調査期間	調査面積	時代	遺構	遺物	調査主体
山田中西	本調査(Ⅷ)	平成15年5月～8月	5900㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡90、土坑墓98、炉跡31、土坑31、焼土跡31、溝状遺構11、柱穴跡7	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目瓦直土器、白磁、初期高麗青磁、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、楠の羽口はか	町教育委員会
	本調査(Ⅷ)	平成15年12月 平成16年10月～12月				原文化財課・町教育委員会	
山田平田	本調査	平成16年5月～8月 平成17年4月～平成18年3月	18000㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(113)、土坑墓(8)、炉跡3、土坑39、焼土を伴う土坑29、焼土土坑11、溝状遺構2	土師器、須恵器、兼入式土器、越州窯系青磁、布目瓦直土器、灰釉陶器、白磁、初期高麗青磁、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、青磁、銅製品、鉄製品、鉄、ガラス玉、楠の羽口、鉄滓、石器ほか	町教育委員会
	本調査	平成19年5月～平成20年3月				町教育委員会	
平田口	確認調査	平成15年2月、平成16年2月 平成17年2月、平成18年2月	2500㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡90、土坑墓41、土坑、焼土跡ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目瓦直土器、白磁、初期高麗青磁、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、楠の羽口、石製はか	町教育委員会
	確認調査(Ⅷ)	平成18年7月	800㎡			町教育委員会	
	本調査	平成19年4月～平成20年3月	15000㎡			町教育委員会	
本調査	平成20年4月～平成21年3月						
小ハネ	本調査	平成18年4月～平成19年3月	7000㎡	古代末～中世		土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目瓦直土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、楠の羽口はか	町教育委員会
前畑	本調査	平成18年4月～平成19年3月	7000㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡(116)、土坑墓18、炉跡3、石敷遺構ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目瓦直土器、兼入式土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、楠の羽口、鉄滓、砂鉄ほか	町教育委員会
	確認調査	平成16年2月～3月、平成17年7月、平成18年2月	500㎡				
大ウフ	確認調査(Ⅷ)	平成18年7月	700㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡95、土坑墓16、焼土跡、柱穴列、溝状遺構ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、白磁、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、楠の羽口、鉄滓、砂鉄、ガラス玉ほか	町教育委員会
	本調査	平成19年8月	1000㎡			町教育委員会	
	本調査	平成19年4月～10月	11,500㎡			町教育委員会	
	本調査	平成20年12月～平成21年12月				町教育委員会	
平田	確認調査	平成17年2月～3月、4月～5月、7月、平成18年2月、10月	1500㎡	古代末～中世	掘立柱建物跡51、土坑墓31、土坑ほか	越州窯系青磁、兼入式土器、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、ガラス玉ほか	町教育委員会
	確認調査(Ⅷ)	平成18年7月	400㎡	柱穴、土坑墓11ほか	土師器、白磁、青磁、石器ほか	町教育委員会	
赤通	確認調査(Ⅷ)	平成20年7月	50㎡	中世	柱穴	青磁	町教育委員会

大ウフ遺跡

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法

平成19年度からの本調査は10m間隔の調査用グリッドを設定して実施した。各年度とも伐採などの環境整備を実施した後、重機によって表土を除去し、遺物包含層であるⅡ層を人力で掘り下げ、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。検出した遺構については、掘り下げを行い、写真撮影や50分の1や20分の1の遺構配置図、10分の1の個別図の作成などを行った。なお、掘立柱建物跡の復元は、調査現場での復元と整理作業の段階での図上復元両方で行った。発掘調査終了後は、プレハブなどの撤収を終え鹿児島県農政部農地整備課（大島支庁喜界事務所農村整備課）へ調査現場を引き渡した。

第2節 発見された遺構・遺物

調査では、古代末～中世（10世紀～14世紀）の遺構・遺物が発見された。遺構は、掘立柱建物跡85棟、土坑墓8基、焼土跡34基、溝状遺構などを検出した。遺物は土師器・須恵器・兼久式土器・越州窯系青磁・布目庄痕土器・灰軸陶器・白磁・初期高麗青磁・朝鮮系無軸陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・青磁・ガラス玉・銭・銅製品・鉄製品・轆の羽口・鉄滓・石器などが出土した。調査成果の詳細については、第Ⅴ章でふれることとする。なお、陶磁器の分類は太宰府分類を参考にしている。

第3節 基本層位

遺跡の土層は大きく4層に分けることができる。石灰岩の風化土壌であるために堆積は薄く、表土から基盤層までの深度は60cm程である。地形がやや凹む範囲には包含層が厚く堆積していた。

I層－灰褐色粘質土で、サトウキビ畑の耕作土として利用されている。

II層－硬質の黒褐色粘質土で古代・中世の遺物包含層である。削平されている地点も多い。層厚は地区によって異なり、後述するA地区では約100cm堆積していた。その地区以外ではおおむね10～20cm程である。

包含層が見られた範囲では細分を行っており、埋土色の違いからⅡa～Ⅱd層としている。出土遺物からA～C地区とD地区では時期差がある。

III層－赤褐色粘質土で一般にマージと呼ばれる遺跡の基盤層である。（一部、細分化できる箇所もある）

IV層－隆起埋埋礫である。調査区の至る所に露頭がみられる。

第V章 大ウフ遺跡発掘調査の成果



第3図 大ウフ遺跡遺構配置図

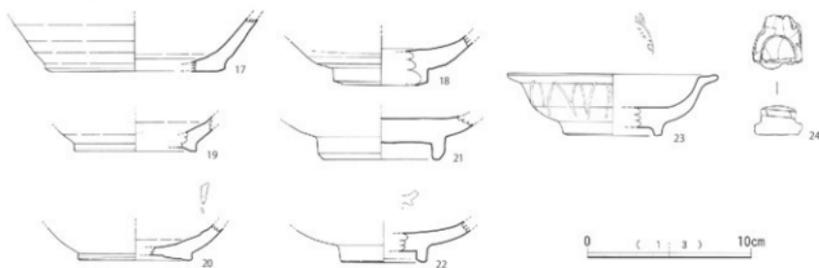


第4図 大ウフ遺跡トレンチ調査出土遺物

第3表大ウフ遺跡トレンチ調査

発掘 No	発掘 番号	トレンチ 名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
4	1	1T	II一括	カムイヤキ	器	-	口縁部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	2	1T	II一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3	4T	II	土師器	椀	-	腰部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	4	4T	II	土師器	杯	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5	4T	II	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	6	4T	II	カムイヤキ	器	-	胴部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	7	4T	II	カムイヤキ	器	-	胴部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	8	4T	層下	白磁	椀	IV類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9	5T	II b一括	土師器	輪×杯	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	10	5T	II一括	土師器	椀	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	11	5T	II b一括	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	12	5T	II b一括	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	13	5T	II b一括	土器	-	-	脚	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	14	5T	II一括	土師器	甕	-	胴部	-	-	-	灰	灰	黄灰	黄灰	-	-
	15	5T	II一括	土師器	甕	-	胴部	-	-	-	灰	灰	灰	灰	-	-
	16	5T	II b一括	石器	磨盤石	砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	1418	-

2 木調査



第5図 表採・廃土等出土資料



第6図 A地区 掘立柱遺物跡1)

S=1:250

第4表 表採・廃土等出土遺物

検出No	発取番号	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
							口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
5	17	-	廃土一括	土師器	椀×杯	-	底部	10	-	-	-	-	-	-	-
	18	-	廃土一括	白磁	-	-	底部	4.4	-	-	-	-	-	-	-
	19	-	表採	黒色土器	椀	A類	底部	7.4	-	-	-	-	-	-	-
	20	-	表土一括	越前式灰青磁	椀	B類	底部	6.6	-	-	-	-	-	-	-
	21	-	表土一括	越前式灰青磁	椀	無文外反	底部	7	-	-	-	-	-	-	-
	22	-	表土一括	越前式灰青磁	椀	無文外反	底部	4.9	-	-	-	-	-	-	-
	23	-	表採	越前式灰青磁	椀	無文外反	底部	12.6	5.2	3.7	-	-	-	-	-
	24	-	表採	現代加工品	パレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	18	-

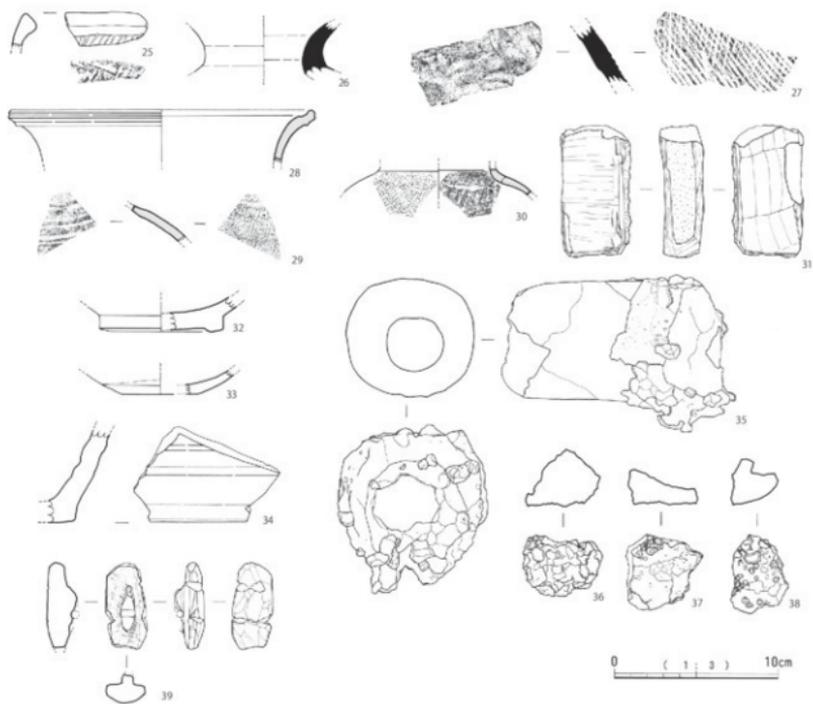
第5表 大ウツ遺跡一括遺物

検出No	発取番号	土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
B	25	B7	II一括	織文土器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	
	26	-	一括	須磨器	器	-	胴部	-	7.4	灰	-	灰白	灰白	-	-	
	27	B6	II一括	須磨器	-	-	胴部	-	-	-	-	灰白	灰	-	-	
	28	C7	II一括	カムイサキ	器	-	口縁部	18.2	-	-	-	灰	灰	-	-	
	29	C7	II一括	カムイサキ	器	-	胴部	-	-	-	-	灰	灰	-	-	
	30	B6	II一括	カムイサキ	器	-	胴部	-	7.2	-	-	灰	灰	-	-	
	31	-	一括	滑石製石鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	172	縦断面標本	
	32	B10	II一括	白磁	椀	IV類	底部	6	-	-	-	-	-	-	-	
	33	B6	II一括	白磁	器	IV類	底部	4.6	-	-	-	-	-	-	体部外遺跡中まで発掘	
	34	A2	II一括	焼粘土器	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	
	35	-	一括	輪の口口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	36	B6	II一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	37	C7	II一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	60	-	
	38	B3	II一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	39	B7	近世廃一括	現代加工品	パレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	30	-	

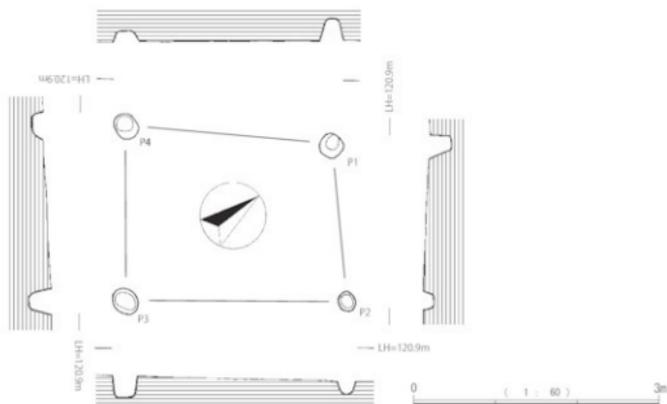


第7图 A地区 掘立柱遺物跡(2)

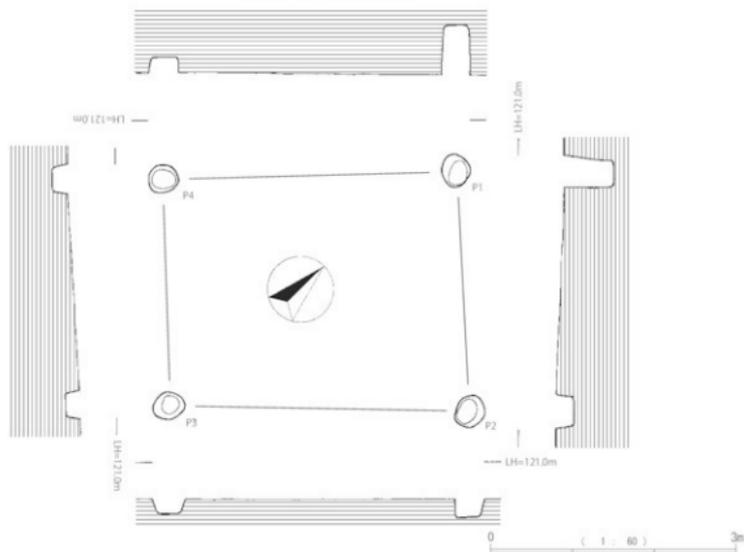
S=1:250



第8图 一括遺物



第9図 掘立柱建物跡1号



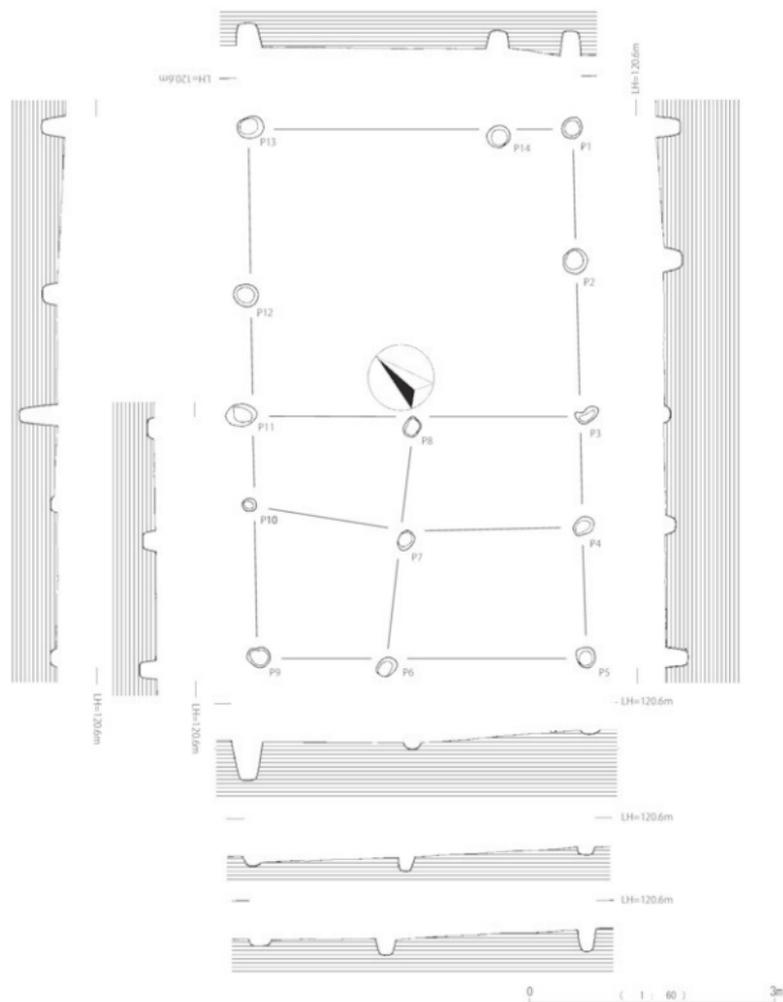
第10図 掘立柱建物跡2号

第6表 掘立柱建物跡1号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	192	平均	-	P1-P4	256	平均	-	方向:N34°E	P2: 獣骨(1)
P3-P4	216	平均	-	P2-P3	272	平均	-		

第7表 掘立柱建物跡2号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	292	平均	-	P1-P4	360	平均	-	方向:N53°E	
P3-P4	276	平均	-	P2-P3	364	平均	-		



第11図 掘立柱建物跡3号

第1節 遺構

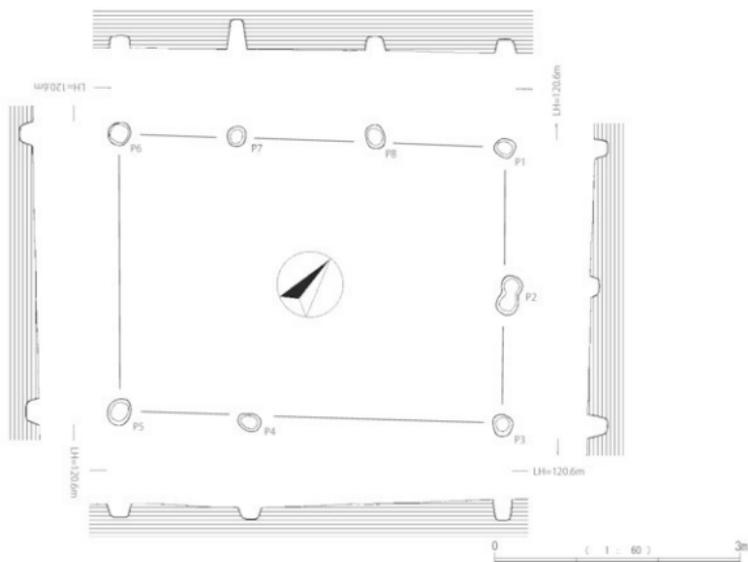
1 確認・試掘調査

確認・試掘調査は数年度に渡って行った。トレンチの配置図は第3図の通りである。トレンチ番号については各調査年度・月で1番からあったため、「年度・月_トレンチ名」と

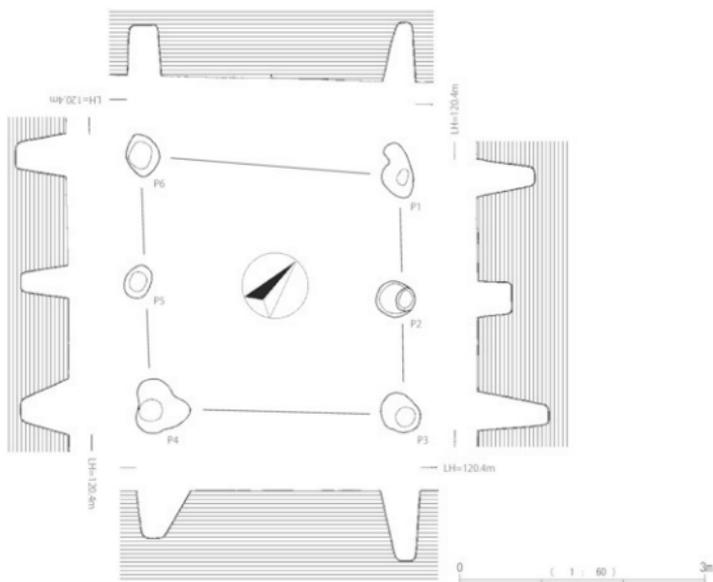
表記している。

第4図は確認調査で得られた遺物である。1・6・7はカマイヤキ、2は鉄滓、3・4・5は土師器、8は白磁である。

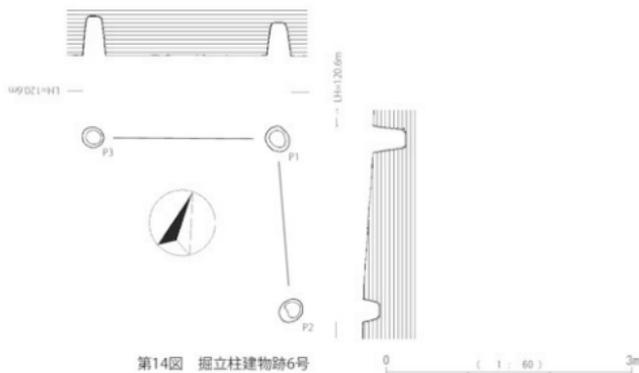
9～16は5Tからの出土物である。9-12は土師器、13は兼久式土器の脚、14・15は須恵器である。



第12图 掘立柱建物跡4号



第13图 掘立柱建物跡5号



第14図 掘立柱建物跡6号

2 本調査

大ウツ遺跡の本調査は数年に分けて広範囲行っている。そこで本報告では、便宜上A～D地区を設けそれぞれについて述べていくこととする。

遺跡全体の状況は、表土及び包含層を除去後、地山面まで掘り下げ遺構の検出を行い、掘立柱建物跡・土坑・焼土跡・溝状遺構などを確認している。

第5図17～24は表採及び廃土一括資料である。17は土師器検である。底部の作り方から越州窯系青磁を模倣したものではないかと考えられる。18はビロースク系白磁碗底部である。19は黒色土器A類である。底部の形状から12世紀代を想定している。23は約1/4ほど残存している。連片はラフに描かれている。内面には魚文が沈線で施されている。

第8表 掘立柱建物跡3号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P13	392	平均	196	P1-P5	648	平均	162	方向:N49°E	P7:須恵器(1),滑石製石鏝(4) 粘土塊(3),石器(1) P12:土師器(1) P13:土師器(2) P14:石器(1)
P3-P11	420	平均	210	P6-P8	300	平均	150		
P4-P10	412	平均	206	P9-P13	648	平均	162		
P5-P9	396	平均	198						
P1-P13	88	P4-P7	216	P1-P2	160	P9-P10	184		
P14-P13	304	P7-P10	196	P2-P3	192	P10-P11	112		
P3-P8	212	P5-P6	244	P3-P4	136	P11-P12	148		
P8-P11	208	P6-P9	152	P4-P5	160	P12-P13	204		
				P6-P7	160				
				P7-P8	140				

第9表 掘立柱建物跡4号計測表

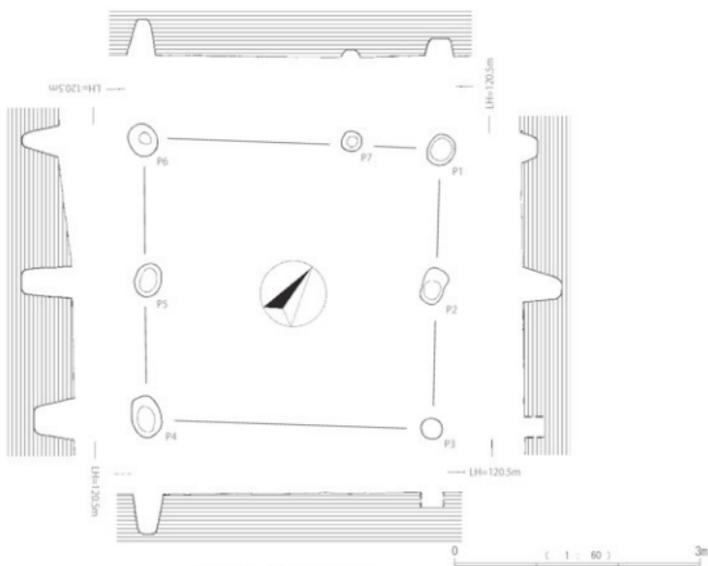
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	340	平均	170	P1-P6	472	平均	157	方向:N53°E	P8:石器(1)
P5-P6	340	平均	-	P3-P5	468	平均	234		
P1-P2	168			P1-P8	160	P3-P4	308		
P2-P3	172			P8-P7	168	P4-P5	160		
				P7-P6	144				

第10表 掘立柱建物跡5号計測表

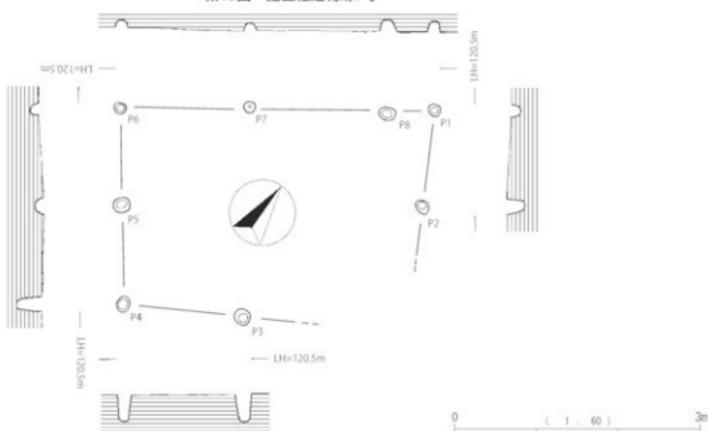
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	296	平均	148	P1-P6	320	平均	-	方向:N40°W	P2:石器(1) P3:土師器(1) P4:土師器(8),鉄滓(1) P6:土師器(4),鉄滓(1),糠の羽口(1) 粘土塊(1),石器(1)
P4-P6	312	平均	156	P3-P4	312	平均	-		
P1-P2	152	P4-P5	160						
P2-P3	144	P5-P6	152						

第11表 掘立柱建物跡6号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	212	平均	-	P1-P3	224	平均	-	方向:	P2:土師器(3) P3:土師器(1),石器(1)



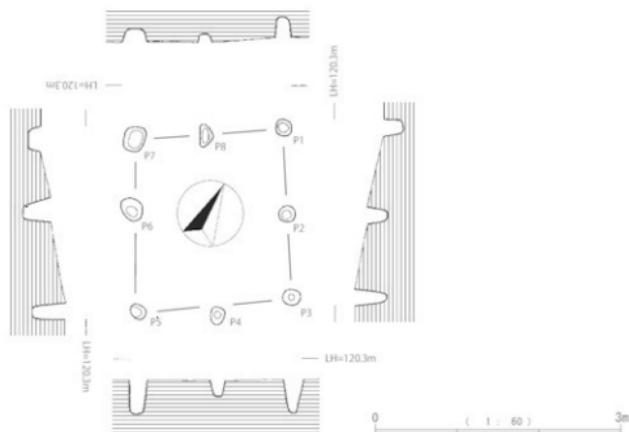
第15図 掘立柱建物跡7号



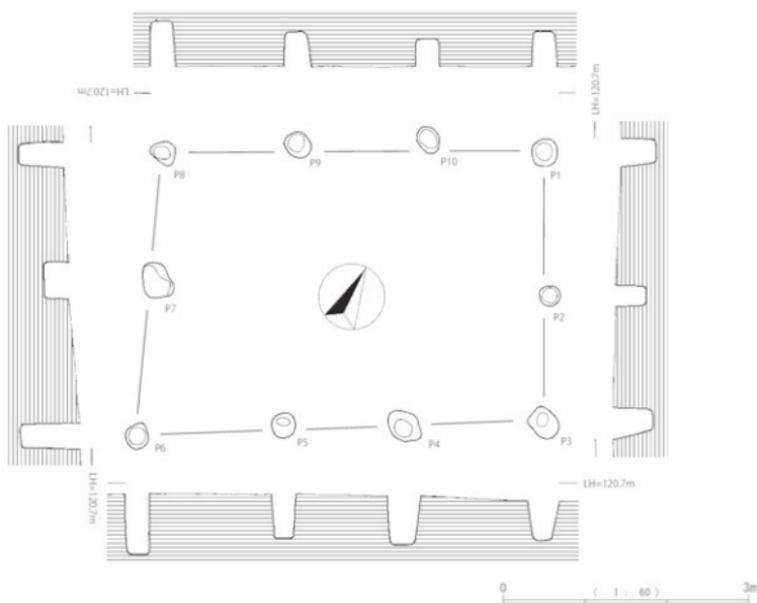
第16図 掘立柱建物跡8号

第12表 掘立柱建物跡7号計測表

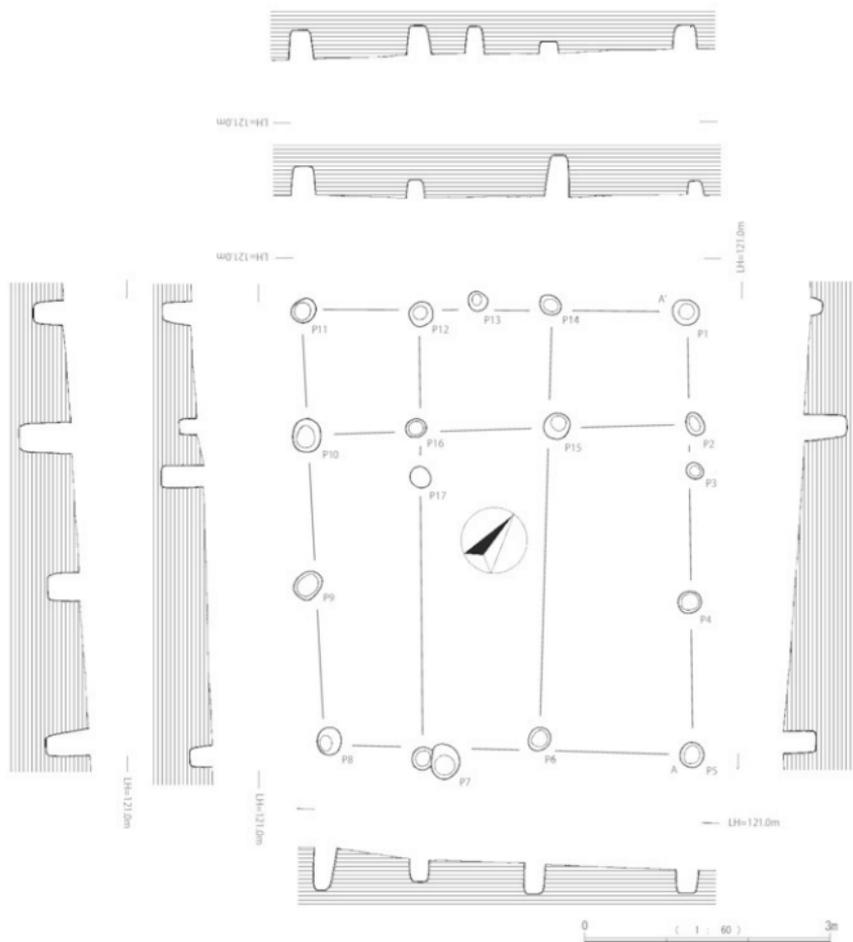
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	346	平均	173	P1-P3	346	平均	173	方向:	P5:土師器(3),鉄製品(7),粘土塊(1) 石器(1)
P3-P4	332	平均	-	P4-P6	346	平均	173		
P1-P7	94			P1-P2	174	P4-P5	172		P6:土師器(2),鉄滓(5),粘土塊(3)
P7-P6	252			P2-P3	172	P5-P6	174		



第17図 掘立柱建物跡9号



第18図 掘立柱建物跡10号



第19図 掘立柱建物跡11号(1)

(1) A地区

A地区は城久遺跡群の中では最も厚く包含層が残っていた。包含層除去後、おびただしい柱穴とともに焼土跡がB-6・7区付近に集中して出土した。掘立柱建物跡は地形を考慮して建築されていると見られ、石灰岩が露頭している部分にはほとんどつくられていない。そういった土地の制約があったためか、検出したピットは非常に集中する所とそうでないところがみられる。

(ア) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1号(第9図, 第6表)

B-2・3区で検出。1×1間の建物跡である。1×1間の建物跡の中では柱穴径・深さとも小さめである。柱穴内からは獸骨が出土している。

掘立柱建物跡2号(第10図, 第7表)

B-3区で検出。1×1間の建物跡である。掘立柱建物跡1号とはほぼ同じ向きである。



第20図 掘立柱建物跡11号(2)

掘立柱建物跡3号(第11図, 第8表)
B-3-4区で検出し, 掘立4-5号と重複している。南側には

構造柱が見られ, 一部総柱の建物であったと考えられる。柱
穴内からは須恵器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡4号(第12図, 第9表)

B-3-4区で検出し, 掘立3-5号と重複している。南側で1
本確認できていないが, 2×3間の建物跡とみられる。

第13表 掘立柱建物跡8号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	116	平均	-	P1-P6	384	平均	128	方向:N57°E	
P4-P6	240	平均	120	P3-P4	148	平均	-		
		P4-P5	124	P1-P8	60				
		P5-P6	116	P8-P7	168				
				P7-P6	156				

第14表 掘立柱建物跡9号計測表

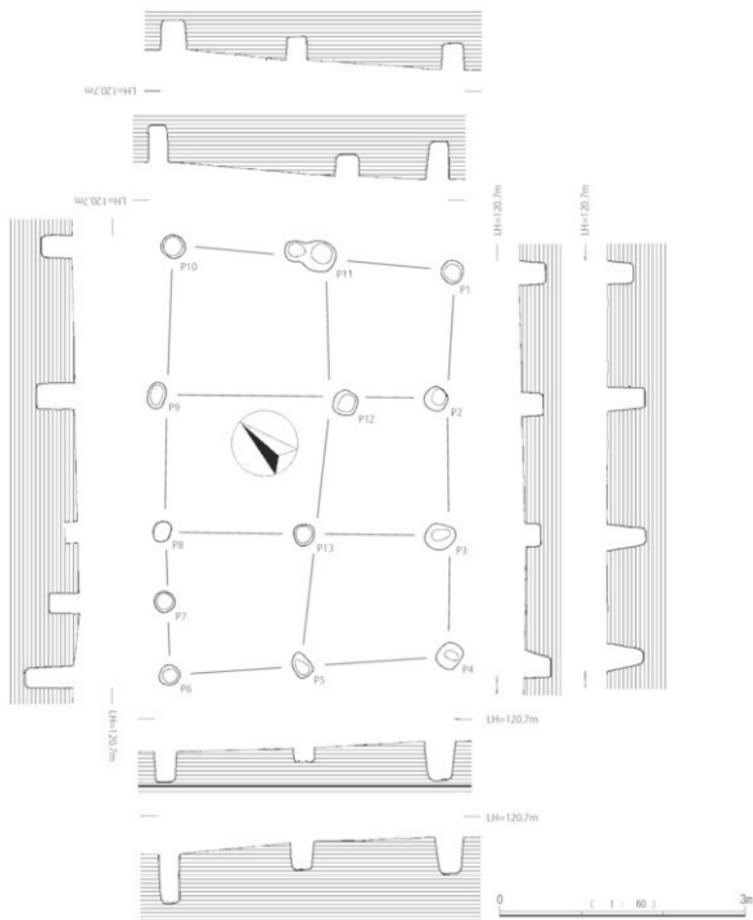
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P7	180	平均	90	P1-P3	206	平均	103	方向:N28°W	P2:土師器(1),鉄滓(2),粘土塊(1) P7:土師器(3),鉄滓(3),粘土塊(3) P8:土師器(1)
P3-P5	192	平均	96	P5-P7	208	平均	104		
P1-P8	96	P3-P4	92	P1-P2	106	P5-P6	120		
P8-P7	84	P4-P5	100	P2-P3	100	P6-P7	88		

第15表 掘立柱建物跡10号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	328	平均	164	P1-P8	472	平均	157	方向:N61°E	P1:土師器(1),石器(1) P3:鉄滓(2) P4:土師器(1) P5:土師器(1),鞆の羽口(1) 粘土塊(2) P6:滑石製石鍋(1),鉄滓(1) 鞆の羽口(1) P8:土師器(2),須恵器(1),白磁(1) 鉄滓(3),鞆の羽口(3) 粘土塊(4),石器(2) P9:土師器(2),滑石製石鍋(1)
P6-P8	348	平均	174	P3-P6	500	平均	167		
P1-P2	176	P6-P7	188	P1-P10	144	P3-P4	172		
P2-P3	152	P7-P8	160	P10-P9	160	P4-P5	148		
				P9-P8	168	P5-P6	180		

第16表 掘立柱建物跡11号計測表

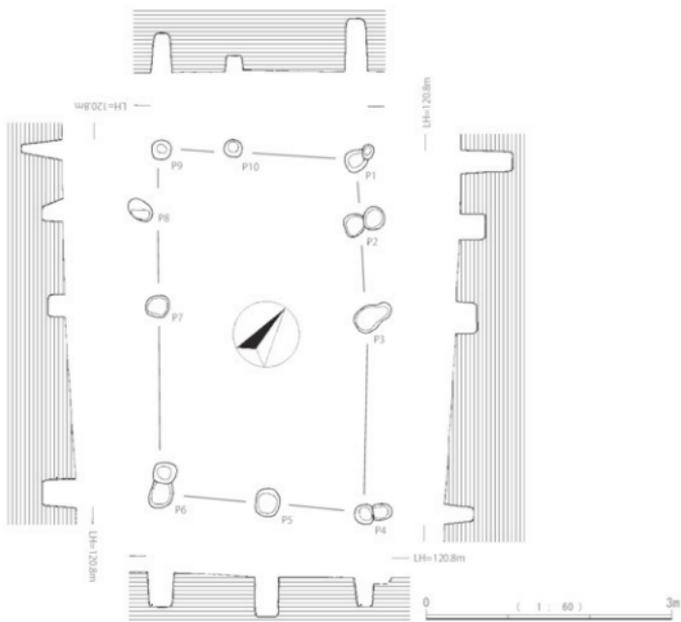
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P11	472	平均	118	P1-P5	488	平均	122	方向:N39°W	P1:滑石製石鍋(1),鉄滓(2) 粘土塊(4) P8:土師器(2),布目瓦土器(1) P12:土師器(2),鞆の羽口(1) 粘土塊(4) P15:鉄滓(1),粘土塊(1),石器(2) P16:鉄滓(1),鞆の羽口(1) P17:土師器(2),粘土塊(5)
P2-P10	468	平均	156	P6-P14	532	平均	266		
P5-P8	448	平均	149	P7-P12	540	平均	180		
				P8-P11	528	平均	176		
P1-P14	164	P5-P6	184	P1-P2	136	P7-P17	340		
P14-P13	92	P6-P7	144	P2-P3	60	P17-P16	60		
P13-P12	72	P7-P8	120	P3-P4	104	P16-P12	140		
P12-P11	144			P4-P5	188				
P2-P15	164			P6-P15	388	P8-P9	192		
P15-P16	172			P15-P14	144	P9-P10	180		
P16-P10	132					P10-P11	156		



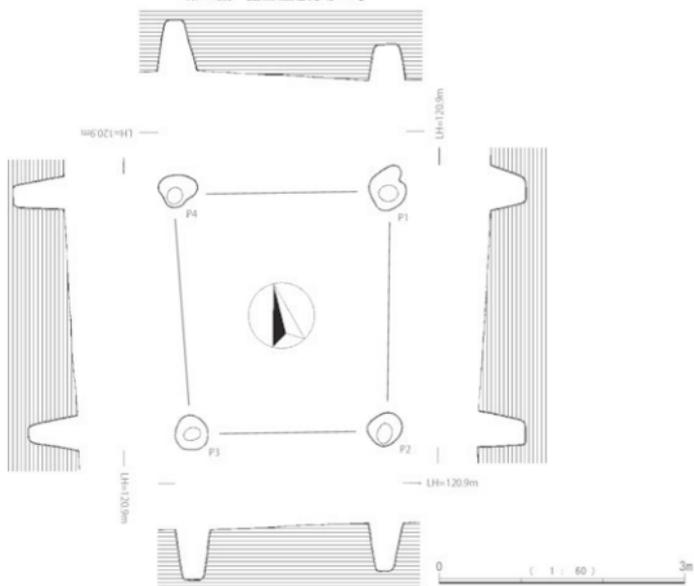
第21図 掘立柱建物跡12号

第17表 掘立柱建物跡12号計測表

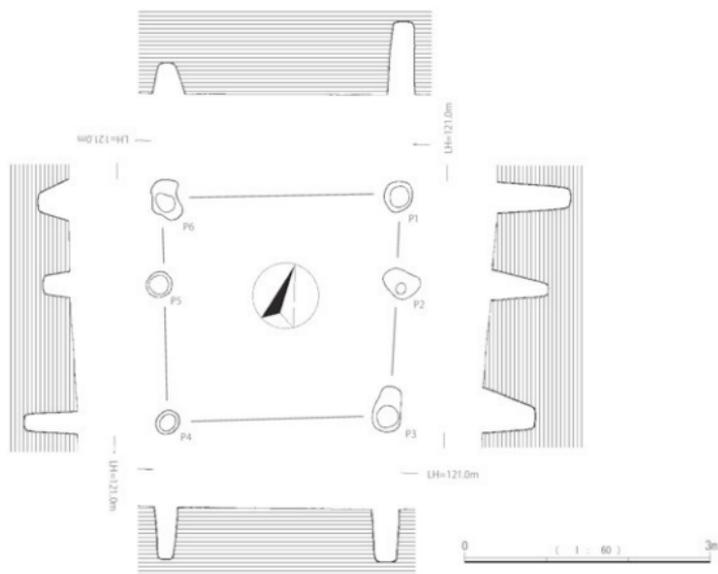
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P10	344	平均	172	P1-P4	468	平均	156	方向:N52°E	P3:鉄滓 ²⁾
P2-P9	344	平均	172	P5-P11	528	平均	176		
P3-P8	340	平均	170	P6-P10	532	平均	133		
P4-P6	344	平均	172						
P1-P11	192	P3-P13	168	P1-P2	152	P6-P7	92		
P11-P10	152	P13-P8	172	P2-P3	168	P7-P8	88		
				P3-P4	148	P8-P9	168		
						P9-P10	184		
P2-P12	112	P4-P5	184	P5-P13	164				
P12-P9	232	P5-P6	160	P13-P12	168				
				P12-P11	196				



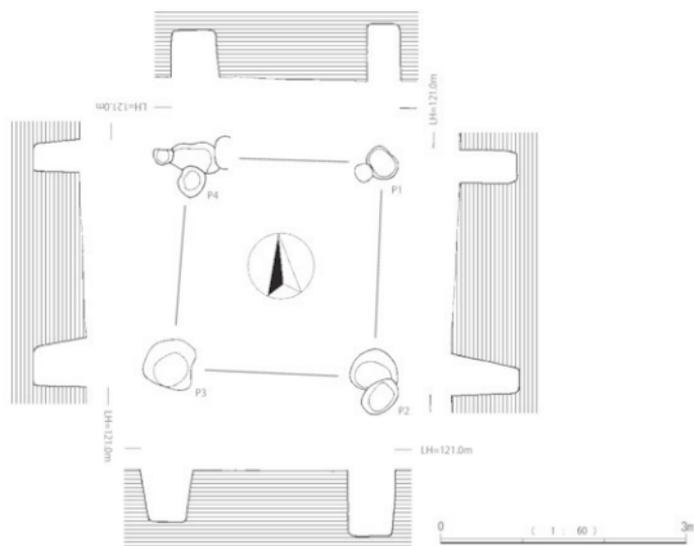
第22图 掘立柱建物跡13号



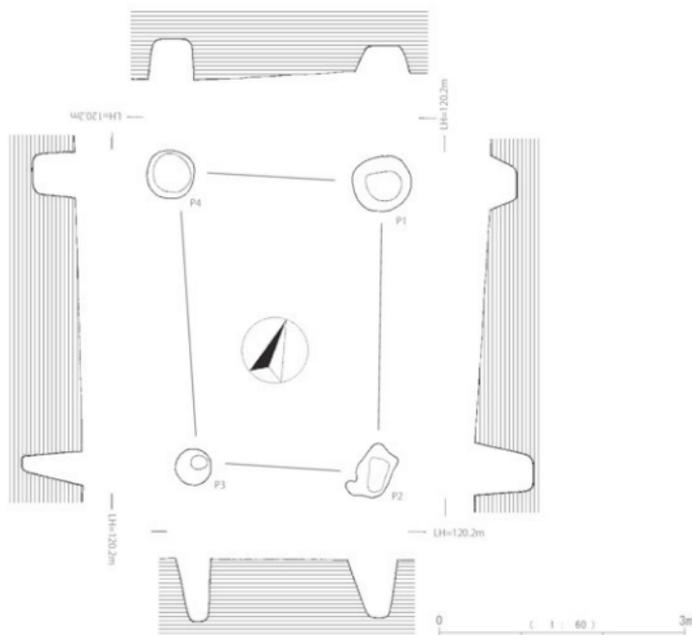
第23图 掘立柱建物跡14号



第24図 掘立柱建物跡15号



第25図 掘立柱建物跡16号



第 18 表 掘立柱建物跡 13 号計測表

第 26 図 掘立柱建物跡 17 号

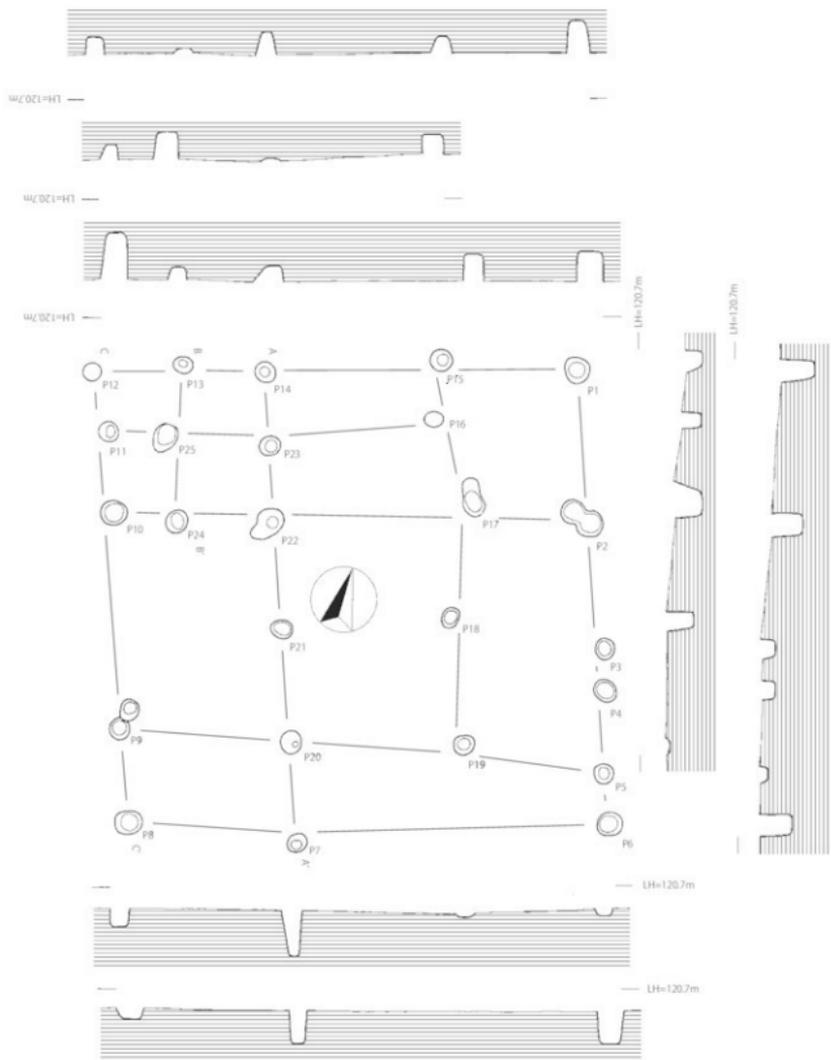
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P9	240	平均	120	P1-P4	436	平均	145	方向 :N37°W	P1: 土師器(3), 滑石製石鏝(1) 粘土塊(4), 石器(3)
P4-P6	252	平均	126	P6-P9	432	平均	144		P2: 滑石製石鏝(1), 石器(1)
P1-P10	152	P4-P5	120	P1-P2	80	P6-P7	232		P5: 越州窯系青磁(1), 鉄滓(1)
P10-P9	88	P5-P6	132	P2-P3	116	P7-P8	116		P6: 土師器(1)
				P3-P4	240	P8-P9	84		P8: 滑石製石鏝(1), 鉄滓(1)
									P9: 土師器(1), 粘土塊(1), 軽石(2)
									P10: 鉄滓(1), 粘土塊(3)

第 19 表 掘立柱建物跡 14 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	260	平均	-	P1-P2	292	平均	-	方向:	P1: 兼久式土器(1), 鉄滓(2) 粘土塊(2)
P2-P3	236	平均	-	P3-P4	288	平均	-		P2: 土師器(1), 須恵器(1), 鉄滓(1) 粘土塊(2)
									P3: 土師器(3), カムイヤキ(1) 滑石製石鏝(1), 鞆の羽口(2) 粘土塊(1), 石器(1)
									P4: 土師器(2), 鉄滓(5), 粘土塊(1)

第 20 表 掘立柱建物跡 15 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P3	268	平均	134	P1-P6	286	平均	-	方向 :N73°E	P2: 土師器(2), カムイヤキ(1) 鉄製品(1), 鉄滓(1)
P4-P6	268	平均	134	P3-P4	268	平均	-		P4: 石器(2)
P1-P2	112	P4-P5	168						P6: 土師器(2), 鉄滓(3), 鞆の羽口(2)
P2-P3	156	P5-P6	100						粘土塊(7), 石器(7)



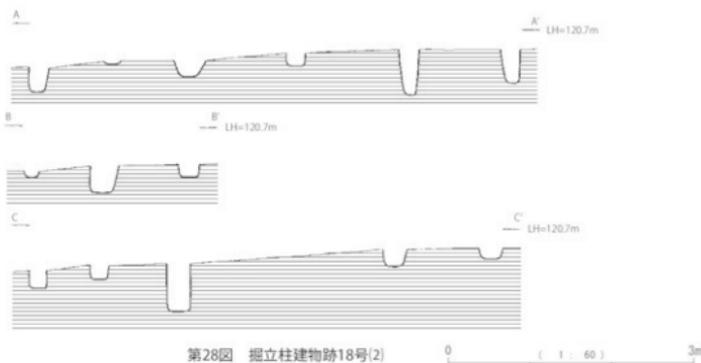
第27図 掘立柱建物跡18号(1)

掘立柱建物跡5号 (第13図, 第10表)

B-3-4区で検出し、掘立3-4号と重複している。2×1間の建物跡である。構成する柱穴は周囲の他のピットよりも若干径が大きい。柱穴内からは土師器甕、鉄滓などが出土している。

掘立柱建物跡6号 (第14図, 第11表)

B-5-6区で検出し、掘立7号と重複している。南側で1本未検出であるが、1×1間であると考えられる。



第28図 掘立柱建物跡18号(2)

掘立柱建物跡7号 (第15図, 第12表)

B-5-6区で検出し、掘立柱建物跡6-9号と重複している。2×1間の建物跡である。柱穴径が周囲のピットよりもやや大きめである。柱穴内からは土師器甕、鉄滓などが出土している。

掘立柱建物跡8号 (第16図, 第13表)

B-5-6区で検出し、掘立柱建物跡7-9号と重複している。2×3間の側建物跡である。掘立柱建物跡7号と重複する側の1本は未検出である。柱穴内から遺物は出土していない。

掘立柱建物跡9号 (第17図, 第14表)

B-6区で検出し、掘立柱建物跡8号と重複している。2×2間の側建物跡である。小型の建物跡である。

掘立柱建物跡10号 (第18図, 第15表)

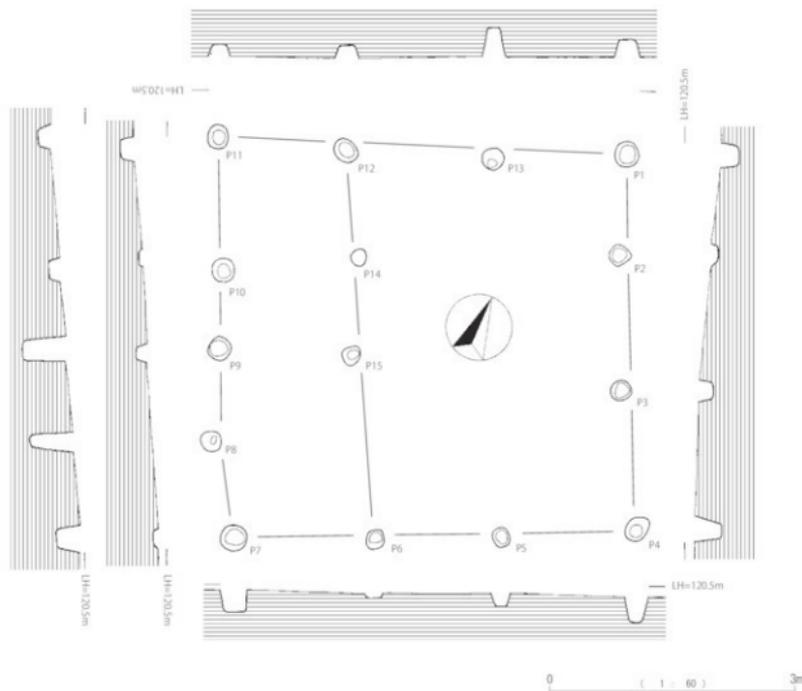
C-6区で検出し、掘立柱建物跡11-12-13号と重複している。ピットの重複関係から掘立柱建物跡12号より新しい。2×3間の側建物跡である。柱穴は深さ・径もそろっている。また、土師器・滑石製石鍋などが出土している。

第21表 掘立柱建物跡16号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	236	平均	-	P1-P2	260	平均	-	方向:	P1: 土師器(4), 滑石混入土器(1) 鉄滓(3), 竈の羽口(2), 粘土塊(5) 石器(3), 軽石(2) P2: 土師器(3), 滑石製石鍋(3) 鉄滓(5), 竈の羽口(2), 粘土塊(8) P3: 土師器(5), 越州窯系青磁(1) 滑石製石鍋(3), 兼久式土器(1) 鉄滓(5), 竈の羽口(2), 粘土塊(4) 炭化物(1) P4: 土師器(1), 布目圧痕土器(2) 滑石製石鍋(8), 白磁(1) 龍泉窯系青磁(1), 鉄滓(5) 粘土塊(4), 施釉陶磁器(1) 石器(5), 軽石(2)
P2-P3	248	平均	-	P3-P4	260	平均	-		

第22表 掘立柱建物跡17号計測表

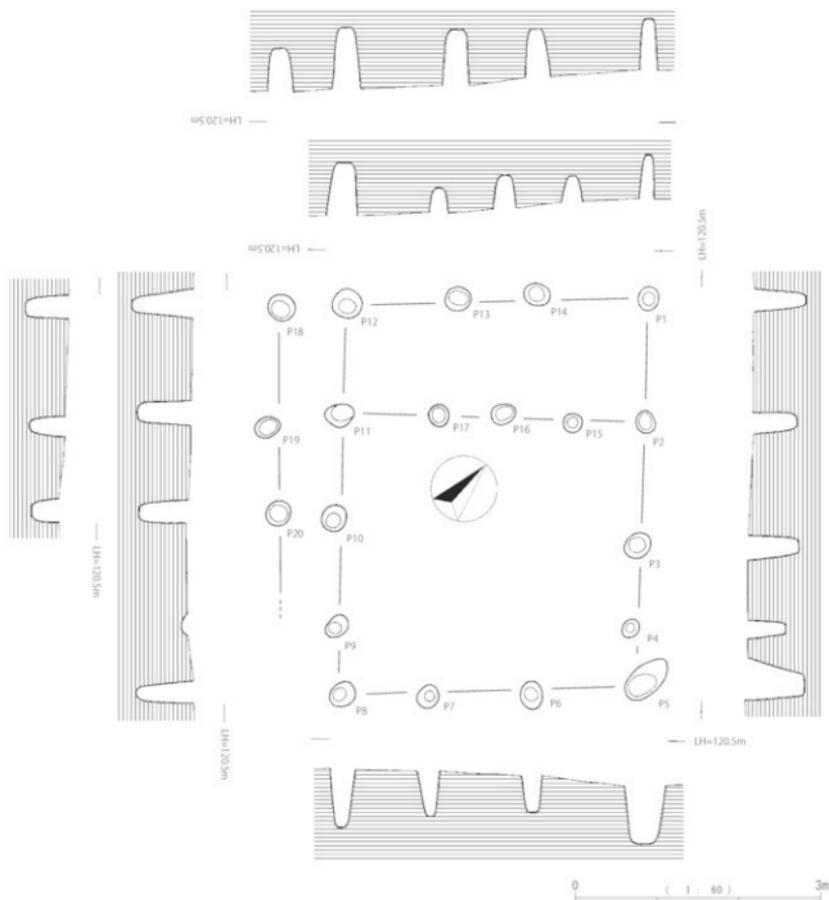
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	260	平均	-	P1-P2	356	平均	-	方向: N20°W	P1: 布目圧痕土器(1), カムイヤキ(2) 滑石製石鍋(1), 鉄滓(4) 竈の羽口(3), 粘土塊(4), 石器(3) P2: 土師器(3), 鉄製品(1), 鉄滓(3) 竈羽口(1), 石器(3), 炭化物(1) P3: 土師器(2), 鉄製品(3) 竈の羽口(1), 軽石(1) P4: 白磁(1), 鉄滓(2), 竈の羽口(4) 粘土塊(5)
P2-P3	320	平均	-	P3-P4	356	平均	-		



第29図 掘立柱建物跡19号

第23表 掘立柱建物跡18号計測表

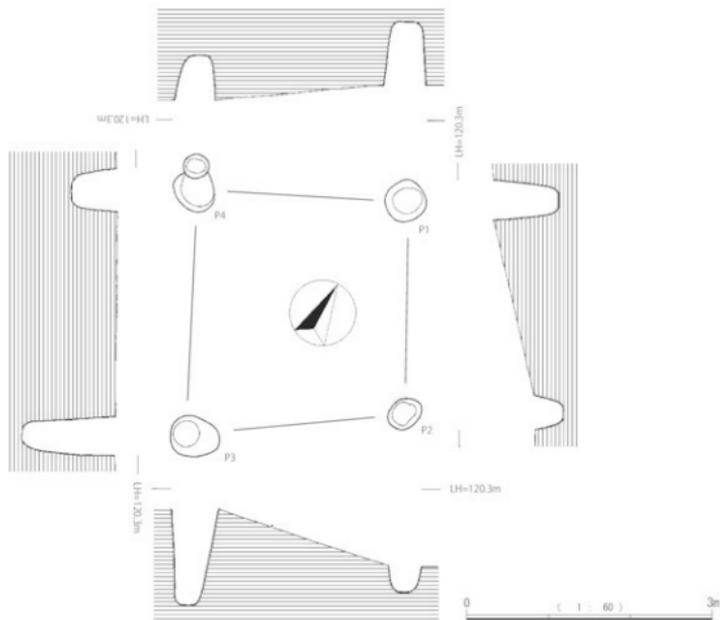
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	556	平均	111	P1-P12	592	平均	148	方向:N72°E	P1:白磁(1) P2:白磁(1),石器(1) P4:籾の羽口(2),粘土塊(1) P10:カムイヤキ(1) P14:鉄滓(3),石器(1) P16:滑石製石鏝(3) P17:土師器(2) P18:施釉陶磁器(1) P24:石器(1)
P15-P19	484	平均	121	P16-P11	396	平均	132		
P7-P14	576	平均	115	P2-P10	588	平均	147		
P13-P24	200	平均	100	P5-P9	594	平均	198		
P8-P12	552	平均	138	P6-P8	584	平均	292		
P1-P2	188	P13-P25	92	P1-P15	164	P5-P19	174		
P2-P3	152	P25-P24	108	P15-P14	216	P19-P20	204		
P3-P4	52			P14-P13	100	P20-P9	216		
P4-P5	100			P13-P12	112				
P5-P6	64								
P15-P16	72	P8-P9	116	P16-P23	200	P6-P7	380		
P16-P17	112	P9-P10	260	P23-P25	128	P7-P8	204		
P17-P18	144	P10-P11	100	P25-P11	68				
P18-P19	156	P11-P12	76						
P7-P20	124			P2-P17	148				
P20-P21	140			P17-P22	248				
P21-P22	128			P22-P24	116				
P22-P23	92			P24-P10	76				
P23-P14	92								



第30回 据立柱建物跡20号

第 24 表 据立柱建物跡 19 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	460	平均	153	P1-P11	500	平均	167	方向 :N26°W	P1: 土師器(1) P4: 土師器(1), 石器(1) P7: 土師器(2), 鉄滓(2) P8: 滑石製石鏡(1), 鉄滓(1), 軽石(1) P9: 鉄製品(1), 鉄滓(1), 粘土塊(2) P12: 土師器(1)
P6-P12	476	平均	159	P4-P7	488	平均	163		
P7-P11	492	平均	123						
P1-P2	124	P7-P8	120	P1-P13	164	P4-P5	164		
P2-P3	164	P8-P9	112	P13-P12	180	P5-P6	152		
P3-P4	172	P9-P10	96	P12-P11	156	P6-P7	172		
		P10-P11	164						
P6-P15	224								
P15-P14	120								
P14-P12	132								



第31図 掘立柱建物跡21号

掘立柱建物跡11号 (第19・20図, 第16表)

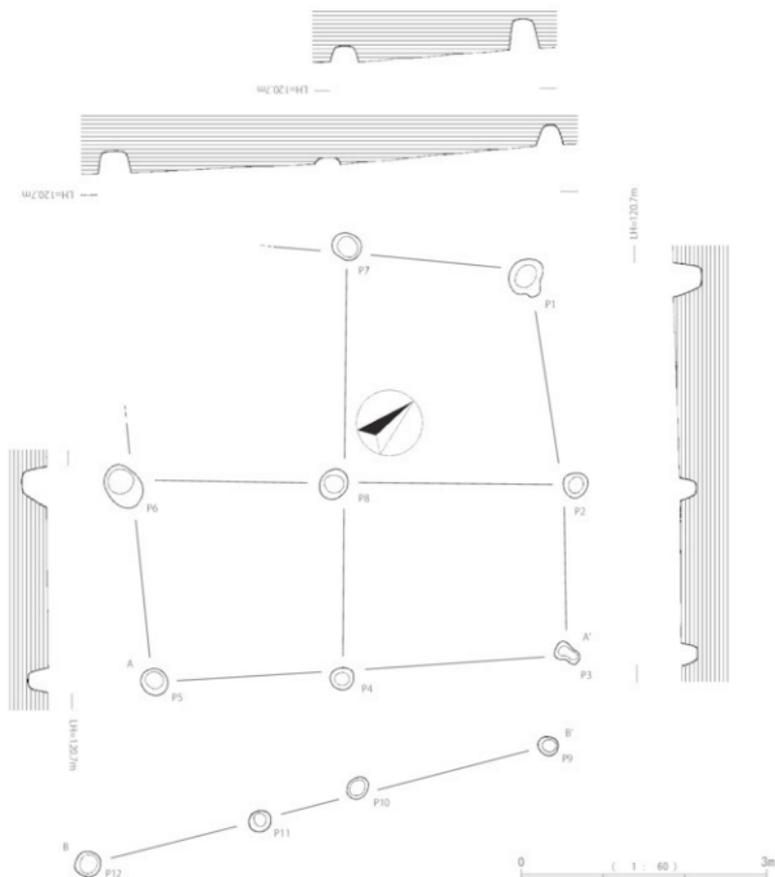
B・C6区で検出し、掘立10・12・14号と重複している。左右で柱穴の本数が異なるが、3×3間を基本と見られる。柱穴内からは土師器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡12号 (第21図, 第17表)

B・C6区で検出し、掘立10・11・13号と重複している。2×3間の総柱建物跡である。柱穴の重複関係から、掘立柱建物跡10号よりも古い。柱穴内からは鉄滓が出土している。

第25表 掘立柱建物跡20号計測表

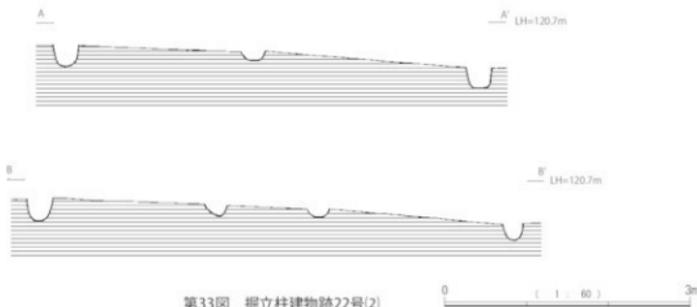
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物	
P1-P12	368	平均	123	P1-P5	324	平均	118	方向:N40°W	P4:滑石製石鍋(1) P6:須恵器(1),鉄滓(1),粘土塊(2) 石器(1) P7:籾の羽口(4),粘土塊(1) P8:籾の羽口(1),粘土塊(1),石器(1) P9:籾の羽口(1),石器(1) P11:籾の羽口(1) P14:土師器(1),石器(2) P18:須恵器(1),粘土塊(1)	
P2-P11	368	平均	92	P8-P12	472	平均	118			
P5-P8	368	平均	123							
P1-P14	136	P5-P6	136	P1-P2	148	P8-P9	80			
P14-P13	96	P6-P7	124	P2-P3	152	P9-P10	132			
P13-P12	136	P7-P8	108	P3-P4	100	P10-P11	132			
				P4-P5	72	P11-P12	128			
P2-P15	88									
P15-P16	84									
P16-P17	80									
P17-P11	116									
庇部分										
P18-P20	252	平均	126							
P18-P19	144									
P19-P20	108									



第32図 掘立柱建物跡22号(1)

第 26 表 掘立柱建物跡 21 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	256	平均	-	P1-P2	260	平均	-	方向 :N29°W	P1: 土師器(2), 布目圧痕土器(1) 滑石製石鏡(1), 鉄滓(5) 籾の羽口(1), 粘土塊(24) 軽石(1), 炭化物(1) P2: 土師器(3), 須恵器(3) 朝鮮系無釉陶器(1) 滑石製石鏡(1), 鉄滓(11) 籾の羽口(1), 粘土塊(4), 石器(1) P3: 土師器(1), 布目圧痕土器(1) 鉄滓(5), 粘土塊(3), 石器(10) 軽石(1), 炭化物(1) P4: 鉄滓(1), 籾の羽口(1)
P2-P3	268	平均	-	P3-P4	300	平均	-		



第33図 掘立柱建物跡22号(2)

掘立柱建物跡 13号 (第22図, 第18表)

C-6-7区で検出し、掘立14号と重複している。掘立14号よりも新しい。2×3間の建物跡とみられるが、北側に柱穴が多く配置されている。柱穴内からは越州窯系青磁や滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 14号 (第23図, 第19表)

B-C-6-7区で検出し、掘立13号と重複している。1×1間の建物跡である。柱穴内からは滑石製石鍋・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 15号 (第24図, 第20表)

C-7区で検出。1×2間の建物跡である。掘立柱建物跡5-7号と同様の形状であるがその2つとはやや方向が異なる。柱穴内からは土師器・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 16号 (第25図, 第21表)

B-7区で検出。1×1間の建物跡である。方形の平面プランである。柱穴内からは滑石製石鍋・龍泉窯系青磁などが出土している。

掘立柱建物跡 17号 (第26図, 第22表)

B-7区で検出。1×1間の建物跡である。掘立柱建物跡16号と異なり、長方形の平面プランである。柱穴内からは白磁・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 18号 (第27・28図, 第23表)

B-C-8区で検出し、掘立19号と重複している。柱穴の重複関係から掘立柱建物跡19号より古い。4×5間の総柱建物跡であるとみられる。柱間間隔は比較的均等である。柱穴内からは白磁・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 19号 (第29図, 第24表)

B-C-8-9区で検出し、掘立18号と重複している。柱穴の重複関係から掘立18号より新しい。4×4間の側柱建物跡であると見られるが、東側には中柱が見られない。柱穴内からは土師器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 20号 (第30図, 第25表)

B-8区で検出し、掘立21号と重複している。掘立21号より新しい。4×4間の側柱建物跡であると考えられる。柱穴内からは須恵器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 21号 (第31図, 第26表)

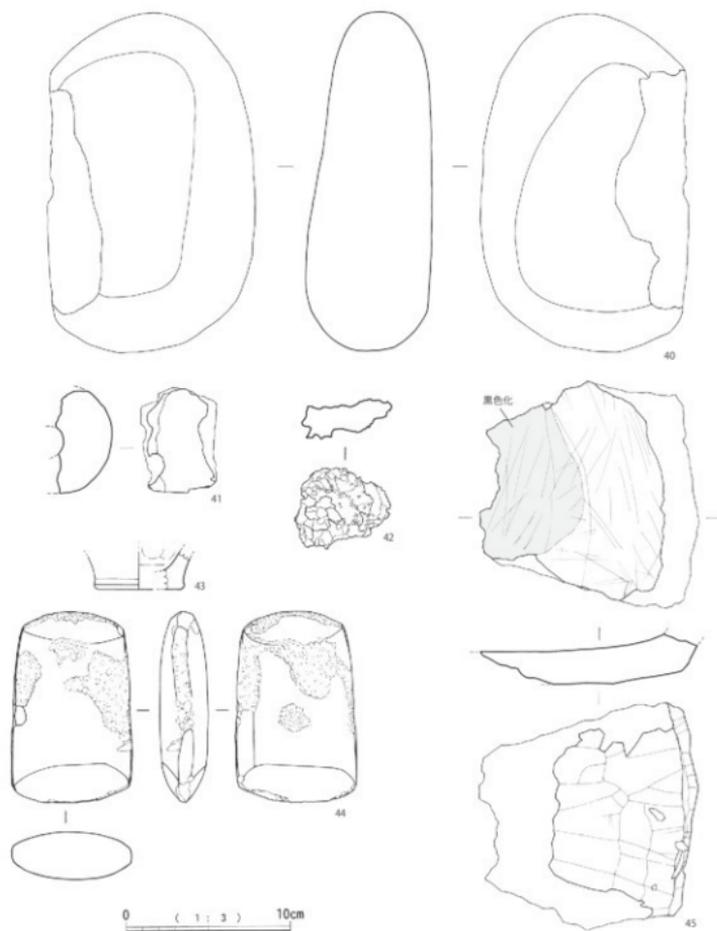
B-8区で検出し、掘立20号と重複している。掘立20号よりも古い。1×1間の建物跡である。平面プランは方形である。柱穴内からは土師器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 22号 (第32・33図, 第27表)

B-9-10区で検出。2×2間の総柱建物跡である。柱穴内からは主に土師器・滑石製石鍋が出土している。

第27表 掘立柱建物跡 22号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	470	平均	235	P1-P7	220	平均	-	方向:N39°E	P1:土師器(1),滑石製石鍋(2) 土器(1),軽石(1)
P4-P7	524	平均	262	P2-P6	552	平均	276		
P5-P6	248	平均	-	P3-P5	504	平均	252		
P1-P2	264					P3-P4	276		
P2-P3	206					P4-P5	228		
P4-P8	236			P2-P8	292				
P8-P7	288			P8-P6	260				

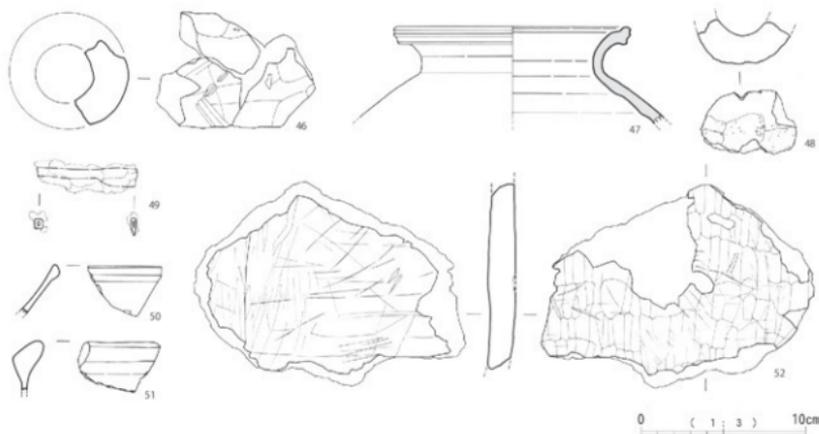


第34図 A地区掘立柱建物跡内出土遺物(1)

(イ) 掘立柱内出土遺物

第34図40～第35図52は掘立柱建物跡内から出土した遺物である。40は掘立5号から出土した石器である。磨敲石である。やや重量があるが、側面を持つと非常によいフィット感がある。側面が破損しているのは敲具として使用した結果であると考えられる。43～45は掘立16号から出土した遺物である。43は兼久式土器の底部である。44は石斧であるが、端部が潰れており、敲打具として転用されている。

は掘立18号から出土したカムイヤキである。新里A群に対応する。48・50・51は掘立18号から出土した遺物である。50は土師器甕である。口縁部は短く、頸部は強くケズられ、非常に薄く作られている。52は掘立20号から出土した滑石製石鍋である。外面は黒色化しており、よく焼けている。



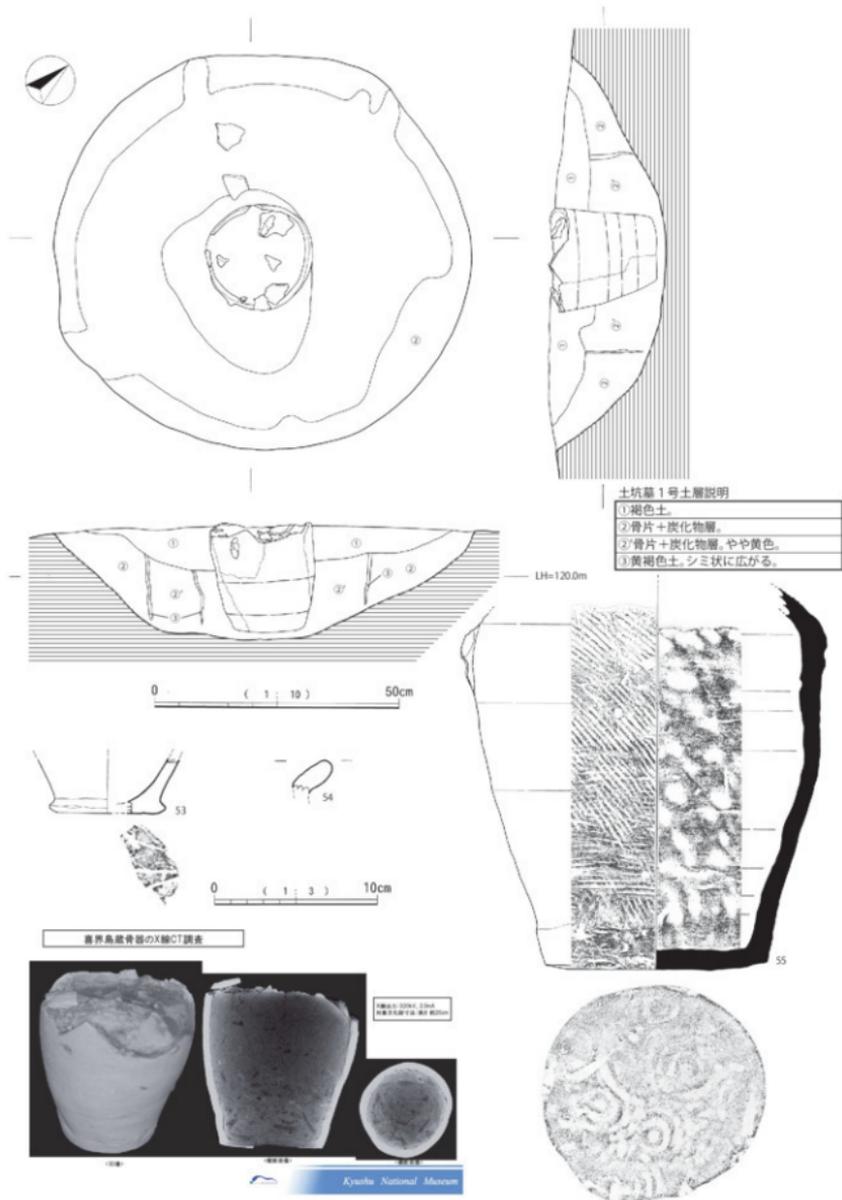
第35図 A地区掘立柱建物跡内出土遺物(2)

第28表 A地区掘立柱建物跡内出土遺物(1)

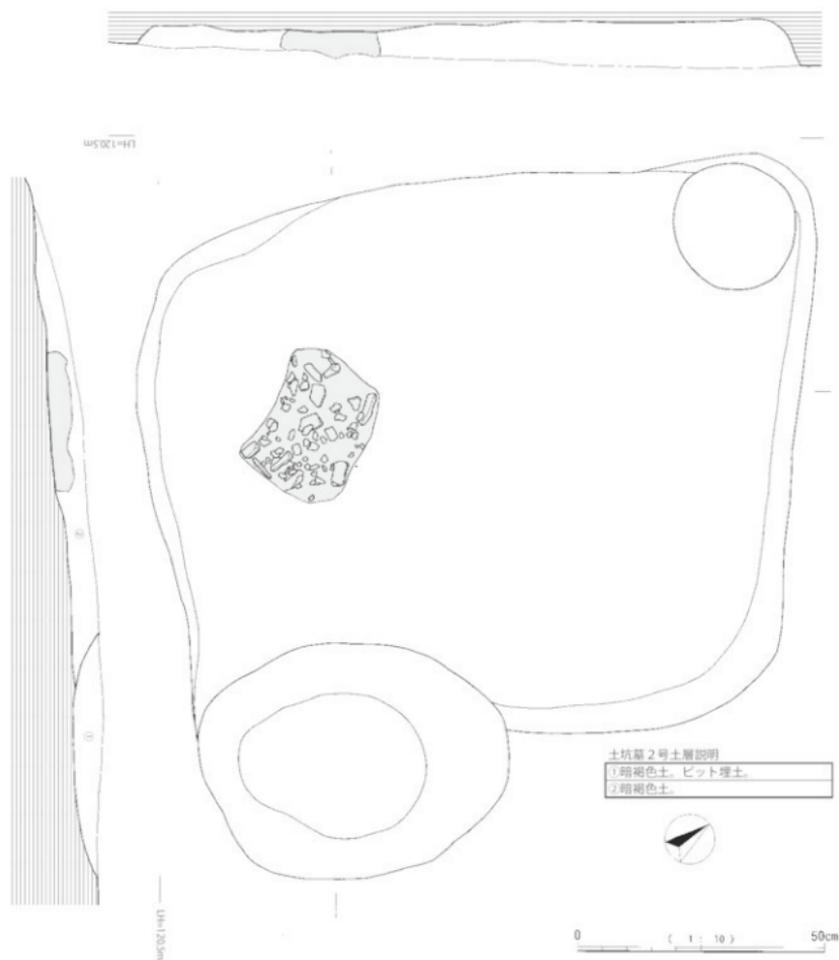
検出 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)			(外)
34	40	B4	P0464	石磨	磨盤石	砂岩	-	-	-	-	-	-	-	3020	掘立 5号 P02	
	41	C6	P0350	輪の口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立 10号 P06	
	42	C7	P0243	袋等	椀形埴	-	-	-	-	-	-	-	-	69	掘立 15号 P06	
	43	B7	P0840	耐久式土器	-	-	-	底部	4.8	-	-	-	-	-	453	掘立 16号 P03
	44	B7	P1108	石磨	石岸	ひん岩	-	-	-	-	-	-	-	-	453	掘立 16号 P04
45	B7	P1108	滑石製石磨	-	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	623	掘立 16号 P04	

第29表 A地区掘立柱建物跡内出土遺物(2)

検出 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)			(外)
35	46	B7	P0894	輪の口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立 17号 P04	
	47	C8	P0133	カム \times ヤ手	蓋	-	口縁部	14	-	-	-	-	灰	灰	-	掘立 18号 P10
	48	C8	P0203	輪の口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立 18号 P04
	49	B7	P0812	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	掘立 17号 P02
	50	B8	P0182	土師器	罎	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	掘立 18号 P17
	51	C8	P0212	白磁	瓶	A類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立 18号 P02
	52	B8	P1019	滑石製石磨	-	-	-	側部	-	-	-	-	-	-	469	掘立 20号 P04



第36図 土坑墓1号



第37図 土坑墓2号

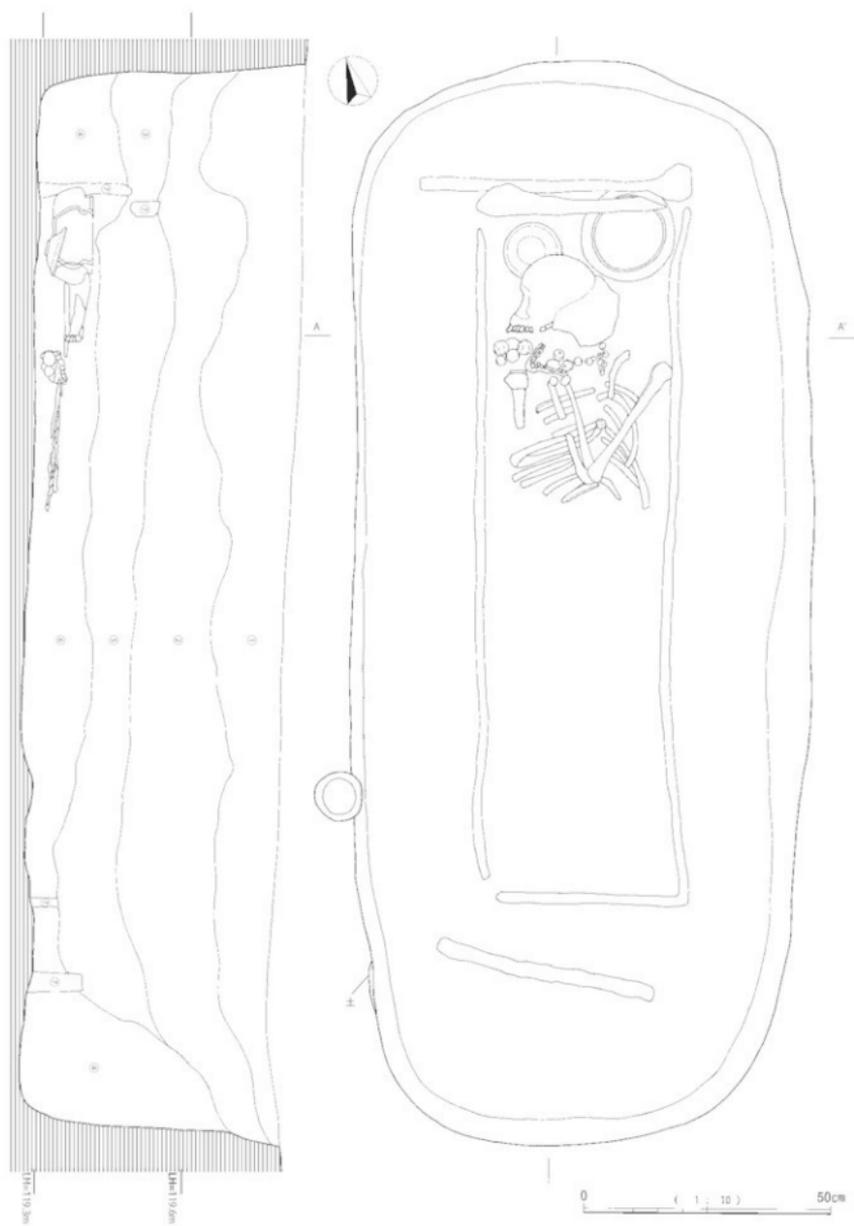
ウ 土坑墓
土坑墓1号

B-5区で包含層除去後に検出。直径約85cm×80cmの円形で、深さ24cmほどである。検出時には外周の黒褐色層が輪状に見えていた。中央部分には須恵器壺が置かれていた。①層は褐色土層、②層は炭化物和火葬骨が入り混じった層であった。③層は黄褐色でシミ状に観察ができた。

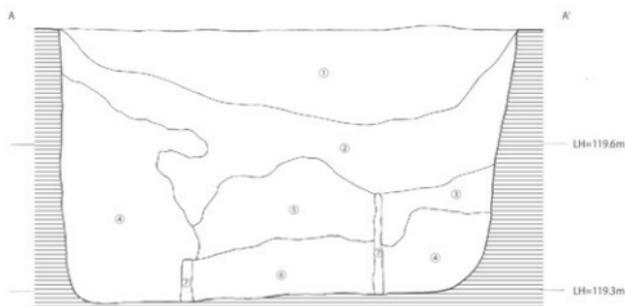
これらのことから、②層を敷き→壺を安置→さらに②層を充填したものと見られる。③層のシミ状のものは曲物などの

可能性も考えられる。須恵器の上部は検出時点から破損していたため、①層が混入した時点で壊されたものと見られる。

また、須恵器壺は取り上げ後、室内で内部の土を取り出す際前にレントゲン写真を撮影した結果、半ばあたりから反応がたくさんあり、掘り進めると火葬骨が充填していた(火葬骨の詳細については第VI章第1節を参照)。そのため、本土坑墓は須恵器を蔵骨器とした火葬墓と考えられる。



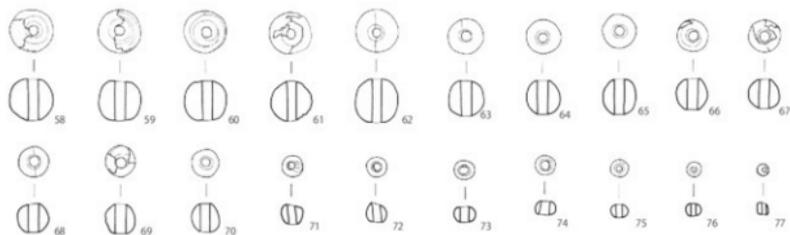
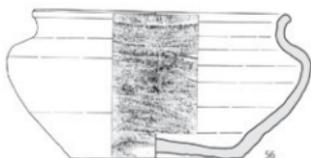
第38圖 土坑墓3号(1)



土坑墓3号土層説明

①暗茶褐色粘質土
②①+④層の混土層。
③②層と類似。やや暗い。
④茶褐色粘質土。
⑤暗茶褐色粘質土。
⑥暗茶褐色+黄色粘質土。
⑦褐色強粘質土。木郭。

0 (1 : 10) 50cm



第39図 土坑墓3号(2)

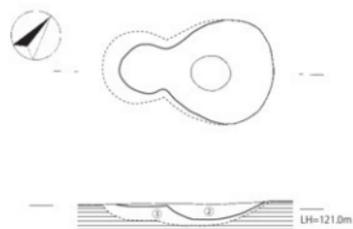
0 (1 : 3) 10cm

第30表 土坑墓1号

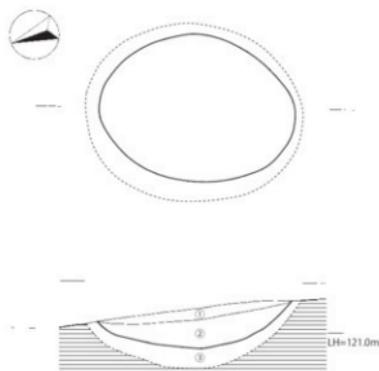
検出No	発掘番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調			重量 (g)	備考
								口徑	底径	高さ	(内)	(外)	(内)	(外)	(内)		
36	53		土坑墓1号	溝式土器			底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	54		土坑墓1号	土器類	甕		口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	55		土坑墓1号	土器類	甕		胴一處	22.3	13.5	23.2	灰白色	灰白色	灰白	灰白	-	-	-

第31表 土坑墓3号

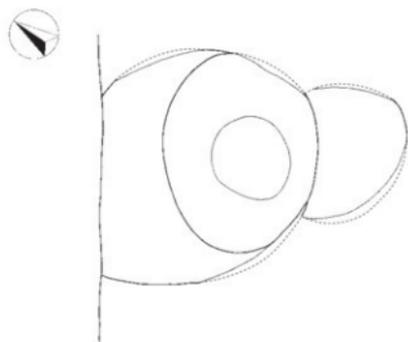
検出No	発掘番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調			重量 (g)	備考
								口徑	底径	高さ	(内)	(外)	(内)	(外)	(内)		
30	56		土坑墓3号	カムィヤキ	鉢		底部	15.4	10.2	9	-	-	-	-	-	-	-
	57		土坑墓3号	白磁	皿	皿類	底部	11	3.8	2.9	-	-	-	灰	灰	-	-
	58		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.7	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-
	59		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.6	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	60		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.6	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	61		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.5	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	62		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.6	2.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	63		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.2	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-
	64		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.1	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-
	65		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	2.1	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-
	66		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.9	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-
	67		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.9	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	68		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.9	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	69		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.8	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	70		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.7	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-
	71		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.3	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-
	72		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.3	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-
	73		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.5	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-
	74		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.2	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	75		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	1.1	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-
76		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	0.9	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
77		土坑墓3号	ガラス玉	球状		底部	0.7	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	



第40図 焼土跡1号



第41図 焼土跡2号

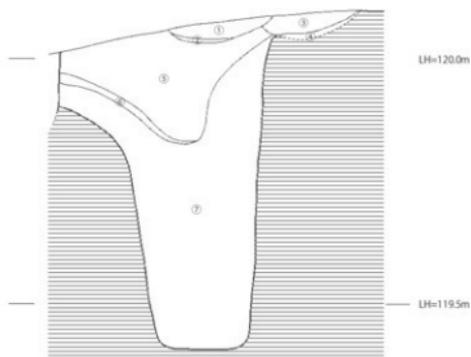


焼土跡 1-2号土層説明

- | | |
|---|--------------|
| ① | 灰褐色土 |
| ② | 黒灰色土、鉄滓片多い。 |
| ③ | 赤褐色に被熱した地山面。 |

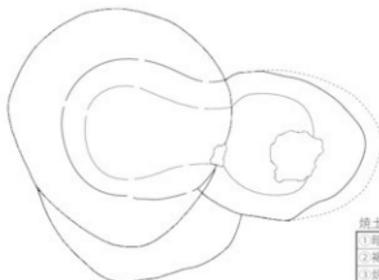
焼土跡 3号土層説明

- | | |
|-----|--------------|
| ①③ | 暗褐色土 |
| ⑤ | 褐色土、炭化物・焼土粒有 |
| ②④⑥ | 赤褐色被熱面。 |
| ⑦ | ピット埋土。暗褐色土。 |



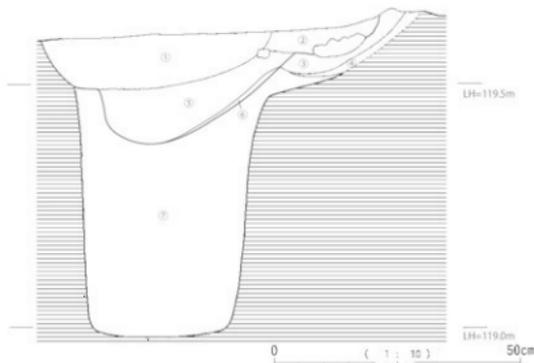
0 (1 : 10) 50cm

第42図 焼土跡3号

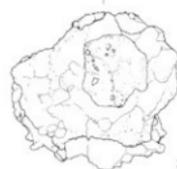
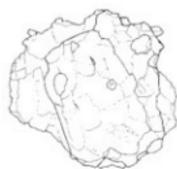


焼土跡4号土層説明

①	暗褐色土。
②	褐色土。
③	が壁。
④⑥	赤褐色被熱面。
⑤	暗褐色土。鉄薄片が混入。
⑦	ピット埋土。褐色土。



第43図 焼土跡4号



0 (1 : 5) 10cm

出土遺物

53は兼久式土器の底部である。①層と②層の境目から出土した。55は須恵器壺である。最大胴形約25cm、残存高約25cmを測る。外面は平行状、内面は無文である。底部部分には同心円状の当て具痕が確認できる。

土坑墓2号

C-7-8区で検出。直径約134cm×115cmの方形状で、深さ24cmほどである。方形状の一角に方形状の火葬骨と炭化物の混在した塊を検出している。副葬品は確認できなかったが、塊上部には破損したカマイヤキ片が散在した状態で検出していることや、土坑自体がかなり浅くなっているため、後世の行為で散在してしまった可能性が高い。

土坑墓3号

B-7区で検出。直径225×96cmの長方形土坑で、深さ50cmほどである。土坑を掘り進めている最中で、非常に粘土質の強い土層が細長い形状で残っていることを確認した。これを木棺痕であると考え、調査を進めたところ、中央部分に非常に腐食した人骨片と副葬品を確認した。人骨は直径150×40cm、幅2cmの木棺痕跡の内側から検出した。下半身は残念ながら確認できなかったが、上半身を検出することができた。頭の上にはカマイヤキ鉢と白磁小碗、首付近と手首付近にガラス玉を確認した。ガラス玉は73-腐食小玉-74-71-70-59-67と60-66-61-65-62と77-76-腐食小玉-75の並びを確認した。残りの玉も72-63-69-64が想定できる。

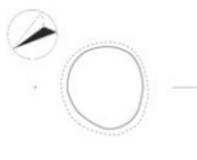
これらから77-76-腐食小玉-75-72-63-69-64-60-66-61-65-62-67-58-59-70-71-74-腐食小玉-73-77の順で装着されていたと想定できる。68はプレスレットと見られる。

第32表 焼土跡4号

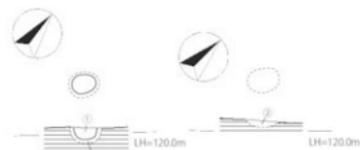
検出No	検出番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底徑	器高	(内)	(外)	(内)		
43	78		焼土跡4号	鉄滓	検出層			-	-	-	-	-	-	-	-



第44図 焼土跡5号

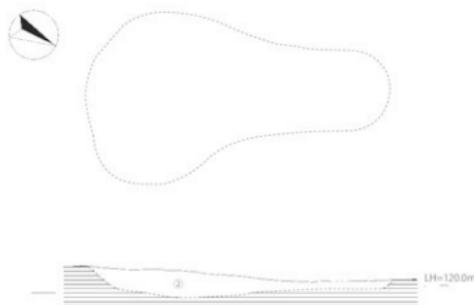


第45図 焼土跡6号



第46図 焼土跡7号

第47図 焼土跡8号

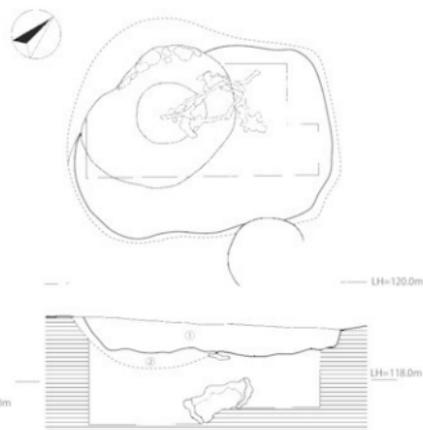


第48図 焼土跡9号

焼土跡5～10号土層説明

① 暗褐色土

② 赤褐色被熱面



第49図 焼土跡10号

副葬品

56はカマイヤキ鉢完形品である。口径15.4cm、底径10.2cm、器高9cmを測る。丁寧にナデ仕上げされている。頸部～胴部にかけて記号状の印が刻まれている。57は白磁皿完形品である。口径11cm、底径3.8cm、器高2.9cmを測る。内面は蛇の目輪割ぎされていることなどから、大宰府分類皿類と見られる。58～77はガラス玉である。サイズの大小と管玉がある。ほとんどが巻き付け技法で製作されている。

(四) 焼土跡

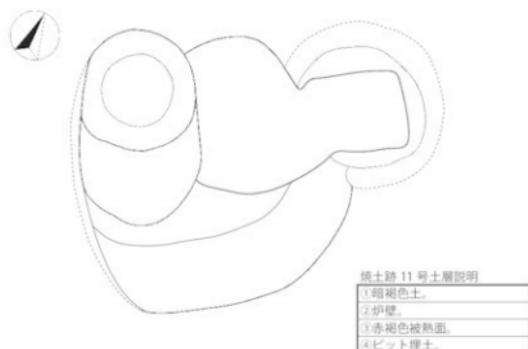
焼土跡は、文字通り焼土を伴う遺構であるが、紋帯には多様である。そのほとんどが削平を受けているため、上部の規模や形状を判断できないが、略円形で、皿状の掘方をもち、内部を還元色の焼土が満たし、地山に赤褐色の被熱帯を残すものが多い。削平が深く及び、地山に被熱帯のみを残す遺構もある。被熱帯は平均2cmと厚く、平面でも断面でも認めることができ、熱源の温度が大変高かったと推測できる。また焼土には鉄滓・鍛造削片・粒状滓などを含む例が多いことが

ら、鉄あるいは鉄器の加工に関わる炉跡がほとんどである。ただし、被熱帯のみを残す例もあることから、まずはこれらの遺構を焼土跡として報告し、後にその性格を限定したい。

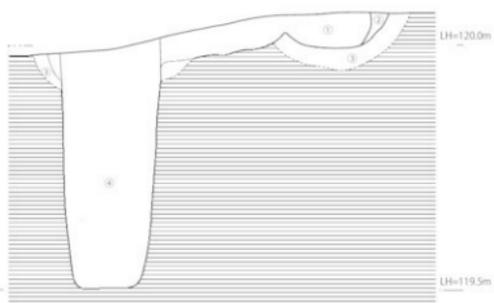
これらの焼土跡はB・6・7区付近の15m程の範囲に集中して出土している。

焼土跡1号

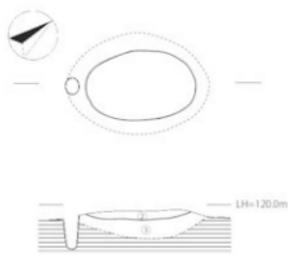
平面形は瓢箪形を呈し、全長軸31cm、小円部分の幅は10cm、大円部分の幅は21cmを測る。炉底部分がわずかに残存する程度であり、黒色ないしは黒灰色の焼土が残存している。その周囲には赤褐色の被熱帯がめぐっている。被熱帯は小円部分の方が、平面・断面双方ともに厚い。小円部分の被熱温度が高かったと判断される。



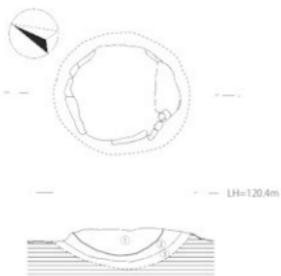
焼土跡 11 号土層説明



第50図 焼土跡11号



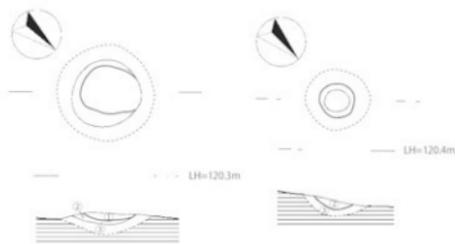
第51図 焼土跡12号



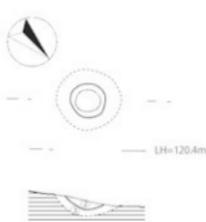
第52図 焼土跡13号

焼土跡 12 ~ 15 号土層説明

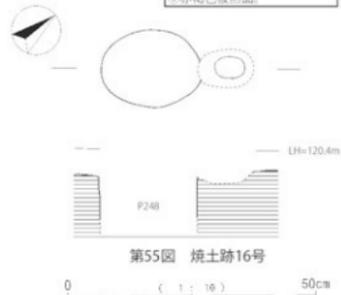
- | |
|----------------|
| ① 灰褐色土。 |
| ② 暗褐色土、硬化している。 |
| ③ 赤褐色被熱面。 |



第53図 焼土跡14号



第54図 焼土跡15号



第55図 焼土跡16号

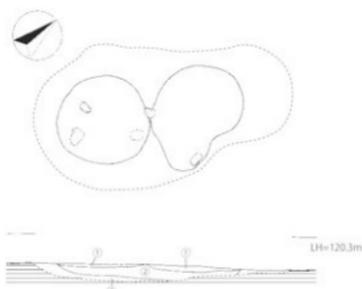
焼土跡 2 号

楕円形を呈し、長軸 40cm・短軸 30cm・深さ 8cm である。②層が黒灰色の炭混じりの焼土であり、その直下の炉底は表面が灰色の還元色を呈している。被熱帯は平面で 5cm、断面で 4cm を測る。③層には鉄滓の小片が含まれており、金属学

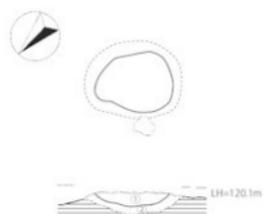
的分析の結果、精錬鍛冶滓と判断された。

焼土跡 3 号

平面形は略円形で、この焼土が北西部の土坑と接しているため瓢箪形に見える。焼土の周囲には赤褐色の被熱帯が観察



第56図 焼土跡17号



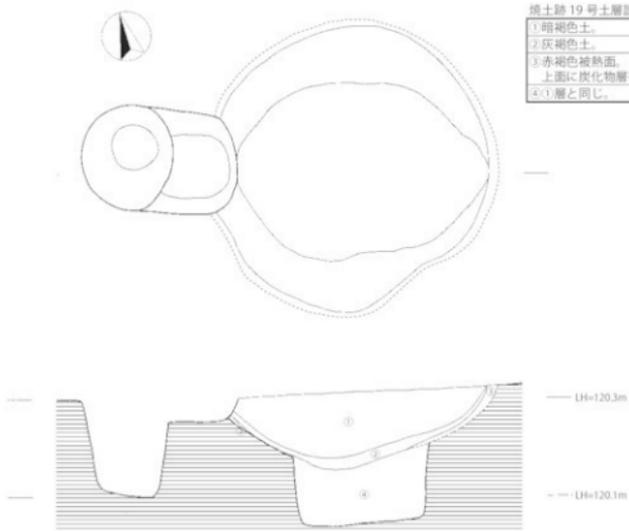
第57図 焼土跡18号

焼土跡 17・18号土層説明

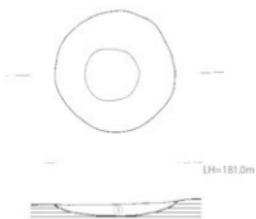
- | | |
|---|---------|
| ① | 暗褐色土。 |
| ② | 赤褐色被熱面。 |

焼土跡 19号土層説明

- | | |
|---|---------------------|
| ① | 暗褐色土。 |
| ② | 灰褐色土。 |
| ③ | 赤褐色被熱面
上面に炭化物層有。 |
| ④ | ①層と同じ。 |



第58図 焼土跡19号



第59図 砂鉄ビット

0 (1 : 10) 50cm

される。焼土を切るビットはその北西側で深くなっている。後述する焼土跡4号と類似する堆積状況である。このビットは溝状遺構1号に切られている。断面観察の結果、④層を伴う炉が破壊された部分に③層が堆積し、⑤層は炉底がかき出された際に形成されたものと推測される。その後、①・②層を伴う炉が形成されると見られる。前者の炉の方が被熱が高い。なお③層が堆積するビットの埋設後、焼土に関する一連の遺構がもうけられた理由は不明である。

焼土跡 4号

北東側の楕円形を呈する焼土が南西側の土坑と接しており、焼土跡3号と同様、瓢箪形の遺構として検出された。焼土の周囲には赤褐色の被熱帯が見られる。こちら左側がピット状に深くっており、その上に被熱面が見られた。③層は炉底であり、粘土を貼って形成されている。②層は炉底付近が吹き出された際に形成された層であるが、吹き出しを免れた大型鉄滓が炉底状に残存していた。④層は被熱帯である。⑤・⑥層が堆積するピットは、炉からの排滓のために設置されたものと推測される。なお⑦層が堆積するピットの埋没後、焼土に関する一連の遺構がもうけられた理由は不明である。

炉底状の鉄滓は、金属学的分析によって製錬滓であることが判明している（掲載 No78）。③層の炉底粘土は他の小型の焼土跡には見られない厚みと被熱度を呈しており、この③・④層の上に炉壁を立てた製鉄炉があったと推測される。ただし、遺構内の②層や⑤層には粒状滓や鍛造剥片様の微細滓なども含まれており、製鉄炉の破壊後、それらが流入したと考えられる。したがって、周辺に鍛冶関連の工房があったことも想定される。

焼土跡 5～9号

焼土跡5・8・9号は深さ1cm～5cmの被熱帯のみが見られる。焼土跡9号は5・8号と異なり、不定形な平面形状である。とくに南側の土坑の被熱が高いため、5・8号と比べると高温の熱源があったと推測される。焼土跡6・7号は炉底部がわずかに残存する程度で、その周囲には厚さ1cmほどの赤色被熱帯がめぐっている。焼土跡1号と内容は類似しているが、平面形状が円形である。

焼土跡 10号

直径50×40cmの方形で全体的によく被熱していた。左側の一部が円形状に凹んでおり、一部炉壁も確認できた。炉内からは流動滓が出土している。この流動滓が焼けた地山面からも出土していたため、追いかけて掘り下げると流動滓の塊が出土した。脚痕などの空洞に堆積したものと考えられる。

焼土跡 11号

北東側の円形を呈する焼土が南西側の土坑と接しており、焼土跡1・3・4号と同様、瓢箪形の遺構として検出した。焼土の周囲には赤褐色の被熱帯③が見られる。②層は還元色を呈する炉底であり、粘土を貼って形成されている。①層は炉底付近が吹き出された際に形成された層であるが、南西側の土坑に広がっている。この土坑はさらに③層を伴う柱穴によって破壊されている。

①層より出土した鉄滓は重量感があり、破面は緻密である。金属学的分析の結果、製錬滓であることが判明している。②層の炉底粘土は他の小型の焼土跡には見られない厚みと被熱度を呈しており、この上に炉壁を立てた製鉄炉があったと推測される。

焼土跡 12号

全長軸22cm、幅は14cmの楕円形で、②層の炉底部がわずかに残存する程度で、その周囲には幅3～4cm、断面で4cmほどの赤色被熱帯がめぐっている。

焼土跡 13号

全長軸23cm、幅は20cmの円形で、焼土跡12号よりも残りがよく、壁面には固く焼け締まった還元色を呈する炉壁が貼り付いていた。周囲には幅2～3cm前後の赤色被熱帯がめぐっている。内部からは鉄滓片が出土している。

焼土跡 14号

全長軸16cm前後の円形で、②層の炉底部がわずかに残存する程度であった。その周囲には幅3～4cmほどの赤色被熱帯がめぐっている。

焼土跡 15号

全長軸7cm前後の円形で、②層の炉底部がわずかに残存する程度であった。その周囲には幅3cmほどの赤色被熱帯がめぐっている。

焼土跡 16号

楕円形で、赤色被熱帯がめぐっていた。図は被熱帯まで完掘したときの断面図である。

焼土跡 17号

全長軸18cm前後の円形と全長軸22cm、幅は17cmの不定形な円状の範囲が見られ、その周囲には幅4～10cmほどの赤色被熱帯がめぐっていた。

焼土跡 18号

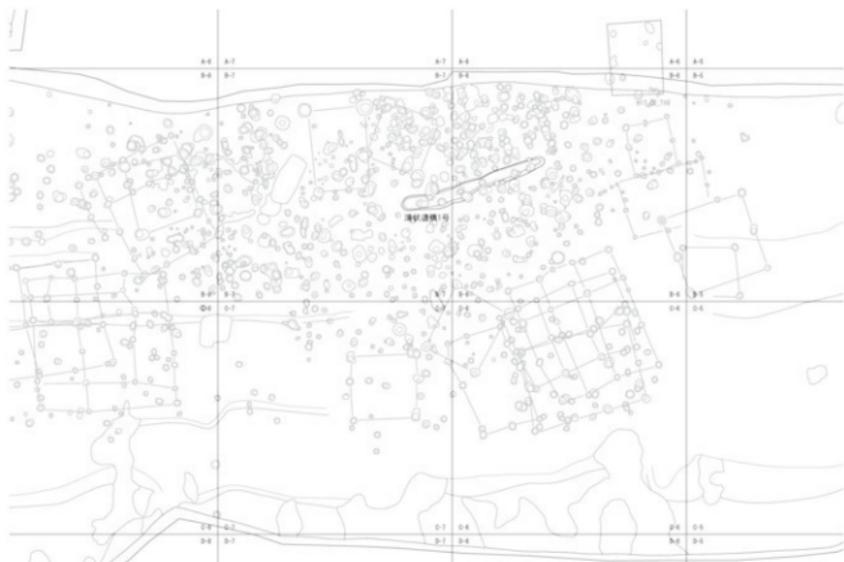
全長軸15cm、幅は12cmの楕円形で、炉底部がわずかに残存する程度であった。その周囲には幅1～3cmほどの赤色被熱帯がめぐっている。内部からは鉄滓片が出土している。

焼土跡 19号

全長約60cm前後の円形の土坑である。周囲には赤色被熱帯が見られる。これまでのものよりも径が大きく、擂鉢状になっている。埋土色も異なることから、他のものとは用途が異なる土坑ではないかと考えている。

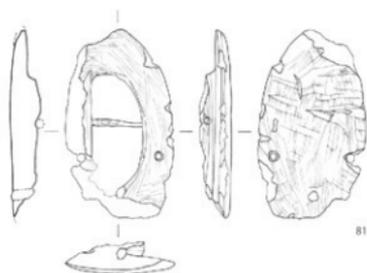
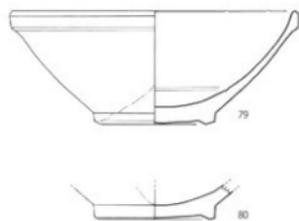
砂鉄ピット

全長25cmの円形の中に厚さ2cmほど堆積していた。非常に浅いピットであった。また、隣接するピットにもわずかに混入していた。



溝状遺構1号

S=1:200



第60図 溝状遺構1号出土遺物

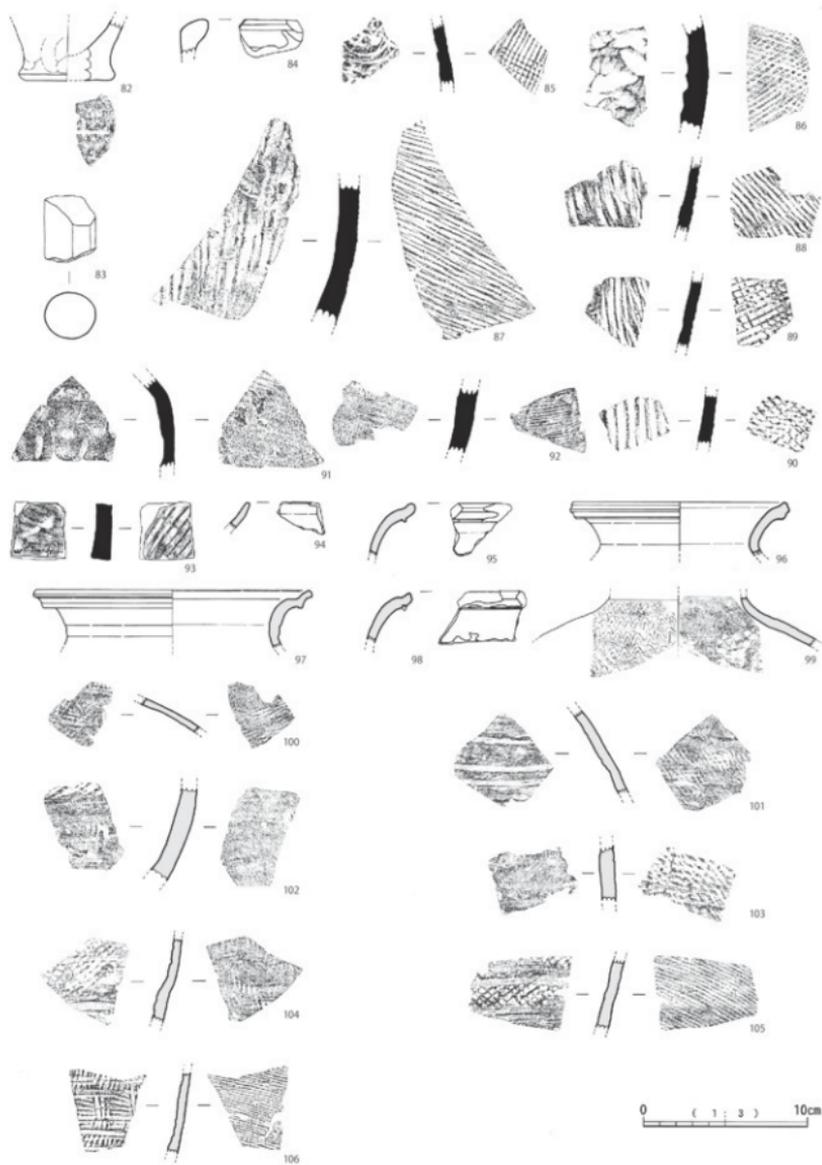
(*) 溝状遺構

溝状遺構1号

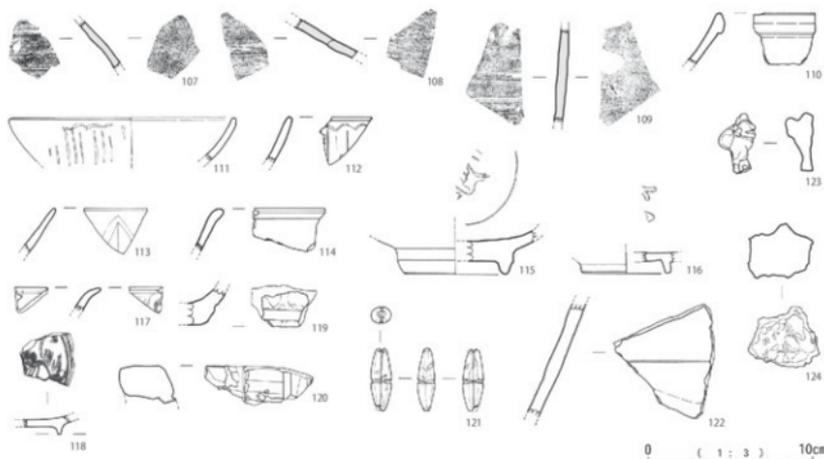
B-6・7区で検出。約長さ6.4m・幅60cmである。溝の中からは白磁や滑石製石鍋が出土した。

出土遺物

79・80は白磁椀Ⅳ類である。79は約1/2残存しており、全形がうかがえる資料である。81は滑石製石鍋二次加工品である。突起部分はほとんど破損しているが貫通穿孔が中央部分に認められることや、形状からバレン状製品と考えられる。



第61图 A地区II a层出土遗物(1)



第62図 A地区IIa層出土遺物(2)

第33表 溝状遺構1号

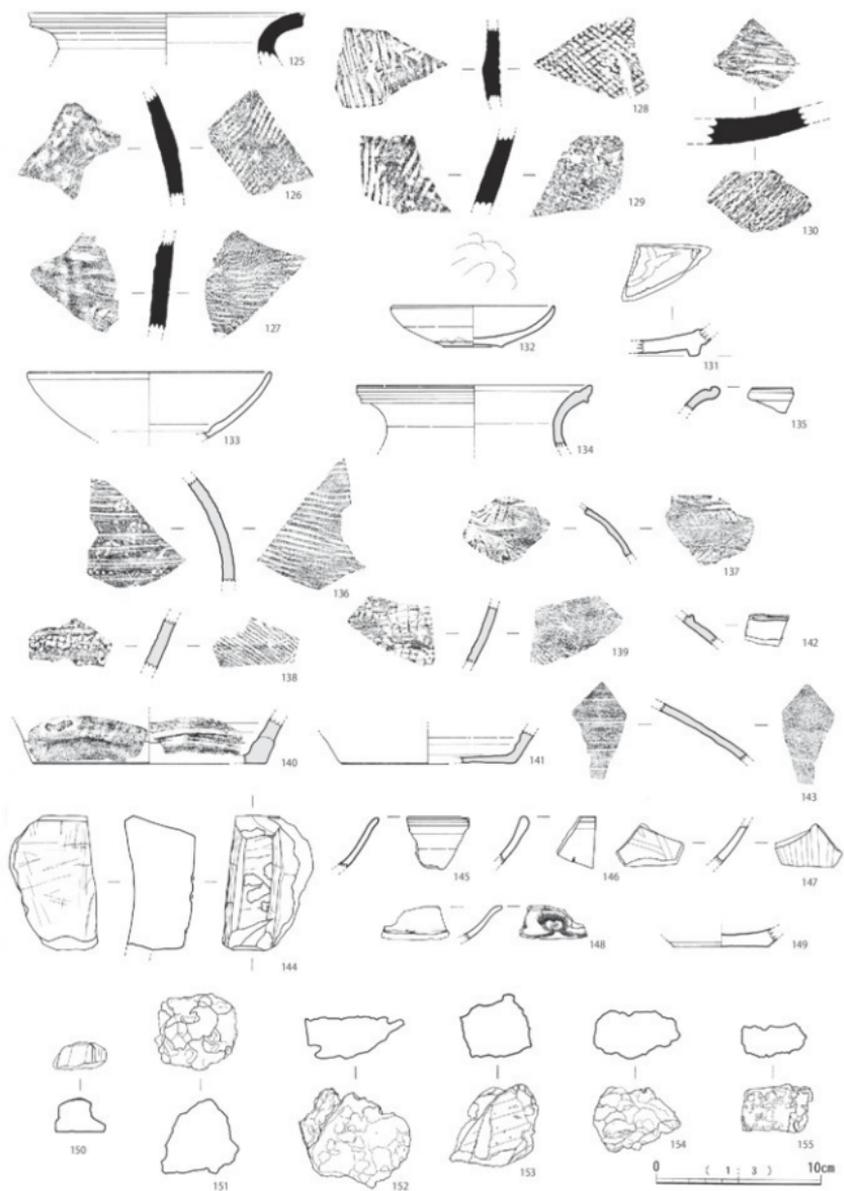
探検 No	順数 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
60	79	B7	溝状遺構	白磁	柄	IV 1a類	口一底	17	6.2	6.9	-	-	-	-	-	-
	80	B7	溝状遺構	白磁	柄	IV類	底部	-	6.7	-	-	-	-	-	-	
	81	B6	溝状遺構	赤土・白土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	赤土遺存孔	

第34表 A地区IIa層出土遺物(1)

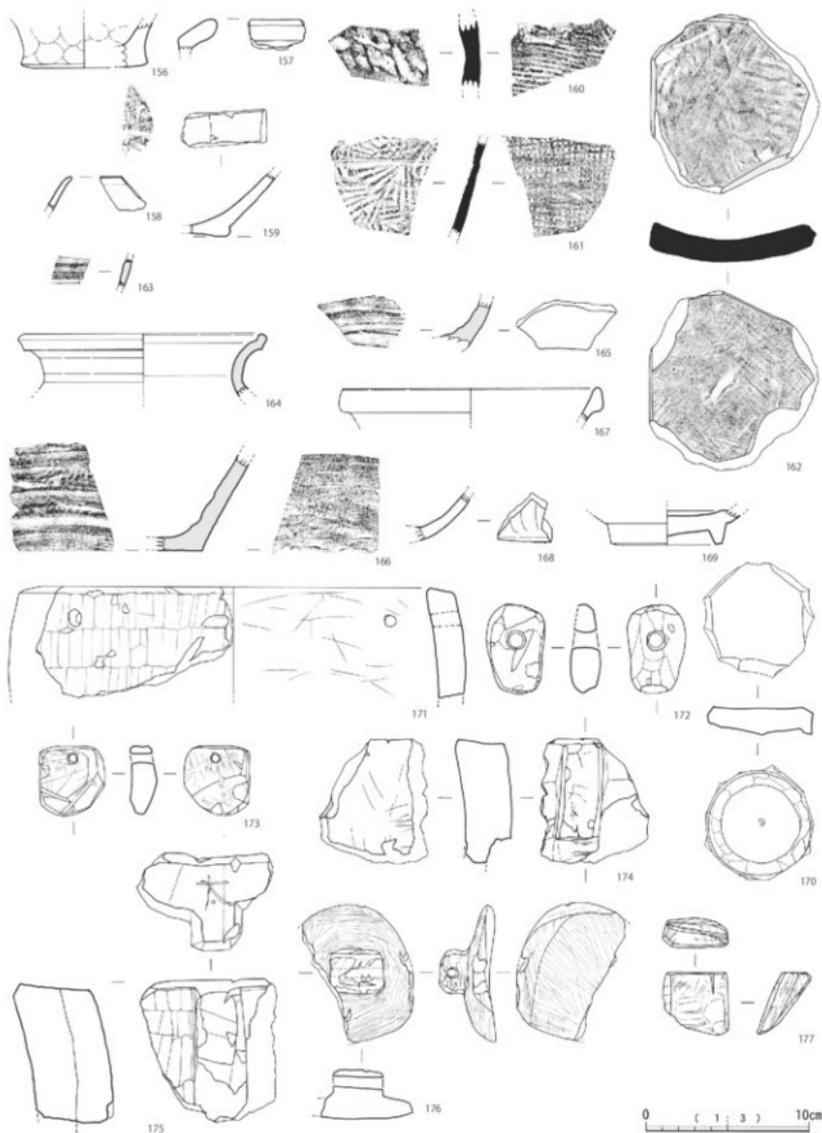
探検 No	順数 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
61	82	B9	IIa	黒土式土器	器	-	底部	3	-	-	-	-	-	-	-	土質質
	83	A9	IIa	土器	器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	84	C6	IIa	土師器	器	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	85	C5	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-	-
	86	C5	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	同心円	平行	灰黄緑	灰黄緑	-	-
	87	B7	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰黄	灰黄	-	-
	88	A9	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰黄	灰白	-	-
	89	A2	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	格子	灰白	灰白	-	-
	90	C7	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	格子	灰黄	赭灰	-	-
	91	B8	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	無文	平行	灰白	灰黄	-	-
	92	C7	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰白	灰白	-	-
	93	C8	IIa	滑石器	器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰黄	灰白	-	-
	94	B10	IIa	カムイヤキ	器	-	口縁部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	95	C8	IIa	カムイヤキ	器	-	口縁部	-	-	-	-	-	赭灰	赭灰	-	-
	96	-	IIa	カムイヤキ	器・器	-	口縁部	12.8	-	-	-	-	黄・灰	灰	-	-
	97	A3	IIa	カムイヤキ	器・器	-	口縁部	16.4	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	98	B8	IIa	カムイヤキ	器・器	-	口縁部	-	-	-	-	-	黄灰	黄灰	-	-
	99	-	IIa	カムイヤキ	器・器	-	底部	-	8.4	-	格子	波状文	灰	赭灰	-	-
	100	C8	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰	灰	-	-
101	C5	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-	
102	A10	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	ナデ	ナデ	平行	灰	灰	-	-
103	B10	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	ナデ	ナデ	平行	灰黄緑	赭灰	-	-
104	C6	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	格子	平行	灰	赭灰	-	-	
105	B10	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	格子	平行	灰黄緑	灰	-	-	
106	B10	IIa	カムイヤキ	器・器	-	腹部	-	-	-	平行	平行	灰	灰	-	-	

第35表 A地区IIa層出土遺物(2)

探検 No	順数 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
62	107	A10	IIa	新製系本地陶	器・器	-	腹部	-	-	-	-	-	灰	黄灰	-	-
	108	B10	IIa	新製系本地陶	器・器	-	腹部	-	-	-	-	-	黄灰	青灰	-	-
	109	C8	IIa	新製系本地陶	器・器	-	腹部	-	-	-	-	-	青灰	灰	-	-
	110	B10	IIa	白磁	柄	IV類	口縁部	14.3	-	-	-	-	-	-	-	外面編連弁風文埋
	112	C4	IIa	新製系本地陶	器	-	口縁部	-	-	-	編連弁	編連弁	-	-	-	-
	113	B9	IIa	新製系本地陶	器	-	口縁部	-	-	-	編連弁	編連弁	-	-	-	-
	114	A2	IIa	新製系本地陶	器	-	口縁部	-	-	-	編連弁	編連弁	-	-	-	-
	115	A2	IIa	新製系本地陶	器	-	無文外反	-	6	-	-	-	-	-	-	-
	116	C4	IIa	新製系本地陶	器	-	編連弁	底部	5	-	-	白灰文	-	-	-	-
	117	B10	IIa	青花	柄	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	118	B3	IIa	青花	器	穴野打釘	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	119	B9	IIa	黒土式土器	器	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	120	A9	IIa	赤土製土器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55	破断面に埋骨あり
	121	C5	IIa	赤土・白土	-	縁状	-	-	-	-	-	-	-	-	7	十字にV字の溝がある
	122	B8	IIa	陸奥式土器	器	-	腹部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	123	A9	IIa	陸奥式土器	器	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	124	C7	IIa	陸奥式土器	器	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	53	凹状付着



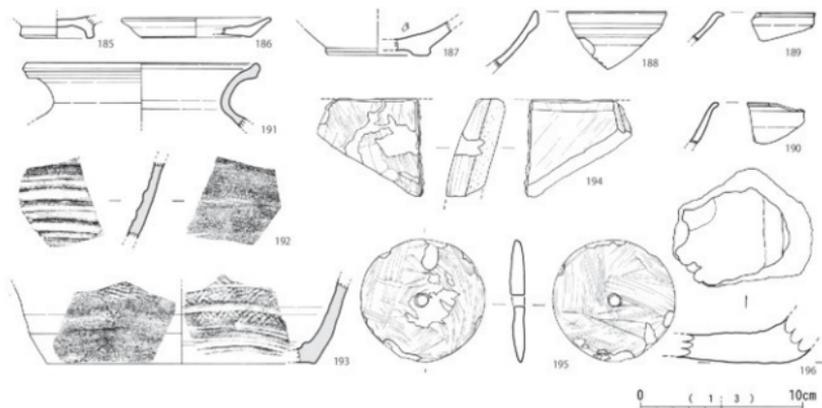
第63图 A地区IIb层出土遗物



第64图 A地区IIc层出土遗物(1)



第65図 A地区IIc層出土遺物(2)



第66図 A地区II d層出土遺物

(ウ) 包含層中遺物

82～124はII a層から出土した資料である。

82・83は兼久式土器である。83は兼久式土器の脚と見られる。54は土師器甕である。85～93は須恵器である。85～90は甕、91・92は壺、93は断面が磨かれており、転用されている可能性が高い。94～106はカムイヤキである。94は碗、95～106は壺・甕である。102は新里B群で、それ以外は新里A群に相当する。107～109は朝鮮系無袖陶器と見られる。非常によく似ているが、カムイヤキとは胎土の質感がやや異なる。110・111は白磁である。112～116は龍泉窯系青磁である。112は細連弁文碗、113は細連弁文碗、114は無文外反碗である。115は内面に印花文、116は内面に双

魚文が施されている。117・118は青花である。119は滑石混入土器、120・121は滑石製石鍋である。120は石鍋が破損後に再利用され、断面が磨かれている。121は錘状に加工されている。122は褐釉陶器である。123・124は鉄滓である。

125～155はII b層から出土した資料である。125～130は須恵器である。126・128～130は甕、127は壺である。127は土坑墓1号の蔵骨器と同一個体の可能性が高い。131は越州窯系青磁碗である。132・133は白磁である。134～141はカムイヤキである。全て新里A群に相当する。142・143は朝鮮系無袖陶器である。142は凸帯がついている。144は滑石製石鍋の口縁部である。145・146は龍泉窯系青磁である。いずれも無文外反碗である。147は外面に連弁、内

第 36 表 A 地区 II b 層出土遺物

発掘 No	期数 番号	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
125	B4	II b	流布器	-	-	-	口縁部	16.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
126	B4	II b	流布器	-	-	-	胴部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-	-	
127	B5	II b	流布器	-	-	-	胴部	-	-	-	無文	平行	灰白	灰白	-	-	
128	B5	II b	流布器	-	-	-	胴部	-	-	-	平行	格子	灰白	灰白	-	-	
129	B ¹ -7 ¹ a	II b	流布器	-	-	-	胴部	-	-	-	平行	格子	灰白	灰白	-	-	
130	A3	II b	流布器	-	-	-	胴部	-	-	-	平行	平行	灰	灰	-	-	
131	B5	II b	基町窯系青磁	椀	II類	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
132	B4	II b	白磁	皿	-	-	口~底部	9.6	3.6	2.5	-	-	-	-	-	-	
133	B ¹ -7 ¹ a	II b	白磁	椀	II類	-	口縁部	14.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
134	B7	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	口縁部	14.2	-	-	-	-	-	陶青灰	陶青灰	-	-
135	B6	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
136	B7	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	陶青灰	陶青灰	-	-
137	A3	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-	-
138	B6	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	灰黄緑	灰	-	-
139	B5	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	青灰	陶緑灰	-	-
140	B7	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	底部	-	14	-	-	-	-	陶緑灰	陶緑灰	-	-
141	B4	II b	カムイヤキ	器・罍	-	-	底部	-	10.4	-	-	-	-	青灰	青灰	-	-
142	B4	II b	網糸無釉磁器	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	IC土製	-	-	-
143	B3	II b	網糸無釉磁器	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	流黄	-	-	-
144	A2	II b	滑石製石網	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	252	-
145	B4	II b	基町窯系青磁	椀	無文外反	-	外反口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
146	B3	II b	基町窯系青磁	椀	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
147	A3	II b	青磁	椀	-	-	胴部	-	-	-	目文刻	凸野文	-	-	-	-	-
148	B4	II b	青花	椀	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
149	B7	II b	青花	皿	-	-	底部	-	5.7	-	-	-	青白	青白	-	-	-
150	B5	II b	鉄滓・加工品	-	-	-	ハレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	12	-
151	B4	II b	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	86	-
152	B4	II b	鉄滓	桐形滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	130	-
153	B3	II b	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
154	B4	II b	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57	-
155	B9	II b	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	40	-

第 37 表 A 地区 II c 層出土遺物(1)

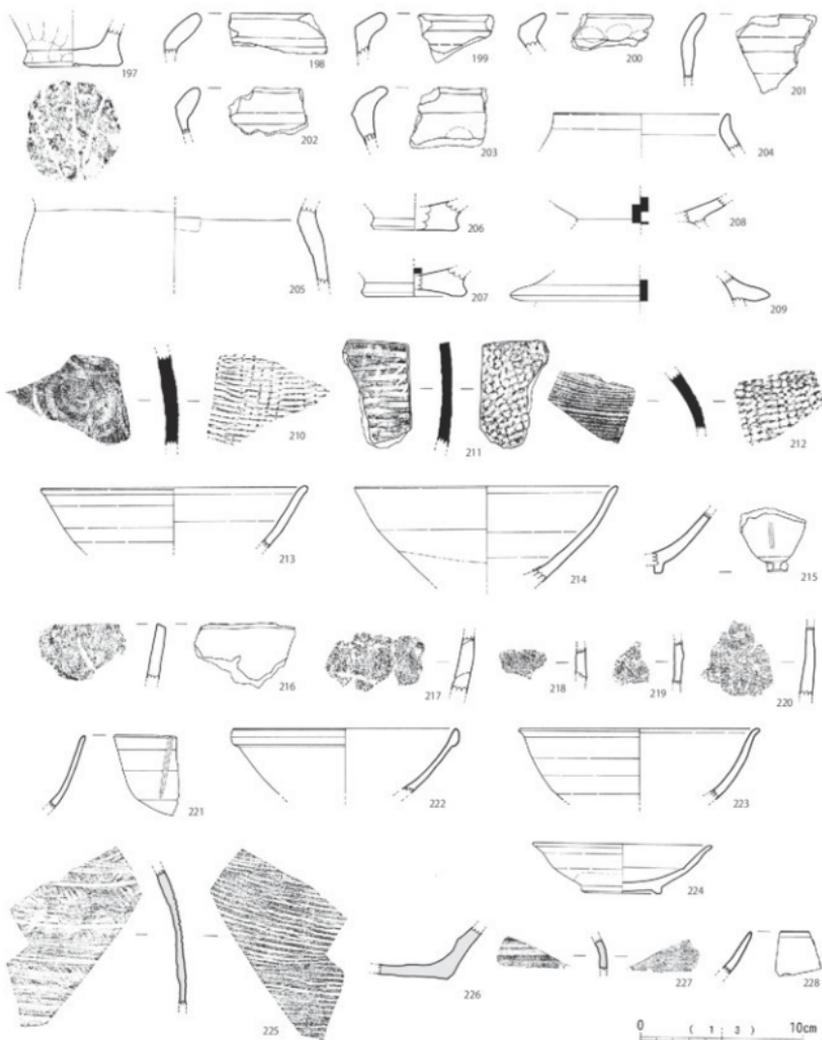
発掘 No	期数 番号	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
156	B5	II c	素久式土器	罍	-	-	底部	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-
157	B6	II c	土師器	罍	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
158	B6	II c	基町窯系青磁	椀	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
159	B7	II c	基町窯系青磁	椀	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
160	B6	II c	流布器	罍	II類	-	胴部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-	-	
161	B7	II c	流布器	罍	-	-	胴部	-	-	-	平行	車輪	灰	灰	-	-	
162	B7	II c	流布器	罍	-	-	胴部	-	-	-	平行	平行	灰白	灰白	-	-	
163	B6	II c	網糸無釉磁器	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-	
164	B7	II c	カムイヤキ	器・罍	-	-	口縁部	14.5	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-	-
165	B6	II c	カムイヤキ	器・罍	-	-	腰部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-	
166	B7	II c	カムイヤキ	器・罍	-	-	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	-	-	
167	B6	II c	白磁	椀	IV類	-	口縁部	15.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
168	B7	II c	白磁	椀	V類	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
169	B7	II c	白磁	椀	V類	-	底部	-	5.9	-	-	-	-	-	-	-	-
170	B7	II c	白磁	椀	V類	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
171	B7	II c	滑石製石網	-	-	-	口縁部	24	-	-	-	-	-	-	-	-	-
172	B7	II c	滑石加工品	-	種状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
173	B6	II c	滑石加工品	-	種状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	滑石製あり、5先角状
174	B7	II c	滑石製石網	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
175	II c	II c	滑石製石網	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
176	II c	II c	滑石加工品	-	-	-	ハレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
177	B7	II c	滑石加工品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第 38 表 A 地区 II c 層出土遺物(2)

発掘 No	期数 番号	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
178	B7	II c	輪の引口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
179	II c	II c	輪の引口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
180	B8	II c	鉄滓	桐形滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
181	B7	II c	鉄滓	流動滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-
182	B5	II c	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41	-
183	B7	II c	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	-
184	II c	II c	石器	石屑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第 39 表 A 地区 II d 層出土遺物

発掘 No	期数 番号	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
185	B6	II d	土師器	椀	-	-	底部	-	3.6	-	-	-	-	-	-	-	南九州的でない
186	II d	II d	土師器	杯	口~底部	-	-	-	8.7	-	-	-	-	-	-	-	糸切りか
187	B6	II d	基町窯系青磁	椀	I類	-	底部	-	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-
188	B6	II d	白磁	椀	IV類	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
189	B6	II d	白磁	椀	V類	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
190	B7	II d	白磁	椀	V類	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
191	B6	II d	カムイヤキ	器・罍	-	-	口縁部	14.1	-	-	-	-	-	灰	陶青灰	-	-
192	B ¹ -7 ¹ a	II d	カムイヤキ	器・罍	-	-	胴部	-	-	-	ナデ	平行	灰	灰	-	-	
193	B6	II d	カムイヤキ	器・罍	-	-	底部	-	16.4	-	-	-	-	青灰	緑灰	-	-
194	B ¹ -7 ¹ a	II d	滑石製石網	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	129	網糸無釉、滑石製石網
195	B6	II d	滑石加工品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
196	B7	II d	滑石製土器	-	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

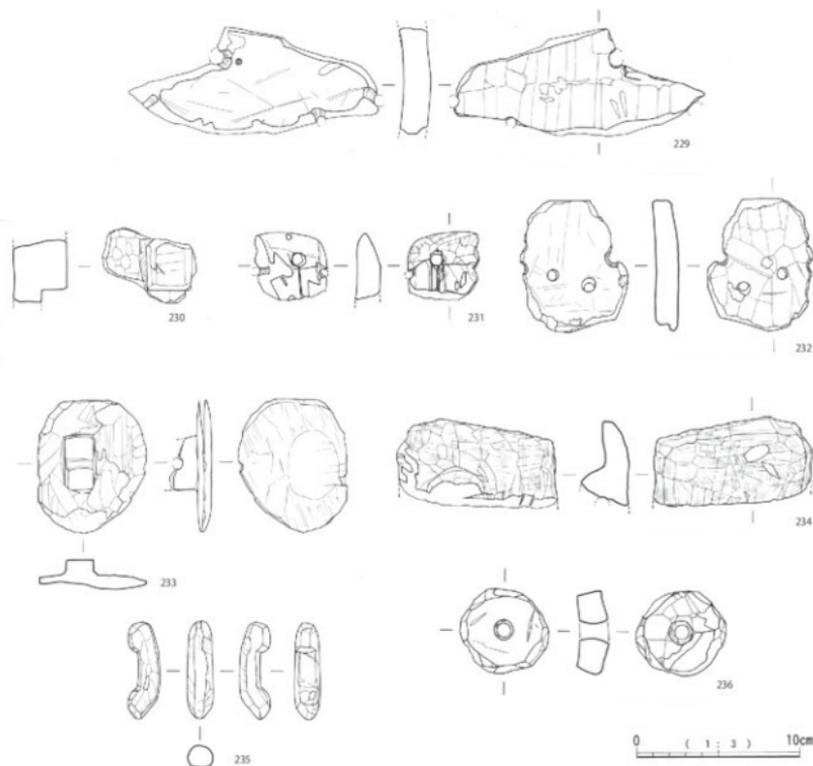


第67図 A地区柱穴内出土遺物(1)

面に浅い沈線で施文されている。本資料は龍泉窯ではない可能性がある。148-149は青花である。148は小野B1類と見られる。150はバレン状製品である。151～155は鉄滓である。

156～184はⅡc層から出土した資料である。

156は兼久式土器の底部である。木葉痕が観察できる。157は土師器甕である。158-159は越州窯系青磁である。159は越州窯系青磁Ⅱ類の底部である。内面には目跡が残っている。また、この資料は断面が非常に摩滅しており、撞った可



第68図 A地区柱穴内出土遺物(2)

能性が非常に高い。160～162は須恵器である。161は内面に車輪状の当て具を使用した特徴的な須恵器である。162は底部である。断面の一部に推痕が見られる。164～166はカマイヤキである。167～170は白磁である。170は底部を打ち欠いて作成された転用品である。171～177は滑石製石鍋である。171・174・175は口縁部資料である。175は縦耳部分の上部に「大」もしくは「太」が刻まれている。書き順から見ても字と考えると良いとみられ、本遺跡群で初めての文字資料である。176はバレン状製品である。胴部片を利用しているため、内側はやや内彎している。178・179は籠の羽口である。180～183は鉄滓である。184は石弁である。全面に敲打痕が確認でき、先端部は打撃により潰れている。

185～196はⅡd層から出土した資料である。

185は土師器碗である。底径が3.6cmと小さい。南九州的な土師器ではなさそうである。186は土師器環である。非常

に不明瞭であるが糸切り底の可能性もある。186は越州窯系青磁である。188～190は白磁である。191～193はカマイヤキである。194・195は滑石製石鍋である。194は折り切った折った痕跡が断面で確認でき、加工品の前段階の素材であると見られる。195は紡錘車状に加工された製品である。

(4) 柱穴内出土遺物

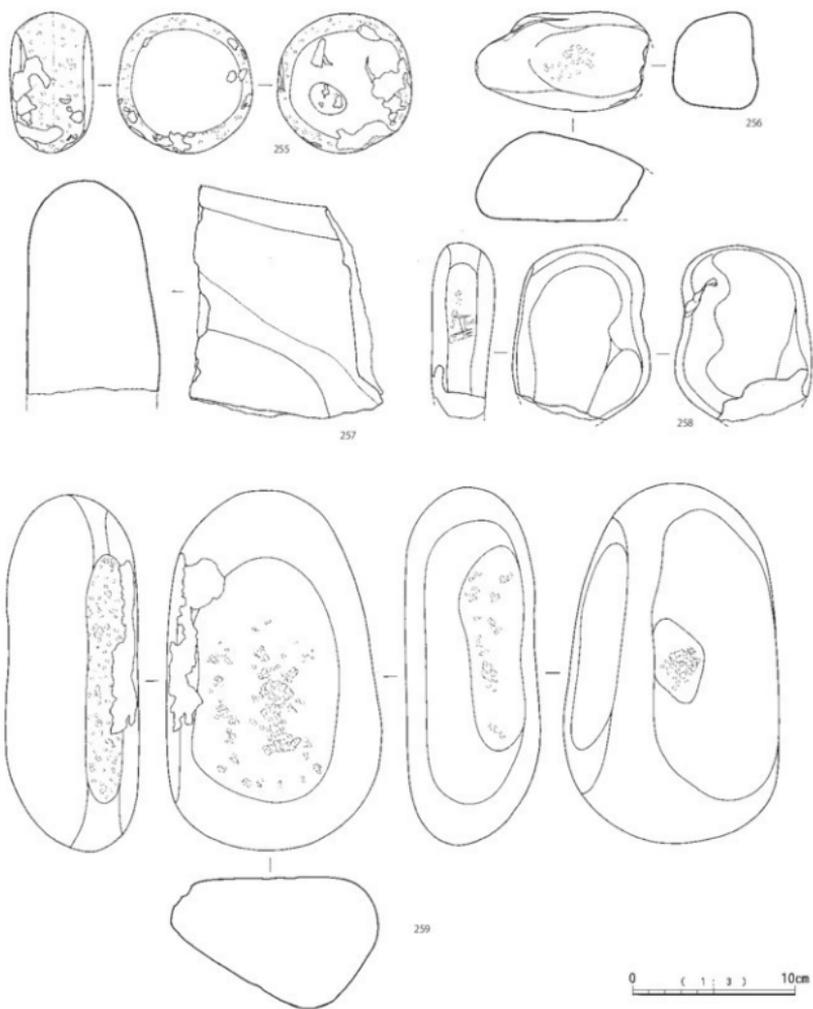
197は兼久式土器の底部である。底には木葉痕が観察できる。198～205は土師器甕である。「く」の字型に屈曲するものがほとんどであるが、204の様に内彎するものもある。206は碗の底部である。充実高台風に仕上げられている。207～209は黒色土器である。207も206と同様である。209は蓋と捉えたが、異なる可能性もある。210～212は須恵器である。211は断面が擦られており、平滑である。213～215は越州窯系青磁である。213・214はⅡ類、215はⅠ類



第69図 A地区柱穴内出土遺物(3)

と考えられる。216～220は布目班土器である。216は口縁部で、口唇部は平坦に作成されている。221～224は白磁碗である。221はXⅠ類、222はⅣ類、223はⅤ類である。224は完形品で、ⅢⅡ類と見られる。225はカムイヤキである。226～227は朝鮮系無軸陶器である。228は初期高麗青磁である。229～236は滑石製石鍋である。233～236は二次加工品である。233はつまみ部があり、中央に貫通穿孔があることから、バレン状製品と考えられる。内側が凹んでいる

ことから胴部から削りだして製作したと見られる。237は滑石混土器の口縁部である。直口気味に立ち上がる。239は軽石である。一部が半円状に凹んでいる。240～244は輪の羽口である。240は完形の先端部である。先端部は被熱により黒色化し、ガラス質化している。245～249は鉄滓である。250は土器であるが、内面が被熱し、ガラス質化している。つば等の代用品として使用されたか、かなり火元に近いところに置かれていたものと見られる。253～259は石器であ



第70図 A地区柱穴内出土遺物(4)

る。253は石斧であるが、刃部とは反対の方向と側面が敲打具としてよく使用されている。259はほぼ完形資料で、断面は三角形をしている。側面は敲打痕が集中する範囲がある。一部破損しているが、敲打の結果であると考えられる。

第40表 A地区村穴内出土遺物(1)

探区 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
	197	B6	P1030	黒灰土器	甕	-	底部	-	4.2	-	-	-	-	-	-	木製蓋あり
	198	B6	P1152	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	199	B7	P0953	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	200	B7	P0782	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	201	B7	P0944	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	202	B7	P0899	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	203	B7	P0897	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	204	B6	P0940	土師器	甕	-	口縁部	10.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	205	B6	P0701	土師器	甕	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	206	B7	P0996	土師	筒	穴実高台	底部	-	4.9	-	-	-	-	-	-	-
	207	B7	P1069	黒色土器	-	A群	底部	-	5.9	-	-	-	-	-	-	-
	208	B7	P0899	黒色土器	筒	B群	胴部	-	-	7.8	-	-	-	-	-	-
	209	B7	P1081	黒色土器	-	A群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	覆分
	210	B7	P1070	須置器	甕	-	胴部	-	-	-	胴心円	平行	灰白	灰	-	-
	211	B6	P0721	須置器	甕	-	胴部	-	-	-	平行	格子	灰	灰	-	転用品か
	212	B6	P1037	須置器	甕	-	胴部	-	-	-	平行	格子	灰	灰	-	-
	213	B7	P0823	越中深木青磁	筒	B群	口縁部	15.3	-	-	-	-	-	-	-	-
	214	B7	P0949	越中深木青磁	筒	B群	口縁部	16	-	-	-	-	-	-	-	福建産安楽
	215	B7	P0920	越中深木青磁	筒	I-26類	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	216	B7	P0757	布目土師器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	217	B7	P0756	布目土師器	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	218	B7	P1097	布目土師器	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	219	B7	P1081	布目土師器	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	220	A3	P1140	布目土師器	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	221	B7	P0920	白磁	筒	XI類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	222	B7	P1106	白磁	筒	IV類	口縁部	13.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	223	B7	P0916	白磁	筒	V類	口縁部	14.2	-	-	-	-	-	-	-	-
	224	B7	P1189	白磁	筒	B群	胴部	10.3	4.4	3	-	-	-	-	-	-
	225	B7	P1189	カムイサキ	筒	度	胴部	-	-	-	ナデ	平行	硝子	青黒	-	-
	226	B6	P0081	細土師器	-	-	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	細灰	灰	-	-
	227	B7	P1107	細土師器	-	-	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	細灰	-	-
	228	B7	P0806	切頭深木青磁	筒	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第41表 A地区村穴内出土遺物(2)

探区 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
	229	B7	P0922	滑石製石碇	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	104	貫通型・未貫入!	
	230	B7	P1106	滑石製石碇	-	-	縦溝部分	-	-	-	-	-	-	4	貫通型	
	231	B7	P0936	滑石製石碇	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	44	貫通型	
	232	C7	P0274	滑石製石碇	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	138	貫通型	
	233	B7	P1107	滑石製石碇	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	90	貫通型	
	234	B7	P0954	硝子加工品	-	-	ハレン状	-	-	-	-	-	-	138	-	
	235	C7	P0237	硝子加工品	-	-	ハレン状	-	-	-	-	-	-	24	-	
	236	B7	P0850	硝子加工品	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	86	貫通型	

第42表 A地区村穴内出土遺物(3)

探区 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
	237	B6	P1164	滑石製土器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	238	B7	P1192	陶輪陶磁器	-	-	甕	-	-	9.5	-	-	灰白	灰白	-	-
	239	B7	P1090	磁石	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	240	B4	P0486	磁の引口	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	241	B7	P0897	磁の引口	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	242	B7	P0897	磁の引口	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	243	B7	P0897	磁の引口	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	244	B6	P1037	磁の引口	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	245	B6	P0079	鉄滓	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	56	-	-
	246	B6	P0084	鉄滓	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	79	-	-
	247	A6	P0069	鉄滓	桶形滓	-	胴部	-	-	-	-	-	-	85	-	-
	248	A3	P1138	鉄滓	桶形滓	-	胴部	-	-	-	-	-	-	106	伊保付蓋	-
	249	C7	P0233	鉄滓	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	117	-	-
	250	B6	P1023	土器	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	内面被熱
	251	B6	P0097	鉄製品	刀子	-	胴部	-	-	-	-	-	-	5	-	-
	252	B7	P1097	鉄製品	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	8	-	-
	253	B7	P0806	石碇	石碇	-	胴部	-	-	-	-	-	-	260	転打に転用	-
	254	B7	P0756	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	406	-	-

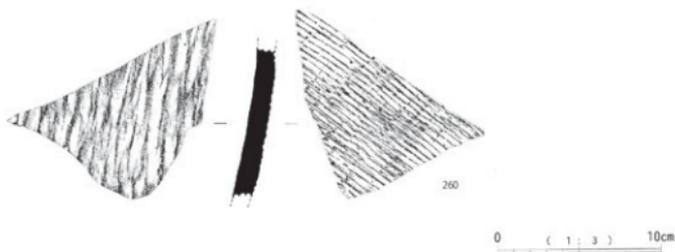
第43表 A地区村穴内出土遺物(4)

探区 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
	255	C7	P1192	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	639	-	-
	256	B7	P0112	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	475	-	-
	257	A3	P0538	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	2400	被熱	-
	258	B7	P0954	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	622	-	-
	259	B6	P0262	石碇	磁石	磁石	胴部	-	-	-	-	-	-	4000	-	-



第71图 B地区遗構配置図

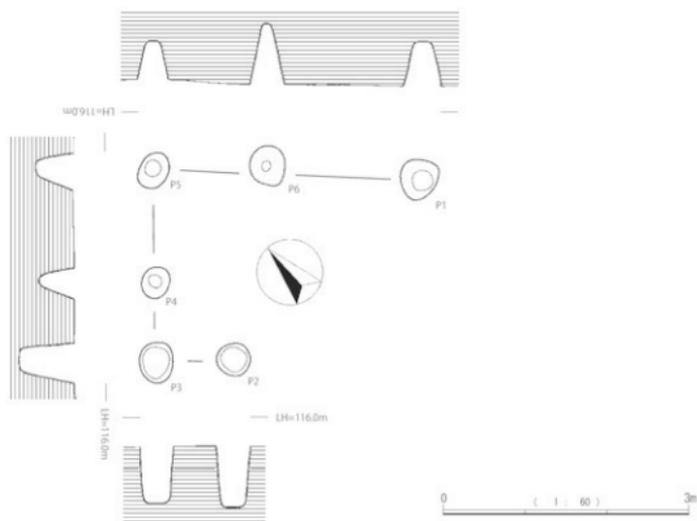
S=1:200



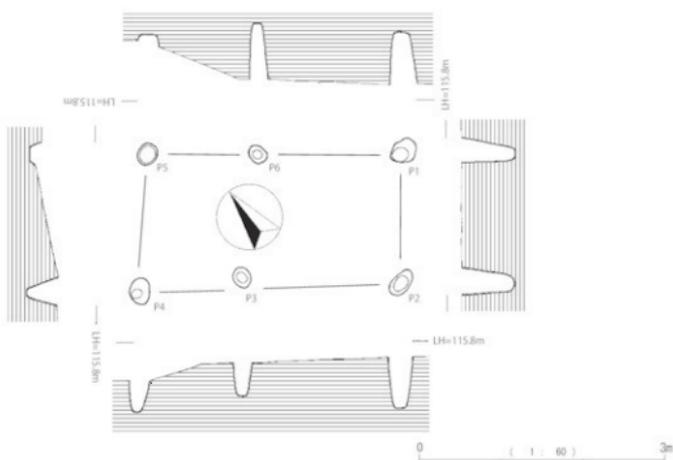
第72图 B地区掘立柱建物内出土遺物

第44表 B地区掘立柱建物跡内出土遺物

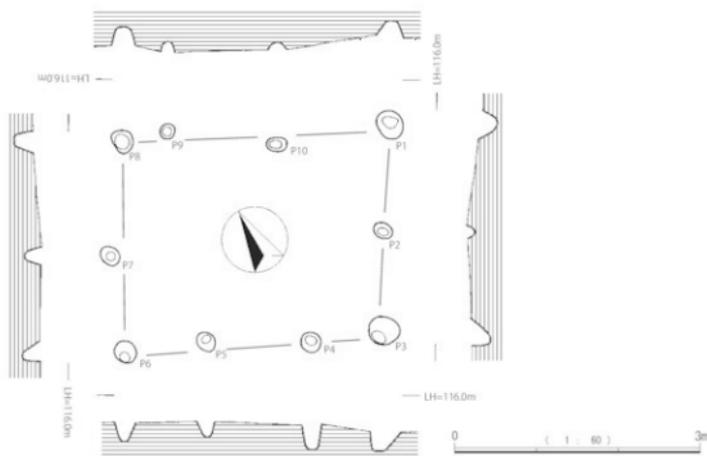
検出 No	埋藏 番号	出土区	層位	分類 L1	分類 L2	分類 L3	部位	計測値 (cm)			形状		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
72	260	C-99	P18.29	土器器	壁	-	胴部	-	-	-	平行	平行	暗褐色	灰	-	掘立24号-P03



第73図 掘立柱建物跡23号



第74図 掘立柱建物跡24号



第75図 掘立柱建物跡25号

(2) B地区

(7) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 23号 (第73図, 第45表)

く-98・99区で検出。周囲のピットより径が大きいもので構成されている。柱穴内からは滑石製石鍋・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 24号 (第74図, 第46表)

く-98・99区で検出。1×2間の掘立柱建物跡である。柱はいずれも深くしっかりつくられている。

第45表 掘立柱建物跡 23号計測表

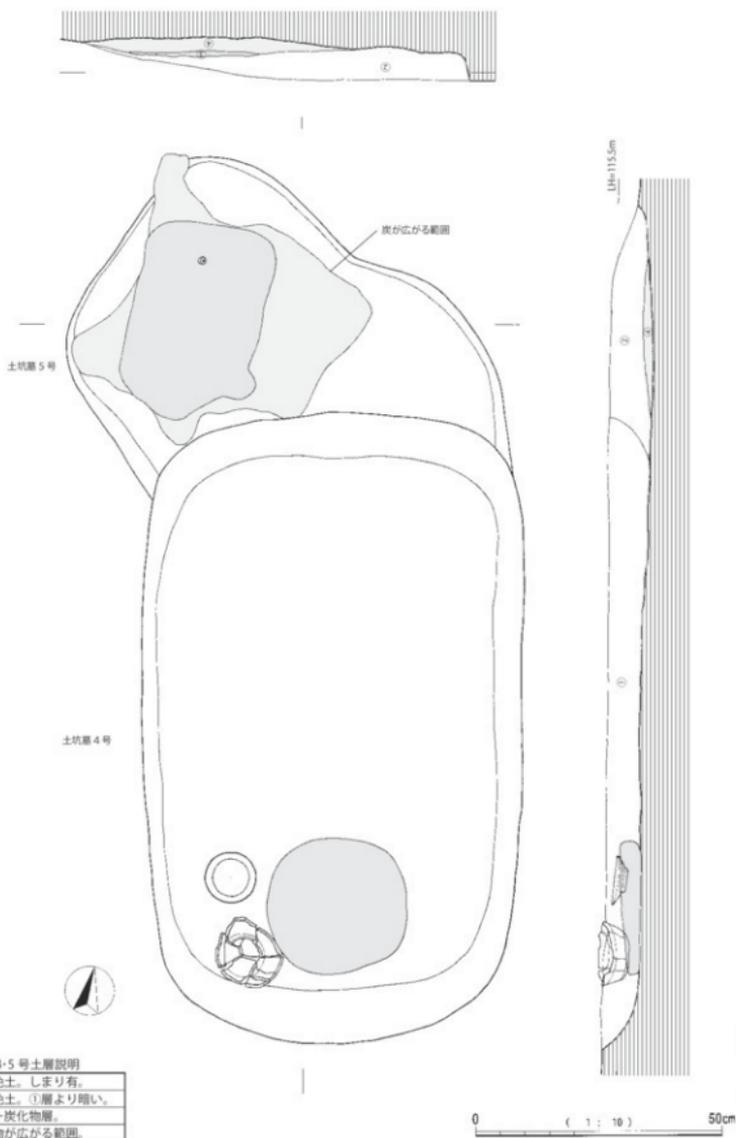
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P3-P5	240	平均	120	P5-P1	332	平均	166	方向:	P1:カムイヤキ(1) P3:滑石製石鍋(1) P5:粘土壘(1),炭化物(1) P6:布目瓦痕土器(1) カムイヤキ(4),鉄滓(1) 粘土壘(2),石器(2),軽石(1)
P3-P4	100			P5-P6	140	平均	-		
P4-P5	140			P6-P1	192				

第46表 掘立柱建物跡 24号計測表

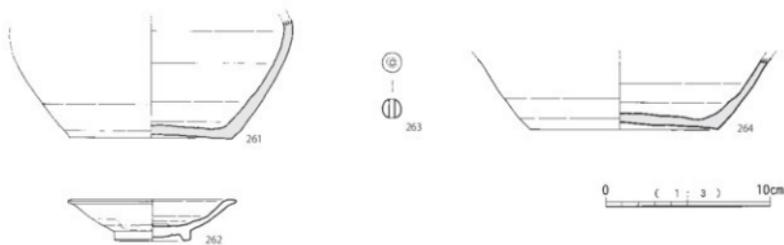
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	156	平均	-	P1-P5	304	平均	152	方向:N53°W	P1:土師器(6),須恵器(1),粘土壘(1) P3:須恵器(1) P4:土師器(1) P6:土師器(2),須恵器(1) 鉄滓(1),粘土壘(2)
P4-P5	168	平均	-	P2-P4	320	平均	160		
				P1-P6	172	P2-P3	192		
				P6-P5	132	P3-P4	128		

第47表 掘立柱建物跡 25号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	264	平均	132	P1-P8	328	平均	109	方向:N65°W	P1:土師器(1),鉄滓(1),粘土壘(2) P3:石器(1) P5:滑石二次加工品(1) P6:土師器(1),滑石製石鍋(1) P9:土師器(7),鉄滓(1)
P6-P8	264	平均	132	P3-P6	316	平均	105		
P1-P2	136	P6-P7	124	P1-P10	140	P3-P4	84		
P2-P3	128	P7-P8	140	P10-P9	132	P4-P5	128		
				P9-P8	56	P5-P6	104		



第76図 土坑墓4・5号(1)



第77図 土坑墓4・5号(2)

(9) 土坑

土坑墓4・5号

く99区で検出。土坑墓4号は直径130cm×78cmの長方形土坑であり、土坑墓5号を切って構築されている。南側に火葬骨塊とカムイヤキ・白磁皿を確認している。検出時点でカムイヤキが見えていたことや堆積が薄いことを考えると、上部は後の耕作などで壊されている可能性が非常に高い。

土坑墓5号は方形の土坑で、炭化物が広がる層の上に火葬骨塊を検出した。塊の中には白磁・ガラス玉が混入していた。また、本土坑墓を検出する際にカムイヤキ壺の底部が出土している。土坑墓4号を構築する際に5号から取り出されたものかもしれない。

出土遺物

261・262が土坑墓4号から、263が土坑墓5号から、265が土坑墓直上で取り上げられた遺物である。263は定形品の白磁皿Ⅲ類である。内面は蛇の目刺ぎされている。口径9.8cm、底径3.7cm、器高2.5cmである。263はガラス玉である。直径1.2cm、高さ1.1cmを測る。表面は白色化していたが、整理作業で洗浄を行い、淡黄色を呈している。264はカムイヤキの底部である。

土坑1号

く98区で検出。土坑はフラスコ型の裾が広がる構造である。大量の石灰岩礫とともに、遺物が混入していた。②層では所々地山のブロックが混入している。

出土遺物

265～278は土坑1号から出土した資料である。

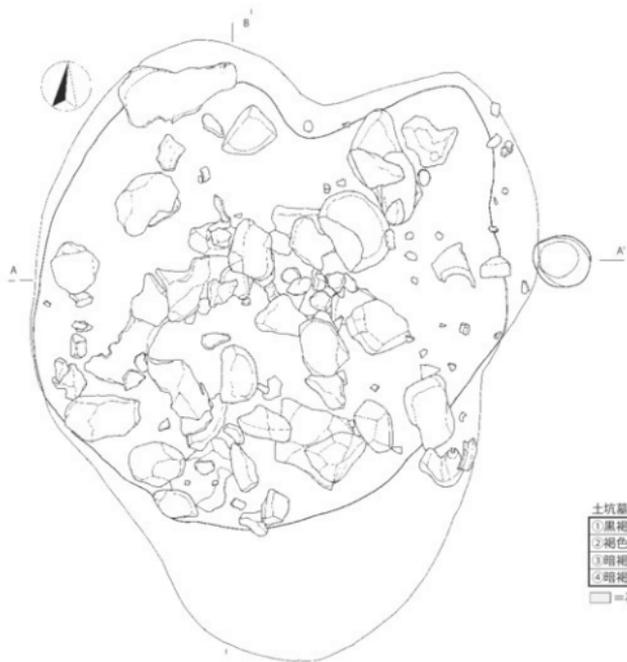
265・266は土師器である。265は輪か坏、266は甕である。267は布目圧痕土器である。口縁部は平坦に作成されている。268はカムイヤキ鉢である。口径16.8cmを測る。269～273はカムイヤキ壺か甕である。270は小型甕の様であるが、その他はやや大きめの形状である。274は白磁碗である。口径15.6cmを測る。275～277は滑石混入土器である。いずれも多く滑石細片が混入している。275・276からは直口気味に立ち上がる形状と推察される。279は磨盤石である。中央部分が双方とも凹んでいる。側面も敲打痕が確認できる。

第48表 土坑墓4・5号

検出No	検取番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)		
77	261		土坑墓4号	カムイヤキ	壺・甕	底部	底面	-	9.9	-	-	-	-	-	-
	262		土坑墓4号	白磁	皿	前縁	突起品	9.8	3.7	2.5	-	-	-	-	-
	263		土坑墓5号	ガラス玉			突起品	直径	高さ	-	-	-	-	-	-
								径 (cm)	直径	1.2	1.1	-	-	-	-
264		土坑墓直上	カムイヤキ	壺・甕	底部	底面	口径	底径	11.2	-	-	-	-	-	-

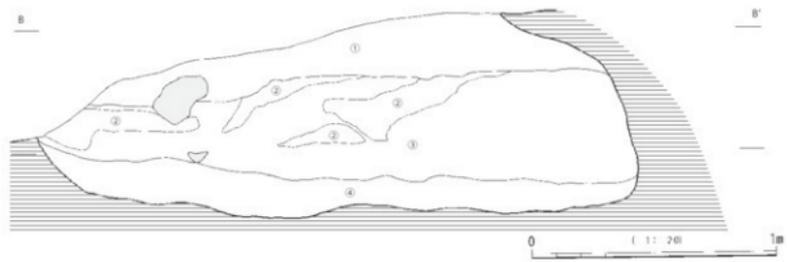
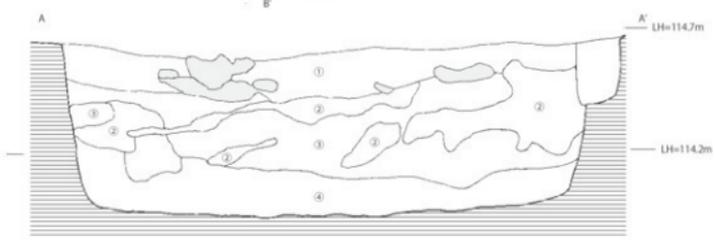
第49表 土坑1号

検出No	検取番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)		
79	265	く98	土坑1号	土師器	輪×坏	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	266	く98	土坑1号	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	267	く98	土坑1号	布目圧痕土器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	268	く98	土坑1号	カムイヤキ	鉢	-	口～胴	16.8	-	20.6	格子	ナデ	黄灰	黄灰	-
	269	く98	土坑1号	カムイヤキ	壺・甕	-	口～肩	15.1	-	-	格子	平行	灰	灰	-
	270	く98	土坑1号	カムイヤキ	壺・甕	-	胴部	-	-	16.2	ナデ	-	灰	灰	-
	271	く98	土坑1号	カムイヤキ	壺・甕	-	胴部	-	-	36.6	ナデ	平行	陶紺	陶紺	-
	272	く98	土坑1号	カムイヤキ	壺・甕	-	胴部	-	-	-	格子	平行	灰	灰	-
	273	く98	土坑1号	カムイヤキ	壺・甕	-	底部	-	-	-	-	-	陶灰	灰	-
	274	く98	土坑1号	白磁	碗	Ⅲ類	口縁部	15.6	-	-	-	-	-	-	-
	275	く98	土坑1号	滑石混入土器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	外面に皮が付着
	276	く98	土坑1号	滑石混入土器	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-
	277	く98	土坑1号	滑石混入土器	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-
	278	く98	土坑1号	石礫	磨盤石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	830

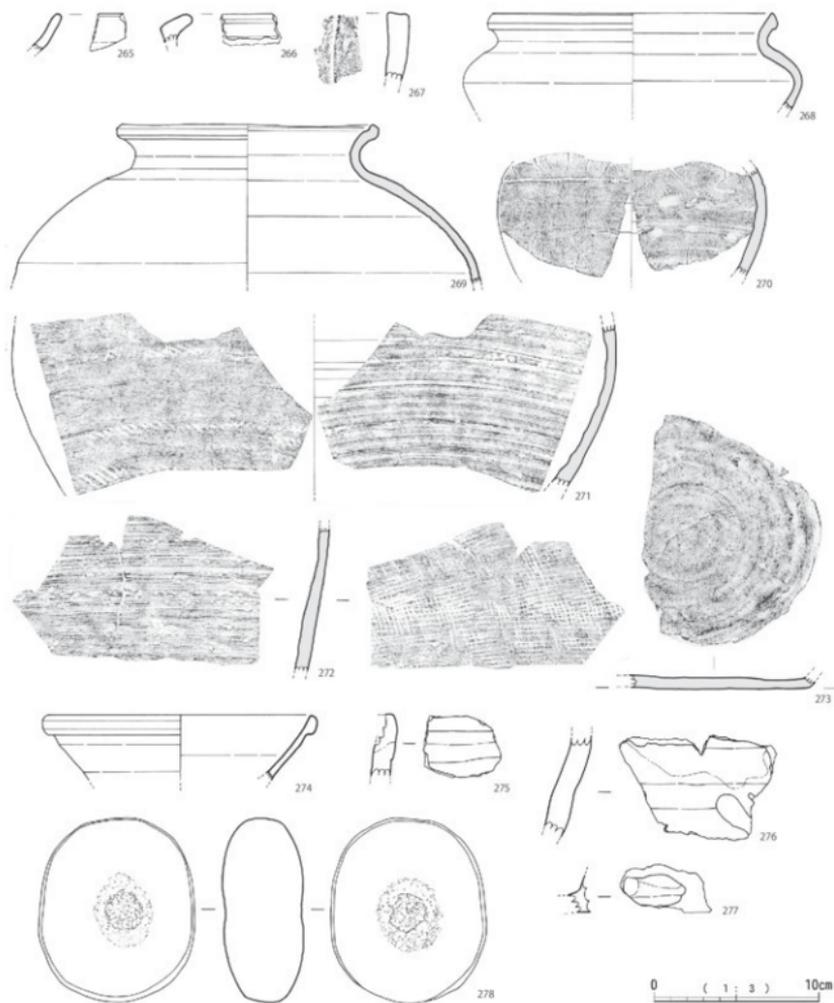


土坑墓 1号土層説明

- | | |
|---|---------------|
| ① | 黒褐色粘質土。 |
| ② | 褐色土。ブロック状に入る。 |
| ③ | 暗褐色土。炭化物混入。 |
| ④ | 暗褐色土。③層より明るい。 |
| □ | =石灰岩 |



第78図 土坑1号(1)



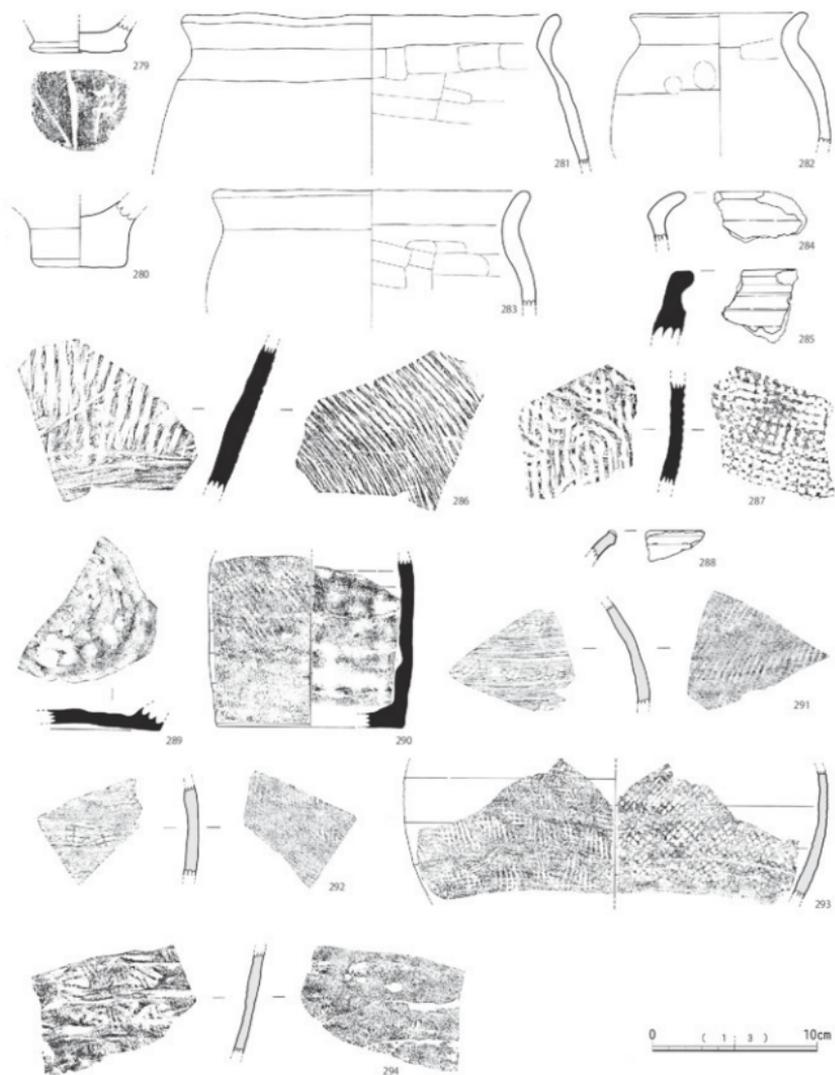
第79図 土坑1号(2)

㊦ 柱穴内出土遺物

279～306は柱穴内から出土した資料である。

279は兼久式土器である。底部には木葉痕が確認できる。281は充実高台を意識した底部であるとみられる。281～284は土師器甕である。281・284は口縁下のケズリが強く削られているが、282・283はやや弱い。285～289は須恵器で

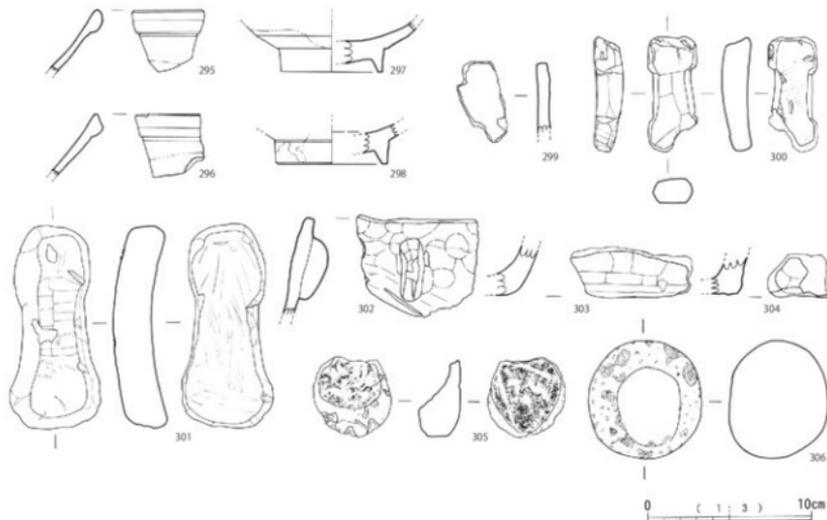
ある。288と289は壺の底部であると見られる。290～294はカムイヤキである。いずれも新里A群に対応する。295～298は白磁碗である。299～301は滑石製石鍋である。300と301はサイズの大小の違いだけで、ほぼ同じ用途に製作された資料と見られる。いずれも胴部片を利用し、それぞれの先端がダンベル状に太くなっている。302～304は滑石混入



第80図 B地区柱穴内出土遺物(1)

土器である。302は縦耳部分が口縁部直下ではなく少し離れた位置に貼り付けられている。303は滑石製石鐮の底部を意識して作成されている。304は指頭圧痕がみられ、303とは作り手の意識が異なることが考えられる。305は粘土塊であ

る。内外面に植物痕のようなスジが見られる。307は球状の石器である。一部平滑に磨られているがほぼ全面に敲打痕が見られる。



第81図 B地区柱穴内出土遺物(2)

第50表 B地区柱穴内出土遺物(1)

発見 No	発掘 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	胴部	(内)	(外)	(内)		
80	279	< 99	P1680	兼久式土器	甕	-	底部	-	5.4	-	-	-	-	-	-
	280	< 98	P1743	土器	-	-	底部	-	5.1	-	-	-	-	-	-
	281	< 99	P1596	土師器	甕	-	口縁-胴部	22.2	-	-	-	-	-	-	-
	282	< 99	P1684	土師器	甕	-	口縁-胴部	10	-	-	-	-	-	-	-
	283	< 98	P1636	土師器	甕	-	口縁部	18.1	-	-	-	-	-	-	-
	284	< 98	P1757	土師器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	285	< 99	P1684	滑車器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	灰白	-
	286	< 99	P1689	滑車器	甕	-	口縁部	-	-	平行	平行	橙	橙	-	-
	287	< 99	P1793	滑車器	甕	-	胴部	-	-	同心円	格子	灰白	灰白	-	-
	288	< 98	P1755	滑車器	甕	-	底部	-	-	-	-	-	-	灰白	-
	289	< 99	P1716	滑車器	甕	-	胴-底部	11.2	-	-	-	浅黄	オリーブ	-	-
	290	< 99	P1825	カムイヤキ	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	暗青灰	-
	291	< 98	P1665	カムイヤキ	甕	-	胴部	-	-	-	-	-	-	暗青灰	-
	292	< 99	P1825	カムイヤキ	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	灰	-
	293	< 88	P1745	カムイヤキ	甕	-	胴部	-	25.6	-	-	-	-	暗青灰	-
	294	< 98	P1777	カムイヤキ	甕	-	胴部	-	-	-	-	-	-	黄褐	黄灰

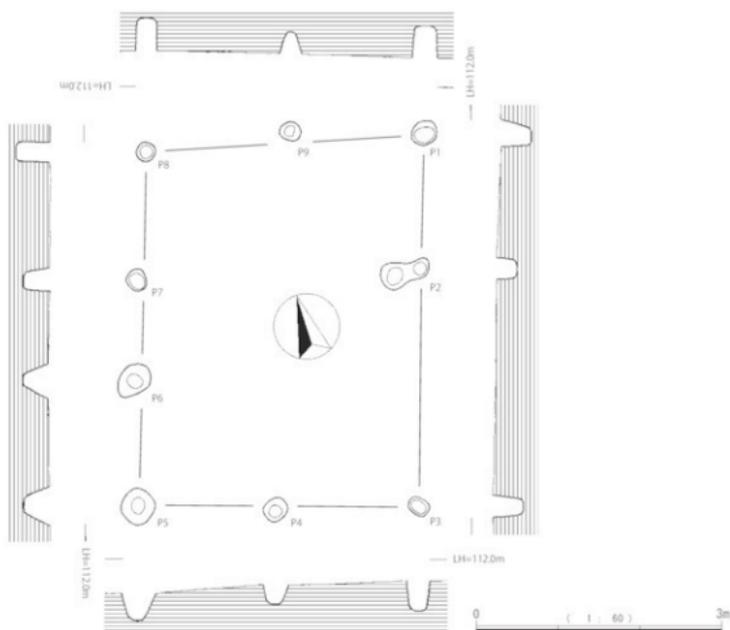
第51表 B地区柱穴内出土遺物(2)

発見 No	発掘 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)		
81	295	< 99	P1825	白磁	碗	IV類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	296	< 98	P1740	白磁	碗	IV類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	297	< 99	P1774	白磁	碗	V類	底部	-	6.1	-	-	-	-	-	-
	298	< 98	P1777	白磁	碗	V類	底部	-	6.3	-	-	-	-	-	-
	299	< 98	P1627	滑石製石鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32	破断面摩痕
	300	< 98	P1627	滑石製石鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57	-
	301	< 98	P1631	滑石製石鏡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	290	加工途中
	302	< 98	P1627	滑石製土器	石鏡縁部	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-
	303	< 98	P1611	滑石製土器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	304	< 99	P1825	滑石製土器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
305	< 98	P1743	土製品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
306	< 98	P1626	石器	球状製品	彫つた品	-	-	-	-	-	-	-	488	-	

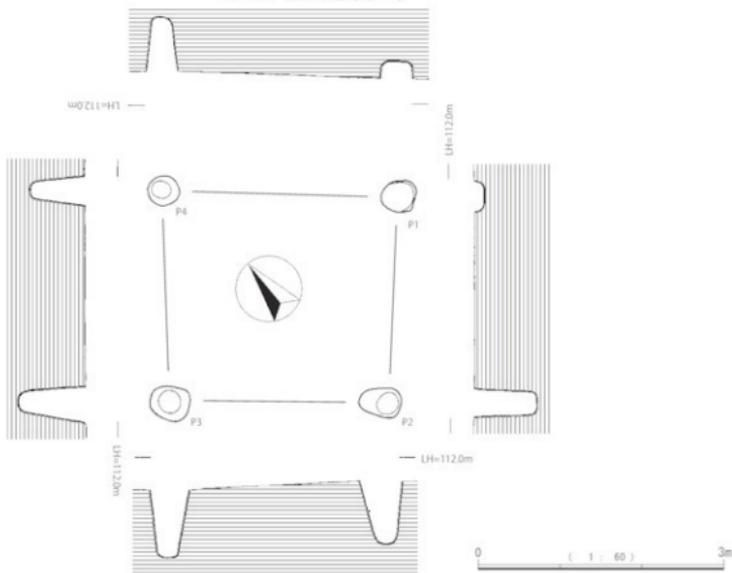


第82图 C地区总图配置图

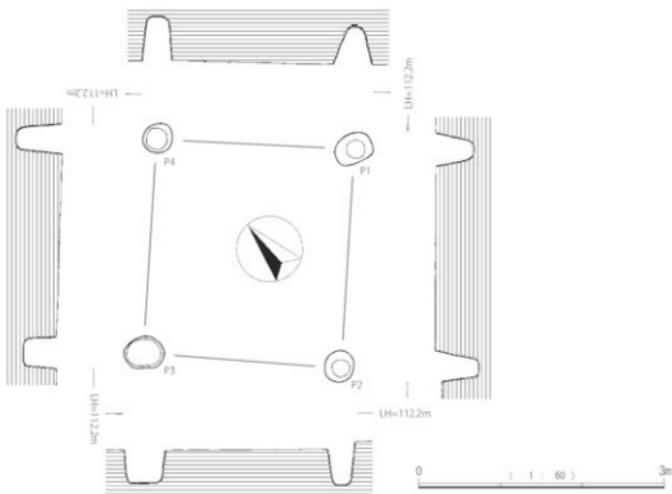
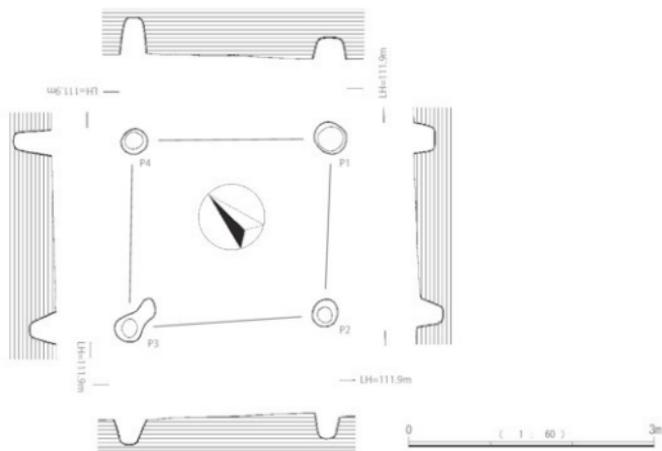
S=1:250

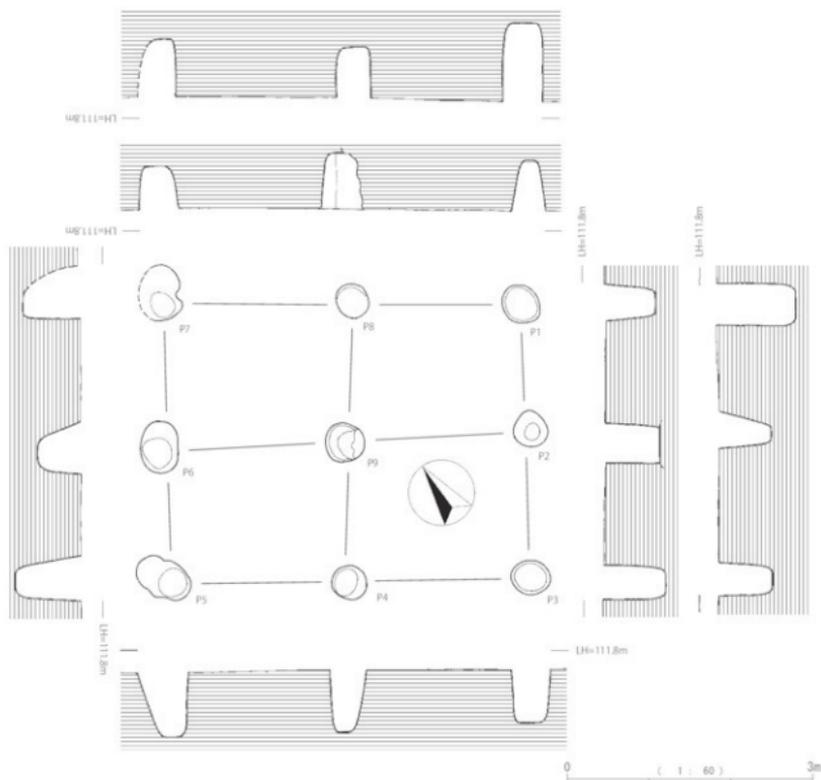


第83図 掘立柱建物跡26号



第84図 掘立柱建物跡27号





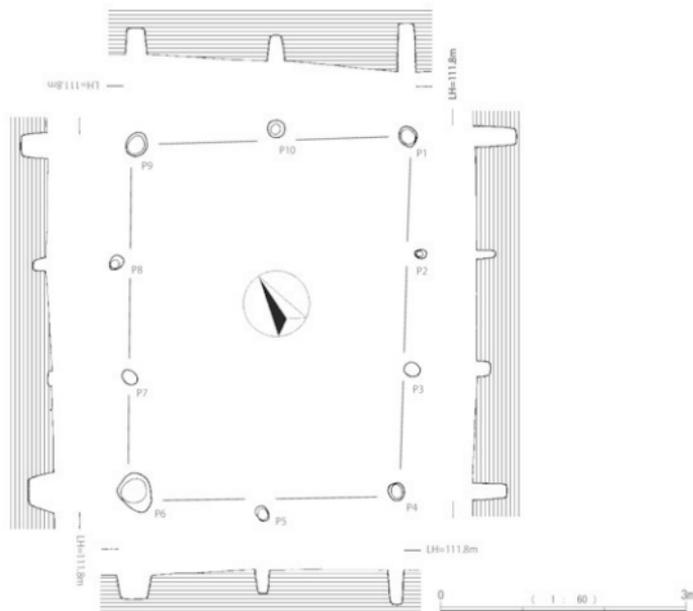
第87図 据立柱建物跡30号

第 52 表 据立柱建物跡 26 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P8	340	平均	170	P1-P3	452	平均	226	方向 :N20°E	P1: 粘土塊(3)
P3-P5	344	平均	172	P5-P8	436	平均	145		P6: 粘土塊(3)
P1-P9	164	P3-P4	176	P1-P2	164	P5-P6	152		P7: 石器(1)
P9-P8	176	P4-P5	168	P2-P3	288	P6-P7	124		P8: 轆の羽口(1)
						P7-P8	160		

第 53 表 据立柱建物跡 27 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P2	252	平均	-	P1-P4	292	平均	-	方向 :N50°W	P1: 石器(1)
P3-P4	260	平均	-	P2-P3	268	平均	-		P2: 土師器(2)
									P3: 滑石製石鍋(2)
									P4: 土師器(9), 滑石製石鍋(1)
									粘土塊(2), 石器(1)



第88図 掘立柱建物跡31号

第54表 掘立柱建物跡28号計測表

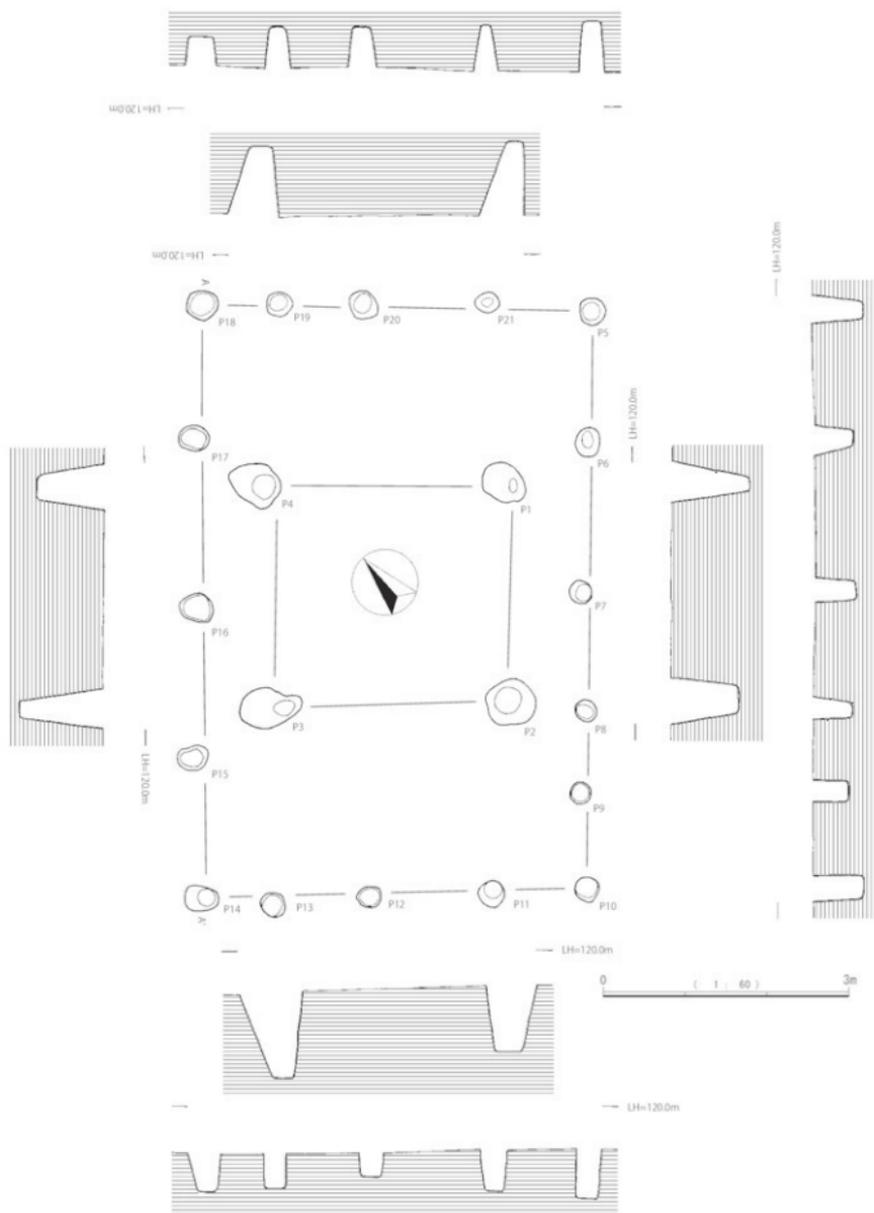
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	216	平均	-	P1-P4	240	平均	-	方向:N44°W	
P3-P4	228	平均	-	P2-P3	236	平均	-		

第55表 掘立柱建物跡29号計測表

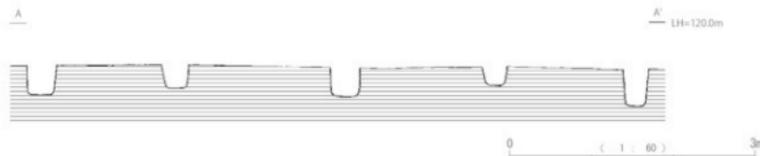
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	240	平均	-	P1-P2	268	平均	-	方向:	P2: 兼久式土器(1) P3: 土師器(4) 滑石二次加工品(1), 粘土塊(3) P4: 土師器(1), 粘土塊(2)
P2-P3	240	平均	-	P3-P4	260	平均	-		

第56表 掘立柱建物跡30号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	340	平均	170	P1-P7	440	平均	220	方向:N55°W	P1: 土師器(2) P2: 石器(1) P3: 石器(3) P4: 土師器(6), 粘土塊(1) P5: 土師器(2), 籬の羽口(1) P6: 土師器(6), 須恵器(2) 滑石製石鍋(1), 鉄滓(5) 粘土塊(1), 石器(6) P7: 土師器(4), 粘土塊(1), 軽石(2) P9: 土師器(3), 石器(3)
P4-P8	340	平均	170	P2-P6	440	平均	220		
P5-P7	336	平均	168	P3-P5	436	平均	218		
P1-P2	160	P5-P6	160	P1-P8	228	P3-P4	224		
P2-P3	180	P6-P7	176	P8-P7	212	P4-P5	212		
P4-P9	168			P2-P9	212				
P9-P8	172			P9-P6	228				



第89图 掘立柱建物跡32号(1)



第90図 掘立柱建物跡32号(2)

(3) C地区

ア) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 26号 (第83図, 第52表)

し-2区で検出し, 掘立27・28・30号と重複している。2×3間の側柱建物跡とみられる。

掘立柱建物跡 27号 (第84図, 第53表)

し-2区で検出し, 掘立26・28号と重複している。1×1間の建物跡である。柱穴内からは滑石製石罫などが出土している。

掘立柱建物跡 28号 (第85図, 第54表)

し-2区で検出し, 掘立26・27号と重複している。1×1間の建物跡である。掘立27号より一回り小さい大きさである。

掘立柱建物跡 29号 (第86図, 第55表)

し-1区で検出。1×1間の建物跡である。掘立36号とほぼ同じ大きさである。柱穴内からは土師器・滑石製品などが出土している。

掘立柱建物跡 30号 (第87図, 第56表)

し-す-2区で検出し, 掘立26・31号と重複している。2×2間の総柱建物跡である。柱穴内からは土師器・滑石製石罫などが出土している。

掘立柱建物跡 31号 (第88図, 第57表)

す-2区で検出し, 掘立30・32号と重複している。2×3間の側柱建物跡である。構成されている柱穴は小さく浅いものが多い。柱穴内からは土師器・カムイヤキが出土している。

掘立柱建物跡 32号 (第89・90図, 第58表)

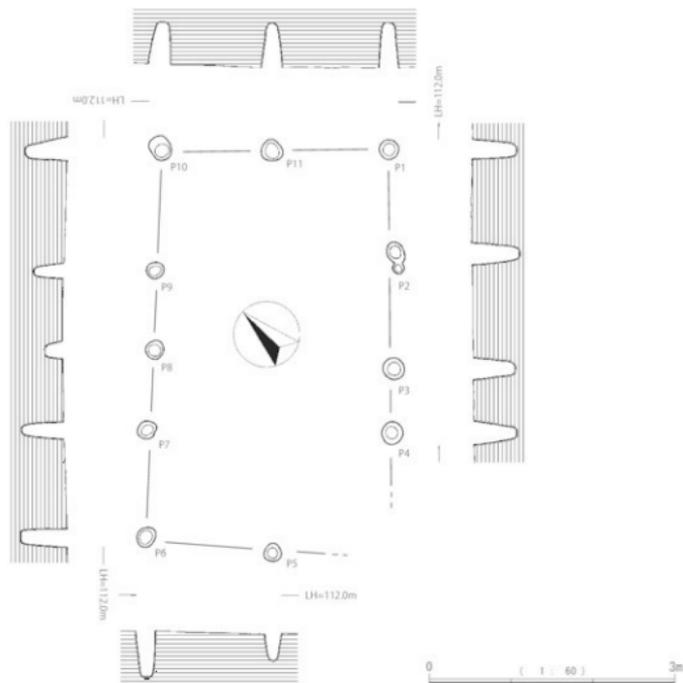
す-せ-1・2区で検出し, 掘立31・33号と重複している。中央に1×1間, 周囲に17本の柱が長方形に囲む建物跡である。柱穴の大きさや深さは統一である。城久遺跡群では山田半田遺跡掘立17・21号などに類似するようプランが見られるが, それらよりもより規格的である。柱穴内からは土師器・黒色土器などが出土している。

第57表 掘立柱建物跡 31号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P9	332	平均	166	P1-P4	432	平均	144	方向:N35°E	P4:土師器(1) P6:土師器(3) P9:カムイヤキ(1)
P4-P6	320	平均	160	P6-P9	428	平均	143		
P1-P10	160	P4-P5	164	P1-P2	144	P6-P7	140		
P10-P9	172	P5-P6	156	P2-P3	140	P7-P8	140		
				P3-P4	148	P8-P9	148		

第58表 掘立柱建物跡 32号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	260	平均	-	P1-P4	300	平均	-	方向:N42°E	P2:土師器(2),鉄滓(1) 籾の羽口(1),石器(3) P3:土師器(3),籾の羽口(1) 粘土塊(6),石器(1) P4:土師器(1),粘土塊(4),石器(1) P10:土師器(2) P12:黒色土器(1),土器(1) P15:土師器(2),粘土塊(2) P18:土師器(2),炭化物(1) P19:土師器(6),粘土塊(2),石器(1) P20:土師器(2) P21:粘土塊(2)
P3-P4	272	平均	-	P2-P3	272	平均	-		
底部分									
P5-P18	476	平均	119	P5-P10	704	平均	141		
P10-P14	464	平均	116	P14-P18	728	平均	182		
P5-P21	128	P10-P11	112	P5-P6	156	P14-P15	172		
P21-P20	152	P11-P12	152	P6-P7	188	P15-P16	184		
P20-P19	104	P12-P13	120	P7-P8	144	P16-P17	208		
P19-P18	92	P13-P14	80	P8-P9	100	P17-P18	164		
				P9-P10	116				



第91図 掘立柱建物跡33号

掘立柱建物跡 33号 (第91図, 第59表)

す・1・2区で検出し、掘立32・35号と重複している。南角の柱が1本未検出であるが、2×4間の側柱建物跡であると見られる。構成されている柱穴は小さく浅いものが多い。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 34号 (第92図, 第60表)

せ・1・2区で検出。3×5間の総柱建物跡である。西側は総柱であるが、東側は見られない。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 35号 (第93・94図, 第61表)

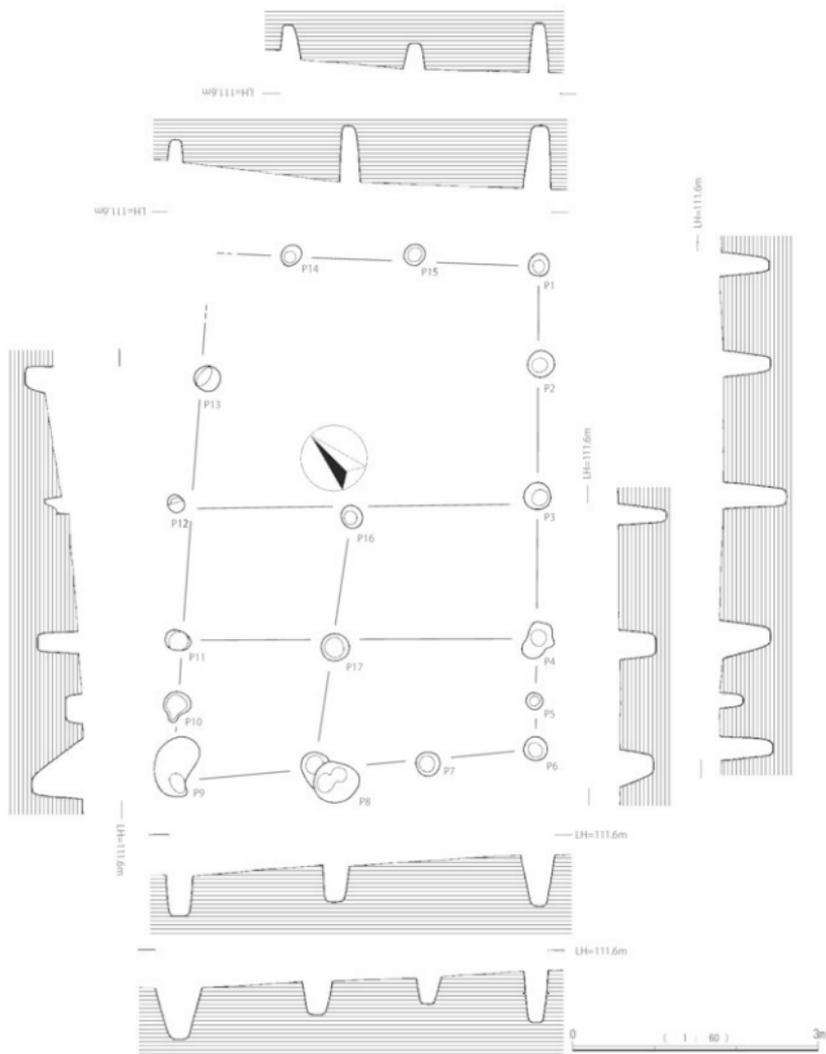
す・せ・1区で検出。全体的に柱穴は細めで、浅いものが多い。柱穴内からは須恵器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 36号 (第95図, 第62表)

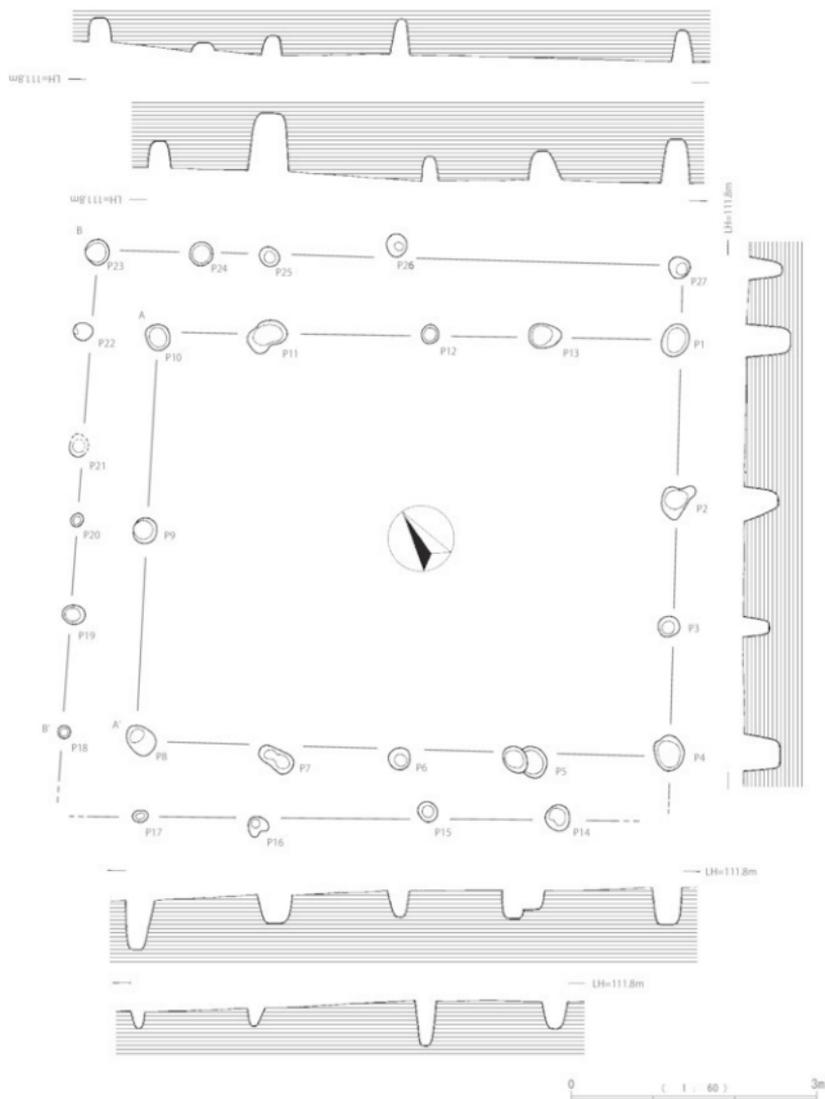
し・1区で検出。1×1間の建物跡である。柱穴内からは白磁・滑石製石鍋などが出土している。

第59表 掘立柱建物跡 33号計測表

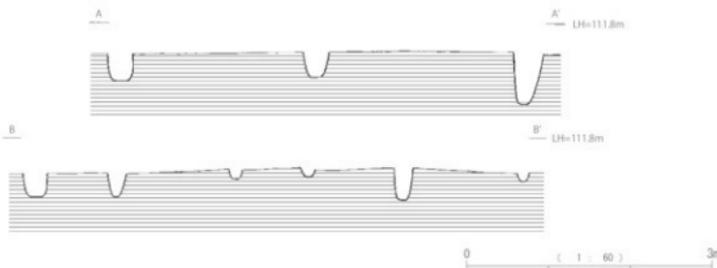
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P10	276	平均	138	P1-P4	344	平均	115	方向:N49°E	P3:土師器(1) P4:土師器(3),粘土塊(6) P9:石器(1) P10:土師器(3)
P5-P6	156	平均	-	P6-P10	452	平均	113		
P1-P11	144			P1-P2	124	P6-P7	132		
P11-P10	132			P2-P3	144	P7-P8	96		
				P3-P4	76	P8-P9	76		
						P9-P10	148		



第92図 掘立柱建物跡34号



第93图 掘立柱建物跡35号(1)



第94図 掘立柱建物跡35号(2)

掘立柱建物跡 37号 (第96図, 第63表)

す-1-99区で検出。2×3間の側柱建物跡である。柱穴間隔がこれまでのものより若干広い。

掘立柱建物跡 38号 (第97図, 第64表)

せ-99区で検出。2×3間の側柱建物跡である。周囲よりも一回り以上大きめの柱穴で構成されている。柱穴内からは土師器甕などが出土している。

掘立柱建物跡 39号 (第98図, 第65表)

そ-1-99区で検出。2×3間の側柱建物跡である。ほぼ東西に主軸を持ち、他の建物跡とはやや向きが異なる。柱穴からは土師器・越州窯系青磁などが出土している。

掘立柱建物跡 40号 (第99図, 第66表)

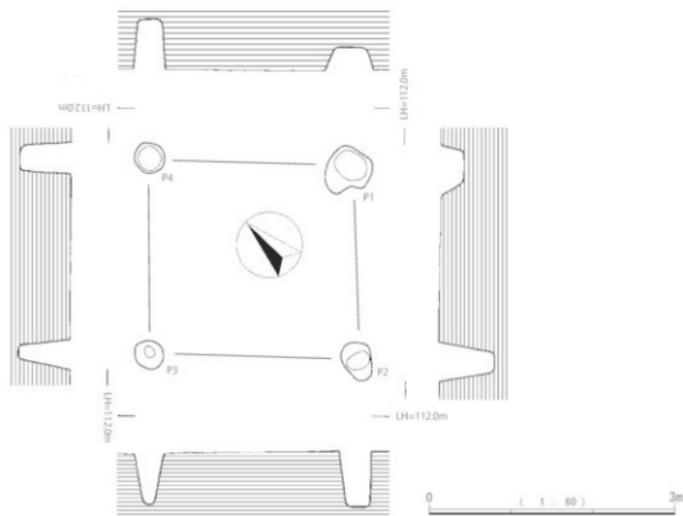
せ-98-97区で検出。2×2間の側柱建物跡である。南側の1本は未検出である。柱穴内からは土師器などが出土している。

第60表 掘立柱建物跡 34号計測表

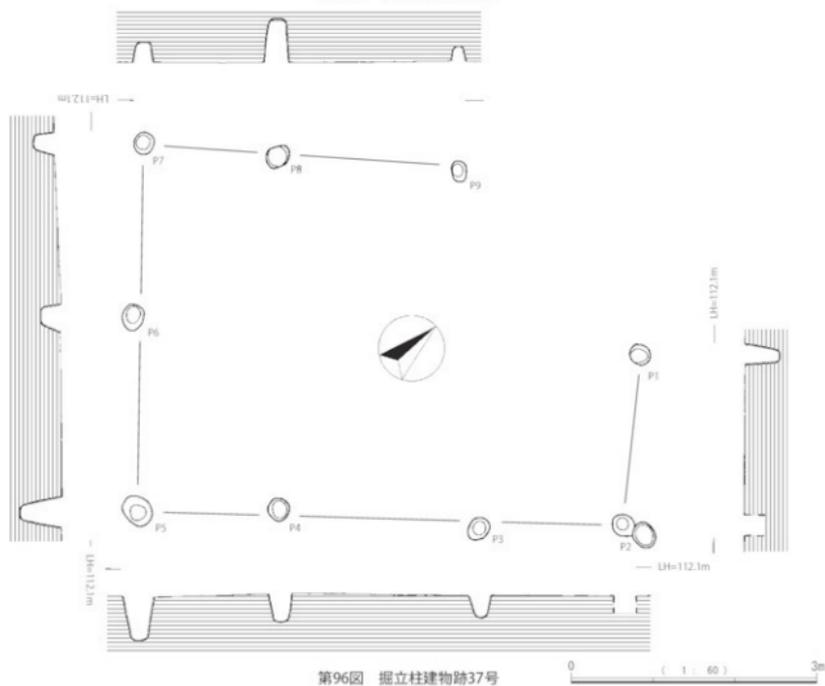
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P14	304	平均	152	P1-P6	588	平均	118	方向:N47°E	P1:土師器(2),粘土塊(1)
P3-P12	444	平均	222	P8-P16	312	平均	156		P4:土師器(2),粘土塊(1),石器(1)
P4-P11	440	平均	220	P9-P13	504	平均	126		P6:石器(1)
P6-P9	436	平均	145						P9:石器(2)
P1-P15	152	P4-P17	248	P1-P2	120	P9-P10	96		P10:石器(1)
P15-P14	152	P17-P11	192	P2-P3	160	P10-P11	80		P15:土師器(1)
				P3-P4	172	P11-P12	172		P16:土師器(2),石器(1)
				P4-P5	76	P12-P13	156		P17:土師器(3),土器(3)
				P5-P6	60				粘土塊(3),石器(1)
P3-P16	232	P6-P7	132	P8-P17	152				
P16-P12	212	P7-P8	136	P17-P16	160				
		P8-P9	168						

第61表 掘立柱建物跡 35号計測表

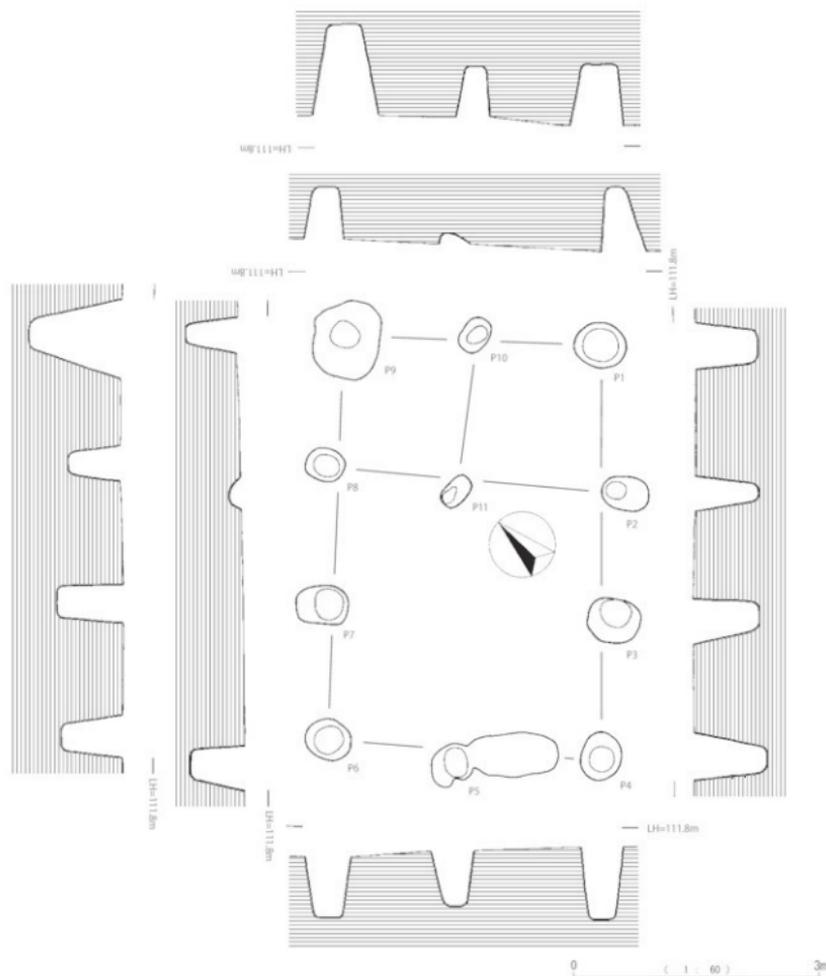
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物	
P1-P4	508	平均	169	P1-P10	644	平均	161	方向:N53°W	P1:須恵器(1)	
P8-P10	488	平均	244	P4-P8	658	平均	165		P4:滑石製石鏝(1),石器(1)	
P1-P2	196	P8-P9	252	P1-P13	164	P4-P5	196		P6:土師器(1)	
P2-P3	156	P9-P10	236	P13-P12	140	P5-P6	156		P8:粘土塊(6),施釉陶磁器(1)	
P3-P4	156			P12-P11	200	P6-P7	134		石器(1)	
				P11-P10	140	P7-P8	172		P10:須恵器(1)	
底部分										P11:粘土塊(3)
P1-P27	88	平均	-	P15-P17	512	平均	171		P13:櫛の羽口(1)	
P18-P23	592	平均	118	P23-P27	728	平均	182		P14:須恵器(1),石器(1)	
		P18-P19	144	P14-P5	160	P23-P24	132		P15:土師器(1),粘土塊(1)	
		P19-P20	116	P15-P16	212	P24-P25	88		P18:石鏝(2)	
		P20-P21	92	P16-P17	140	P25-P26	160		P23:粘土塊(7),石器(1)	
		P21-P22	140			P26-P27	348	P24:滑石製石鏝(1)		
		P22-P23	100							



第95図 掘立柱建物跡36号



第96図 掘立柱建物跡37号



第97図 掘立柱建物跡38号

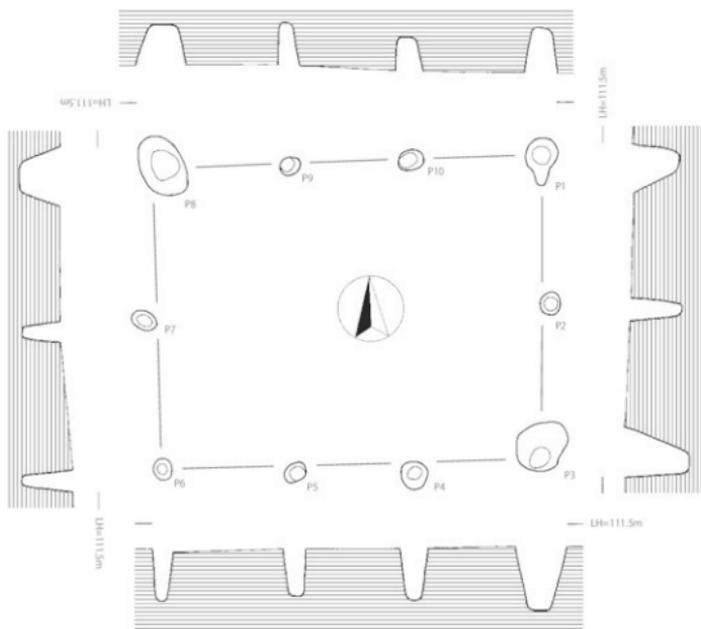
掘立柱建物跡 41号 (第101・102図, 第67表)

す・せ・99区で検出。中央に 1×2 間。周囲には20本の柱穴が囲む建物跡である。これまで城久遺跡群で見られた囲いを持つ建物跡よりも規格性が高い。柱穴内からは土師器・滑石製石鍋などが出土している。

(イ) 掘立柱建物跡内出土土物

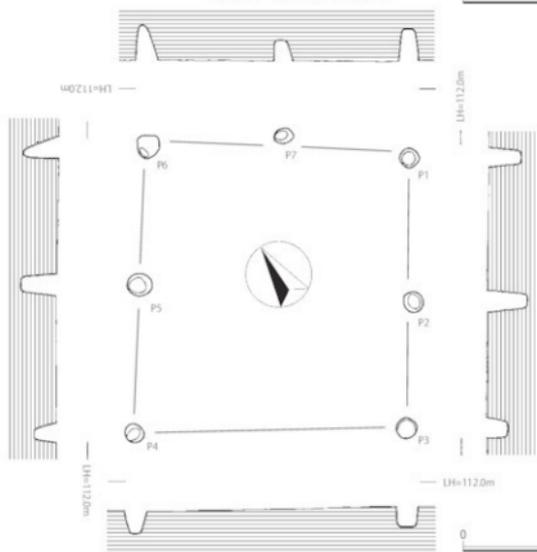
308～319は掘立柱建物跡を構成する柱穴内から得られた資料である。

308は掘立27号から出土した磨礫石で断面はやや三角形になっている。309は掘立29号から出土した滑石二次加工品である。胴部を再利用したものと見られ、内側がくり抜かれている。311は土師器坏である。器色は赤色味を帯びている。312・313は掘立35号から出土した資料である。312



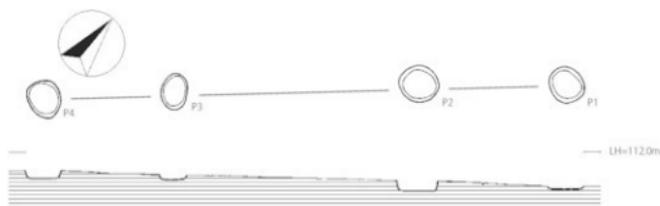
第98図 掘立柱建物跡39号

0 (1 : 60) 3m



第99図 掘立柱建物跡40号

0 (1 : 60) 3m



第100図 柱穴列

は須恵器である。313は滑石製石鍋である。断面を振り切った痕跡が確認できる。314～316は掘立41号から出土した資料である。317～319は掘立39号から出土した資料であ

る。316は土師器環である。底部の形状から9世紀後半～10世紀前半頃の資料である。317-318は土師器甕である。「く」の字型に強く屈曲する形状である。

第62表 掘立柱建物跡 36号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	240	平均	-	P1-P4	248	平均	-	方向:N42°W	P3:土師器(2),滑石製石鍋(1) P4:土師器(2),布目瓦痕土器(1) 滑石製石鍋(1),白磁(1) 粘土塊(1),石器(1)
P3-P4	236	平均	-	P2-P3	256	平均	-		

第63表 掘立柱建物跡 37号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	204	平均	-	P9-P7	384	平均	192	方向:N46°E	P2:施釉陶磁器(1) P5:須恵器(1) P7:土師器(1)
P5-P7	452	平均	226	P2-P5	588	平均	196		
		P5-P6	240	P9-P8	220	P2-P3	172		
		P6-P7	212	P8-P7	164	P3-P4	244		
						P4-P5	172		

第64表 掘立柱建物跡 38号計測表

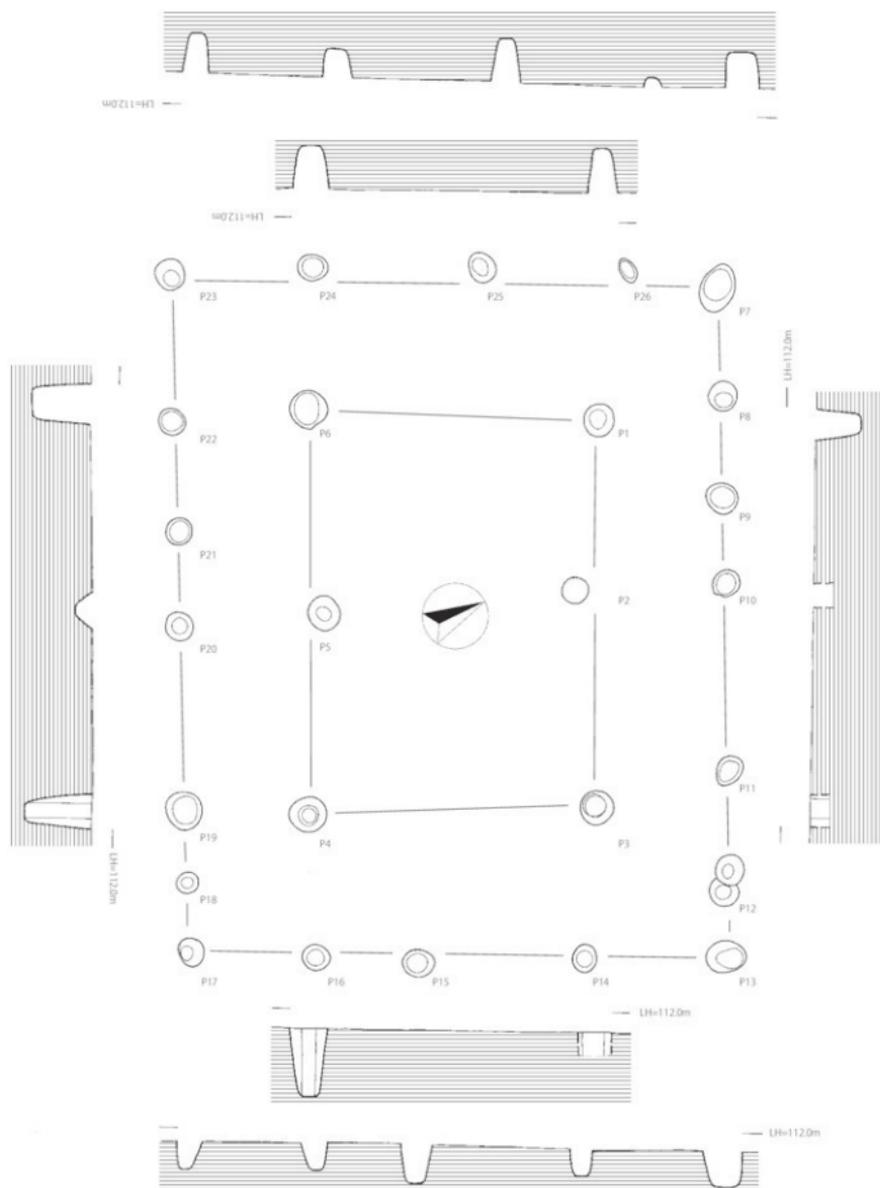
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P9	316	平均	158	P1-P4	508	平均	169	方向:N47°E	P3:土師器(2),石器(1) P6:土師器(3) P8:土師器(4),粘土塊(1) P10:石器(2)
P2-P8	356	平均	178	P6-P9	504	平均	168		
P4-P6	336	平均	168						
P1-P10	152	P4-P5	176	P1-P2	180	P6-P7	168		
P10-P9	164	P5-P6	160	P2-P3	148	P7-P8	172		
				P3-P4	180	P8-P9	164		
P2-P11	200								
P11-P8	156								

第65表 掘立柱建物跡 39号計測表

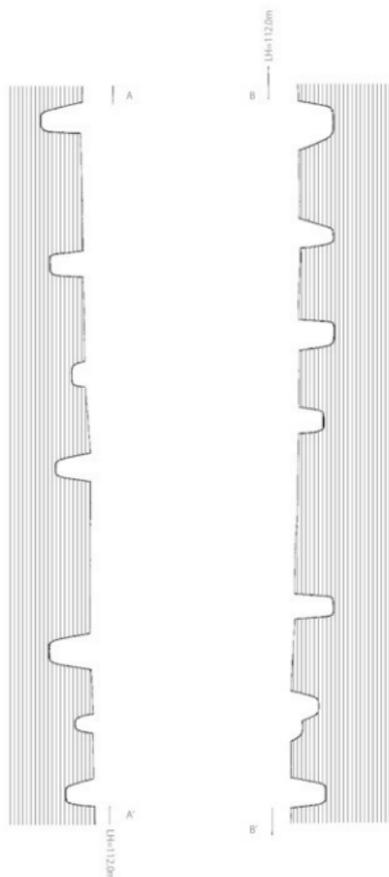
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	368	平均	184	P1-P8	464	平均	155	方向:N90°E	P1:土師器(1) P2:土師器(1) P3:土師器(5),越州窯系青磁(1) 粘土塊(1),石器(1),軽石(1) P4:土師器(5),越州窯系青磁(2) 粘土塊(5),獣骨(1) P5:土師器(1) P8:土師器(1)
P6-P8	376	平均	188	P3-P6	456	平均	152		
P1-P2	180	P6-P7	184	P1-P10	164	P3-P4	152		
P2-P3	188	P7-P8	192	P10-P9	148	P4-P5	140		
				P9-P8	152	P5-P6	164		

第66表 掘立柱建物跡 40号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	324	平均	162	P1-P3	332	平均	166	方向:N35°E	P3:土師器(1) P4:土師器(6) P6:石器(8)
P3-P4	332	平均	-	P4-P6	344	平均	172		
P1-P7	156			P1-P2	176	P4-P5	180		
P7-P6	168			P2-P3	156	P5-P6	164		



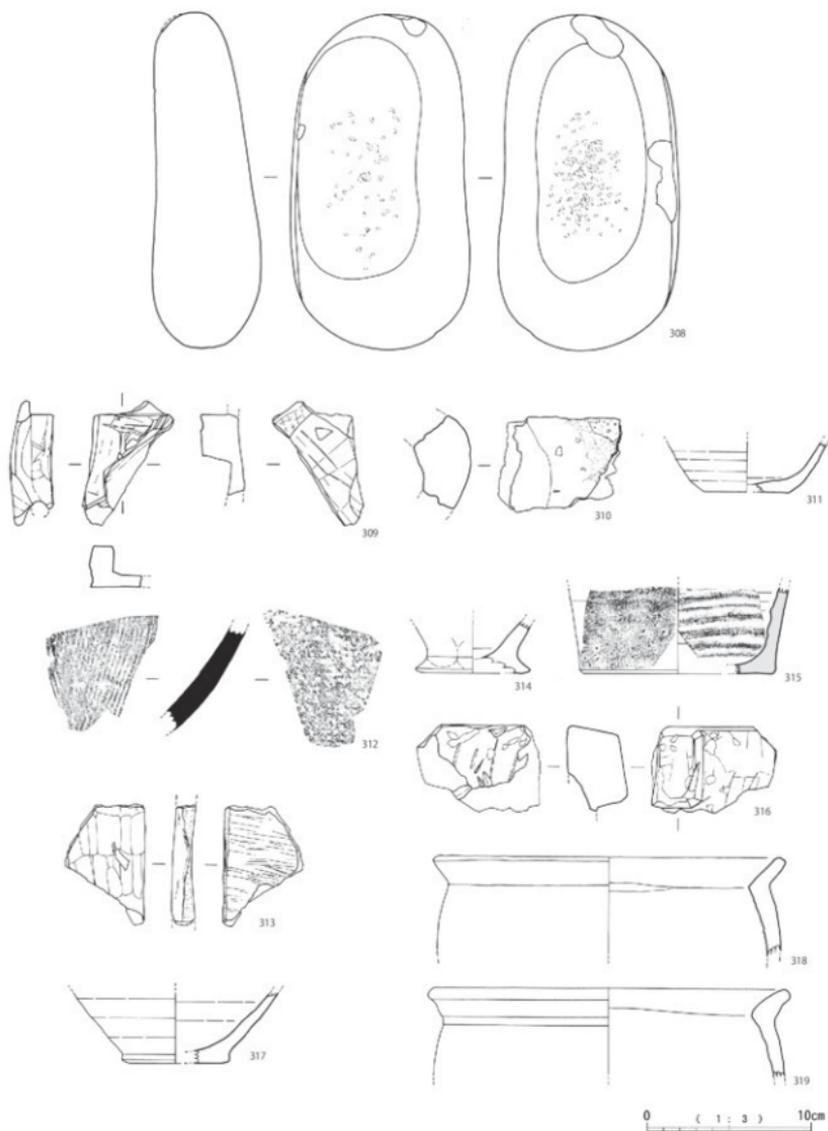
第101图 掘立柱建物跡41号(1)



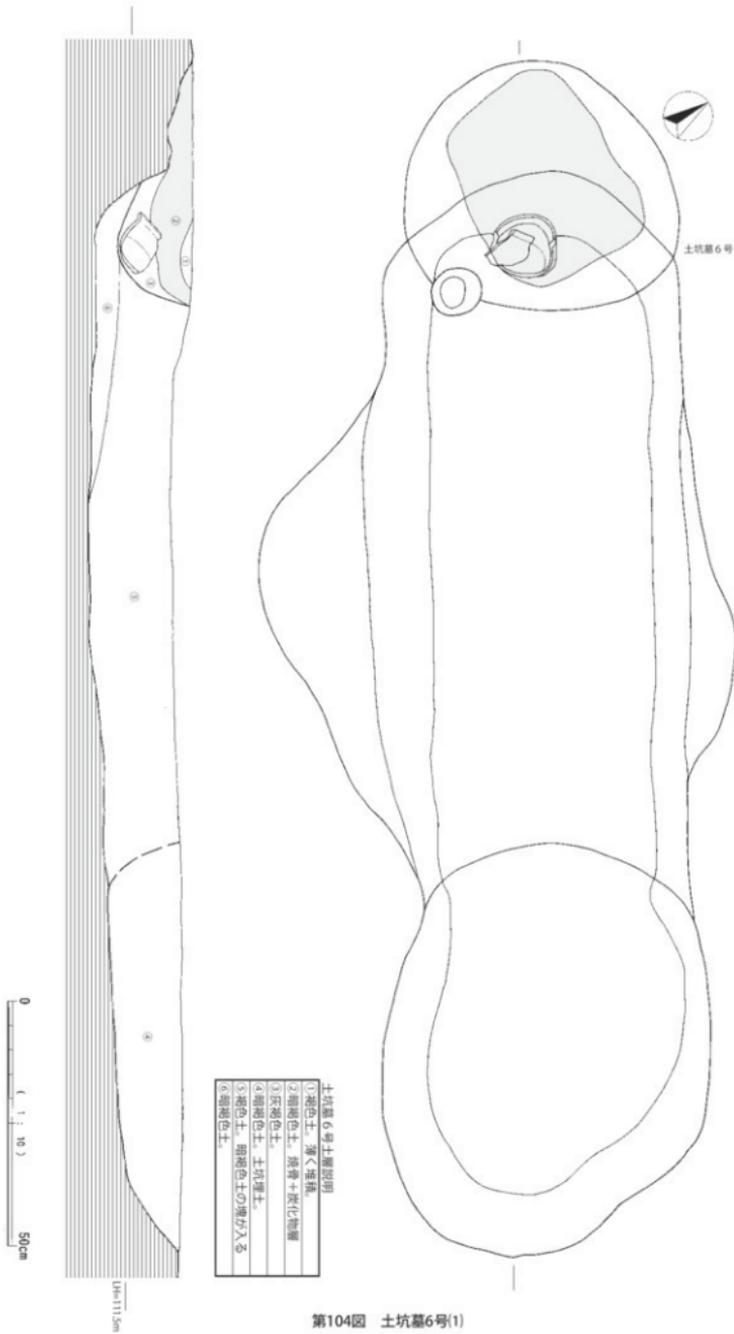
第102図 掘立柱建物跡41号(2)

第 67 表 掘立柱建物跡 41 号計測表

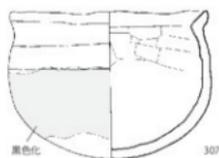
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物	
P1-P6	352	平均	-	P1-P3	474	平均	237	方向 :N64°W	P1: 土師器(1), 兼久式土器(1) 鉄滓(1), 石器(1) P3: 石器(2) P4: 土師器(3), 須恵器(2), 糶羽口(1) P5: 土師器(1), 石器(1) P6: 糶の羽口(2) P7: 石器(1) P9: 粘土塊(1) P11: 石器(1) P13: 土師器(3) P15: 滑石製石鏝(1), 施釉陶磁器(1) P16: 土師器(1) P25: 土師器(3), 鉄製品(1) 粘土塊(4)	
P3-P4	348	平均	-	P4-P6	504	平均	252			
				P1-P2	210	P4-P5	252			
				P2-P3	264	P5-P6	252			
庇部分										
P7-P23	668	平均	167	P7-P13	800	平均	133			
P13-P17	660	平均	165	P17-P23	824	平均	137			
P7-P26	112	P13-P14	176	P7-P8	140	P17-P18	88			
P26-P25	180	P14-P15	204	P8-P9	120	P18-P19	90			
P25-P24	204	P15-P16	124	P9-P10	108	P19-P20	226			
P24-P23	172	P16-P17	156	P10-P11	228	P18-P21	116			
				P11-P12	124	P21-P22	132			
				P12-P13	80	P22-P23	172			



第103图 C地区掘立柱建物内出土遗物



第104図 土坑墓6号(1)



第105図 土坑墓6号(2)

(ウ) 土坑墓

土坑墓 6号

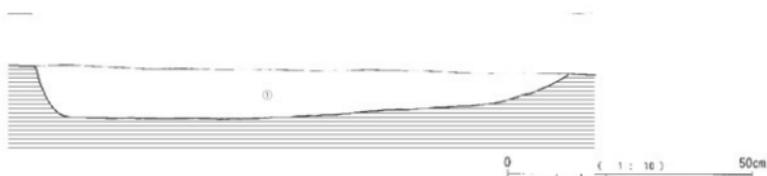
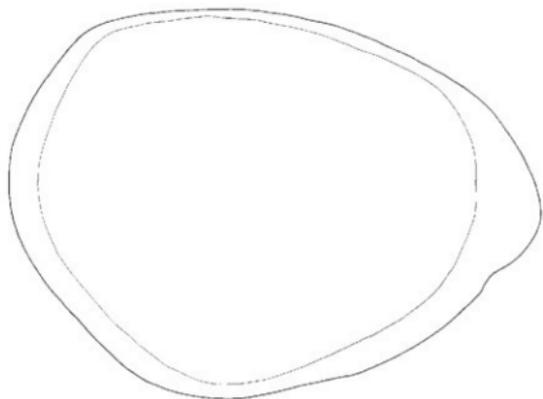
せ-98・99区で検出。直径55cm×51cmの円形土坑である。その隣には2基土坑があり、土坑墓は隣接する土坑を切って作られている。6号墓は②層に炭化物と火葬骨が混在する層があり、その下から小型の土師甕が出土している。⑤層を主体とする土坑は長方形と見られ、遺物・人骨などは確認できなかった。土坑墓6号の様相から見れば、元々土葬していた部分と考えることもできるのではないだろうか。

出土遺物

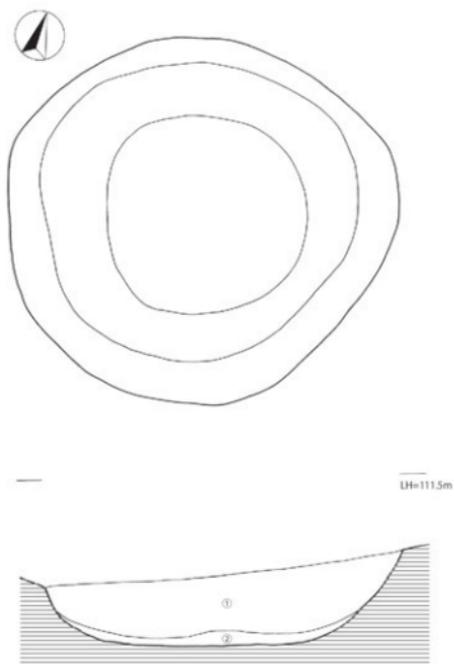
319は土師器甕である。2/3ほど残存している。内面にはケズリの痕跡が確認できる。また、外面には炭化物が付着している。この付着した炭化物は年代測定を行っており、1230±20BPの年代が得られている。

第68表 土坑墓6号

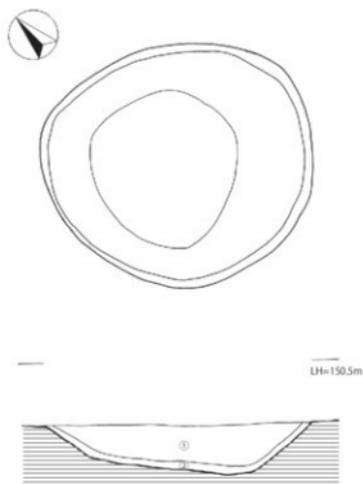
神田No	副都庁番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			色調			重量 (g)	備考
								口径	底径	高さ	(内)	(外)	(内)	(外)	(g)			
105	307		土坑墓6号	土師器	甕		口~底	11.7	12.2	9	-	-	-	-	-	-	-	小型



第106図 焼土跡20号



第107図 焼土跡21号



第108図 焼土跡22号

0 (1 : 10) 50cm

焼土跡 21-22号土層説明

① 暗褐色土層

② 炭化物層

㊦ 焼土跡

焼土跡 20号

そ-99区で検出。直径190cm×80cmで全面焼けた地山面である。焼けた厚さは約10cmほどである。掘立39号の内側にある。

焼土跡 21号

そ-98区で検出。直径80cm×76cmの円形状土坑である。②層に炭化物が充填している。その周囲がわずかに焼けている。

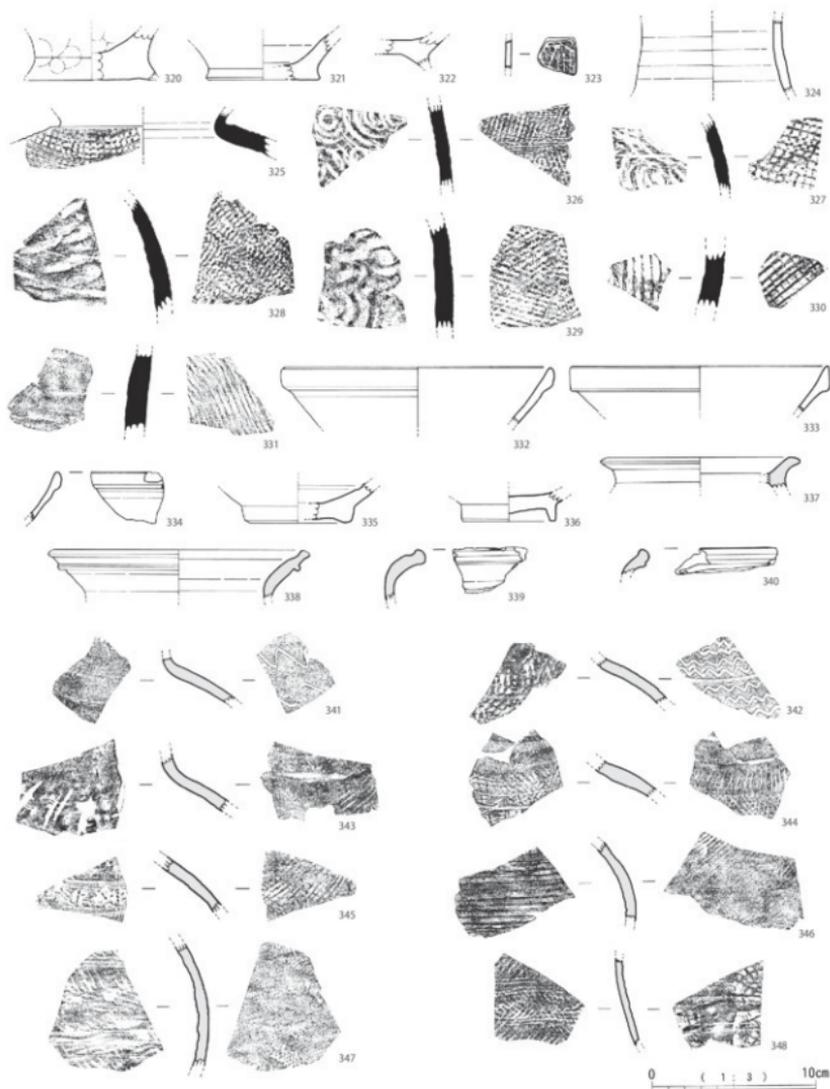
焼土跡 22号

そ-97-96区で検出。焼土跡21号とほぼ同様の形状で、②層に炭化物が充填している。21号より一回り小さい。

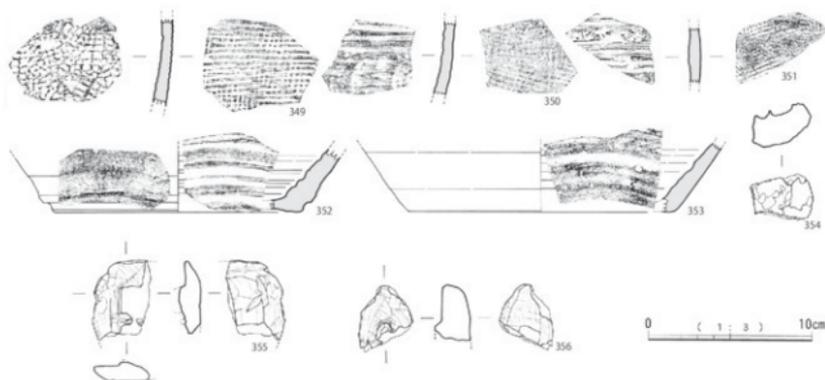


第109图 C地区沟状遗构

S=1:200



第110号 C地区包含层出土物(1)



第111圖 C地区包含層出土遺物(2)

第 69 表 C 地区包倉層出土遺物

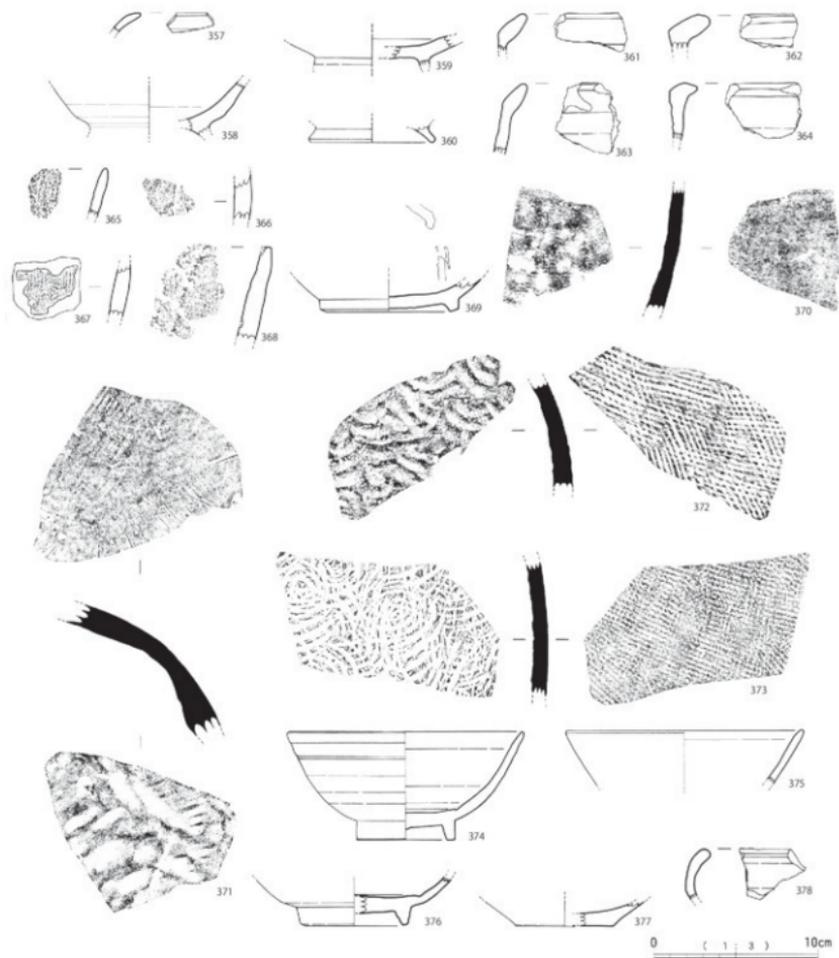
発掘 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
103	308	し2	P1426	石製	磨製石	埴輪形	-	-	-	-	-	-	-	2400	竪立27号 P01	
	309	し1	P1433	粘土製	縄文土器	-	-	-	-	-	-	-	-	90	竪立29号 P03	
	310	す2	P1461	縄の付口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	竪立30号 P05	
	311	せ2	P1556	土師器	杯	-	底部	-	4.9	-	-	-	-	-	-	竪立34号 P17
	312	せ1	P1993	土師器	杯	-	底部	-	-	-	裾	-	-	-	-	竪立35号 P10
	313	せ1	P2121	滑石製石器	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	69	竪立35号 P24	
	314	す99	P2050	赤瓦土器	-	-	底部	-	5.8	-	-	-	-	-	-	竪立41号 P01
	315	す99	P2083	赤釉陶器	-	-	底部	-	11.4	-	-	-	-	-	-	竪立41号 P15
	316	す99	P2083	滑石製石器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	170	竪立41号 P15	
	317	せ99	P2168	土師器	杯	-	底部	-	5	-	-	-	-	-	-	竪立39号 P04
	318	せ99	P2167	土師器	甕	-	口縁部	20.2	-	-	-	-	-	-	-	竪立39号 P03
319	せ99	P2168	土師器	甕	-	口縁部	21	-	-	-	-	-	-	-	竪立39号 P03	

第 70 表 C 地区包倉層出土遺物(1)

発掘 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
110	320	ん3	埴輪	赤瓦土器	環	-	底部	-	8.2	-	-	-	-	-	-	-
	321	し3	埴輪	土師器	輪×環	-	底部	-	6.5	-	-	-	-	-	-	-
	322	す1	埴輪	土師器	輪×環	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	323	せ99	埴輪	土師器	輪×環	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	324	せ99	埴輪	赤瓦土器	環	-	底部	-	-	8.6	-	-	-	-	-	-
	325	せ99	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	9.9	-	-	格子	灰	灰	-	-
	326	し2	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	同心円	灰白	灰白	-	-
	327	す1	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	同心円	格子	灰黄緑	灰黄緑	-
	328	す1	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	同心円	格子	灰白	灰白	-
	329	せ99	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-
	330	す99	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	平行	格子	灰	灰	-
	331	す99	埴輪	土師器	甕	-	底部	-	-	-	-	無文	平行	灰白	灰白	-
	332	せ99	埴輪	白磁	輪	IV類	口縁部	16	-	-	-	-	-	-	-	-
	333	ん3	埴輪	白磁	輪	IV類	口縁部	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	334	す1	埴輪	白磁	輪	IV類	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	335	ん3	埴輪	白磁	輪	IV類	底部	-	5.6	-	-	-	-	-	-	-
	336	す99	埴輪	白磁	輪	V類	底部	-	5.6	-	-	-	-	-	-	-
	337	し2	埴輪	カムイヤキ	鉢	-	口縁部	11	-	-	-	-	-	-	-	-
	338	せ99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	口縁部	14.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	339	ん3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	口縁部	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-	-
340	し2	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	口縁部	-	-	-	-	-	黒灰	黒灰	-	-	
341	ん3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	口縁部	-	-	-	-	ナデ	波状文	灰	灰	-	外面波状文
342	せ99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	波状文	灰	灰	-	-	
343	せ99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	ナデ	平行	灰	灰	-	-
344	し3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	ナデ	平行	灰	灰	-	-
345	せ99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	ナデ	平行	青灰	青灰	-	-
346	し3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	平行	暗青灰	暗青灰	-	-	
347	せ99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	平行	平行	灰黄緑	灰	-	-
348	す99	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	-	格子	平行	灰	灰	-	-

第 71 表 C 地区包倉層出土遺物(2)

発掘 No	発掘 番号	土土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
111	349	ん3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	格子	平行	灰	灰	-	-	
	350	し1	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	ナデ	平行	灰	灰	-	-	
	351	し1	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	-	-	ナデ	平行	灰	灰	-	-	
	352	せ1	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	14.1	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-
	353	し3	埴輪	カムイヤキ	甕	Ⅱ	底部	-	15.9	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-
	354	す99	埴輪	鉄線	輪形浮	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	40	-	
355	し1	埴輪	赤瓦土器	ハレン鉢	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	28	-		
356	ん3	埴輪	赤瓦土器	ハレン鉢	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	30	-		

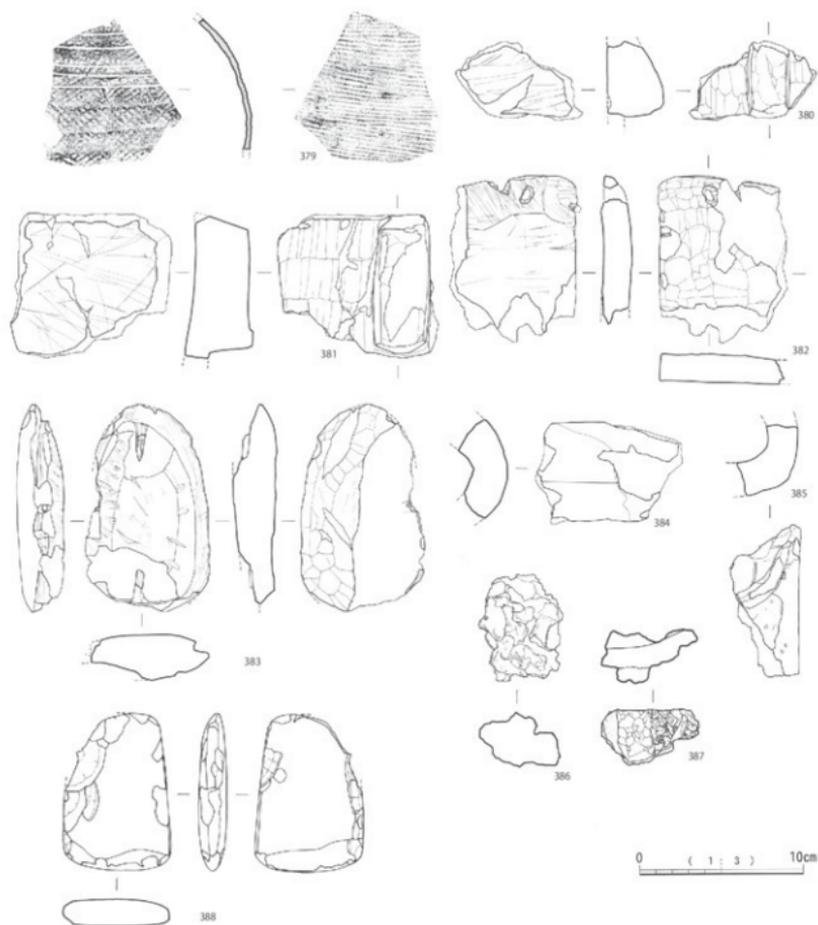


第112図 C地区包含層出土遺物(3)

(*) 包含層内出土遺物

320は兼久式土器の底部である。指頭圧痕が明瞭に見られる。321～323は土師器碗・坏である。322は底面がやや外側へ出てくびれが出来る資料で、9世紀後半から10世紀前半頃に位置づけられる。324は胴部片にマス目状に線状痕が確認できる。325は越州窯系青磁水注の頸部片である。325～331は須恵器である。327～330は内面に同心円状当て具

が見られるが、外面は違うタタキ具が使用されている。331は壺である。333～336は白磁碗である。Ⅳ類・Ⅴ類が出土している。337～353はカムイヤキである。338は小型鉢かと思われる。天地逆で蓋状になる可能性もある。338～340は口縁部資料である。341～351は胴部資料である。342はラフに波状文が大きく描かれている。やや大きめの製品かもしれない。343は区画された沈線の中に小さく波状文が描



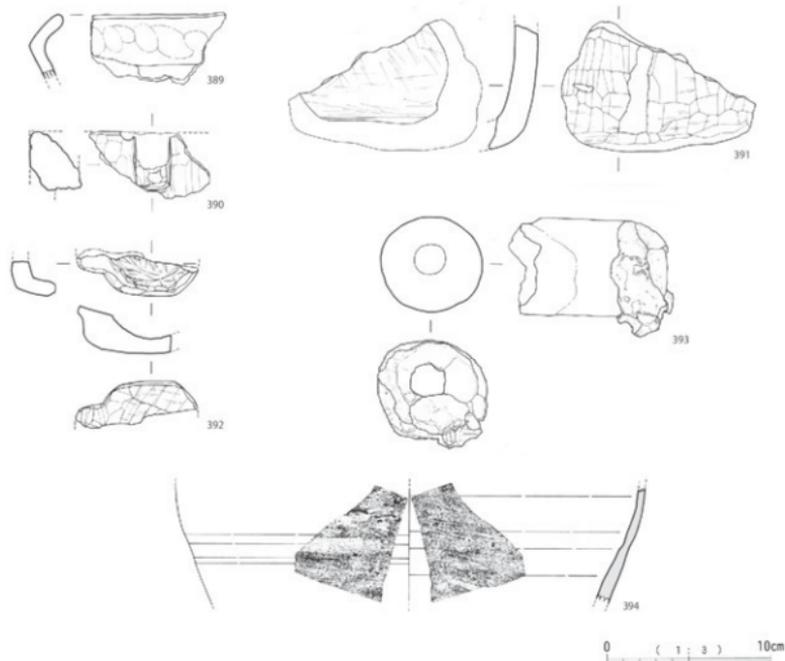
第113図 C地区包含層出土遺物(4)

かれている。352-353は底部資料である。354は鉄滓である。碗形澤と見られる。355-356は滑石製二次加工品である。いずれも半分以上破損しているが、つまみがあることや横位に貫通穿孔が認められることから、バレン状製品と見られる。

357～388はさ-8～10区の包含層中から出土した資料である。この範囲は当初盛土保存される範囲であったが、畑の構造上どうしても掘削が必要であったため、影響の及ぶ包含層の途中まで掘り下げた。そのため、この範囲について遺構検出は行っていない。

357～360は土師器碗である。360は底部のみ残存している。その形状から11世紀～12世紀頃の資料と見られる。361～364は土師器器口縁部である。365は兼久式土師の胴部と見られる。内面にハケ目状推痕が見られる。

366～368は布目瓦土器である。366は舌状、368は平坦に口唇部が作られている。369は越州窯系青磁である。I類の底部で、内面に目跡が残っている。370～373は須恵器である。370は壺、それ以外は甕である。374～377は白磁である。375はほぼ全器形がうかがえる資料で口径14cm底径



第114図 C地区柱穴内出土遺物

5.9cm器高6.6cmを測る。377は皿状に見えるが底面が良く握られており、元々は脚があった可能性もある。378は朝鮮系無軸陶器である。379はカムイヤキである。非常に薄く仕上げられている。380～383は滑石製石鍋である。380・381は口縁部資料である。382は方形状に加工されている。端部は貫通穿孔が施されている。温石と考えられる。383は縦方向に穿孔が施され、内部には鉄製品がはまっている。形状からパレン状製品と同様な用途で使用されたものと考えられる。384・385は櫛の羽口である。386・387は鉄滓である。389は石斧である。こちらも刃部が潰れ、左右側面も破損している。敲打具として使用された結果であると考えられる。

(9) 柱穴内出土遺物

389～394は柱穴内から出土した資料である。

389は土師器甕の口縁部である。くびれ部分に明瞭な指頭圧痕がみられる。390～392は滑石製石鍋である。392は柄杓の先端の様な形状をしている。削り片を利用して作られている。393は櫛の羽口完形品である。先端部は被熱し、ガラス質化している。直径約7cm内径約2cmでやや小さめである。

第72表 C地区包倉出土遺物(3)

発掘 No	発掘 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
357	38-10	階層一括	土師器	柄	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
358	38-10	階層一括	土師器	柄	-	-	腹部	-	-	7.2	-	-	-	-	-	-
359	38-10	階層一括	土師器	柄	-	-	腹部	-	-	6.9	-	-	-	-	-	-
360	38-10	階層一括	土師器	柄	-	-	腹部	-	-	7.4	-	-	-	-	-	-
361	38-10	階層一括	土師器	實	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
362	38-10	階層一括	土師器	實	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
363	38-10	階層一括	土師器	實	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
364	38-10	階層一括	土師器	實	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
365	38-10	階層一括	瀬久式土器	-	-	-	腹部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
366	38-10	階層一括	本目瓦土器	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
367	38-10	階層一括	本目瓦土器	-	-	-	腹部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
368	38-10	階層一括	本目瓦土器	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
369	38-10	階層一括	基州系青磁	柄	I-2b類	-	底部	-	-	7.4	-	-	-	-	-	-
370	38-10	階層一括	滑石器	器	-	-	腹部	-	-	-	無文	ナ字	灰白	粗灰	-	-
371	38-10	階層一括	滑石器	器	-	-	腹部	-	-	-	同心円	平行	浅黄橙	浅黄橙	-	-
372	38-10	階層一括	滑石器	器	-	-	腹部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-	-
373	38-10	階層一括	滑石器	器	-	-	腹部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰白	-	-
374	38-10	階層一括	白磁	柄	V類	-	口縁部	14	5.9	6.6	-	-	-	-	-	-
375	38-10	階層一括	白磁	柄	V類	-	口縁部	14.1	-	-	-	-	-	-	-	-
376	38-10	階層一括	白磁	柄	V類	-	底部	-	5.9	-	-	-	-	-	-	-
377	38-10	階層一括	白磁	-	-	-	底部	-	6	-	-	-	-	-	-	-
378	38-10	階層一括	瀬久系黄磁	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第73表 C地区包倉出土遺物(4)

発掘 No	発掘 番号	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
379	38-10	階層一括	カムイヤキ	器・器	-	-	腹部	-	-	-	平行	平行	靑灰	オリーブ	-	-
380	38-10	階層一括	滑石製石皿	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	111	縦耳
381	38-10	階層一括	滑石製石皿	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	395	縦耳
382	38-10	階層一括	漆工加工品	方形状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	217	貫通穿孔(2)
383	38-10	階層一括	漆工加工品	パレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	328	未貫通穿孔(2)
384	38-10	階層一括	藤の引口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
385	38-10	階層一括	藤の引口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
386	38-10	階層一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	-
387	38-10	階層一括	鉄滓	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	77	-
388	38-10	階層一括	石器	石斧	部ノツクス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	転用品

第74表 C地区柱穴内出土遺物

発掘 No	発掘 番号	出土区	遺構名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
389	す1	P2036	土師器	器	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
390	す2	P1457	滑石製石皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	69	縦耳
391	-	P1669	滑石製石皿	-	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	240	-
392	す1	P2252	漆工加工品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	62	フライパン型
393	す99	P2080	藤の引口	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ほぼ完成品
394	す2	P1457	瀬久系黄磁	-	-	-	底部	-	-	25.6	-	-	-	-	-	-



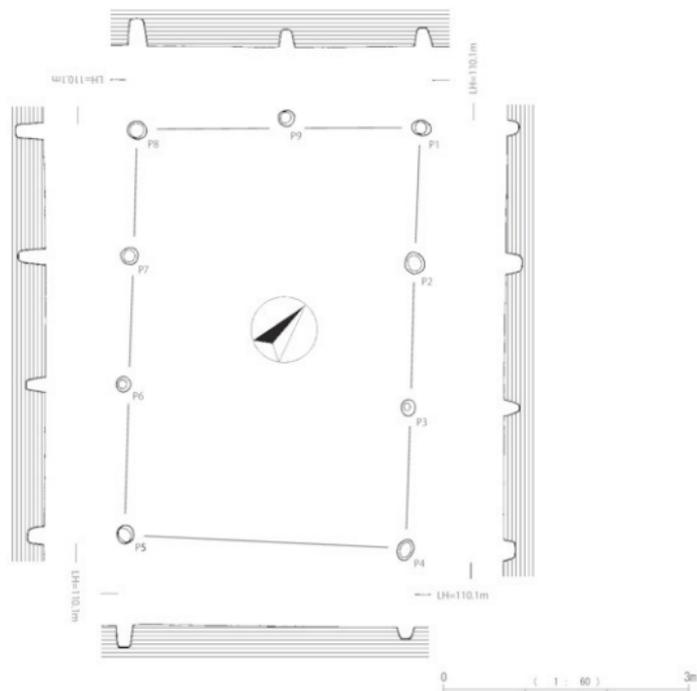
第115圖 D地区遺構配置圖(1)

S = 1 : 250



第116图 D地区遗构配置图2)

S = 1 : 250



第117図 掘立柱建物跡42号

(4) D地区

D地区は全体的に柱穴が浅いものが多かった。これは近世・近代に畑の造成を行った結果であろうと推察している。

(ア) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡42号(第117図, 第75表)

そ・た-5区で検出。2×3間の側柱建物跡である。やや小さめの柱穴で構成され、ほぼ等間隔で配置されている。柱穴内からは土師器甕・須恵器などが出土している。

掘立柱建物跡43号(第118図, 第76表)

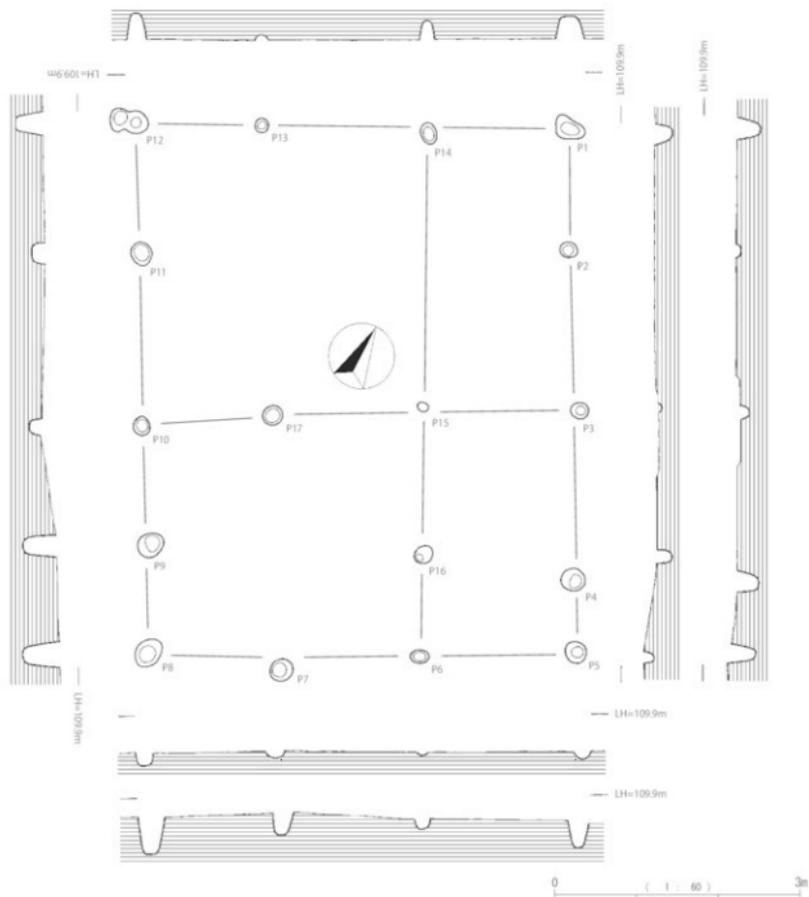
そ・た-4区で検出。3×4間の総柱建物跡である。こちらも小さめの柱穴で構成されている。

掘立柱建物跡44号(第119図, 第77表)

た-4区で検出。3×3間の建物跡である。42・43号と同様に柱穴は小さめである。柱穴内からは粘土塊が出土している。

第75表 掘立柱建物跡42号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P8	348	平均	174	P1-P4	512	平均	171	方向:N40°W	P1:土師器(4)
P4-P5	340	平均	-	P5-P8	492	平均	164		P5:土師器(5)
P1-P9	164			P1-P2	164	P5-P6	184		P7:土師器(2), 陶磁器(1)
P9-P8	184			P2-P3	176	P6-P7	156		P8:土師器(2)
				P3-P4	172	P7-P8	152		P9:須恵器(1)



第118図 掘立柱建物跡43号

掘立柱建物跡 45号 (第120図, 第78表)

ち-5区で検出。1×1間の建物跡である。やや小型で平面プランは長方形である。

掘立柱建物跡 46号 (第121図, 第79表)

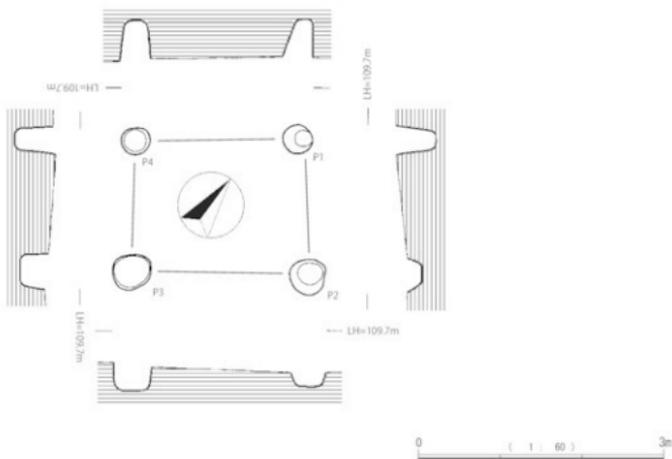
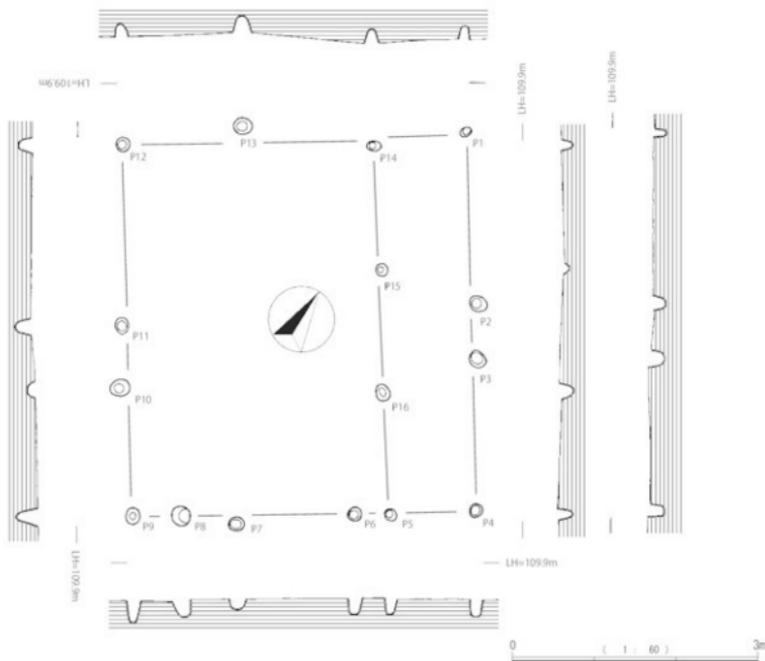
ち-4-5区で検出。1×3間の側柱建物跡である。周囲にある溝に沿うようにつくられている。柱穴内からは龍泉窯系青磁、天目などが出土している。

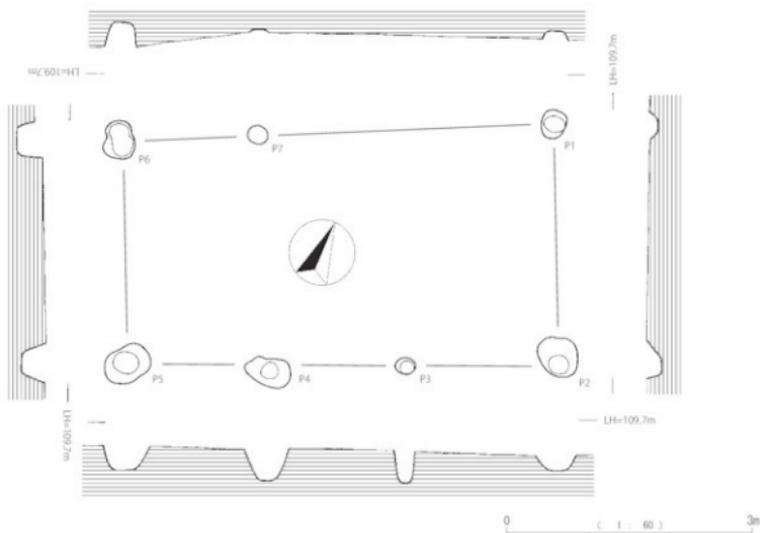
掘立柱建物跡 47号 (第122図, 第80表)

そ・た-5-6区で検出し、掘立48-50号と重複している。その2つよりも古い。2×3間の側柱建物跡であると考えられる。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 48号 (第123図, 第81表)

そ-6区で検出し、掘立47号と重複している。掘立47号よりも新しい。1×1間の建物跡で、平面プランは長方形である。





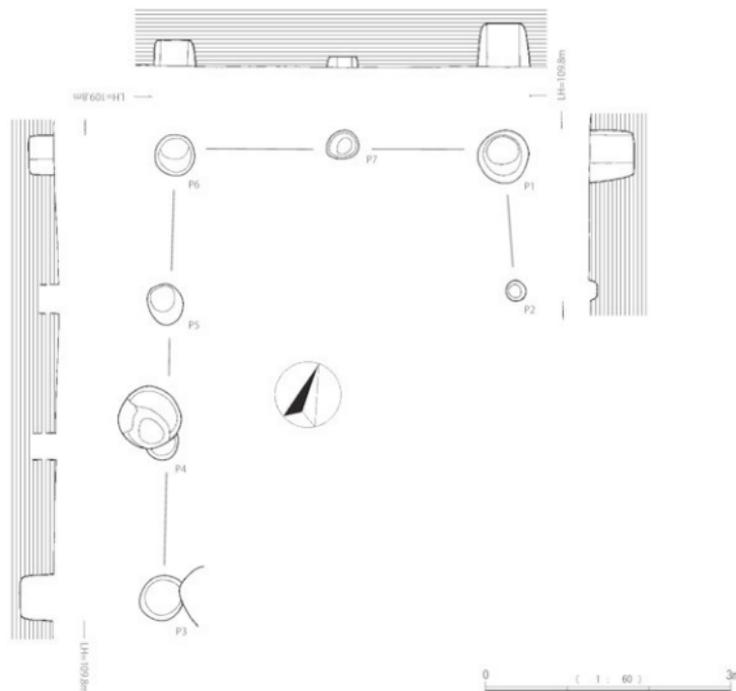
第121図 掘立柱建物跡46号

第76表 掘立柱建物跡43号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P12	524	平均	175	P1-P5	640	平均	160	方向:N27°W	P1: 籾の羽口(1), 粘土塊(2) 石器(2) P9: 石器(3) P12: 土師器(1) P14: 土師器(1), 滑石製石鍋(2) 鉄滓(2), 籾の羽口(1)
P3-P10	536	平均	179	P6-P14	633	平均	211		
P5-P8	524	平均	175	P8-P12	652	平均	163		
P1-P14	172	P5-P6	192	P1-P2	148	P8-P9	136		
P14-P13	200	P6-P7	172	P2-P3	196	P9-P10	144		
P13-P12	152	P7-P8	160	P3-P4	208	P10-P11	212		
				P4-P5	88	P11-P12	160		
P3-P15	192			P6-P16	120				
P15-P17	184			P16-P15	181				
P17-P10	160			P15-P14	332				

第77表 掘立柱建物跡44号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P12	468	平均	156	P1-P4	460	平均	153	方向:N31°W	P4: 粘土塊(1)
P4-P9	420	平均	84	P5-P14	448	平均	149		
				P9-P12	452	平均	151		
P1-P14	160	P4-P5	104	P1-P2	208	P9-P10	156		
P14-P13	160	P5-P6	44	P2-P3	68	P10-P11	76		
P13-P12	148	P6-P7	144	P3-P4	184	P11-P12	220		
		P6-P8	64	P5-P16	148				
		P8-P9	64	P16-P15	148				
				P15-P14	152				



第122図 掘立柱建物跡47号

掘立柱建物跡 49号 (第124図, 第82表)

そ-6区で検出。2×2間の側柱建物跡である。柱穴はやや小さいもので構成されている。柱穴の内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 50号 (第125図, 第83表)

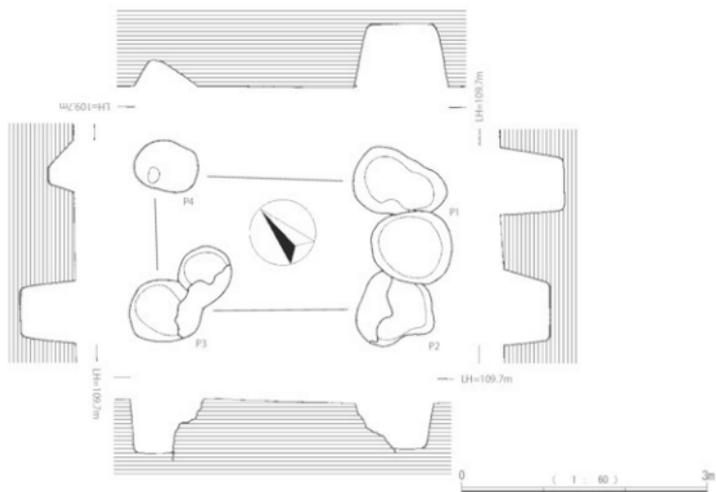
た-6区で検出し、掘立47号と重複している。掘立47号よりも新しい。1×1間の建物跡である。柱穴内からは須恵器・カムイヤキなどが出土している。

第78表 掘立柱建物跡 45号計測表

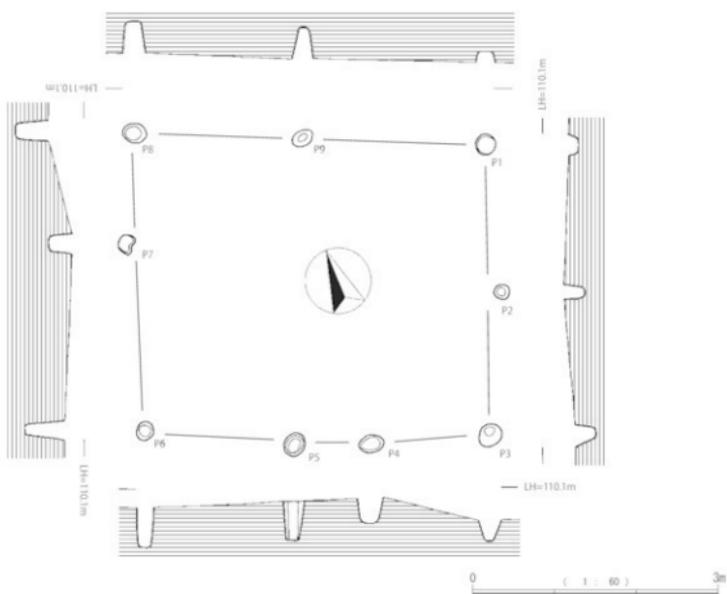
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	168	平均	-	P1-P4	208	平均	-	方向:N55°E	P1:土師器(1),須恵器(1) P2:土師器(3) P3:土師器(1) P4:白磁(1),粘土塊(1)
P3-P4	160	平均	-	P2-P3	220	平均	-		

第79表 掘立柱建物跡 46号計測表

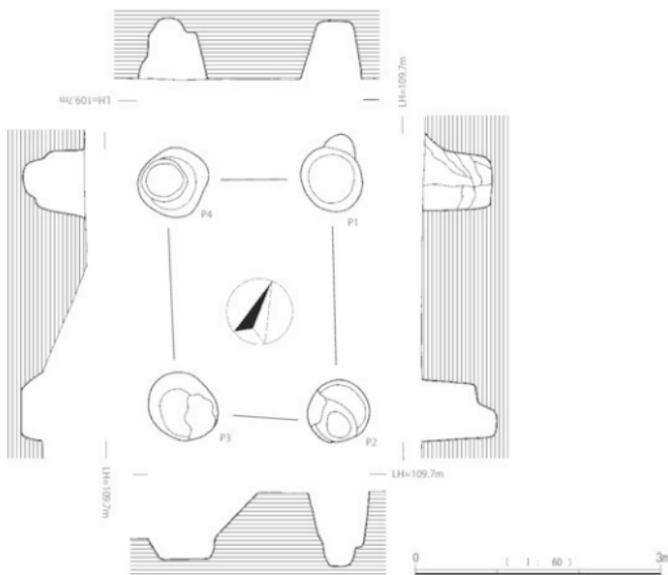
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	296	平均	-	P1-P6	528	平均	264	方向:N65°E	P1:龍泉窯系青磁(2),粘土塊(3) P4:鉄滓(1),天目(1) P5:土師器(1) P6:龍泉窯系青磁(1),土製品(2) 鉄滓(1)
P5-P6	272	平均	-	P2-P5	528	平均	176		
				P1-P7	360	P2-P3	184		
				P7-P6	168	P3-P4	168		
						P4-P5	176		



第123図 掘立柱建物跡48号



第124図 掘立柱建物跡49号



第125図 掘立柱建物跡50号

第80表 掘立柱建物跡47号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	382	平均	191	P1-P2	172	平均	-	方向:N18°W	P3: 土師器(2) P4: 土師器(1), 粘土塊(1) P6: 土師器(1), 石器(1)
				P3-P6	588	平均	196		
P1-P7	176					P3-P4	180		
P7-P6	206					P4-P5	224		
						P5-P6	184		

第81表 掘立柱建物跡48号計測表

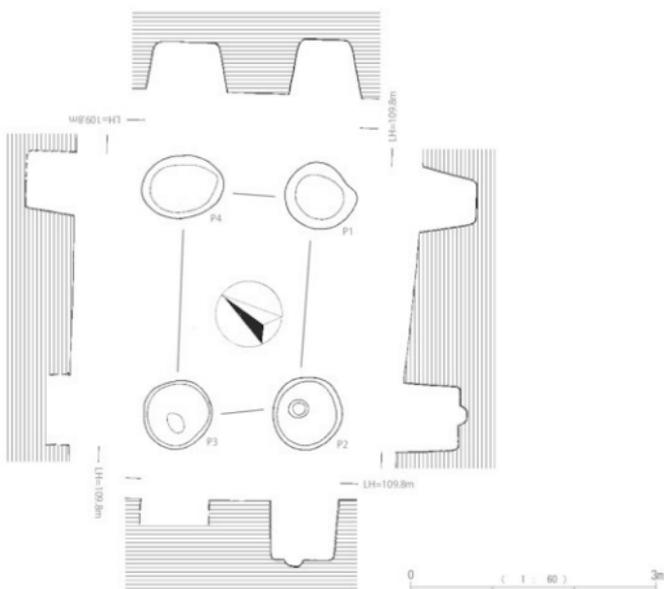
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	160	平均	-	P1-P4	296	平均	-	方向:N47°W	P1: 石器(1)
P3-P4	168	平均	-	P2-P3	304	平均	-		

第82表 掘立柱建物跡49号計測表

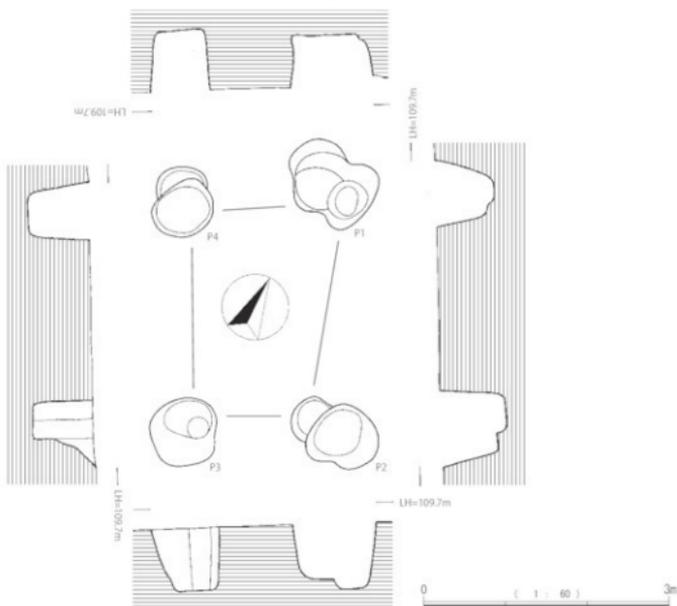
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	352	平均	176	P1-P8	428	平均	214	方向:N72°W	P4: 土師器(2), 粘土塊(1), 軽石(2) P5: 土製品(1)
P6-P8	364	平均	182	P3-P6	416	平均	139		
P1-P2	180	P6-P7	228	P1-P9	220	P3-P4	144		
P2-P3	172	P7-P8	136	P9-P8	208	P4-P5	92		
						P5-P6	180		

第83表 掘立柱建物跡50号計測表

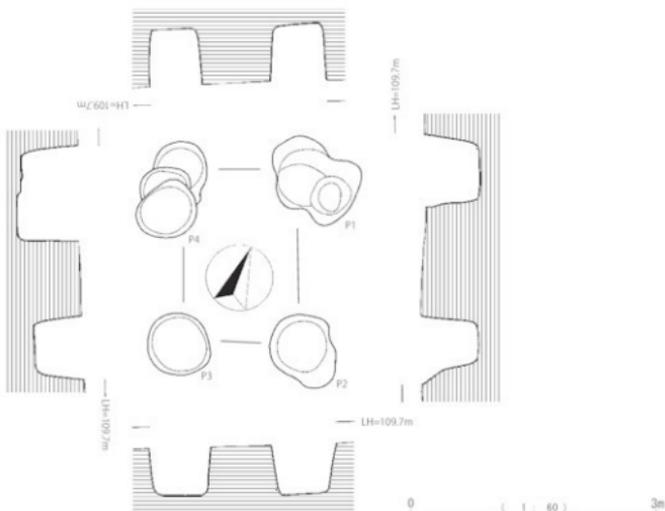
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	208	平均	-	P1-P2	304	平均	-	方向:N25°W	P4: 須恵器(1), カムイヤキ(1) 兼久式土器(1), 鉄滓(1) 粘土塊(1)
P2-P3	200	平均	-	P3-P4	280	平均	-		



第126図 掘立柱建物跡51号



第127図 掘立柱建物跡52号



第128図 掘立柱建物跡53号

第84表 掘立柱建物跡 51号計測表

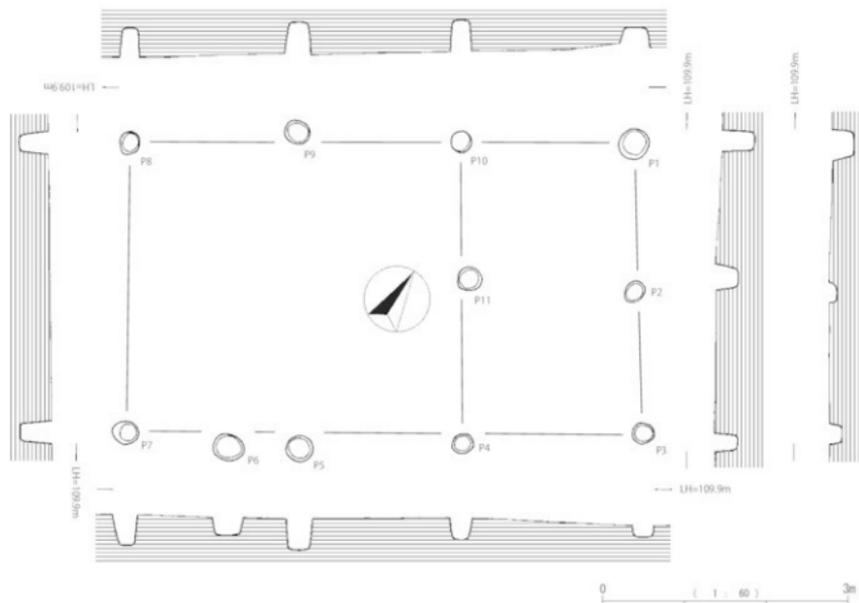
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	172	平均	-	P1-P2	260	平均	-	方向:N56°E	P1:龍泉窯系青磁(1) P3:土師器(3),須恵器(1) カムイヤキ(3),滑石製石鍋(1) 粘土塊(2),石器(2)
P3-P4	0	平均	-	P3-P6	0	平均	-		

第85表 掘立柱建物跡 52号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	200	平均	-	P1-P2	272	平均	-	方向:N27°W	
P2-P3	140	平均	-	P3-P4	268	平均	-		

第86表 掘立柱建物跡 53号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	144	平均	-	P1-P2	236	平均	-	方向:N26°W	
P2-P3	156	平均	-	P3-P4	220	平均	-		



第129図 掘立柱建物跡54号

掘立柱建物跡 51号 (第126図, 第84表)

た-6区で検出。1×1間の建物跡で、平面プランは長方形である。

掘立柱建物跡 52号 (第127図, 第85表)

た-6区で検出し、掘立53号と重複している。掘立53号よりも新しい。1×1間の建物跡である。

掘立柱建物跡 53号 (第128図, 第86表)

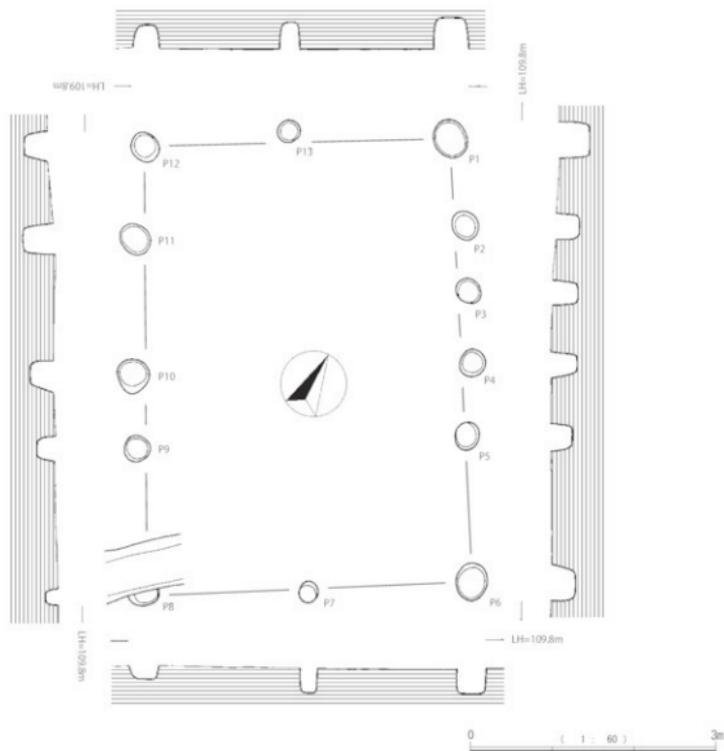
た-6区で検出し、掘立52号と重複している。掘立52号よりも古い。1×1間の建物跡である。掘立52号よりも面積は小さく、平面プランも方形気味である。

掘立柱建物跡 54号 (第129図, 第87表)

た-6・7区で検出。2×3間の建物跡である。一部総柱になると見られる。柱穴内からは土師器・須恵器などが出土している。

第87表 掘立柱建物跡 54号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	360	平均	180	P1-P8	616	平均	205	方向:N58°E	P1:土師器(埴, 須恵器(2) 粘土塊(1), 石器(1) P3:土師器(1), 須恵器(1), 石器(1) P4:土師器(3), 鉄滓(1) P6:土師器(5) P8:土師器(1), 須恵器(2) 粘土塊(1), 石器(1)
P4-P10	372	平均	186	P3-P6	632	平均	158		
P7-P8	356	平均	-						
P1-P2	184			P1-P10	212	P3-P4	220		
P2-P3	176			P10-P9	200	P4-P5	200		
				P9-P8	204	P5-P6	88		
						P6-P7	124		
P4-P11	200								
P11-P10	172								



第130図 掘立柱建物跡55号

掘立柱建物跡 55号 (第130図, 第88表)

た・ち・6区で検出。2×5間の側柱建物跡である。溝よりも古い。柱穴内から土師器・兼久式土器などが出土している。

掘立柱建物跡 56号 (第131図, 第89表)

た・ち・6・7区で検出。3×3間の総柱建物跡である。西側に庇状もしくは榿状と見られるものがある。柱穴内から土師器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 57号 (第132図, 第90表)

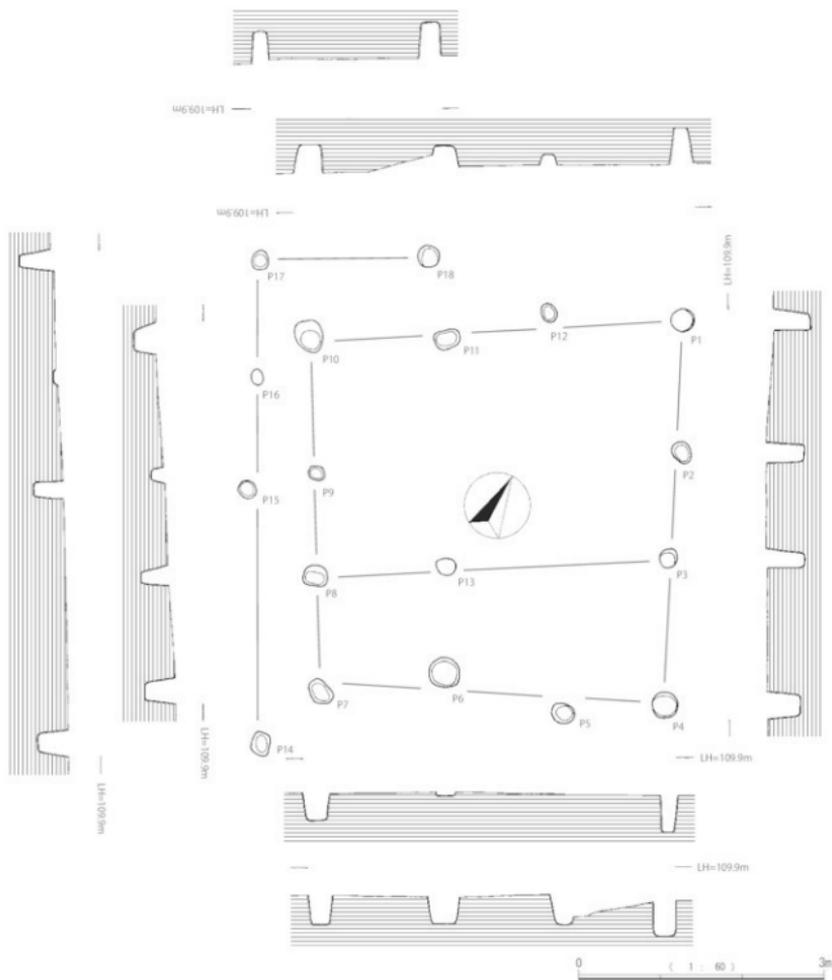
た・7区で検出し、掘立54・59号と重複している。1×1間の建物跡である。柱穴サイズは小さめである。

掘立柱建物跡 58号 (第133図, 第91表)

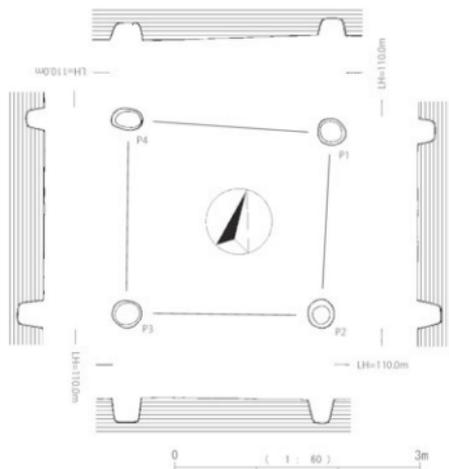
た・7区で検出し、掘立59号と重複している。1×1間の建物跡である。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 59号 (第134図, 第92表)

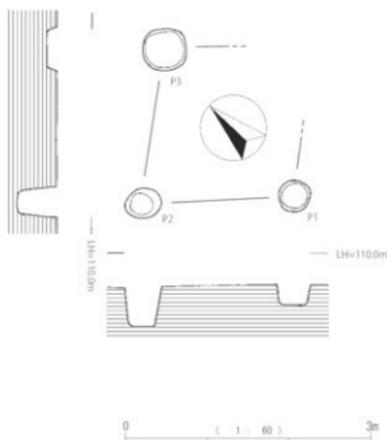
た・7区で検出し、掘立57・58号と重複している。中央に2本の構造を持ち、柱穴間隔が非常に短い建物跡である。類似するものとして沖縄県読谷村などで検出された吹出原型建物跡の母屋があげられる。柱穴内から土師器・カムイヤキなどが出土している。



第131图 掘立柱建物跡56号



第132図 掘立柱建物跡57号



第133図 掘立柱建物跡58号

掘立柱建物跡 60号 (第135図, 第93表)

た・7・8区で検出。掘立59号と類似する形状をしており、他の建物跡と比べて同様に柱穴間隔が短い。南側は石灰岩が露頭しており、未検出である。柱穴内からは土師器・滑石製石鐮などが出土している。

掘立柱建物跡 61号 (第136図, 第94表)

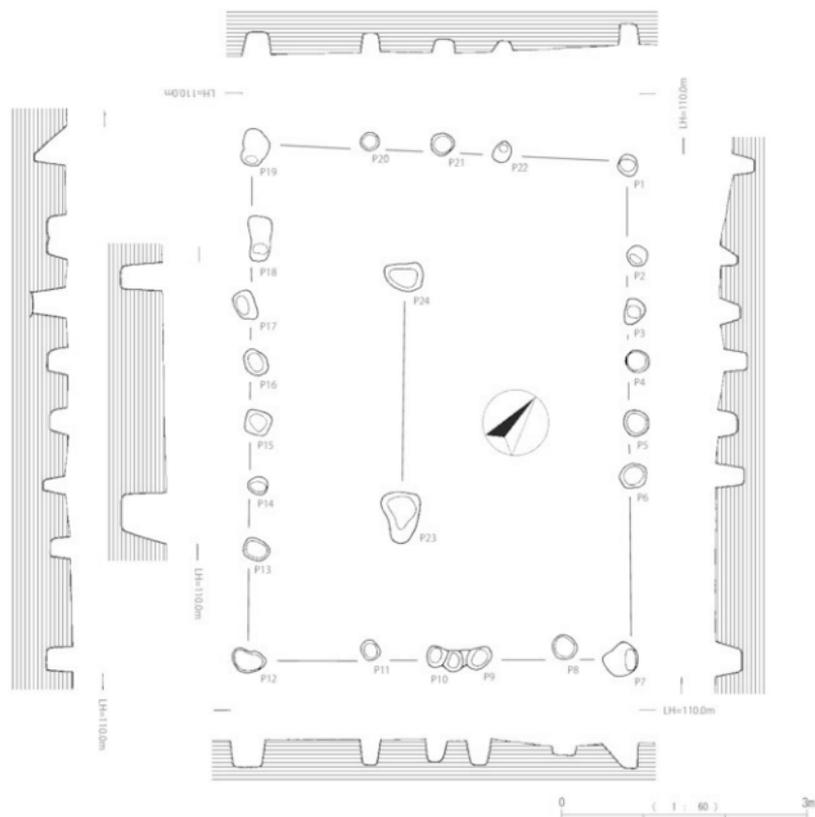
そ・7・8区で検出。側建物跡であると考えられる。半分ほどが未検出である。柱穴内から遺物は得られなかった。

第88表 掘立柱建物跡 55号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P12	372	平均	186	P1-P6	548	平均	110	方向:N30°W	P3:粘土塊(1) P4:土師器(1) P6:土師器(1),鉄滓(1),粘土塊(3) P9:兼久式土器(1) P11:兼久式土器(1),炭化物(1) P12:須恵器(3) P13:土師器(1)
P6-P8	396	平均	198	P8-P12	548	平均	137		
P1-P13	196	P6-P7	200	P1-P2	108	P8-P9	180		
P13-P12	176	P7-P8	196	P2-P3	80	P9-P10	92		
				P3-P4	88	P10-P11	164		
				P4-P5	92	P11-P12	112		
				P5-P6	180				

第89表 掘立柱建物跡 56号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物		
P1-P10	456	平均	152	P1-P4	468	平均	156	方向:N59°E	P1:土器(1),粘土塊(1),石器(7) P2:土師器(1) P3:粘土塊(4),炭化物(1) P4:土師器(2),石器(1) P9:滑石製石鐮(1) P10:土師器(2) P14:粘土塊(2),石器(1) P15:土師器(1),須恵器(1)		
P3-P8	428	平均	214	P7-P10	428	平均	143				
P4-P7	428	平均	143								
P1-P12	160	P4-P5	124	P1-P2	160	P7-P8	140				
P12-P11	128	P5-P6	152	P2-P3	132	P8-P9	124				
P11-P10	168	P6-P7	152	P3-P4	176	P9-P10	164				
P3-P13	268										
P13-P8	160										
庇部分											
P17-P18	204	平均	-	P14-P17	584	平均	195				
				P14-P15	308						
				P15-P16	136						
				P16-P17	140						



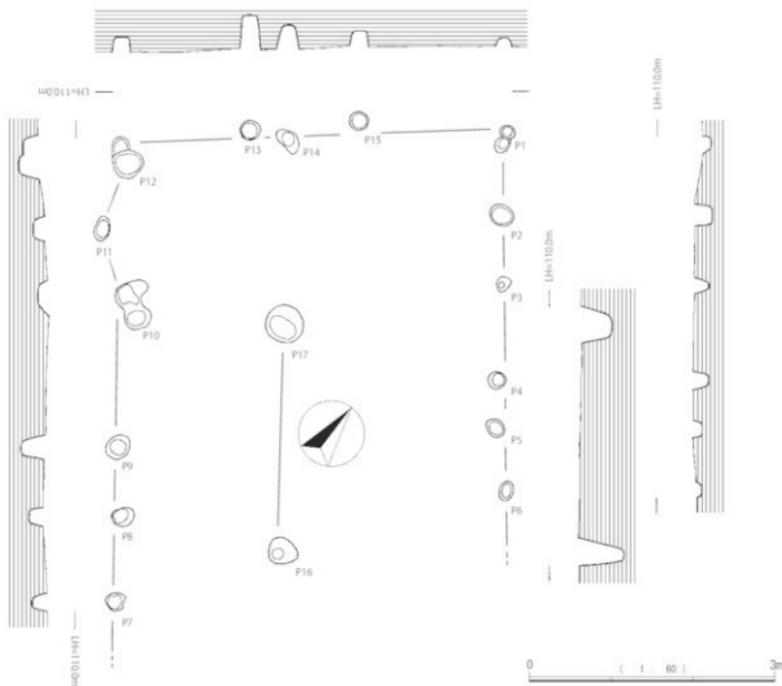
第134図 掘立柱建物跡59号

第 90 表 掘立柱建物跡 57 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P2	224	平均	-	P1-P4	248	平均	-	方向 :N78°E	P3: 土師器(2), 粘土塊(1)
P3-P4	236	平均	-	P2-P3	236	平均	-		

第 91 表 掘立柱建物跡 58 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P2	188	平均	-	P2-P3	192	平均	-	方向:	P1: 土師器(1), 粘土塊(3) P2: 土師器(1), 鉄滓(2) 籾の羽口(2), 粘土塊(6) 炭化物(2) P3: 土師器(1), 粘土塊(5), 石器(1)



第135図 掘立柱建物跡60号

掘立柱建物跡62号 (第137図, 第95表)

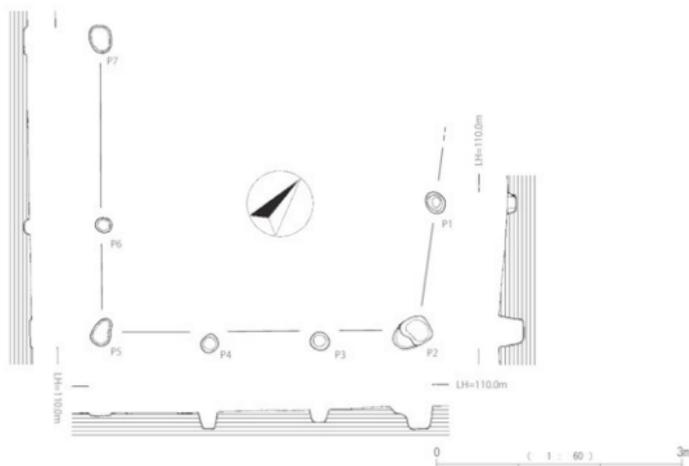
そ-7区で検出し、掘立63号と重複している。2×2間の個柱建物跡である。やや柱間が広い。柱穴内から遺物は出土していない。

掘立柱建物跡63号 (第138図, 第96表)

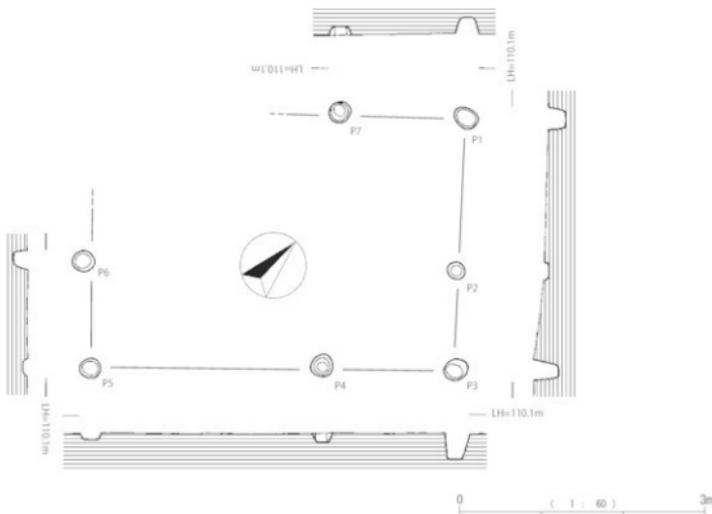
せ・そ-7区で検出し、掘立62号と重複している。4×4間の総柱建物跡である。比較的大きめの柱穴で構成させている。柱穴内からは白磁などが出土している。

第92表 掘立柱建物跡59号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P19	456	平均	114	P1-P7	600	平均	100	方向:N38°W	P3: 粘土塊(1)
P7-P12	472	平均	94	P12-P19	552	平均	92		P4: カムイヤキ(1)
P1-P22	152	P7-P8	84	P1-P2	112	P12-P13	140		P7: 石器(2)
P22-P21	72	P8-P9	104	P2-P3	64	P13-P14	80		P10: 粘土塊(1), 石器(1), 軽石(1)
P21-P20	88	P9-P10	52	P3-P4	60	P14-P15	80		P12: 土器(1)
P20-P19	144	P10-P11	80	P4-P5	76	P15-P16	72		P13: 竈の羽口(1), 石器(1)
				P5-P6	64	P16-P17	72		P15: 土師器(1), 石器(1)
				P6-P7	224	P17-P18	108		P19: 土師器(2), カムイヤキ(1)
						P18-P19			粘土塊(5), 炭化物(1)
中柱部分									P23: 鉄製品(1), 石器(1)
P23-P24	284	平均	-						P24: 粘土塊(4)



第136図 掘立柱建物跡61号



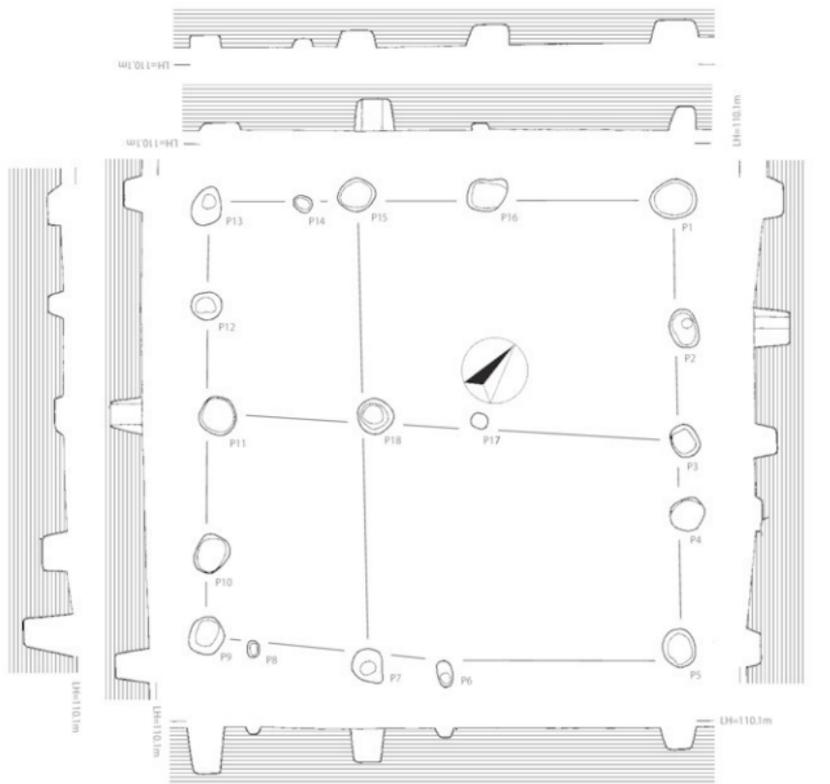
第137図 掘立柱建物跡62号

掘立柱建物跡 61号 (第139図, 第97表)

セ-7・8区で検出し、掘立65号と重複している。3×2間の総柱建物跡である。柱穴内からは龍泉窯系青磁などが出土している。

掘立柱建物跡 65号 (第140図, 第98表)

セ・そ-7・8区で検出し、掘立64・66号と重複している。1×1間の建物跡である。平面は長方形気味である。柱穴内から滑石製石鍋などが出土している。



第138図 掘立柱建物跡63号



掘立柱建物跡 66号 (第141図, 第99表)

セ・ソ7・8区で検出し、掘立65・67号と重複している。1×2間の側柱建物跡である。小型の建物跡である。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 67号 (第142図, 第100表)

セ・ソ8区で検出し、掘立66・68号と重複している。1×3間の側柱建物跡である。細長い建物跡である。柱穴内からは土師器・カムイヤキが出土している。

掘立柱建物跡 68号 (第143図, 第101表)

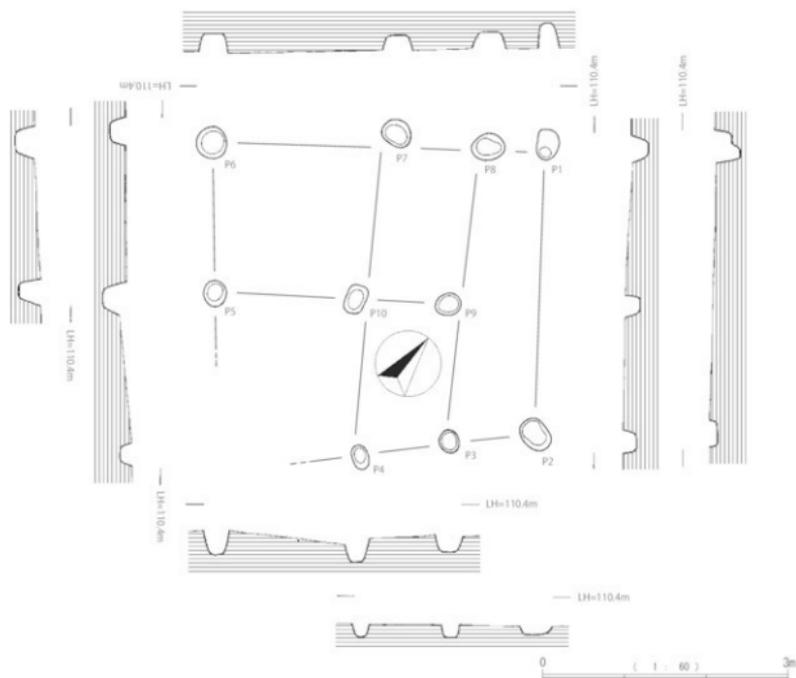
セ8区で検出し、掘立67号と重複している。南側が未検出である。柱穴内から粘土塊が出土している。

掘立柱建物跡 69号 (第144図, 第102表)

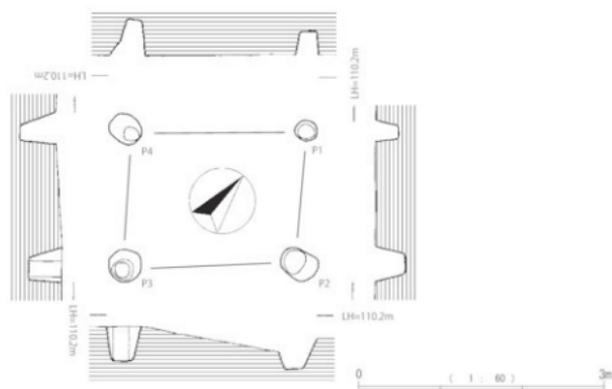
セ・タ8区で検出。西側角柱穴は確認できなかったが、1×3間の細長い側柱建物跡である。柱穴内から龍泉窯系青磁が出土している。

掘立柱建物跡 70号 (第145図, 第103表)

セ9区で検出し、掘立71・72号と重複している。柱穴の切りあいから、掘立72号よりも古い。2×3間を基本に、東側に庇が付く建物跡である。柱穴内から土師器などが出土している。



第139図 掘立柱建物跡64号



第140図 掘立柱建物跡65号

掘立柱建物跡 71号 (第146図, 第104表)

そ-9区で検出し、掘立70・72号と重複している。掘立70・72号と直交するような配置である。東側桁行では柱穴数が1本多い。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 72号 (第147図, 第105表)

そ-9区で検出し、掘立71・72号と重複している。1×1間の建物跡である。約直径80cmと柱の掘り方が大きい。平面プランは長方形状である。柱穴内からはカミヤキなどが出土している。

第93表 掘立柱建物跡 60号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物		
P1-P12	468	平均	117	P1-P6	428	平均	86	方向:N39°W	P1: 石器(1) P4: 石器(1) P12: 土師器(1) P14: 土師器(2), 須恵器(1) 粘土塊(1), 石器(2), 炭化物(1) P17: 滑石製石鏽(1), 鉄滓(2) 軽石(1)		
				P7-P12	544	平均	109				
P1-P15	180			P1-P2	88	P7-P8	104				
P15-P14	88			P2-P3	84	P8-P9	84				
P14-P13	48			P3-P4	116	P9-P10	184				
P13-P12	152			P4-P5	60	P10-P11	84				
				P5-P6	80	P11-P12	88				
中柱部分											
P16-P17	276	平均	-								

第94表 掘立柱建物跡 61号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P2-P5	390	平均	130	P1-P2	120	平均	-	方向:	
				P5-P7	362	平均	181		
P2-P3	120					P5-P6	132		
P3-P4	136					P6-P7	230		
P4-P5	134								

第95表 掘立柱建物跡 62号計測表

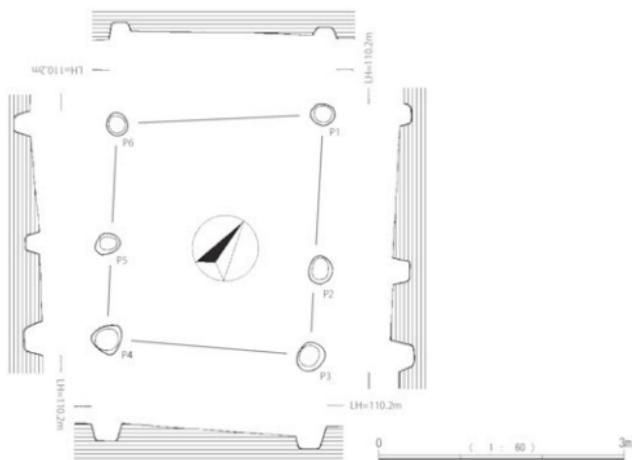
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	312	平均	156	P1-P7	156	平均	-	方向:N46°E	
P5-P6	132	平均	-	P3-P5	440	平均	220		
P1-P2	188					P3-P4	160		
P2-P3	124					P4-P5	280		

第96表 掘立柱建物跡 63号計測表

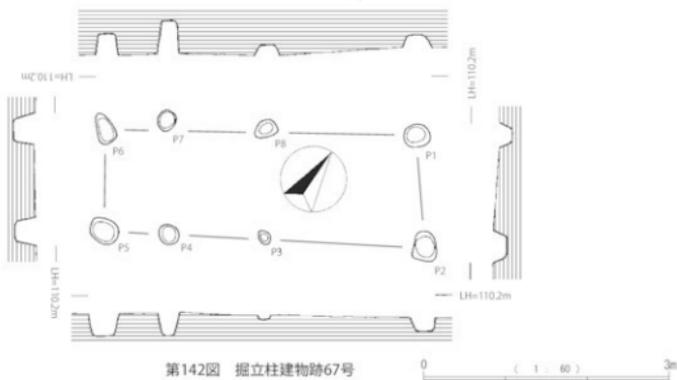
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P5	552	平均	138	P1-P13	572	平均	143	方向:N52°E	P2: 鉄滓(2) P9: 須恵器(1), 石器(3) P12: 土師器(1) P13: 白磁(1) P14: 鉄滓(1), 石器(4)
P7-P15	576	平均	288	P3-P11	568	平均	189		
P9-P13	532	平均	133	P5-P9	584	平均	146		
P1-P2	152	P9-P10	96	P1-P16	228	P5-P6	288		
P2-P3	144	P10-P11	172	P16-P15	160	P6-P7	96		
P3-P4	92	P11-P12	136	P15-P14	68	P7-P8	140		
P4-P5	164	P12-P13	128	P14-P13	116	P8-P9	60		
P7-P18	308			P3-P17	248				
P18-P15	268			P17-P18	132				
				P18-P11	188				

第97表 掘立柱建物跡 64号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	344	平均	-	P1-P6	408	平均	136	方向:N55°E	P1: 粘土塊(1), 石器(1) P5: 粘土塊(4), 石器(1) P6: 獣骨(1) P7: 土師器(1) P9: 龍泉窯系青磁(1)
P3-P8	368	平均	184	P9-P5	264	平均	132		
P4-P7	400	平均	200	P2-P4	216	平均	108		
P5-P6	184	平均	-						
P3-P9	168	P4-P10	192	P1-P8	68	P2-P3	108		
P9-P8	200	P10-P7	208	P8-P7	112	P3-P4	108		
				P7-P6	228				
				P9-P10	92				
				P10-P5	172				



第141図 掘立柱建物跡66号



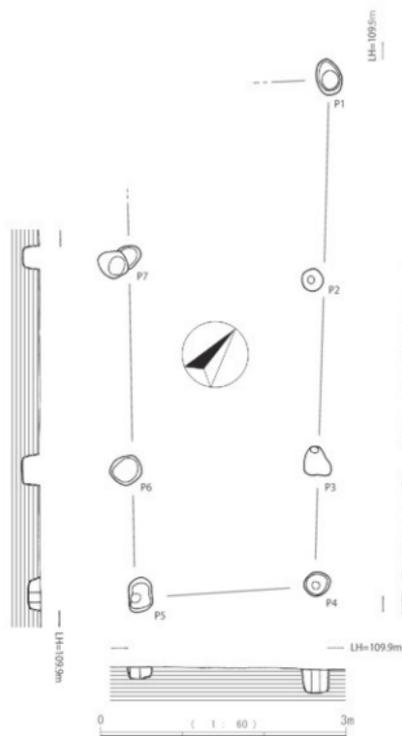
第142図 掘立柱建物跡67号

第 98 表 掘立柱建物跡 65 号計測表

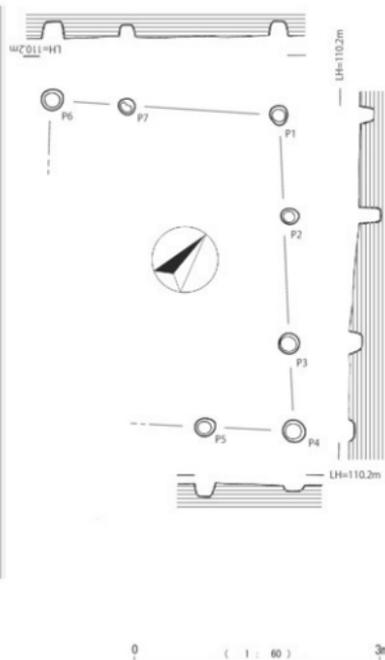
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P2	160	平均	-	P1-P4	212	平均	-	方向 :N51°E	P4: 土師器(1), 滑石製石鍋(1) 粘土塊(1), 石器(1)
P3-P4	168	平均	-	P2-P3	212	平均	-		

第 99 表 掘立柱建物跡 66 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P6	252	平均	-	P1-P3	296	平均	148	方向 :N33°W	P4: 粘土塊(2), 石器(1), 獸骨(1) P6: 土師器(1), 粘土塊(2)
P3-P4	248	平均	-	P4-P6	260	平均	130		
				P1-P2	188	P4-P5	116		
				P2-P3	108	P5-P6	144		



第143図 掘立柱建物跡68号



第144図 掘立柱建物跡69号

掘立柱建物跡73号 (第148図, 第106表)

セ・そ-8-9区で検出し、掘立74-75号と重複している。1×1間の側柱建物跡である。掘立74号よりも1回りほど小さい。柱穴内からはカムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡74号 (第149図, 第107表)

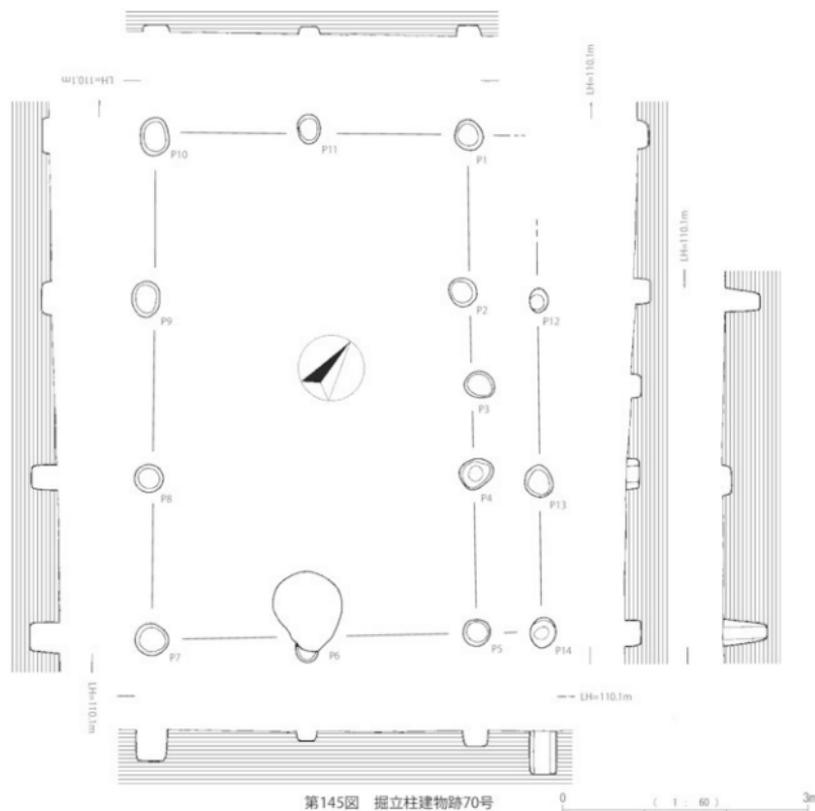
セ・そ-8-9区で検出し、掘立73-75-76号と重複している。周辺で見られる1×1間と同様に平面プランは長方形である。柱穴内からは龍泉窯系青磁などが出土している。

第100表 掘立柱建物跡67号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	136	平均	-	P1-P6	380	平均	127	方向:N67°E	P8:土師器(1),カムイヤキ(1)
P5-P6	124	平均	-	P2-P5	392	平均	131		
				P1-P8	184	P2-P3	196		
				P8-P7	120	P3-P4	116		
				P7-P6	76	P4-P5	80		

第101表 掘立柱建物跡68号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	276	平均	138	P1-P4	390	平均	130	方向:N40°W	P1:粘土塊(1) P5:粘土塊(1) P7:粘土塊(1)
P4-P5	108	平均	-						
P1-P7	184			P1-P2	124				
P7-P6	92			P2-P3	156				
				P3-P4	110				



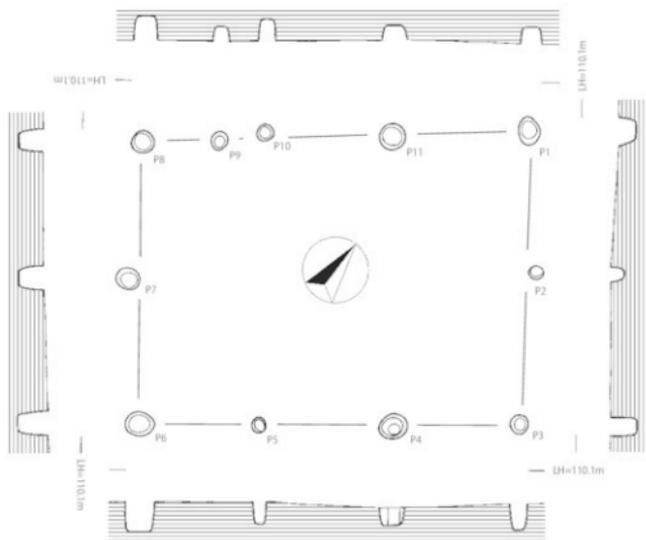
第145图 掘立柱建物跡70号

第 102 表 掘立柱建物跡 69 号計測表

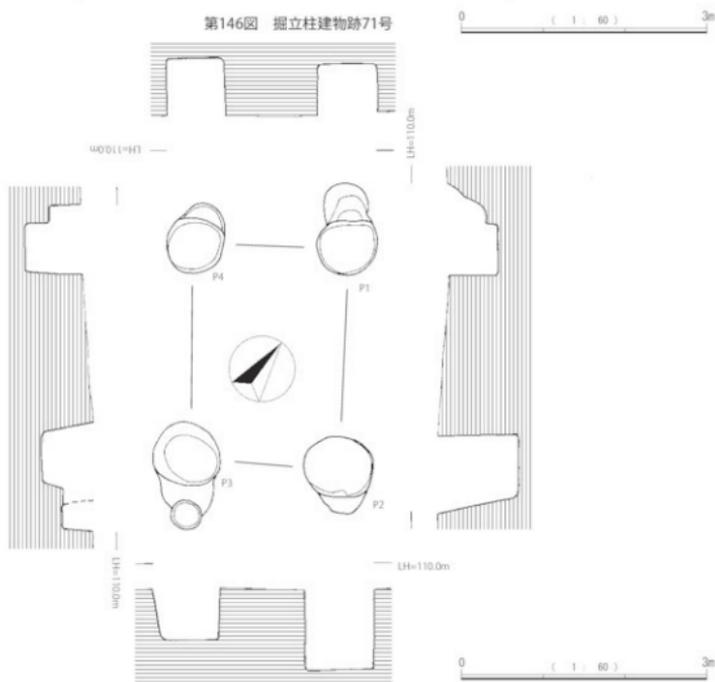
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P4-P5	220	平均	-	P1-P4	612	平均	204	方向 :N37°W	P6: 龍泉窯系青磁(1)
				P5-P7	416	平均	208		
				P1-P2	244	P5-P6	156		
				P2-P3	204	P6-P7	260		
				P2-P4	164				

第 103 表 掘立柱建物跡 70 号計測表

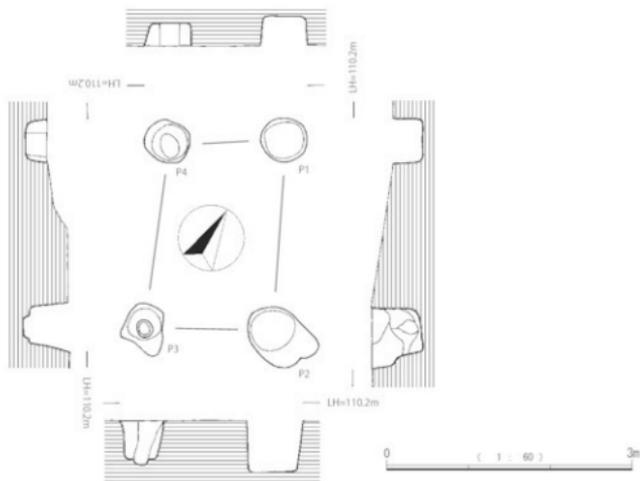
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P10	384	平均	192	P12-P14	404	平均	202	方向 :N37°W	P1: 炭化物(1) P2: 土師器(1) P3: 土師器(1) P4: 鉄瀬(1), 粘土塊(1), 石器(1) P5: 石器(4) P8: 粘土塊(1) P10: 土師器(2), 土器(1) P13: 粘土塊(4) P14: 土師器(6)
P14-P7	476	平均	159	P1-P5	612	平均	153		
				P7-P10	616	平均	205		
P1-P11	196	P14-P5	76	P12-P13	220	P7-P8	196		
P11-P10	188	P5-P6	208	P13-P14	184	P8-P9	220		
		P6-P7	192			P9-P10	200		
				P1-P2	192				
				P2-P3	116				
				P3-P4	112				
				P4-P5	192				



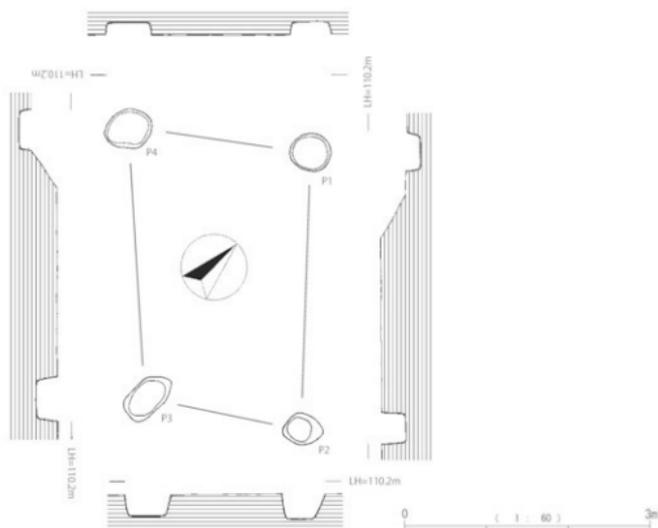
第146图 掘立柱建物跡71号



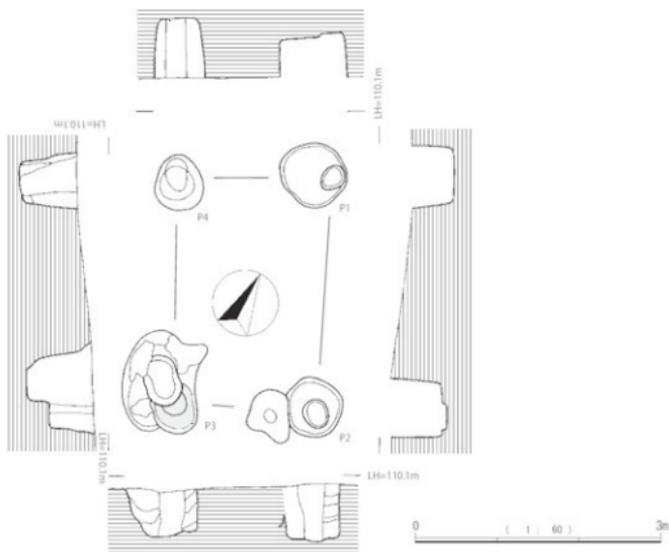
第147图 掘立柱建物跡72号



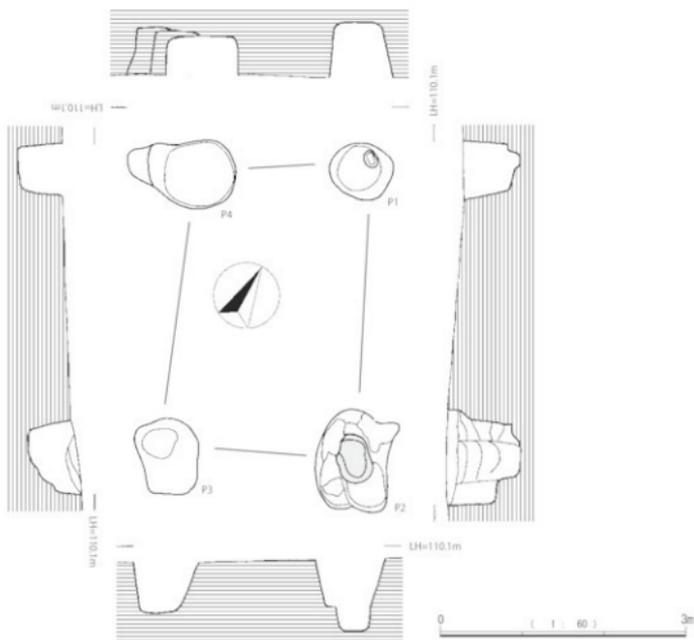
第148图 掘立柱建物跡73号



第149图 掘立柱建物跡74号



第150图 掘立柱建物跡75号



第151图 掘立柱建物跡76号

掘立柱建物跡 75 号 (第 150 図, 第 108 表)

セ・ソ 8-9 区で検出し, 掘立 73-74-76 号と重複している。柱穴の切りあいで掘立 76 号よりも古い。柱穴内からはカムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 76 号 (第 151 図, 第 109 表)

セ・ソ 9 区で検出し, 掘立 74-75-77 号と重複している。1×1 間の建物跡である。掘立 72 号とは同じ大きさである。柱穴内から土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 77 号 (第 152 図, 第 110 表)

セ・ソ 9 区で検出し, 掘立 76 号と重複している。1×1 間の建物跡である。柱穴内からは鉄滓などが出土している。

掘立柱建物跡 78 号 (第 153 図, 第 111 表)

セ-11 区で検出し, 掘立 79 号と重複している。3×3 間の掘立柱建物跡である。柱穴内からは土師器・カムイヤキなどが出土している。

掘立柱建物跡 79 号 (第 154 図, 第 112 表)

セ-11 区で検出し, 掘立 78-80 号と重複している。2×3 間の掘立柱建物跡である。南角隅は未検出である。柱穴内からはカムイヤキ・滑石製石鏃などが出土している。

掘立柱建物跡 80 号 (第 155 図, 第 113 表)

セ-11 区で検出し, 掘立 79 号と重複している。1×1 間の建物跡である。柱穴内から粘土塊などが出土している。

第 104 表 掘立柱建物跡 71 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P3	360	平均	180	P1-P11	472	平均	118	方向 :N51°E	P2: 須恵器(1) P4: 土師器(2) P5: 石器(1) P6: 土師器(1) P7: 軽石(1) P8: 籾の羽口(2) P10: 土師器(2)
P6-P8	344	平均	172	P3-P6	464	平均	155		
P1-P2	172	P6-P7	176	P1-P11	168	P3-P4	152		
P2-P3	188	P7-P8	168	P11-P10	156	P4-P5	164		
				P10-P9	56	P5-P6	148		
				P9-P8	92				

第 105 表 掘立柱建物跡 72 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	188	平均	-	P1-P2	272	平均	-	方向 :N31°W	P2: 滑石製石鏃(1), 鉄滓(1), 石器(1) P3: 黒色土器(1), 土師器(3) 粘土塊(4), 石器(1) P4: 土師器(5), 須恵器(1) 布目瓦痕土器(1) カムイヤキ(1), 鉄滓(3) 粘土塊(1), 石器(6), 軽石(2)
P2-P3	192	平均	-	P3-P4	284	平均	-		

第 106 表 掘立柱建物跡 73 号計測表

梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	140	平均	-	P1-P2	232	平均	-	方向 :N33°W	P3: カムイヤキ(1), 粘土塊(9) 炭化物(1) P4: 粘土塊(1)
P2-P3	156	平均	-	P3-P4	224	平均	-		

第 107 表 掘立柱建物跡 74 号計測表

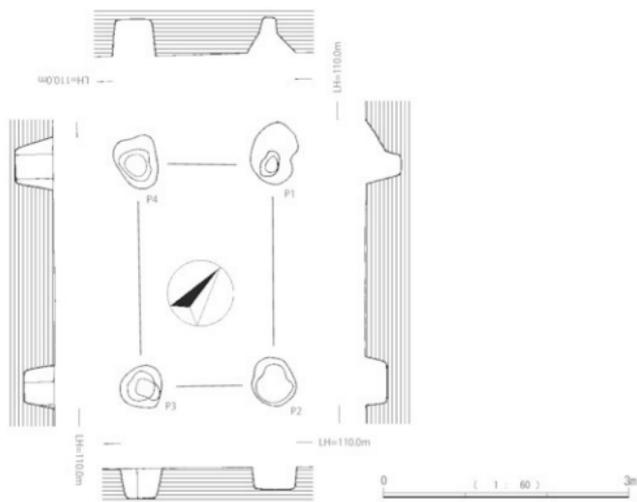
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	224	平均	-	P1-P2	340	平均	-	方向 :N49°W	P4: 龍泉窯系青磁(1), 粘土塊(1) 施釉陶磁器(1)
P2-P3	192	平均	-	P3-P4	332	平均	-		

第 108 表 掘立柱建物跡 75 号計測表

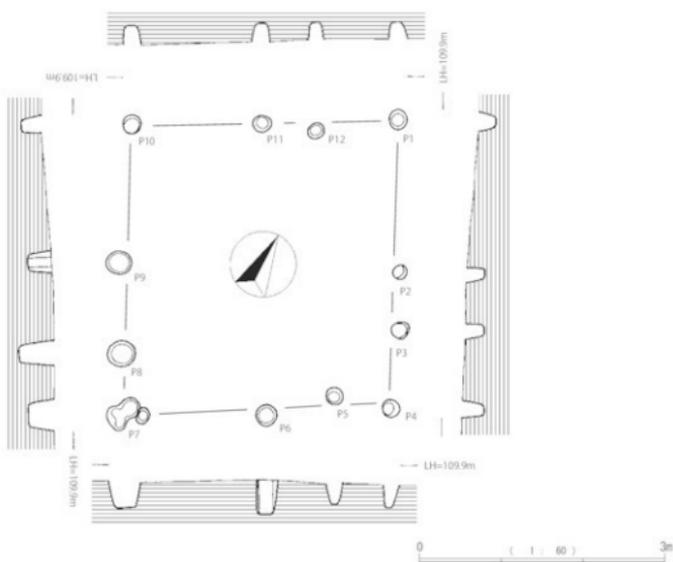
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	188	平均	-	P1-P2	288	平均	-	方向 :N25°W	P1: 鉄滓(1), 粘土塊(6) P2: 土師器(1), カムイヤキ(1) 籾の羽口(2), 石器(1)
P2-P3	195	平均	-	P3-P4	240	平均	-		

第 109 表 掘立柱建物跡 76 号計測表

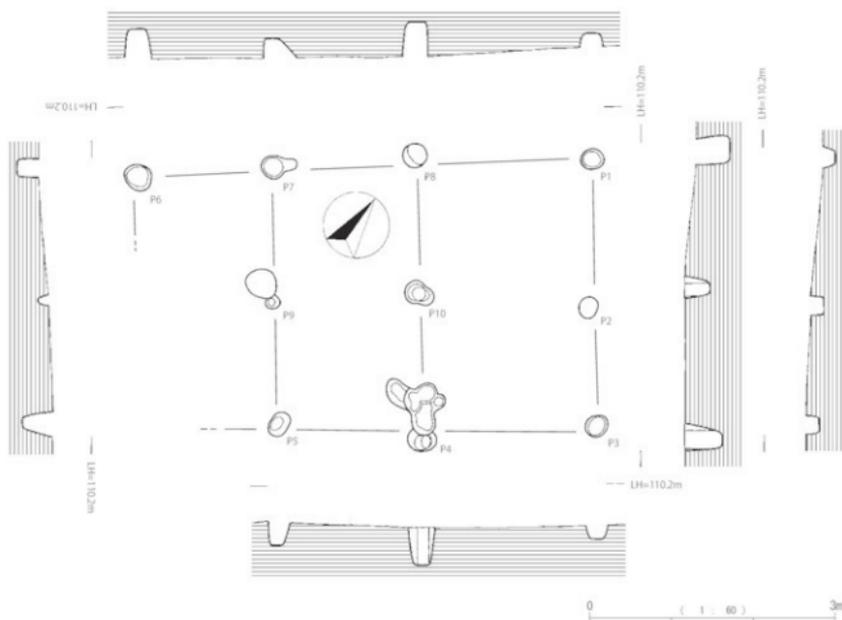
梁行 1	寸法	梁行 2	寸法	桁行 1	寸法	桁行 2	寸法	備考	遺物
P1-P4	212	平均	-	P1-P2	364	平均	-	方向 :N25°W	P4: 土師器(1), 鉄滓(1)(2) 籾の羽口(1), 粘土塊(4), 石器
P2-P3	240	平均	-	P3-P4	336	平均	-		



第152图 掘立柱建物跡77号



第153图 掘立柱建物跡78号



第154図 掘立柱建物跡79号

第110表 掘立柱建物跡77号計測表

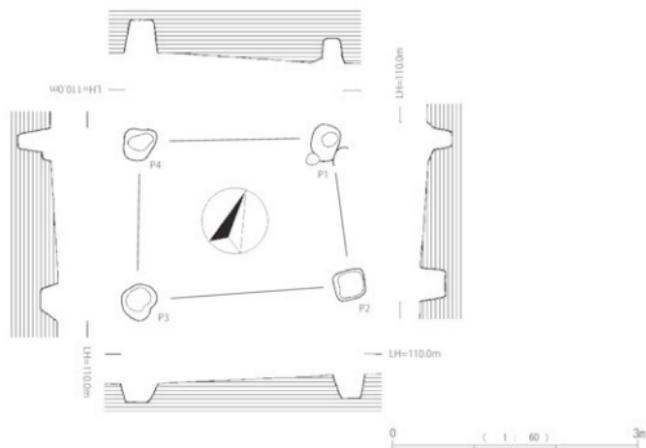
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	168	平均	-	P1-P2	268	平均	-	方向:N35°W	P1:鉄滓(1),粘土塊(1)
P2-P3	156	平均	-	P3-P4	272	平均	-		P2:石器(3) P4:石器(1)

第111表 掘立柱建物跡78号計測表

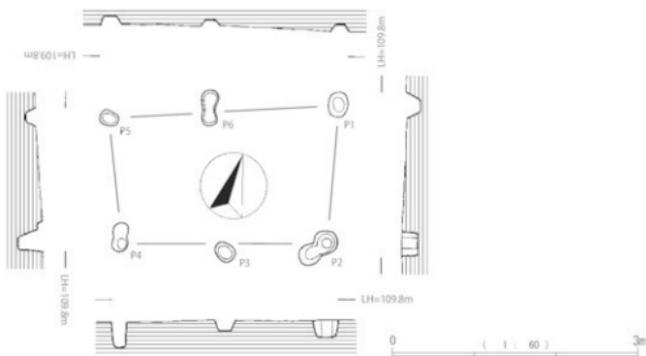
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P10	324	平均	108	P1-P4	352	平均	117	方向:N27°W	P1:土師器(2),粘土塊(1)
P4-P7	320	平均	107	P7-P10	348	平均	116		P2:粘土塊(5) P3:土師器(1) P5:粘土塊(3) P6:粘土塊(1) P7:土師器(2)
P1-P12	100	P4-P5	68	P1-P2	184	P7-P8	68		P8:カムイヤキ(1),石器(1)
P12-P11	64	P5-P6	84	P2-P3	72	P8-P9	112		P9:カムイヤキ(1),鉄滓(1)
P11-P10	160	P6-P7	168	P3-P4	96	P8-P10	168		石器(1),軽石(1)

第112表 掘立柱建物跡79号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	504	平均	168	P1-P6	552	平均	184	方向:N53°E	P2:粘土塊(1)
P4-P8	348	平均	174	P3-P5	392	平均	196		P3:土師器(1) P5:粘土塊(7)
P5-P7	312	平均	156						P7:土師器(1),須恵器(1)
P1-P2	180	P5-P9	148	P1-P8	212	P3-P4	208		カムイヤキ(2),滑石製石鍋(2)
P2-P3	144	P9-P7	164	P8-P7	176	P4-P5	184		鉄滓(3),粘土塊(5),軽石(1)
P4-P10	180			P7-P6	164				P8:土師器(2),粘土塊(3)
P10-P8	168								



第155図 掘立柱建物跡80号



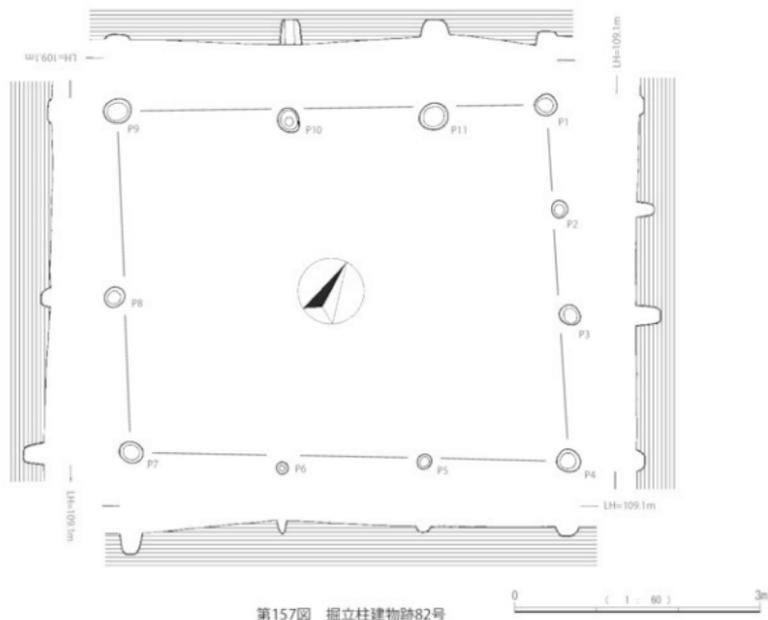
第156図 掘立柱建物跡81号

第113表 掘立柱建物跡80号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	180	平均	-	P1-P4	232	平均	-	方向:N65°E	P1: 粘土塊(2)
P3-P4	192	平均	-	P2-P3	264	平均	-		P2: 粘土塊(7), 施釉陶磁器(1)

第114表 掘立柱建物跡81号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	168	平均	-	P1-P5	276	平均	138	方向:N70°E	P2: 粘土塊(1)
P4-P5	152	平均	-	P2-P4	252	平均	126		P4: 土師器(5), 鉄滓(1), 粘土塊(1)
				P1-P6	156	P2-P3	124		
				P6-P5	120	P3-P4	128		



第157図 掘立柱建物跡82号

掘立柱建物跡 81号 (第156図, 第114表)

せ-12区で検出。1×2間の掘立柱建物跡である。全体的に柱穴径が小さく、穴も浅い傾向が見られる。柱穴内からは土師器などが出土している。

掘立柱建物跡 82号 (第157図, 第115表)

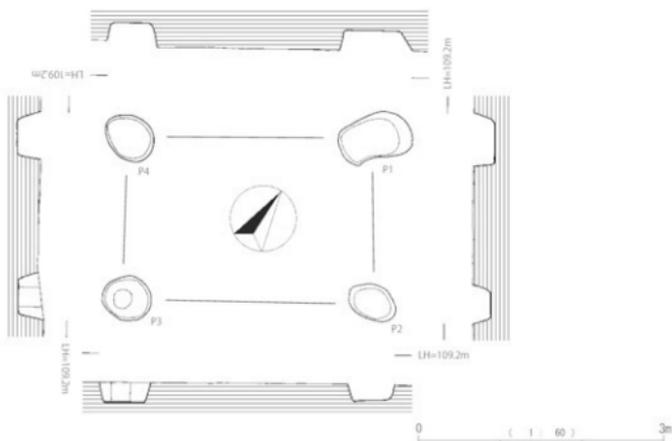
そ-11・12区で検出し、掘立83・84号と重複している。2×3間を基本とした掘立柱建物跡である。北側梁行で柱穴が1本多い。柱穴内からは土師器などが出土している。

第115表 掘立柱建物跡 82号計測表

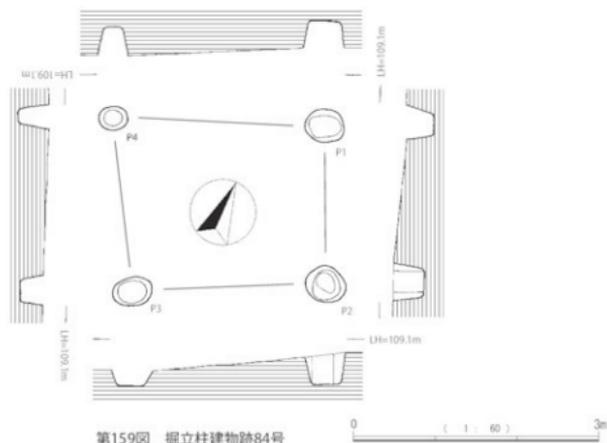
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	440	平均	147	P1-P9	526	平均	175	方向:N60°E	P1: 粘土塊(2) P7: 土師器(1), 粘土塊(5) P8: 土師器(1), 轆の羽口(1) P10: 粘土塊(2) P11: 粘土塊(3)
P7-P9	400	平均	200	P4-P7	536	平均	179		
P1-P2	128	P7-P8	188	P1-P11	136	P4-P5	176		
P2-P3	132	P8-P9	212	P11-P10	180	P5-P6	174		
P3-P4	180			P10-P9	210	P6-P7	186		

第116表 掘立柱建物跡 83号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	200	平均	-	P1-P4	292	平均	-	方向:N58°E	P1: 鉄滓(1), 粘土塊(1), 石器(2) 獣骨(1) P2: 土師器(6), 須惠器(1) 滑石製石鍋(2), 鉄滓(2) 轆の羽口(1), 粘土塊(例) 軽石(1) P3: 土師器(2), 須惠器(1) 滑石製石鍋(1), 鉄滓(1) 轆の羽口(1), 粘土塊(6), 石器(2) P4: 土師器(2), 鉄滓(1), 粘土塊(7) 石器(1)
P3-P4	200	平均	-	P2-P3	304	平均	-		



第158図 掘立柱建物跡83号



第159図 掘立柱建物跡84号

掘立柱建物跡 83号 (第158図, 第116表)

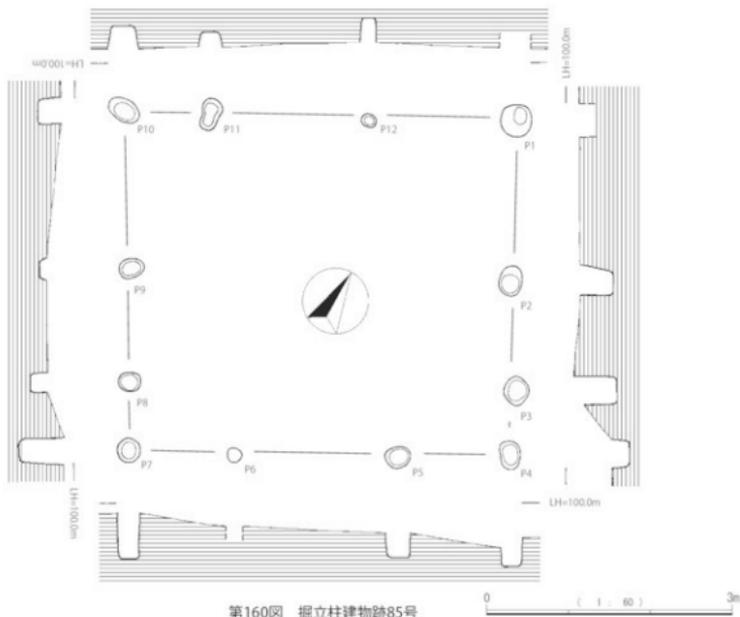
そ-11・12区で検出し、掘立82号と重複している。1×1間の建物跡である。柱穴内からは遺物が多く得られ、土師器・滑石製石鍋などが出土している。

掘立柱建物跡 84号 (第159図, 第117表)

そ-12区で検出し、掘立82号と重複している。1×1間の建物跡である。平面形態は掘立83号と異なり、方形である。柱穴内からは龍泉窯系青磁・滑石製石鍋が出土している。

掘立柱建物跡 85号 (第160図, 第118表)

そ-た-11・12区で検出。3×3間の側柱建物跡である。柱穴内からは遺物が多く出土し、龍泉窯系青磁・カムイヤキなどが出土している。



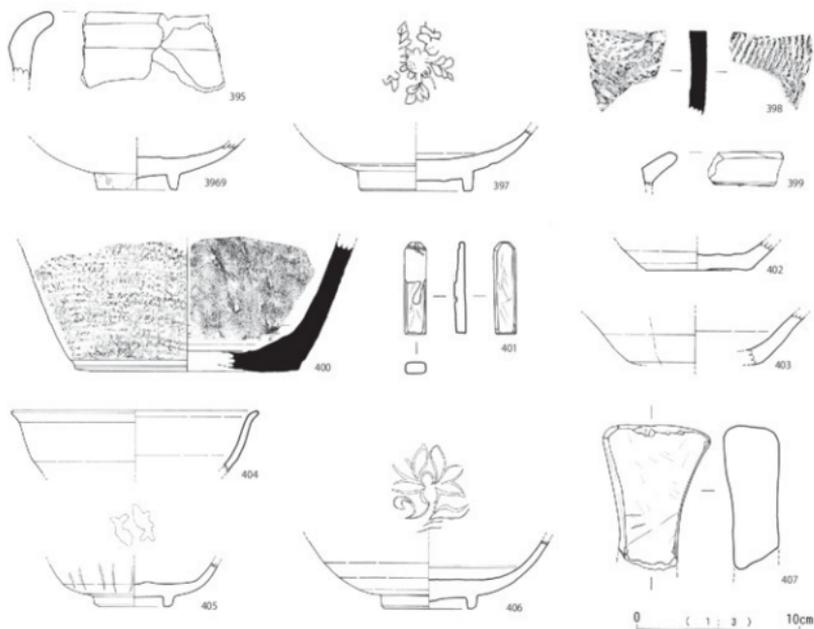
第160図 掘立柱建物跡85号

第117表 掘立柱建物跡84号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	192	平均	-	P1-P4	269	平均	-	方向 :N69°E	P1: 土師器(1), 滑石製石鍋(3) 鉄滓(1), 粘土塊(7), 石器(1) 獣骨(4)
P3-P4	214	平均	-	P2-P3	236	平均	-		P2: 土師器(2), 韃の羽口(3) 粘土塊(6), 石器(1)
									P3: 龍泉窯系青磁(1) P4: 粘土塊(1)

第118表 掘立柱建物跡85号計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	424	平均	141	P1-P10	484	平均	161	方向:	P1: 土師器(1), 鉄滓(1), 粘土塊(2)
P7-P10	412	平均	137	P4-P7	468	平均	156		P2: 土師器(1), 龍泉窯系青磁(2) 粘土塊(5), 石器(3)
P1-P2	212	P7-P8	84	P1-P12	186	P4-P5	136		P3: カムイヤキ(1), 鉄滓(2) 粘土塊(7), 石器(2)
P2-P3	132	P8-P9	140	P12-P11	190	P5-P6	202		P4: 滑石製石鍋(2), 粘土塊(1)
P3-P4	80	P9-P10	188	P11-P10	108	P6-P7	130		P5: 土師器(1), 石器(1)
									P8: 土師器(1)
									P10: 滑石製石鍋(1)
									P11: 粘土塊(1)
									P12: 龍泉窯系青磁(1), 粘土塊(3) 石器(1)



第161図 D地区掘立柱建物内出土遺物

(イ) 掘立柱建物跡内出土遺物

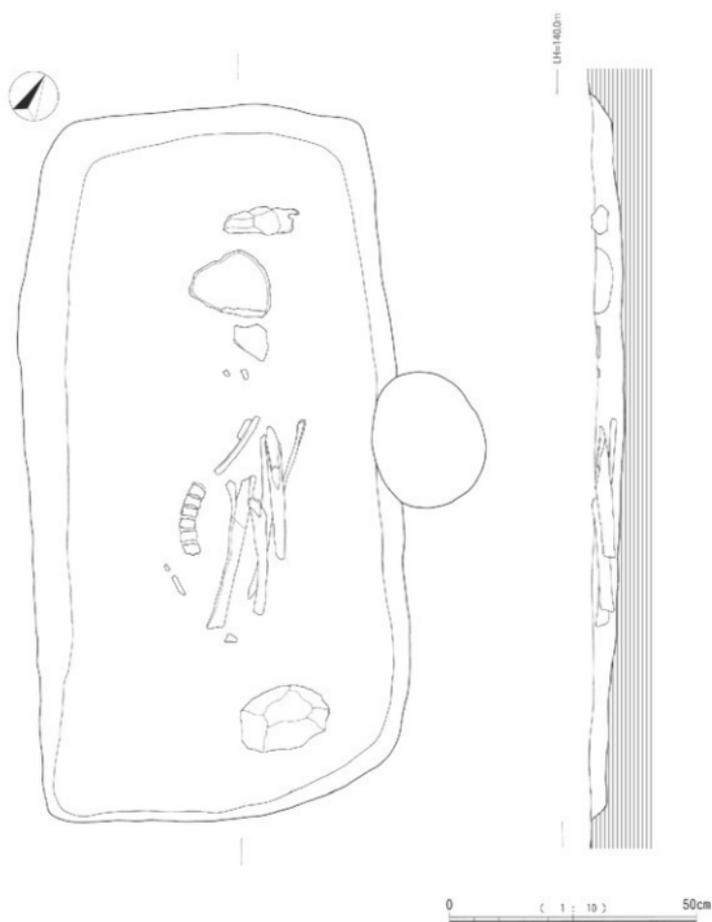
395～407は掘立柱建物跡内から出土した遺物である。

395は掘立47号から出土した土師器甕である。器壁はやや厚い。396-397は掘立51号から出土した龍泉窯系青磁の底部である。397は内面に印花文が施されている。400は須恵器の底部である。掘立56号から出土した。内面は丁寧にナデられている。401は携帯用砥石である。細い棒状で、上部には貫通穿孔痕が見られる。405～407は掘立85号から出土した遺物である。405は双鱼文が描かれている。406は

内面に印花文が描かれている。407は砥石である。下部に向かってくびれた形状をしている。一部には綿状の痕跡が残している。

第119表 D地区掘立柱建物跡内出土遺物

棟別 No	契機 番号	出土区	遺構名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
161	395	そ5	P0653	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立47号 P03
	396	た6	S4021	龍泉窯系青磁	碗	-	底部	4.9	-	-	-	-	-	-	-	掘立51号 P01
	397	た6	S4021	龍泉窯系青磁	碗	-	底部	6.5	-	-	-	-	-	-	-	掘立51号 P01
	398	た6	S4024	須恵器	甕	-	胴部	-	-	同心円	平行	浅黄橙	浅黄橙	-	-	掘立52号 P03
	399	た6	P0662	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立54号 P03
	400	ち7	P0458	須恵器	甕	-	底部	11.8	-	ナデ	格子	灰白	灰白	-	-	掘立56号 P15
	401	た7	P0343	石磨	砥石	増積前	-	-	-	-	-	-	-	-	-	掘立59号 P13
	402	そ9	P0212	土師器	坪	-	底一部	6.2	-	-	-	-	-	-	-	掘立70号 P03
	403	そ9	P0135	黄色土器	-	-	胴部	-	8	黒色	黒色	-	-	-	-	掘立72号 P03
	404	そ12	P0968	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	口縁部	14.6	-	-	-	-	-	-	-	掘立84号 P03
	405	た12	P0698	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	底部	4.2	-	-	双鱼文	-	-	-	-	掘立85号 P12
	406	た11	P0694	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	底部	5.4	-	-	日花文	-	-	-	-	掘立85号 P02
	407	た11	P0694	石磨	砥石	研石	-	-	-	-	-	-	-	-	245	掘立85号 P02



第162图 土坑墓7号



第163図 土坑墓8号

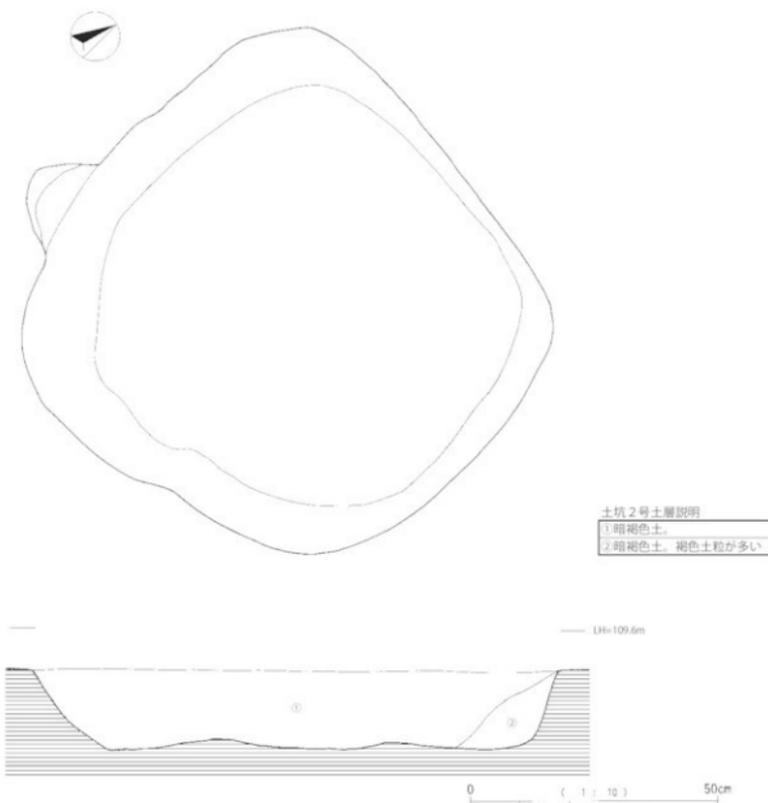
ウ 土坑

土坑墓7号

た-6区で検出。直径147cm×76cmの長方形土坑で、深さ6cmほどで浅かった。土葬の人骨が埋葬されていた。埋葬方法は仰臥屈葬で性別不明、年齢は成人と見られる。頭骨の上と脚の下の方に石灰岩があった。頭位は北東で、副葬品などは検出できなかった。

土坑墓8号

ち-7区で検出。西側は石灰岩に密着している。直径88cm×55cmの卵形土坑で、深さ7cmほどであった。掘り進めるところにも土葬人骨を確認した。埋葬方法は仰臥屈葬で脚は窮屈に曲げている。左肘も強く曲げていることがうかがえる。性別は不明、年齢は成人の範疇に含まれる。頭位は南方向で、土坑墓7号と同じく副葬品などは確認することが出来なかった。また、骨の一部には焼骨が見られた。



第164図 土坑2号

土坑2号

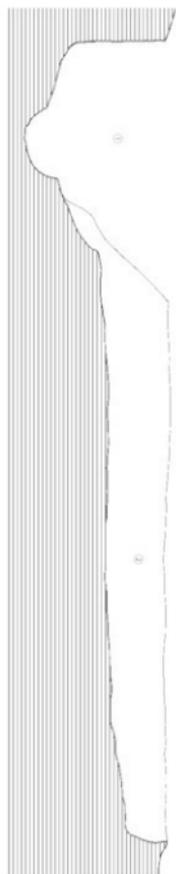
直径96cm×92cmの方形土坑である。深さは16cmほどである。

土坑3号

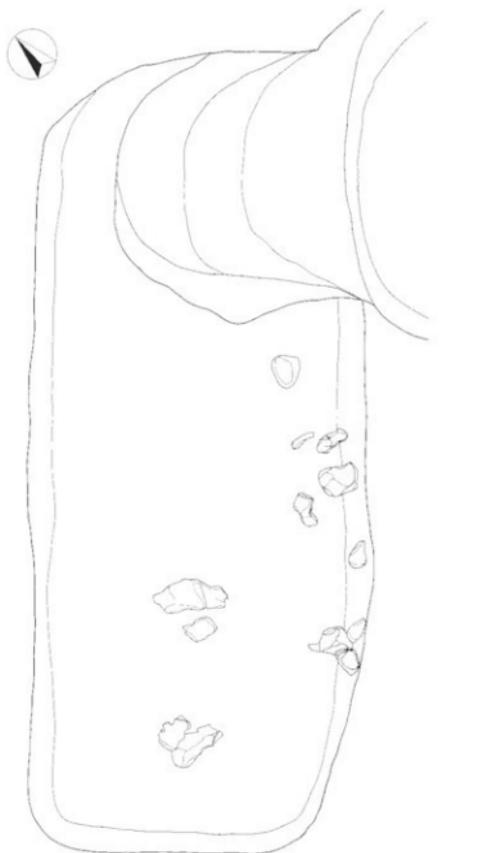
直径160cm×68cmの長方形土坑である。深さは12cmほどである。一部は隣接する柱穴に切られている。②層は白砂と土壌が入り交じった層で他の土坑の堆積とは異なっている。

土坑4号

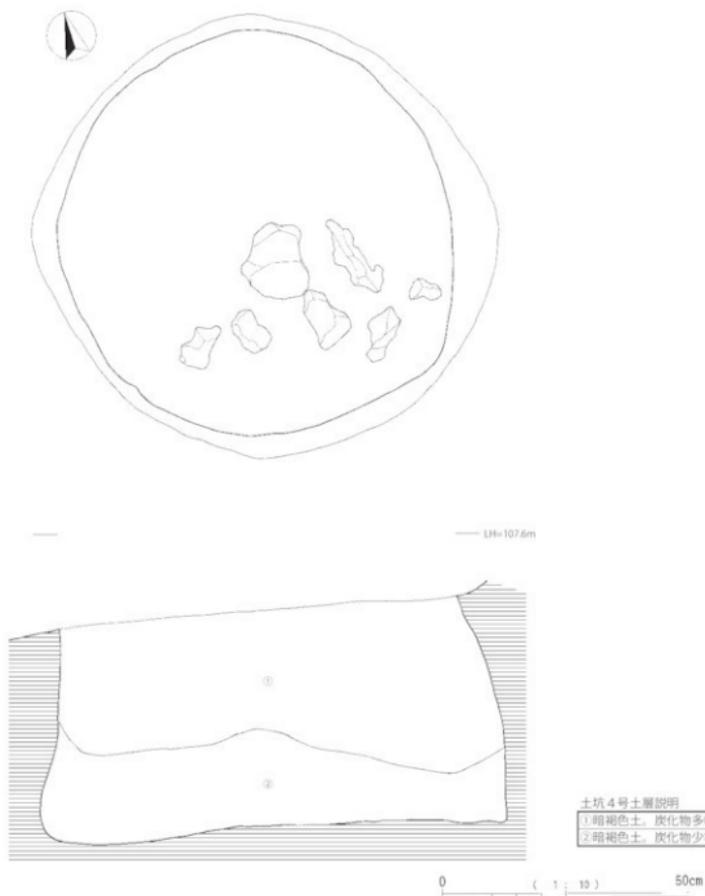
直径84cm×80cmほどの円形土坑である。フラスコ型に裾が広がる土坑である。



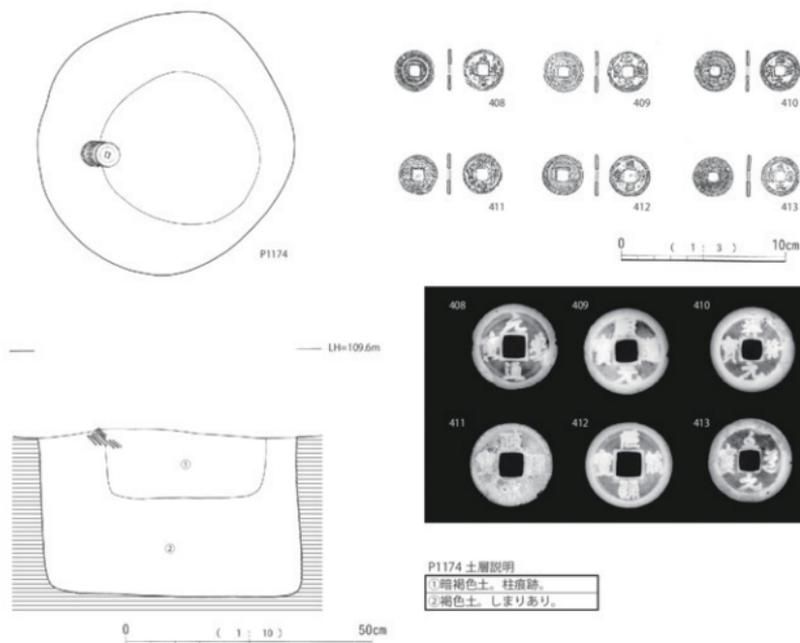
土坑3号土層説明
 ①ピント層土
 ②砂層 じまりなし



第165図 土坑3号



第166図 土坑4号



第167図 古銭出土ピット

㊦ ピット内出土古銭・獣骨

古銭出土ピット

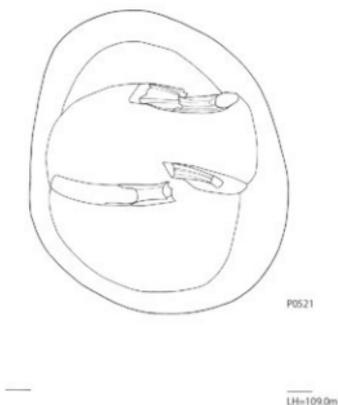
た4区P1174で検出した。ピット上部に6枚重なった状態で出土した。この6枚の一番端の2枚はそれぞれ銭文が見えないように東にされていた。地鎮など意図的に埋納をした結果ではないかと考えられる。①層は柱痕部分②は柱堀片である。このピットが検出された周囲の遺構も総じて浅いものが多く、近世代などで畑を作る際に掘削されてしまった可能性が考えられる。

出土遺物

出土した銭の銭文は腐食があり、肉眼では確認できなかったため、県立埋蔵文化財センターのX線装置で確認をした。408は元豊通寶である。初鑄は1078年(北宋)である。409は明道元寶である。初鑄は1032年(北宋)である。410は祥符元寶である。初鑄は1009年(北宋)である。411は政和通寶である。初鑄は1111年(北宋)である。412は元符通寶である。初鑄は1098年(北宋)である。413は至道元寶である。初鑄は995年(北宋)である。

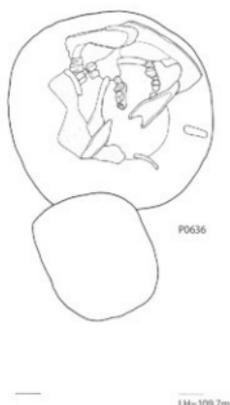
第120表 D地区ピット内出土遺物

検出No	埋蔵番号	土地区	遺構名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	厚径	高さ	(内)	(外)	(内)		
167	408	た4	P1174	古銭	元豊通寶			2.5	0.6	-	-	-	-	-	-
	409	た4	P1174	古銭	明道元寶			2.5	0.7	-	-	-	-	-	-
	410	た4	P1174	古銭	祥符元寶			2.5	0.7	-	-	-	-	-	-
	411	た4	P1174	古銭	政和通寶			2.5	0.7	-	-	-	-	-	-
	412	た4	P1174	古銭	元符通寶			2.5	0.7	-	-	-	-	-	-
	413	た4	P1174	古銭	至道元寶			2.5	0.7	-	-	-	-	-	-



P0521

109.0m



P0636

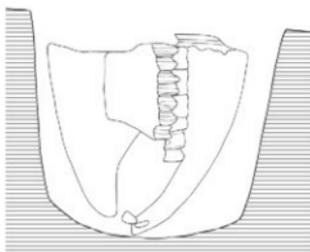
109.7m



0 (1 : 10) 50cm

P0636 土層説明

①黒褐色土。粘質なし。



第168図 獣骨出土ピット

獣骨出土ピット
そ-7区 P0521

直径64cm×52cmの楕円型ピットの中にウシの頭骨が突っ込まれた状態で出土した。残存していたのは上顎・下顎の一部である。このピットも元々はもっとあったと考えられ、近世代などの掘削によって削られたものとみられる。

せ-10区 P0636

直径42cmほどの円形ピットの上面にあった。頭骨部分が押しつぶされたように残存していた。
(ウシの詳細については第VI章第5節西中川先生の所見をご参照ください)

焼土跡

焼土跡 23号

直径63cm×60cmの円形状で周囲が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。

焼土跡 24号

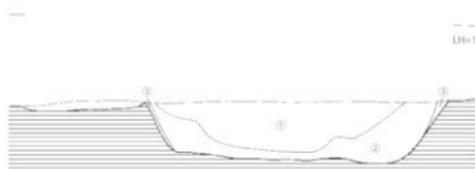
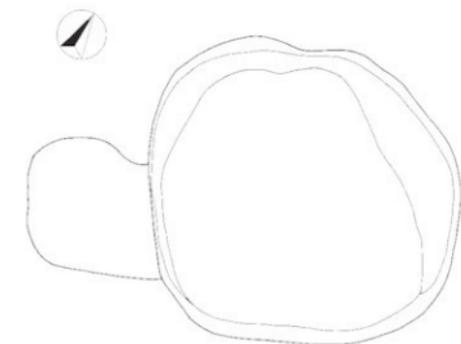
直径52cm×40cmの楕円形状土坑である。北側の一部が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。

焼土跡 25号

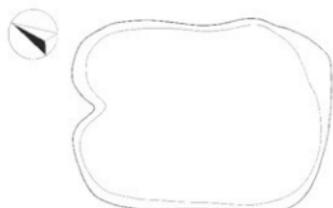
直径57cm×48cmの楕円形状で北側が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。焼土跡23号と類似する堆積状況である。

焼土跡 26号

直径90cm×88cmの方形状で周囲が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。他の土坑よりよく焼けている。サイズは異なるが、焼土跡23-25号と類似する堆積状況である。



第169図 焼土跡23号



第170図 焼土跡24号

0 (1 : 10) 50cm

焼土跡 23～25号土層説明

①暗褐色土層、しまりなし。	③赤褐色に被熱した地山面。
②黒色土、炭化物層。	



焼土跡 27号

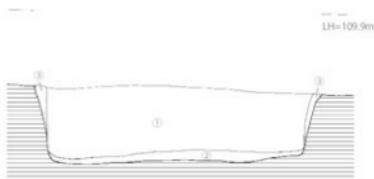
直径57cm×49cmの楕円形状で周囲が赤く焼けている。②層は炭化物が薄く堆積している。焼土跡23・25・26号と類似する堆積状況である。なお、本遺構はSM005を切っている。

焼土跡 28号

直径91cm×68cmの楕円形状で周囲が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。焼土跡23・25～27号と類似する堆積状況である。

焼土跡 29号

直径40cm×38cmの円形状で周囲が赤く焼けている。②層は炭化物が充填している。焼土跡23・25～28号と類似する堆積状況である。



第171図 焼土跡25号

焼土跡 30号

直径52cm×52cmの円形状で周囲が赤く焼けている。③層に炭化物が薄く堆積している。焼土跡23・25～29号と類似する堆積状況である。

焼土跡 31号

直径85cm×82cmの楕円形状で一部薄く焼けている。②層に炭化物が堆積している。



LH=109.6m



焼土跡 26号土層説明

- | |
|---------------|
| ①暗褐色土層。しまりなし。 |
| ②黒色土。炭化物層。 |
| ③赤褐色に被熱した地山面。 |

焼土跡 27号土層説明

- | |
|------------|
| ①暗褐色土。 |
| ②溝状遺構。 |
| ③赤褐色被熱地山面。 |

第172図 焼土跡26号



0 (1 : 10) 50cm

焼土跡 32号

直径 45cm × 45cmの円形状で周囲が赤く焼けている。
②層は焼けた地山面である。炭化物層は検出されていないが、
①層に多量に混入する。

焼土跡 33号

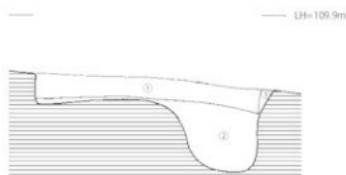
直径 52cm × 52cmの円形状で周囲が赤く焼けている。焼けた
地面の範囲が帯状に広がっている。また、P0732に切られている。
P0732は包含層上面で検出したビットである。②層に焼土
塊が集中する層があり、その下③層に炭化物が堆積している。

焼土跡 34号

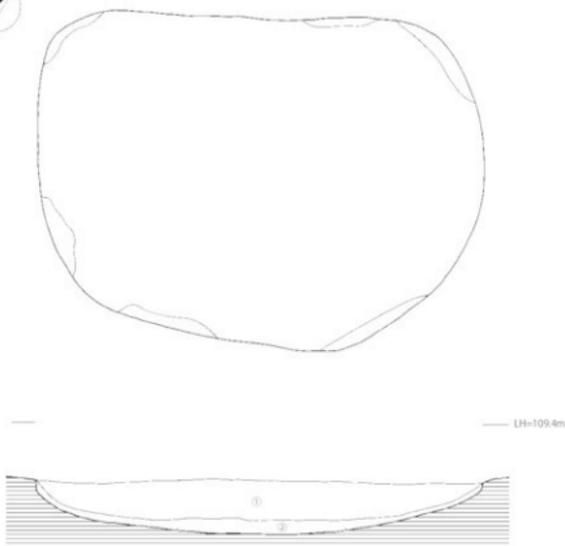
直径 40cm × 38cmの円形状で周囲が赤く焼けている。①層の
暗褐色土層から土師器甕の破片が大量に出土した。石組みな
どはなかったが、煮炊き用のカマドや炉などの可能性もある。

焼土跡 35号

直径 31cm × 23cmの楕円形状で全面赤く焼けている。焼けた
地山面のみを検出である。



第173図 焼土跡27号



焼土跡 28号土層説明

- | |
|---------|
| ① 暗褐色土。 |
| ② 炭化物層。 |

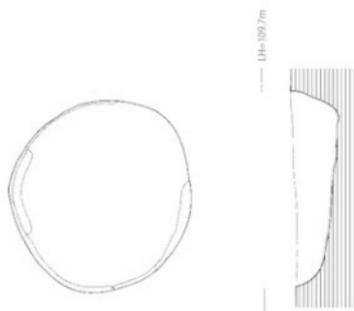
焼土跡 29号土層説明

- | |
|-----------|
| ① 暗褐色土。 |
| ② 暗赤褐色土。 |
| ③ ②層より明るい |
| ④ 炭化物層。 |

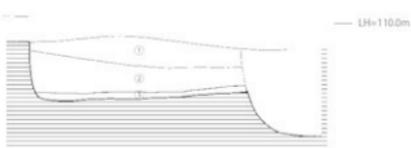
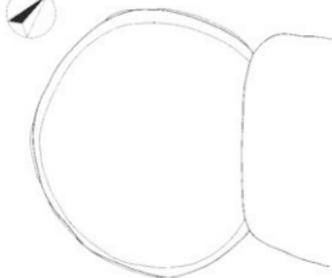
焼土跡 30号土層説明

- | |
|---------------|
| ① 黒褐色土。焼土粒混入。 |
| ② 黒褐色土。①より暗い。 |
| ③ 炭化物層。 |

第174図 焼土跡28号

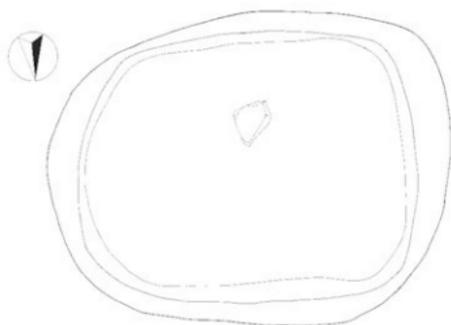


第175図 焼土跡29号



第176図 焼土跡30号

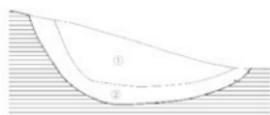
0 (1 : 10) 50cm



焼土跡 31 号土層説明

- | |
|--------|
| ① 暗褐色土 |
| ② 炭化物層 |

第177図 焼土跡31号

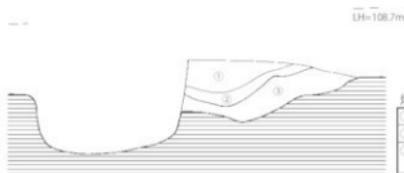
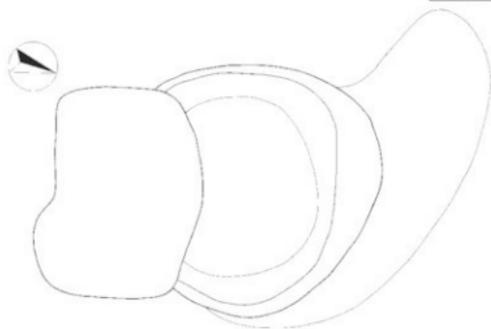


LH=108.7m

焼土跡 32 号土層説明

- | |
|-------------|
| ① 黒褐色土。 |
| 炭化物多い。 |
| ③ 赤褐色被熱地山面。 |

第178図 焼土跡32号

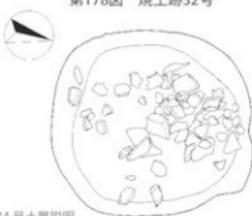


LH=108.7m

焼土跡 33 号土層説明

- | |
|---------|
| ① 暗褐色土 |
| ② 焼土堆集中 |
| ③ 黒褐色土 |
| 炭化物多い。 |

第179図 焼土跡33号



焼土跡 34 号土層説明

- | |
|----------|
| ① 暗褐色土。 |
| 土師器片が大量。 |
| ② 黒褐色土。 |

LH=108.6m



第180図 焼土跡34号



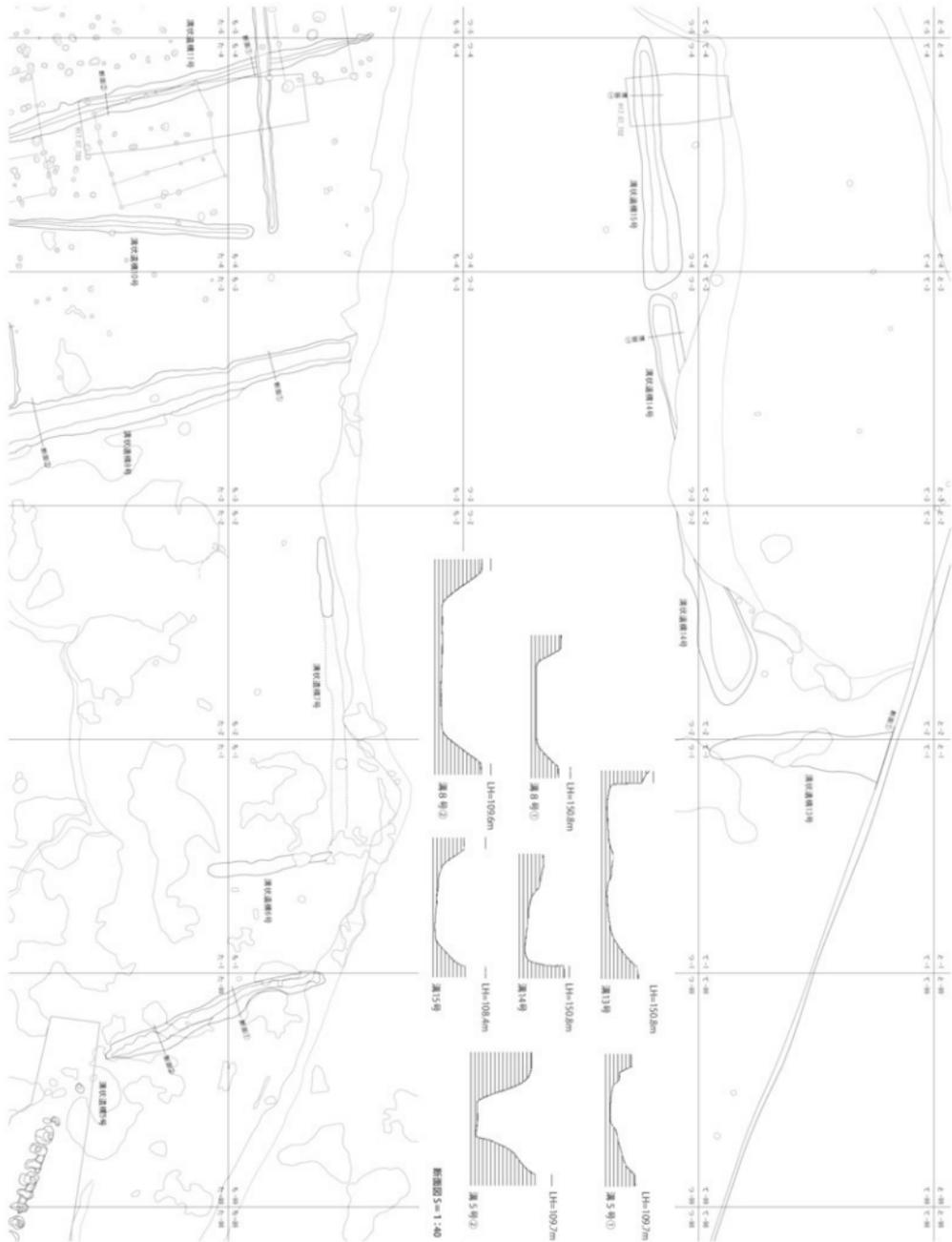
LH=108.6m

第181図 焼土跡35号

焼土跡 35 号土層説明

- | |
|-------------|
| ① 赤褐色被熱地山面。 |
|-------------|





第182图 D地区溝状遺構(1)

縮尺 1:200

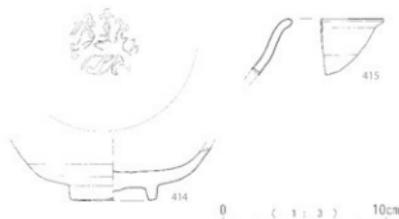


第183图 D地区沟状遗構(2)

S=1:200



第184图 D地区沟状遗槽(3)



第185図 D地区溝状遺構一括遺物

(ゆ) 波板状遺構

た・99-98区で検出。約9mの間に14か所の凹面がある。ピット間の芯々距離は約62～70cmで、平均すると約67cmである。凹面の形状はダルマ状につながっているものが多く、深さは約10～15cmほどであった。この範囲は途中で途切れているが、溝状遺構5号につながっているようにも見える。

(卯) 溝状遺構

ここではこれまでの城久遺跡群の様相と異なり、溝状遺構を多く検出した。

溝状遺構一括

414-415は溝状遺構から出土した遺物である。いずれも龍泉窯系青磁の椀である。

溝状遺構2号

さ・4-5区で検出。約長さ9m・幅1mである。調査区の端で検出したため、全長は不明である。

溝状遺構3号

し・1区で検出。約長さ7m・幅60cmである。「し」状にカーブしており、掘立29号と重複している。掘立29号より古いと見られる。

溝状遺構4号

す・1-99、し・1-2区で検出。約長さ15mである。表面は硬化しており、堆積は非常に浅かった。し・2区では非常に堆積が薄かったが、す・1-99区の続きと見られる範囲を検出している。掘立37・41号と重複している。本遺構がこれら建物跡の柱穴跡を切っている。表面が硬化していることや、周辺の建物跡の主軸方向などを考えると道の可能性がある。

溝状遺構5号

た・ち・99区で検出。約長さ10m・幅1mである。波板状遺構に隣接している。

溝状遺構6号

た・ち・1区で検出。約長さ5mである。

溝状遺構7号

ち・1-2区で検出。約長さ3.5mである。周囲にやや凹む部分が見られ、本遺構の続きがあったのではないかと見られる。推定全長は13mである。

溝状遺構8号

そ〜ち・3区で検出。約長さ20m・幅1.5mである。検出した溝の中では一番幅のあるものである。

溝状遺構9号

そ・3-4、た・3区で検出。約長さ15m・幅1mである。溝8号と垂直方向に延びる。

溝状遺構10号

た・ち・4区で検出。一部段差で途切れているが、推定約長さ30m・幅60cmである。グリッドラインと平行に延びる。本遺構からは近世陶磁器などが出土している。溝9を切っている。

溝状遺構11号

た・ち・4区で検出。約長さ17m・幅1mである。

出土遺物

416は須恵器である。417はカムイキである。418・419は龍泉窯系青磁である。全形が復元可能で、口径11.6cm底径3.6cm器高4cmである。420は陶輪陶器の壺である。421・422は鉄製品である。

溝状遺構12号

ち・4～6区で検出。約長さ28m・幅60mである。掘立55号・溝11号を切っている。

出土遺物

423は石器である。全面よく磨られている。

溝状遺構13号

て・1-2区で検出。約長さ7mである。道路部分に向かって広がっているようである。

出土遺物

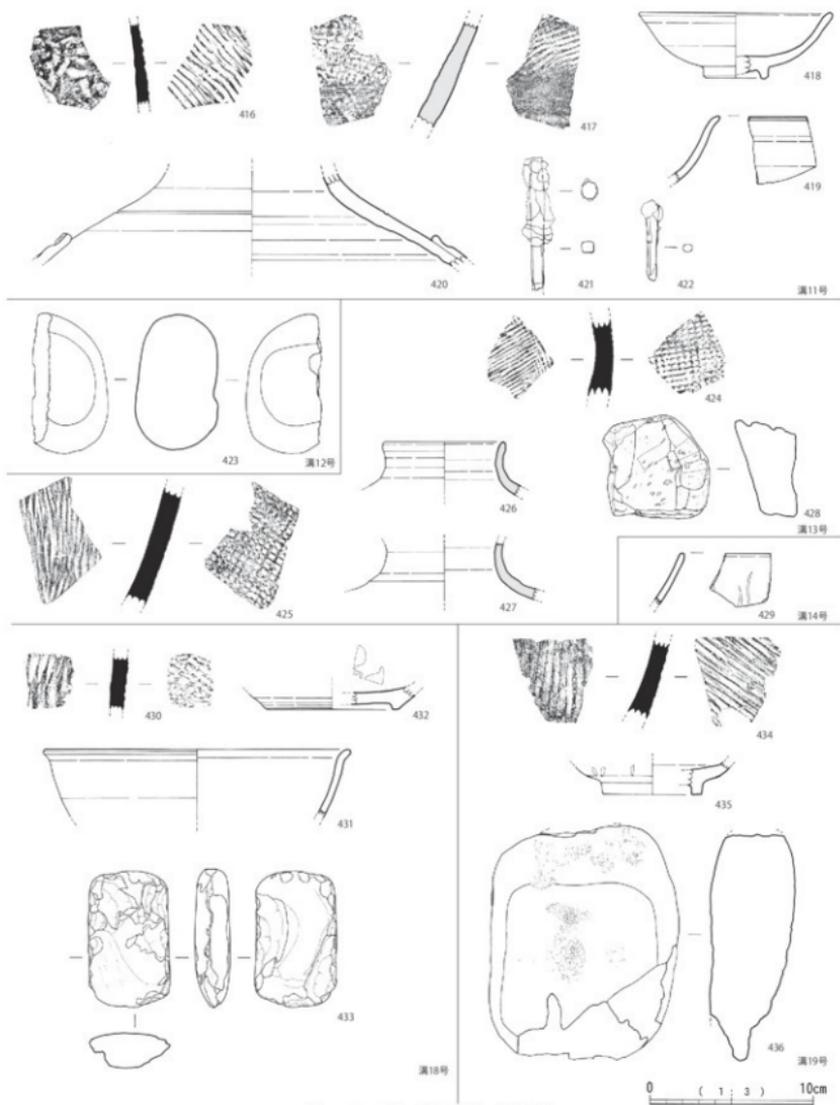
424・425は須恵器である。424の内面はハケ目状の線状痕が見られる。426・427はカムイキ口縁部である。

溝状遺構14号

つ・2-3区付近で検出。約長さ18mである。

第121表 D地区溝状遺構出土遺物

発掘 No	地層 番号	土土区	遺構名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		形状		色調		重量 (g)	備考
								口径	底径	器高	(内)	(外)	(内)		
185	414		溝	龍泉窯系青磁	椀		底部	-	4.2	-	-	-	-	-	-
	415		溝	龍泉窯系青磁	椀		口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-



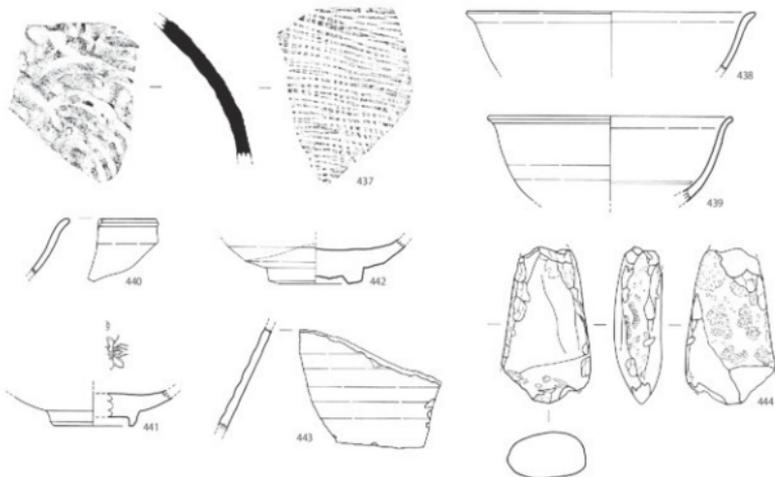
第186図 D地区溝状遺構出土遺物(1)

出土遺物

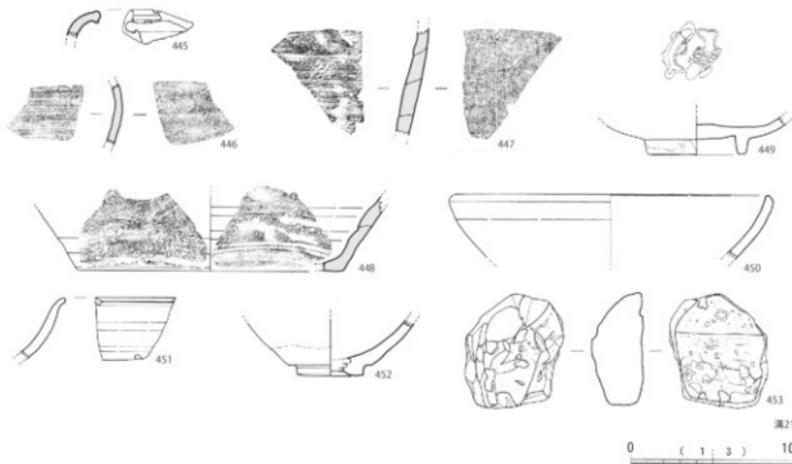
429は龍泉窯系青磁の口縁部である。外面に連弁が描かれているが、非常にラフに描かれている。無鋸連弁である。

溝状遺構 15号

つ-4区で検出。約長さ11mである。



溝20号



溝21号

第187図 D地区溝状遺構出土遺物(2)

溝状遺構 16・17号

た・ち・99区で検出。約長さ13mである。グリッド方向と平行に延びる。溝10号と同様、近世代の遺物が出土している。

溝状遺構 18号

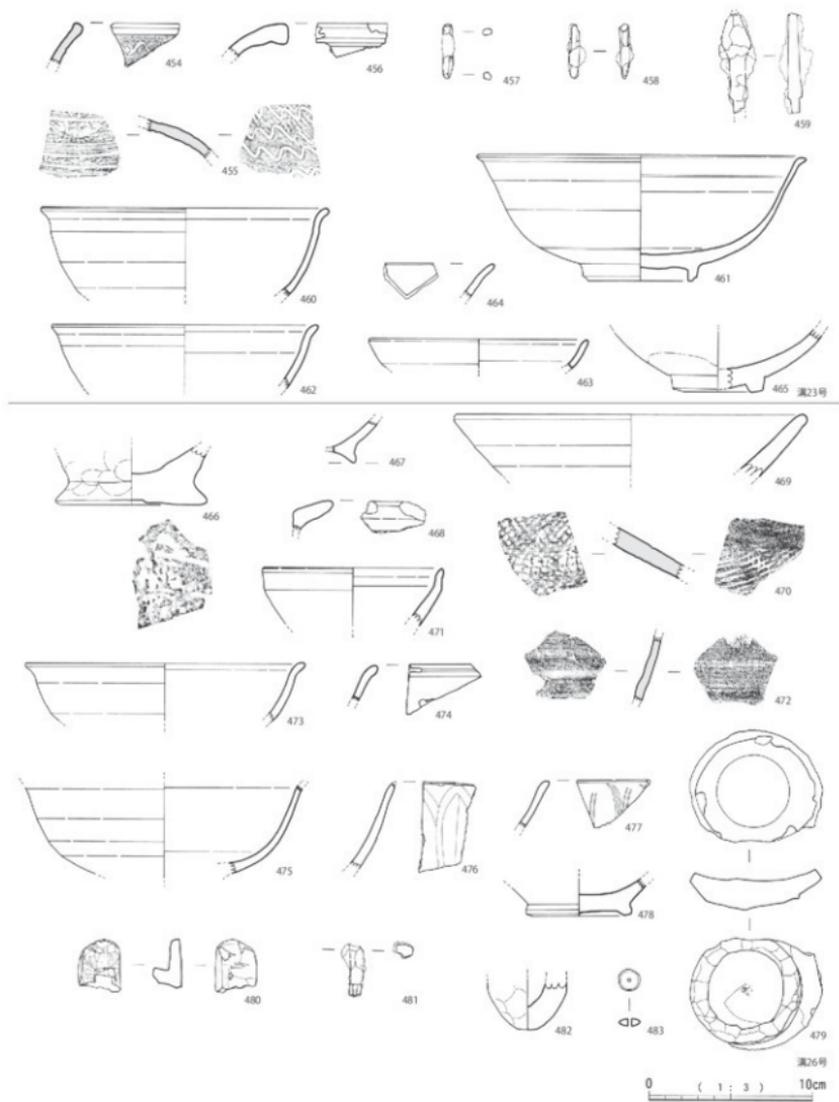
そ・5区で検出。約長さ7m・幅1mである。

出土遺物

430は須恵器である。431-432は龍泉窯系青磁である。431は無文外反碗である。432は坏の底部と見られる。内面に文様がある。433は石斧である。敲打具として転用されている。

溝状遺構 19号

た・6区で検出。約長さ5m・幅1mである。



第188图 D地区满状遗物出土物(3)

第122表 D地区漢状遺構内出土遺物①

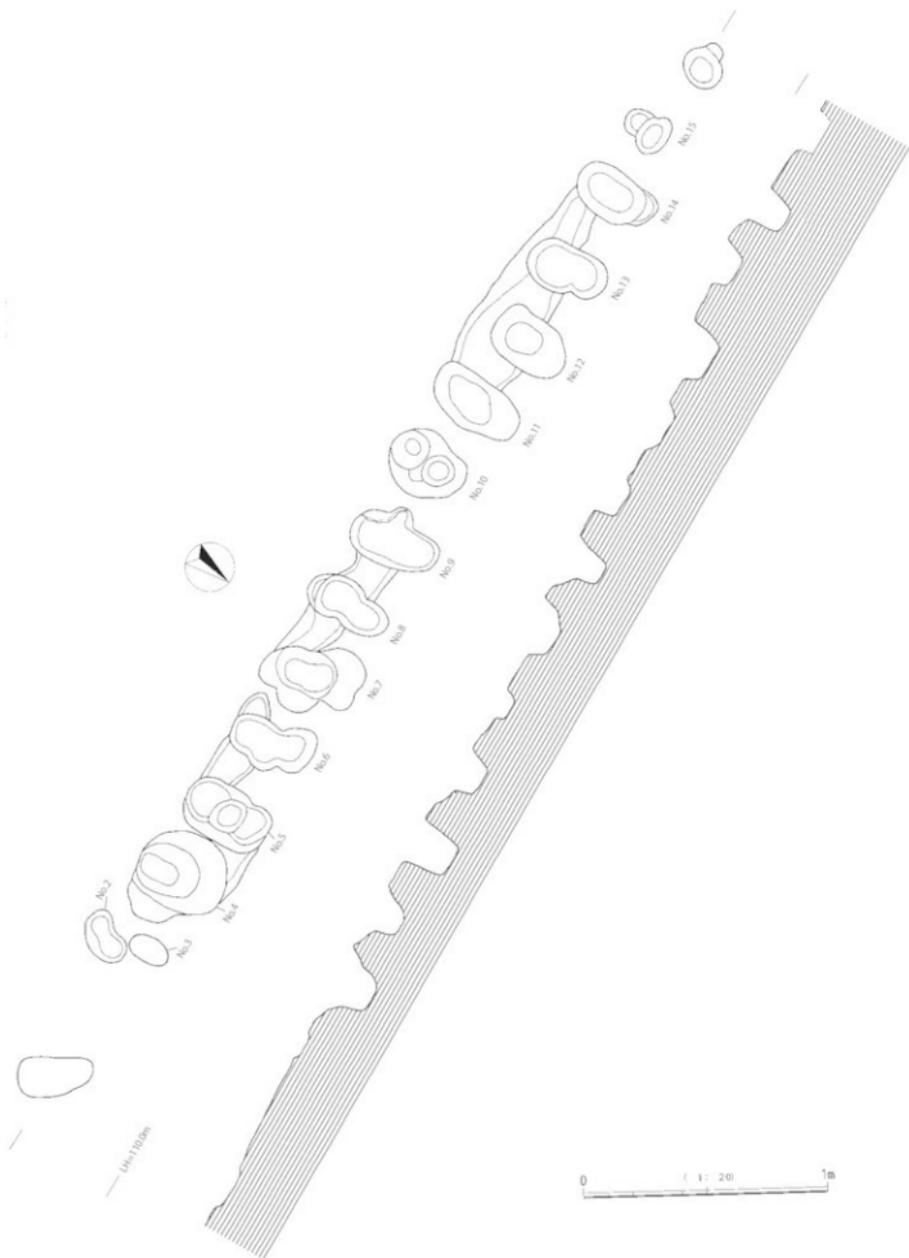
神居No	複製番号	出土区	遺物名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			色調		重量 (g)	備考
								口徑	直径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
186	416	5-5	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	417	5-4	新石器時代	カムイヤキ	罎	-	胴部	-	-	平行	同心円	浅黄緑	浅黄緑	-	-	-	-
	418	5-5	新石器時代	磨製石器	柄	-	口ノ周	11.6	3.6	4	-	平行	楊子	-	暗青灰	-	-
	419	5-5	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	420	5-5	新石器時代	施釉陶器	蓋	施釉陶器	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	421	-	新石器時代	鉄製品	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	422	-	新石器時代	鉄製品	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	423	5-6	新石器時代	石器	磨石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	334
	424	て1	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	力平目	楊子	灰黄	灰黄	-	-	-	-
	425	て1	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	平行	楊子	淡黄	淡黄	-	-	-	-
	426	て1	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	口縁部	7.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	427	て1	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	428	て1	新石器時代	砥石	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	429	て2	新石器時代	磨製石器	柄	無縁連弁	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	430	5-5	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	-	楊子目	平行状	赭灰	赭灰	-	-	-
431	5-5	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	9.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
432	5-5	新石器時代	磨製石器	柄	-	底部	-	-	7.9	-	-	-	-	-	-	-	
433	5-5	新石器時代	石器	石斧	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	151	
434	丸6	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	-	平行状	平行状	灰白	灰白	-	-	-	
435	丸6	新石器時代	磨製石器	柄	-	底部	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	
436	-	新石器時代	石器	磨石	埋積前	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第123表 D地区漢状遺構内出土遺物②

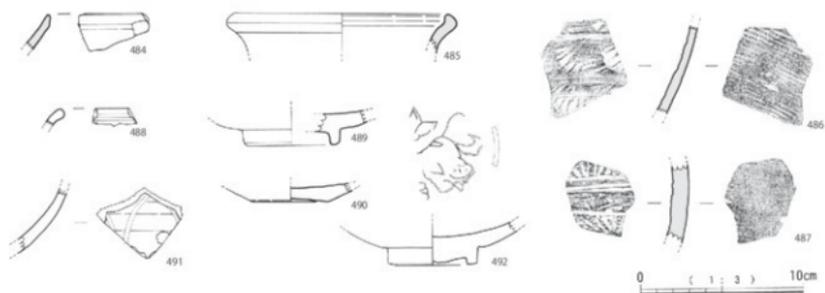
神居No	複製番号	出土区	遺物名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			色調		重量 (g)	備考
								口徑	直径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
187	437	-	新石器時代	遺棄物	罎	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	438	-	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	17.4	-	-	平行	広公輪	広公輪	-	-	-	-
	439	5-6	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	14.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	440	-	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	441	-	新石器時代	磨製石器	柄	-	底部	-	-	4.8	-	-	-	-	-	-	-
	442	-	新石器時代	白磁	柄	ビロースタ	底部	-	-	4.1	-	-	-	-	-	-	-
	443	5-6	新石器時代	施釉陶器	蓋	施釉	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	444	5-6	新石器時代	石器	石斧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	445	5-7	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	446	5-7	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	胴部	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	-	-	-	-
	447	-	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	448	5-7	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	底部	-	-	15.8	-	-	-	-	-	-	-
	449	5-7	新石器時代	磨製石器	柄	-	底部	-	-	5.9	-	-	-	-	-	-	-
	450	5-7	新石器時代	白磁	柄	ビロースタ	口縁部	18.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	451	5-7	新石器時代	白磁	柄	ビロースタ	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
452	5-7	新石器時代	天目	柄	-	底部	-	-	3.3	-	-	-	-	-	-	-	
453	-	新石器時代	砥石	埋積下	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第124表 D地区漢状遺構内出土遺物③

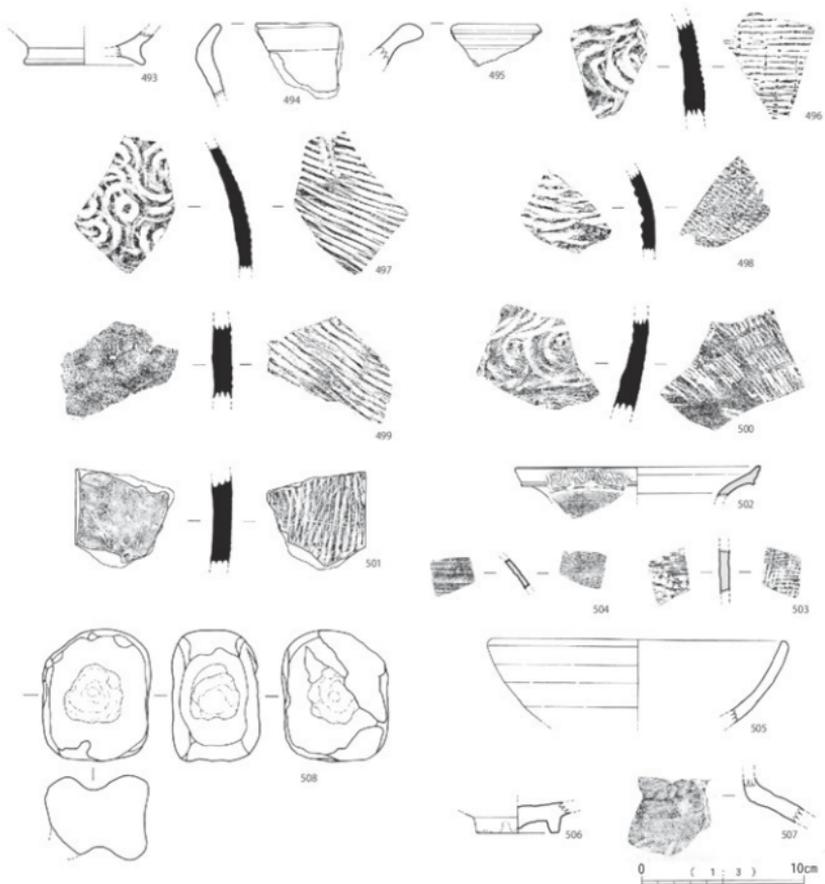
神居No	複製番号	出土区	遺物名	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整			色調		重量 (g)	備考
								口徑	直径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
188	454	丸8	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	455	5-7	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	456	5-7	新石器時代	カムイヤキ	罎・罎	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	457	5-7	新石器時代	鉄製品	釘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	458	-	新石器時代	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	459	5-7	新石器時代	鉄製品	鉄錐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23
	460	丸8	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	17.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	461	5-7	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口ノ周	20	6.3	7.7	-	-	-	-	-	-	-
	462	丸8	新石器時代	磨製石器	柄	無文外反	口縁部	15.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	463	5-7	新石器時代	磨製石器	柄	-	口縁部	13.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	464	丸8	新石器時代	白磁	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	465	丸8	新石器時代	白磁	柄	ビロースタ	底部	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
	466	丸11	新石器時代	蓑久式土器	罎	-	底部	-	-	8.4	-	-	-	-	-	-	-
	467	丸11	新石器時代	土師器	柄	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	468	丸11	新石器時代	土師器	罎	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
469	丸12	新石器時代	カムイヤキ	-	-	口縁部	21.2	-	-	ナデ	ナデ	灰	明緑灰	-	-	-	
470	丸12	新石器時代	カムイヤキ	罎×罎	-	胴部	-	-	-	平行状	楊子目	暗青灰	暗青灰	-	-	-	
471	丸12	新石器時代	施釉陶器	蓋	施釉陶器	口縁部	10.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
472	丸11	新石器時代	磨製石器	柄	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
473	丸11	新石器時代	磨製石器	柄	-	口縁部	16.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
474	丸12	新石器時代	磨製石器	柄	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
475	丸12	新石器時代	磨製石器	柄	-	口縁部	-	-	12.2	-	-	-	-	-	-	-	
476	丸12	新石器時代	磨製石器	柄	縁連弁	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
477	丸12	新石器時代	磨製石器	柄	無縁連弁	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
478	丸12	新石器時代	白磁	柄	IV類	底部	-	-	5.5	-	-	-	-	-	-	-	
479	丸12	新石器時代	白磁	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
480	丸12	新石器時代	滑石・水石	ハレン状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	
481	-	新石器時代	鉄製品	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
482	丸12	新石器時代	土製品	埴輪	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
483	丸11・12	新石器時代	水石	-	-	完形品	1.2	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	



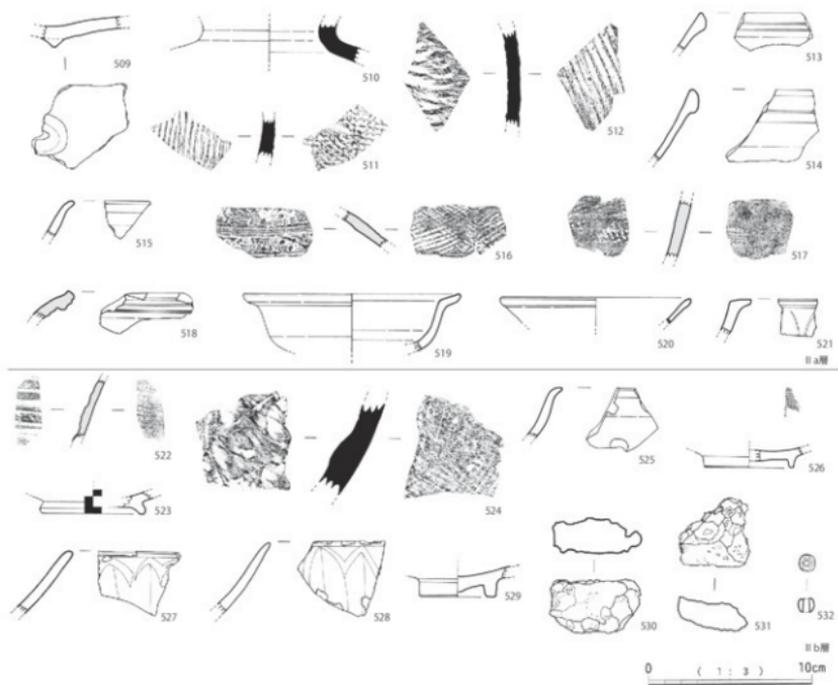
第189図 波板状遺構



第190图 D地区一括遗物



第191图 D地区包含层出土物(1)



第192図 D地区包含層出土遺物(2)

出土遺物

434は須恵器である。435は龍泉窯系青磁碗の底部である。外面には蓮弁がわずかに観察できる。436は磨砕石である。

溝状遺構 20号

た～せ-6区付近で検出。北側から約長さ10m・2m・5mである。それぞれの間には溝は作られていなかった。特に北側では上面に石灰岩が大量にはまった状態で出土していることや他の溝よりも深いといった特徴がある。

出土遺物

437は須恵器である。438～441は龍泉窯系青磁である。438・439は口縁部資料である。いずれも無文外反する器形である。442はピロースクタイプ白磁碗である。底径4.1cmを測る。器壁が厚い。444は石斧であるが、敲打具として転用されている。ほぼ全面使用されている。

溝状遺構 21号

ち-7区で検出。約長さ6mである。

出土遺物

445～448はカムイヤキである。447は胴部資料である。器壁がやや厚い。外面は縦方向にナダれている。449は龍泉窯系青磁底部である。双鱼文が彫られている。450・451はピロースクタイプ白磁碗である。450は内罅するもので、口径18.6cmを測る。452は天目碗である。453は軽石を拵っており二次的に加工されている。

溝状遺構 22号

せ-6区で検出。約長さ1.5m・幅1mである。溝20号と並列するようにみえる。こちらにも石灰岩が入っていた。

溝状遺構 23号

た-7・8区付近で検出。約長さ9m・幅1.5mである。

出土遺物

454～456はカムイヤキである。457～459は鉄製品である。459は鉄錐である可能性が高い。460～463は龍泉窯系青磁である。461はほぼ完成品で、口径20cm底径6.3cm器高7.7cmを測る無文外反碗である。463は器高が低くなるため、皿であると判断した。464は白磁瓦類、口壳である。465はピロースタイプ白磁碗である。

清状遺構 24号

そ-10区で検出。約長さ5mである。

清状遺構 25号

せ・そ-10～12区で検出。約長さ16m・幅1mである。域久集落側に延びている。

清状遺構 26号

た-11・12区で検出。約長さ9m・幅1.5mである。

出土遺物

466は兼久式土器である。底部には木葉痕が観察できる。467は土師器碗。468は土師器甕である。469-470はカムイヤキである。472は朝鮮系無軸陶器と見られる。473～477は龍泉窯系青磁である。473～475は無文外反碗。476は簡述弁文碗。477は無簡述弁文碗である。

478-479は白磁碗である。479は腰部部分から上部と高台部分で割り取られている。480は滑石製石鍋のバレン状製品である。483は水晶玉と見られる。平面は円形で、断面はソロバンの目状である。中央部分に貫通穿孔が1つ施されている。

(ク) 包含層及び一括出土遺物

一括資料

484～487はカムイヤキである。484は碗である。488～490は龍泉窯系青磁である。490は無簡述弁文碗である。492はピロースタイプ白磁碗である。内面に印花文が施されている。

第125表 D地区区画第一清遺物

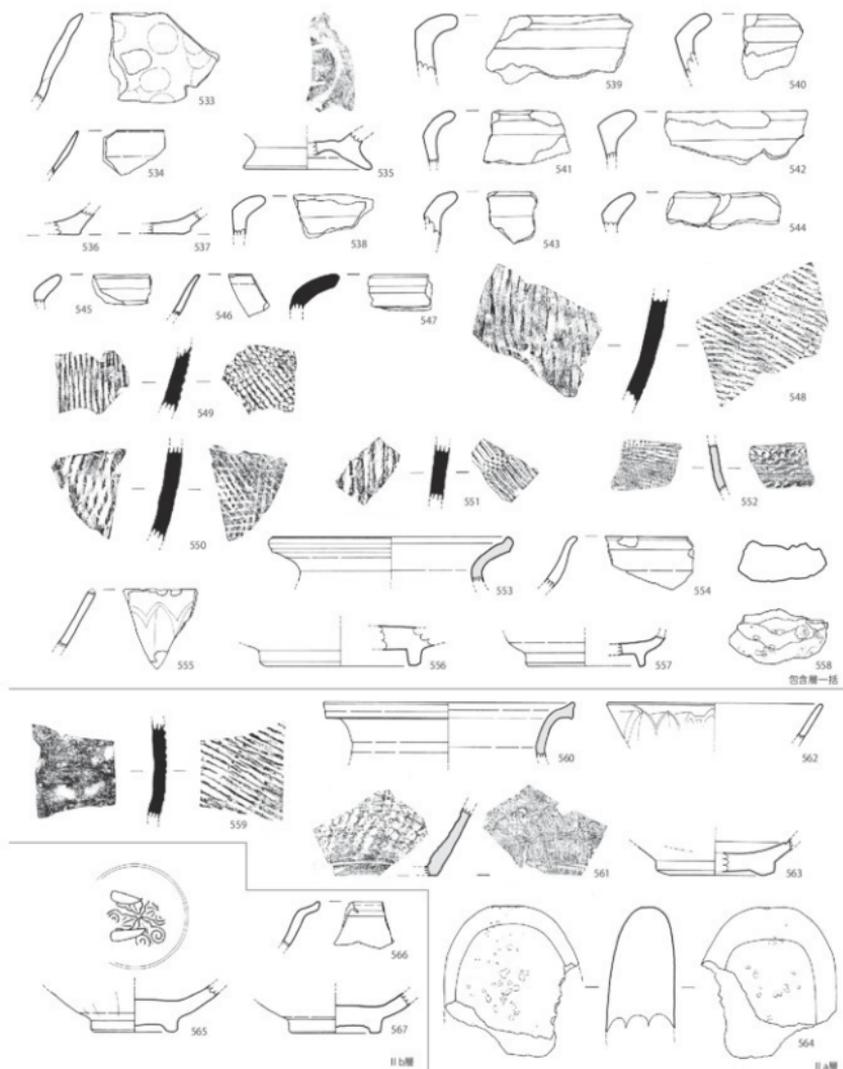
探検No	探検番号	土地区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	口径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
190	484	た-1	1475	カムイヤキ	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	485	そ-3	-	カムイヤキ	部・甕	-	口縁部	13	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	486	ち-6	-	カムイヤキ	部・甕	-	-	-	-	-	-	-	黄灰	灰	-	-
	487	つ-6	-	カムイヤキ	部・甕	-	-	-	-	-	-	-	ナズ	ナズ	-	-
	488	そ-3	-	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	489	た-1,2,3	-	龍泉窯系青磁	部	-	底部	-	5	-	-	-	-	-	-	-
	490	そ-5	-	龍泉窯系青磁	部	-	無簡述弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	491	た-5	-	白磁	部	-	底部	-	4.6	-	-	-	-	-	-	-
	492	つ-6	-	白磁	部	-	口縁部	-	4.2	-	-	-	-	-	-	-

第126表 D地区区画第一清遺物(1)

探検No	探検番号	土地区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考	
								口径	口径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)			
191	493	ち-5	II-1	土師器	碗	-	底部	-	2.2	-	-	-	-	-	-	-	
	494	ち-5	II-1	土師器	碗	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	495	た-5	II-1	土師器	甕	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	496	ち-5	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	平行	灰黄	灰黄	-	-	
	497	て-3	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	平行	黄灰	黄灰黄	-	-	
	498	た-3	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	格子	灰	黄灰	-	-	
	499	つ-9B	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	無文	平行	灰白	灰	-	-	
	500	た-5	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	平行	灰黄	灰・ナズ	-	-	
	501	そ-3	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	平行	灰	灰	-	-	
	502	た-9B	II-1	カムイヤキ	部・甕	-	口縁部	14.8	-	-	-	-	黄灰文	灰	灰	-	内面磨滅 口唇部に黄灰文
	503	ち-6	II-1	カムイヤキ	甕	-	側部	-	-	-	-	-	灰	灰黄	-	-	
	504	た-5	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	側部	-	-	-	-	-	灰	黄灰	-	-	
	505	ち-6	II-1	白磁	碗	-	口縁部	17.4	-	-	-	-	-	灰	黄灰	-	-
	506	た-1	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	-	5	-	-	-	-	-	-	-	
	507	つ-9B	II-1	灰地陶器	部	-	側部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	
	508	ち-6	II-1	石器	磨石	石鏡	-	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	-	

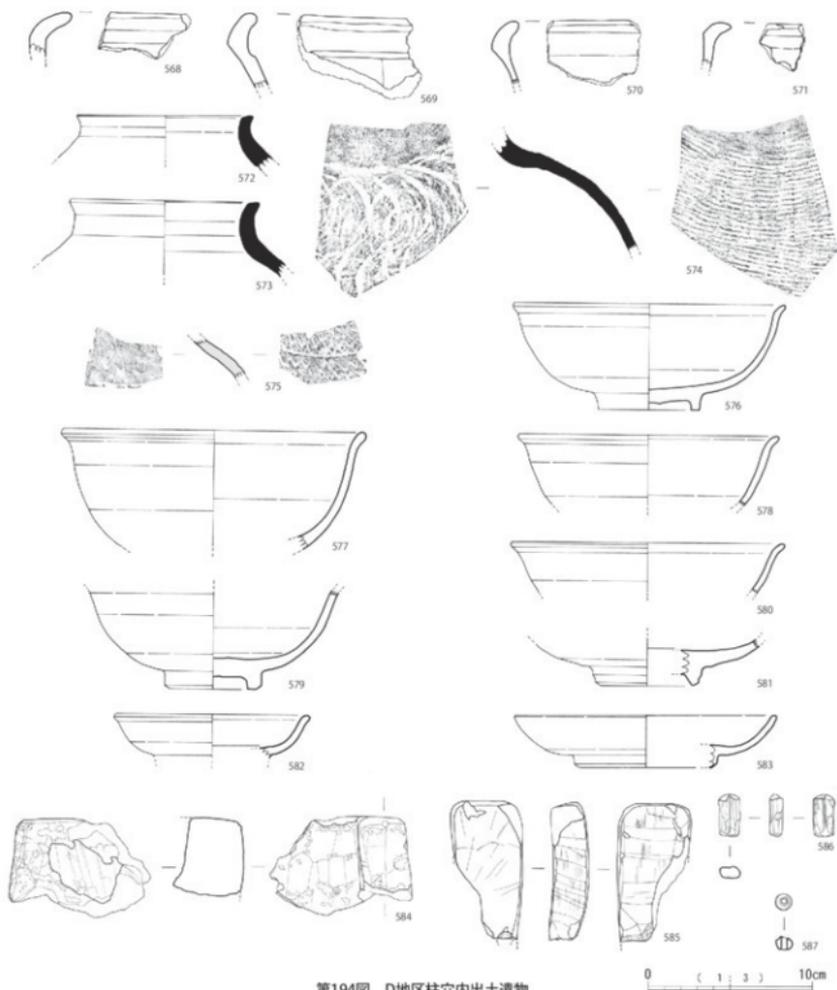
第127表 D地区区画第一清遺物(2)

探検No	探検番号	土地区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口径	口径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
192	509	た-4	埋蔵一括	土器	部	-	側部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	510	満川川	埋蔵一括	土器	甕	-	側部	-	-	ナズ	ナズ	灰白	灰白	-	-	
	511	て-1	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	平行	格子	灰	灰	-	-
	512	て-1	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	同心円	平行	灰白	灰黄	-	-
	513	た-2	II-1	白磁	碗	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	514	ち-9B	II-1	白磁	碗	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	515	た-3	埋蔵一括	白磁	碗	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	516	ち-9B	II-1	カムイヤキ	部・甕	-	側部	-	-	-	ナズ	平行	灰	灰	-	-
	517	満川川	埋蔵一括	カムイヤキ	部・甕	-	側部	-	-	-	格子	平行	灰	灰	-	-
	518	た-2	II-1	カムイヤキ	部・甕	-	側部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	519	ち-5	埋蔵一括	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	13	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	520	た-5	埋蔵一括	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	11.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	521	満川川	埋蔵一括	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	522	て-2	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	側部	-	-	-	-	-	灰	灰	-	-
	523	て-1	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	側部	-	6.1	-	-	-	-	-	-	-
	524	て-2	II-1	土師器	甕	-	側部	-	-	-	平行状	無文	浅黄褐色	浅黄	-	内外黒磨滅
	525	て-4	II-1	白磁	碗	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
526	て-4	II-1	白磁	碗	-	口縁部	-	5.4	-	-	-	-	-	-	内面に磨滅文	
527	て-3	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
528	そ-3	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
529	ち-4	II-1	龍泉窯系青磁	部	-	底部	-	4.6	-	-	-	-	-	-	-	
530	て-3	II-1	鉄滓	部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	68	-	
531	と-3	II-1	鉄滓	部	-	横切面	-	-	-	-	-	-	-	47	-	
532	た-7	II-1	ガラス玉	部	-	実形品	1	-	-	-	-	-	-	-	-	



第193图 D地区包含层出土遗物(3)

0 (1 : 3) 10cm



第194図 D地区柱穴内出土遺物

包含層出土資料

D地区は東西に広いため、4か所に分けて報告する。
 493・494は土師器である。493は碗で、底径7.2cmである。
 495～501は須恵器である。499は壺資料である。501は断面の一部が平滑で、擦られている。502・503はカムイヤキである。502は口縁部に波状文が描かれている。504は朝鮮系無釉陶器である。505はピロースタイル白磁碗である。口

径17.4cmを測る。508は石器である。全面良く敲かれている。それぞれの面の中央部分が凹んでいる。

509～521はて-1区周辺から出土した遺物である。509は模倣碗もしくは兼久式土器の胴部である。510～512は須恵器である。513～515は白磁である。516～518はカムイヤキである。

522～533はて-3区周辺から出土した遺物である。522

は朝鮮系無袖陶器である。523は黒色土器碗B群である。527-528は龍泉窯系青磁碗である。双方とも簡連弁文碗である。532はガラス玉である。

533～567はた・そ-I区周辺から出土した遺物である。533は兼久式土器である。535～537は土師器碗・坏である。534は非常に器壁が薄い。535は内面見込み部分に2条沈線が見える。536-537は底部がやや外側へ張り、くびれ状になる資料である。538～545は土師器甕である。比較的口縁部が短いものが多かった。546は越州窯系青磁である。547～551は須恵器である。552-553はカムイヤキである。553は口径14.1cmを測る。554は白磁である。ピロースクタイプ白磁碗と見られる。555～557は龍泉窯系青磁碗である。555は簡連弁文碗である。

559～564はII a層から出土した資料である。559は須恵器、560-561はカムイヤキである。560は口径15cmを測る。やや顔部が縦に長い。562は龍泉窯系青磁簡連弁文碗である。

563は白磁碗IV 1a類である。

565～567はII b層から出土した遺物である。いずれも龍泉窯系青磁で、565は外面にわずかに連弁が見られ、内面に文様が描かれている。566は碗もしくは坏の口縁部である。

(ウ) 柱穴内出土遺物

568～571は柱穴内から出土した資料である。568～571は土師器甕である。口縁部が短いものが多かった。572～574は須恵器である。572-573は同一個体の可能性が高い。575はカムイヤキである。外面には区画線と波状沈線文が描かれている。576～583は龍泉窯系青磁である。576～580は無文外反碗である。576は全形がうかがえる資料で、口径16cm底径6.1cm器高6.5cmである。582-583は皿もしくは坏である。584～586は滑石製石鍋である。584はやや粗質な滑石を使用して作られている。586は鉢状製品で、中央部分縦方向に沈線が施されている。587はガラス玉である。濃緑色。

第128表 D地区創倉層一遺物別

検出No	発掘番号	土器	部位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
533	タ 11	II-III	兼久式土器	-	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
534	タ 11	II-III	土師器	柄文坏	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
535		II-III	土師器	甕	-	-	底部	7.4	-	-	-	-	-	-	-	-
536	タ 11	II-III	土師器	柄文坏	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
537	タ 12	II-III	土師器	坏	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
538	タ 11	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
539	タ 12	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
540	タ 12	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
541	タ 11	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
542	タ 12	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	内面に区画線と波状沈線
543	タ 11	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
544	タ 12	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	1324と接合
545	タ 11	II-III	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
546	タ 12	II-III	龍泉窯系青磁	碗	II類	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
547	タ 11	II-III	須恵器	甕	-	-	口縁部	-	-	灰	-	-	-	-	-	灰白
548	タ 11	II-III	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	灰	-	-	緑	-	-	灰白・緑
549	タ 11	II-III	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	灰	-	-	黄	-	-	灰白
550	ツ 9	II-III	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	灰	灰	黄	黄	-	-	黄
551	タ 12	II-III	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	灰	-	-	黄	-	-	黄
552	タ 12	II-III	カムイヤキ	甕・甕	-	-	胴部	-	-	灰	-	-	灰	-	-	灰
553	タ 11-12	II-III	カムイヤキ	甕・甕	-	-	口縁部	14.1	-	ナデ	ナデ	黄青灰	黄青灰	-	-	-
554	タ 9	II-III	白磁	碗	CO-12類	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
555	タ 10	II-III	龍泉窯系青磁	碗	簡連弁	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
556	ツ 9	II-III	龍泉窯系青磁	坏	-	-	底部	-	9.1	-	-	-	-	-	-	-
557	ツ 9	II-III	龍泉窯系青磁	坏	-	-	底部	-	6.6	-	-	-	-	-	-	-
558	タ 12	II-III	須恵器	柄文甕	-	-	胴部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
559	タ 10	II a	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	無文	平打	灰白	灰白	-	-	-
560	タ 11	II a	カムイヤキ	甕	-	-	口縁部	15	-	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	-	-	-
561	タ 11	II a	カムイヤキ	甕	-	-	胴部	-	-	灰	ナデ	黄青灰	黄青灰	-	-	-
562	タ 11	II a	龍泉窯系青磁	碗	簡連弁	-	口縁部	12.7	-	-	-	-	-	-	-	-
563	タ 11	II a	白磁	碗	IV 1a類	-	口縁部	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-
564	タ 11	II a	白磁	碗	磨石	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	446
565	タ 12	II b	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	底部	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-
566	タ 10	II b	龍泉窯系青磁	柄文坏	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	内面に印状文・口縁部
567	タ 11	II b	龍泉窯系青磁	碗	簡連弁	-	底部	5.2	-	-	-	-	-	-	-	-

第129表 D地区柱穴内出土遺物

検出No	発掘番号	土器	部位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			調整		色調		重量 (g)	備考
								口徑	底径	器高	(内)	(外)	(内)	(外)		
568	タ 5	P1056	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
569	タ 11	P1056	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
570	タ 12	P1010	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
571	タ 8	P0266	土師器	甕	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	-
572	タ 8	P0266	須恵器	甕	-	-	口縁部	10.6	-	-	-	灰白	灰白	-	-	-
573	タ 8	P0266	須恵器	甕	-	-	口縁部	11.2	-	-	-	黄	黄	-	-	-
574	タ 8	P0266	須恵器	甕	-	-	胴部	-	-	灰	-	-	灰	-	-	-
575	タ 6	S0026	カムイヤキ	甕	-	-	胴部	-	-	黄灰	-	-	黄灰	-	-	陶器学で研究された
576	タ 4	P1051	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	口縁部	16	6.1	6.5	-	-	-	-	-	-
577	タ 8	P0301	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	口縁部	17.8	-	-	-	-	-	-	-	-
578	タ 7	P0020	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	口縁部	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-
579	タ 4	P1052	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	底部	5.2	-	-	-	-	-	-	-	-
580	タ 8	P0301	龍泉窯系青磁	碗	無文外反	-	口縁部	16.3	-	-	-	-	-	-	-	-
581	タ 8	P0299	龍泉窯系青磁	碗	-	-	底部	-	5.6	-	-	-	-	-	-	-
582	タ 8	P0299	龍泉窯系青磁	碗	柄文坏	-	口縁部	11.4	-	-	-	-	-	-	-	-
583	タ 4	P1262	龍泉窯系青磁	碗	柄文坏	-	口縁部	15.4	7.9	3.2	-	-	-	-	-	-
584	タ 6	P0886	滑石製石鍋	鍋	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	210 未穿孔孔、粗製
585	タ 12	P1048	滑石製石鍋	鍋	-	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	130 粗製滑石製、貫通穿孔
586	タ 7	P0332	滑石製石鍋	鍋	類状	-	口縁部	-	-	-	-	-	-	-	-	5
587			ガラス玉	陶製品	-	-	直径	1	0.8	-	-	-	-	-	-	-

第Ⅵ章 大ウフ遺跡自然科学分析

第1節 鹿児島県喜界町大ウフ遺跡出土の人骨

鹿児島女子短期大学 竹中正巳

はじめに

2007年10月に鹿児島県大島郡喜界町(奄美諸島喜界島)に所在する大ウフ遺跡が発掘調査され、土坑墓1号から焼かれた人骨が、3号墓から1体の人骨が出土した。本稿では、これらの人骨について人類学的精査を行った結果を報告する。

大ウフ遺跡土坑墓1号出土人骨(性別不明・年齢不明)

須恵器中に詰められていた焼かれた人骨である。木炭が焼骨と一緒に遺存していた。焼人骨は約500g、木炭は約20g遺存している。遺存している焼人骨は大きいものでも長径は80mmを超えない。頭蓋や四肢骨を同定している。

火葬時、焼骨は200℃で焦茶色、400℃で黒色、500℃で灰白色、600℃で純白色、800℃で淡桃色を帯びた乳白色になる(平野, 1935)。本例では、焼かれた人骨の緻密質の外表面は白色を呈する。内側の海綿質の部分は黒色を呈することから、600℃以下の温度で焼かれ、骨の外表面ほとんど内部に火が廻っていないことが分かる。

大ウフ遺跡土坑墓3号出土人骨(性別不明・壮年)

木棺の中に、人骨1体の上半身が遺存している。保存状態は悪い。副葬品はカムイ焼1、中国製の白磁皿1、ガラス玉20以上である。ガラス玉は数列に並んだ状態で検出された。各玉の中央には穴が開いており、折り重なって埋葬されていた。ガラス玉の列は、人骨の頭部で検出されており、首飾りとして着装されていた。

埋葬姿勢は仰臥位で、左右両肘を強く曲げている。頭位は南頭位である。

性別が可能な骨の部位が遺存していないため、性別は不明である。ただ、左右の上腕骨は華奢であり、女性の可能性も考えられる。歯式は次のとおりである。

.....	.
87654	7
	78
	..
	・遊離歯

遊離歯年齢は咬耗がMartinの1度であることから、壮年と判定した。右の上腕骨は華奢であるが、それ以外に、特に特記所見は認められない。



写真1 大ウフ遺跡の須恵器中の焼人骨(焼骨検出面)



写真2 大ウフ遺跡の須恵器中の焼人骨（焼骨検出面から2cm掘り下げた面）



写真3 大ウフ遺跡の須恵器中の焼人骨（焼骨検出面から3cm掘り下げた面）

第2節 喜界町大ウフ遺跡 銭出土ピットから出土した炭化材の放射性炭素年代測定 (AMS測定)

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・尾善大真・丹生越子・廣田正史・小林絢一
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1. はじめに

大ウフ遺跡は喜界島の中央部、標高 100 m ~ 160 m の海岸段丘状の辺縁部に立地する遺跡である。大ウフ遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

なお、同じ試料を用いて樹種同定も行っている (炭化材樹種同定の報告参照)。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第 130 表のとおりである。

試料は、た-4 区の P1174 より出土したシノキ属の炭化材である。同一個体と考えられる複数の部位不明破片を合わせて試料とした。

試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 15SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲を、第 195 図に暦年代校正結果をそれぞれ示す。暦年代校正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年代校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代校正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年代校正の詳細は以下のとおりである。

暦年代校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年代校正には OxCal41 (校正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する

68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。

4. 考察

た-4 区の P1174 より出土した炭化材の ^{14}C 年代を校正した結果、1 σ 暦年代範囲は 1274-1290calAD (68.2%) であった。また、2 σ 暦年代範囲は 1265-1299calAD (93.5%) および 1372-1378calAD (1.9%) であった。1 σ 暦年代範囲に着目すると、13 世紀後半に相当する。

なお、木材は年輪の内側であるほど、古い年代が得られる。今回測定した炭化材の部位は不明で、内側の年輪である可能性もある。そのため、今回得られた結果は木材の枯死・伐採の年代よりいくぶん古い年代を示している可能性がある。

したがって、た-4 区の P1174 より出土した炭化材の枯死・伐採年は 13 世紀後半以降と推定することができる。

参考文献

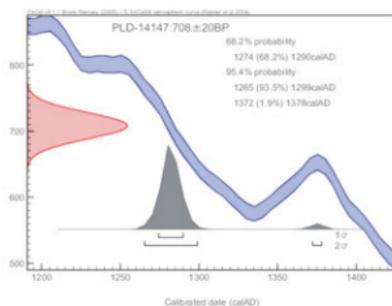
- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第 130 表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前 処 理
PLD-14147	調査区：た-4区 遺構：P1174	試料の種類：炭化材（シノキ属） 試料の性状：部位不明破片複数 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.5N, 塩酸:1.2N）

第 131 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-14147	-26.1 \pm 0.11	708 \pm 20	710 \pm 20	1274AD (68.2%) 1290AD	1265AD (93.5%) 1299AD 1372AD (1.9%) 1378AD



第 195 図 暦年較正結果

1. はじめに

大ウフ遺跡は喜界島の中央部、標高100 m～160 mの海岸段丘状の辺縁部に立地する遺跡である。大ウフ遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いてAMS法による放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定の報告参照）。

2. 試料と方法

試料はた-4区のP1174より出土した炭化材1点である。試料の時期は、同試料の放射性炭素年代測定の結果に基づくと、13世紀後半以降である。

炭化材試料は手もしくはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を採取した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた。その後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-5900LV型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、炭化材はシノキ属であった。以下に同定の根拠となる木材組織の特徴を示し、顕微鏡写真を図版に示す。

シノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版 la-1c

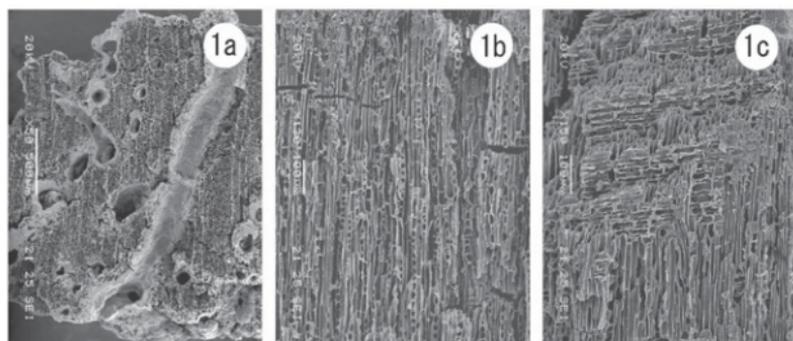
環孔性の放射孔材である。試料には年輪界が含まれていないため、早材部の道管は観察できなかったが、晩材部では大きさを減じて小型で角張る。軸方向柔細胞は短接線状で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列で同性である。

4. まとめ

シノキ属は暖帯に分布する常緑高木で、ツブラジイとスタジイがある。ツブラジイは関東地方以南から九州に分布する。スタジイは福島県・新潟県以西から九州まで分布し、スタジイの地理的な亜種として、奄美大島以南の琉球列島に分布するオキナワジイを区別する場合もある。ツブラジイは放射組織に集合放射組織が存在するが、本試料では集合放射組織の有無を確認することができなかったため、シノキ属とした。ただし、分布域から考えるとツブラジイは喜界島には生育していないため、遺跡周辺に自生していた木を使用したのであれば、オキナワジイであると思われる。材はやや重硬、割裂性・乾燥性は中庸で、建築材・道具の柄などの器具材・船・下駄などに用いられる。

参考文献

佐竹義輔、原寛、亙理俊次、冨成忠夫（1989）日本の野生植物、木本1、76-78、平凡社



図版1 出土材の顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)

1a-1c, シイノキ属

はじめに

大ウフ遺跡が含まれる城久遺跡群は、古代から中世にかけての集落遺跡である。大ウフ遺跡では、鍛冶炉跡、火葬墓、木棺墓等が検出されている。

本報告では、鍛冶炉から出土した炭化材を対象として、遺構の年代確認のための放射性炭素年代測定と木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、B-7区の焼土跡4号および焼土跡10号、B-6区の焼土跡2号から出土した炭化材3点である。

焼土跡4号の炭化材は、2片が接合でき、年輪数は3~4本である。年代測定用試料は最外年輪を含む2年分を使用し、残りを樹種同定用試料とする。焼土跡10号は、5mm角程度の炭化材片が1点と3mm角以下の炭化材片が約40点認められる。実体顕微鏡で観察したところ、全て同一種と考えられたことから、5mm角の炭化材を樹種同定用、残りを年代測定用とする。焼土跡2号の炭化材は、6mm角の炭化材片1点と3mm角以下の炭化材片7点がある。6mm角の炭化材を2分割し、樹種同定と年代測定に用いる。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行う

ため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma \pm 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730 \pm 40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、2 σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にしている。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にしている。

3. 結果

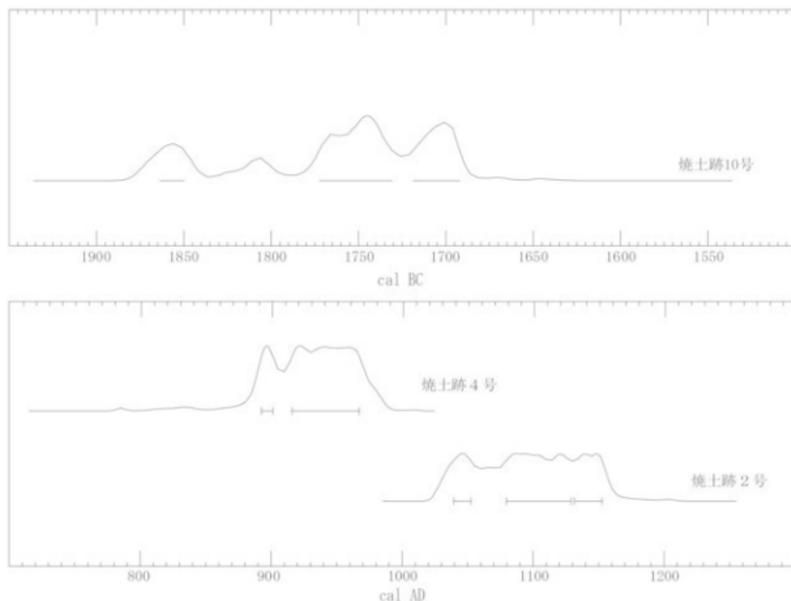
(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を第132表、第196図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、焼土跡4号が940 \pm 30BP、焼土跡10号が3440 \pm 30BP、焼土跡2号が1120 \pm 20BPを示す。また、測定誤差を2 σ として計算させた暦年較正結果(確率1)は、焼土跡4号がcalAD1,030~1,158、焼土跡10号がcalBC1,784~1,686、焼土跡2号がcalAD878~987である。

第 132 表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地区 遺構	種類 (樹種)	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
						cal AD	cal BC	cal BP	cal AD			
B-7区 焼土跡4号	炭化材 (ツバキ属)	AAA	990 ± 20	-28.26 ± 0.49	940 ± 30 (935 ± 25)	σ	cal AD 1039 -	cal AD 1052	cal BP 911 -	898	0.156	IAAA- 113017
							cal AD 1080 -	cal AD 1129	cal BP 870 -	821	0.590	
							cal AD 1131 -	cal AD 1133	cal BP 819 -	797	0.254	
		2σ	cal AD 1030 -	cal AD 1158	cal BP 930 -	792	1.000					
B-7区 焼土跡10号	炭化材 (イヌノキ近縁種)	AAA	3450 ± 20	-25.59 ± 0.69	3440 ± 30 (3442 ± 26)	σ	cal BC 1864 -	cal BC 1850	cal BP 3813 -	3799	0.128	IAAA- 113018
							cal BC 1772 -	cal BC 1731	cal BP 3721 -	3680	0.544	
							cal BC 1719 -	cal BC 1692	cal BP 3698 -	3641	0.329	
						2σ	cal BC 1877 -	cal BC 1840	cal BP 3826 -	3789	0.174	
							cal BC 1828 -	cal BC 1794	cal BP 3777 -	3743	0.089	
							cal BC 1784 -	cal BC 1686	cal BP 3733 -	3635	0.727	
B-6区 焼土跡2号	炭化材 (不明)	AAA	1120 ± 20	-24.96 ± 0.68	1120 ± 20 (1124 ± 24)	σ	cal AD 893 -	cal AD 901	cal BP 1057 -	1049	0.146	IAAA- 113019
							cal AD 916 -	cal AD 967	cal BP 1034 -	983	0.853	
						2σ	cal AD 878 -	cal AD 987	cal BP 1052 -	963	1.000	

- 1) 処理は、酸処理-アルカリ処理-酸処理 (AAA処理) を実施した。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5668年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB 2.2.6 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P J Reimer) を使用した。
- 6) 暦年の計算には、暦正年代に「暦年較正用」として示した、1桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正前線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。
- 9) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、標準的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 196 図 暦年較正結果

② 樹種同定

炭化材の樹種同定結果を第132表に示す。炭化材は、広葉樹2分類群（ツバキ属・イスノキ近似種）に同定された。なお、焼土跡2号は、発泡しており、組織がほとんど観察できないことから不明とした。

同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ツバキ属 (Camellia) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形。単独および2-3個が複合して散在し、年輪縁に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、環孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・イスノキ近似種 (Distylium racemosum Sieb. et Zucc.)

マンサク科 イスノキ属

試料は保存状態が悪い。散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は潰れており、形態や大きさは不明である。道管には着色物質に由来すると考えられる充填物が顕著に認められる。

4. 考察

大ウツ遺跡の鍛冶炉は、直径約20cmの円形を呈し、深さは約10cmである。

焼土跡10号は $3.440 \pm 30BP$ 、焼土跡2号は $1,120 \pm 20BP$ である。暦年較正結果は、焼土跡4号が11～12世紀頃の年代を示し、推定年代とも調和的である。焼土跡2号は、9～10世紀の年代を示しており、遺構の切り合い状況や出土遺物から11～12世紀頃の年代が推定されている（野崎ほか、2010）。

各遺構の補正年代値をみると、焼土跡4号は $940 \pm 30BP$ 、焼土跡2号よりも若干古い値を示すが、樹輪の誤差等を考慮すれば概ね調和的な結果といえる。一方、焼土跡10号は、縄文時代後期に相当する年代を示しており、樹輪の誤差等を考慮したとしても推定年代より古い値である。実際に古い時期の遺構であることや、古材の混入等が考えられる。年代については、層序や他の出土遺物も含めて慎重に検討する必要がある。

各遺構から出土した炭化材は、焼土跡4号がツバキ属、焼土跡10号がイスノキ近似種であった。ツバキ属は、暖温帯性常緑広葉樹林中に生育する常緑小高木であり、木材は重硬で強度が高い。現在の積生を考慮すれば、古代の本遺跡周辺にもツバキ属が生育し、その木材を燃料材として利用したことが推定される。また、鍛冶炉の燃料材として硬い材質の木材が利用されたことが推定される。

イスノキも暖温帯常緑広葉樹林中に生育する常緑高木であり、木材は重硬・緻密で強度が高い。本試料は、年代測定により縄文時代後期に相当する年代が得られており、試料がイスノキとすれば、縄文時代後期頃の遺跡周辺に生育していた

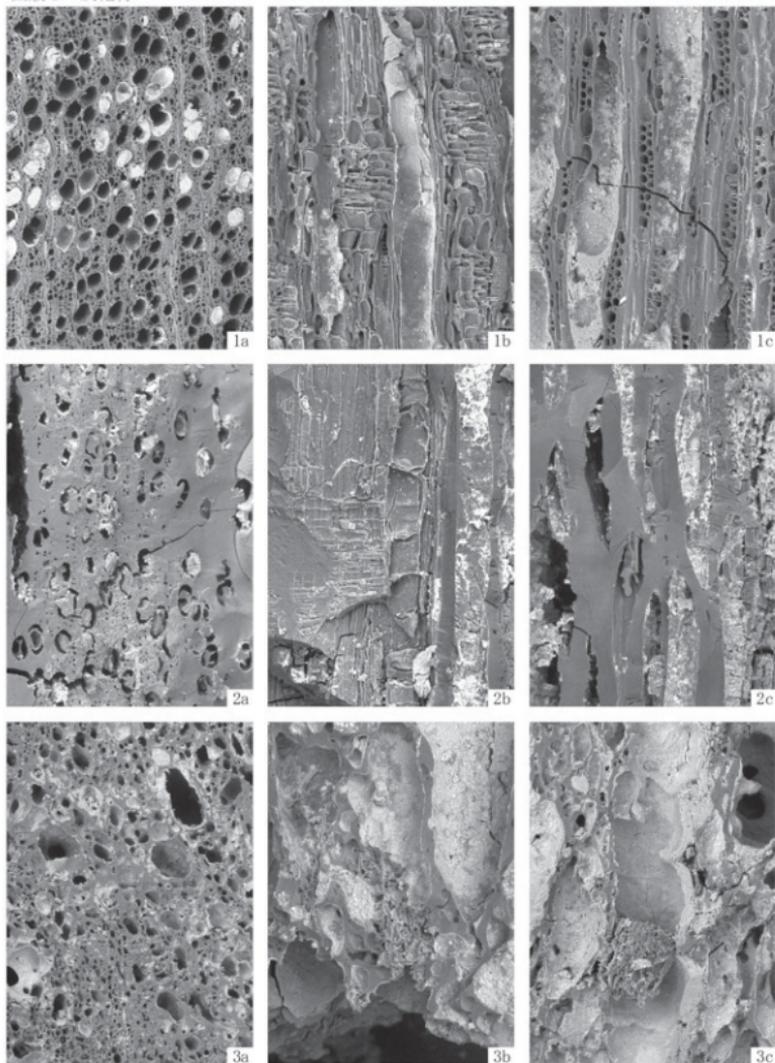
ことが推定される。

焼土跡2号は、発泡し、組織がほとんど観察できないため、種類は不明である。発泡している状況から、高温で焼かれた可能性がある。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
野崎拓司・澄田直敏・後藤法宣, 2010, 城久遺跡群の発掘調査, 日本考古学, 29, 日本考古学協会, 137-146。
高地 謙・伊東隆夫, 1982, 国産木材組織, 地球社, 176p。
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材



1. ツバキ属(焼土跡4号)
 2. イスノキ近似種(焼土跡10号)
 3. 不明(焼土跡2号)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

はじめに

大ウフ遺跡が含まれる城久遺跡群は、古代から中世にかけての集落遺跡である。大ウフ遺跡では、鍛冶炉跡、火葬墓、木棺墓等が検出されている。

本報告では、土坑墓から出土した炭化物および土器器型土器の外面付着炭化物を対象として、遺構の年代確認のための放射性炭素年代測定を実施する。また、炭化材については、木材利用を検討するために、併せて樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、土坑墓1号および土坑墓4号から出土した炭化材各1点、土坑墓6号から出土した土器器型土器の外面付着炭化物1点の合計3点である。

土坑墓1号の炭化材は、分割状の炭化材片1点である。残存する最外年輪を含む3年分を年代測定試料として採取し、残りを樹種同定とした。

土坑墓4号の試料は、炭化材、由来不明の炭化物、骨片が塊状に固結した状態である。試料を崩し、中から約5mm角の炭化材を抽出した。炭化材は年輪等が観察できなかったことから、半分に分割して、それぞれ年代測定用と樹種同定用試料とした。

土坑墓6号の土器器型土器の外面には、炭化物が薄く付着しているのが観察された。カッターなどを用いて、可能な限り土器胎土が混入しないように炭化物を採取して測定試料とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定

する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma 68.3%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730 \pm 40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

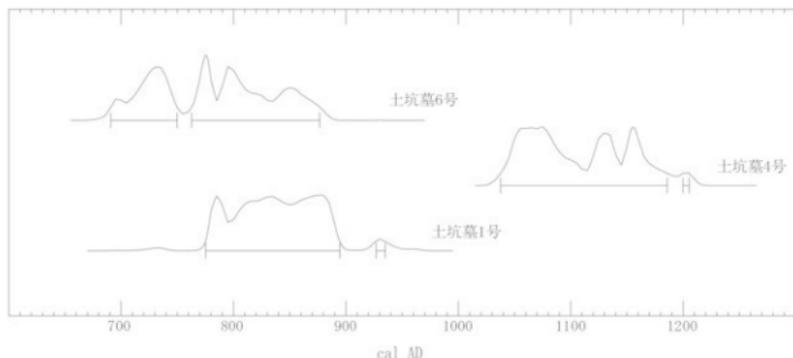
(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を第133表、第197図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、土坑墓1号が1,180 \pm 20BP、土坑墓4号が910 \pm 20BP、土

第 133 表 放射性炭素年代測定結果

遺構など	種類 (樹種)	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	修正年代 (暦年較正前) BP	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
						σ	cal AD	-	cal AD	cal BP	-			cal BP
土坑墓 1 号 日輪	炭化材 (マキ属)	AAA	1230 \pm 20	-27.04 \pm 0.25	1180 \pm 20 (1184 \pm 23)	σ	cal AD 782	-	cal AD 789	cal BP 1168	-	1161	0.092	IAAA- 113191'
						cal AD 810	-	cal AD 848	cal BP 1140	-	1102	0.480		
						cal AD 854	-	cal AD 885	cal BP 1096	-	1065	0.428		
						cal AD 775	-	cal AD 896	cal BP 1175	-	1005	0.985		
						2 σ	cal AD 927	-	cal AD 935	cal BP 1023	-	1015	0.015	
土坑墓 4 号	炭化材 (クスノキ科)	AaA	900 \pm 20	-27.83 \pm 0.42	910 \pm 20 (908 \pm 23)	σ	cal AD 1096	-	cal AD 1091	cal BP 904	-	839	0.587	IAAA- 113192'
						cal AD 1121	-	cal AD 1130	cal BP 829	-	810	0.222		
						cal AD 1148	-	cal AD 1164	cal BP 802	-	786	0.192		
						cal AD 1038	-	cal AD 1180	cal BP 912	-	764	0.986		
						2 σ	cal AD 1200	-	cal AD 1205	cal BP 750	-	745	0.014	
土坑墓 6 号	土師器外面 付着炭化物	AaA	1030 \pm 20	-32.60 \pm 0.51	1230 \pm 20 (1232 \pm 23)	σ	cal AD 713	-	cal AD 745	cal BP 1237	-	1205	0.302	IAAA- 113193'
						cal AD 767	-	cal AD 783	cal BP 1183	-	1167	0.201		
						cal AD 788	-	cal AD 819	cal BP 1162	-	1131	0.314		
						cal AD 842	-	cal AD 859	cal BP 1108	-	1091	0.133		
						cal AD 691	-	cal AD 750	cal BP 1259	-	1200	0.349		
						cal AD 763	-	cal AD 877	cal BP 1187	-	1073	0.651		

- 1) 処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理 (AAA 処理) で、アルカリ濃度が 1N 未満の場合は AaA と表記している。
- 2) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- 3) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P J Reimer) を使用した。
- 6) 暦年の計算には、修正年代に () で暦年較正年代として示した。一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較がしやすいように、暦年較正前年代値は 1 桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95% である。
- 9) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 197 図 暦年較正結果

坑墓 6 号が 1230 \pm 20BP を示す。また、測定誤差を 2 σ として計算させた暦年較正結果 (確率 1) は、土坑墓 1 号 calAD775 ~ 895、土坑墓 4 号が calAD1038 ~ 1186、土坑墓 6 号が calAD763 ~ 877 である。

(2) 樹種同定

炭化材の樹種同定結果を第 133 表に示す。炭化材は、土坑墓 1 号が針葉樹のマキ属、土坑墓 4 号が広葉樹のクスノキ科に同定された。各分類群の主な解剖学的特徴等を記す。

・マキ属 (Podocarpus) マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ~ 2 個。放射組織は単列、1 ~ 10 細胞高。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形。単独または 2 ~ 3 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有する。壁孔は保存が悪く、観察できない。放射組織は異性、1 ~ 2 細胞幅、1 ~ 20 細胞高。

4. 考察

(1) 各遺構の年代

今回調査を行った3基の土坑墓の年代値は、土坑墓1号・6号についてはほぼ一致する年代値を示したが、土坑墓4号の年代値はやや新しい年代値を示した。

土坑墓1号の炭化材と土坑墓6号の土器付着物の年代値は誤差範囲内で一致しており、暦年較正結果から8世紀後半～9世紀後半の年代が推定される。これに対して、土坑墓4号の炭化材は、暦年較正年代から、11世紀～12世紀頃の年代が推定される。

このような遺構間での年代差は、遺構の構築時期差を反映している可能性がある。今後、発掘調査時の所見を踏まえた評価が必要と考える。なお、炭化材の年代値については残存部位が最外年輪に相当するとは限らないことから、実際の伐採年より多少古い年代を示している可能性がある。

(2) 出土炭化材の特徴

土坑墓1号から出土した炭化材は針葉樹のマキ属、土坑墓4号から出土した炭化材は広葉樹のクスノキ科に同定された。マキ属には暖温帯常緑広葉樹林中に生育するイヌマキやナギが含まれ、これらの木材は重硬・緻密で強度・耐水性が高い材質を有する。クスノキ科は、常緑性の種と落葉性の種が含まれ、暖温帯～冷温帯まで広く分布する種を含む。また、木材の材質も幅広い。

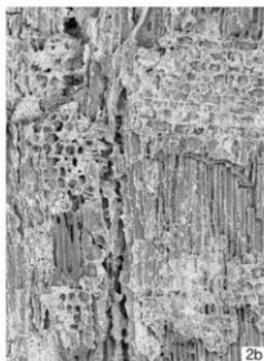
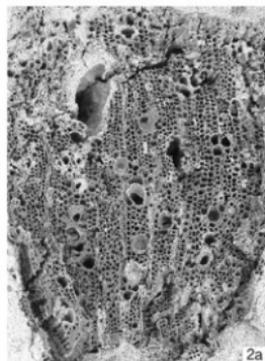
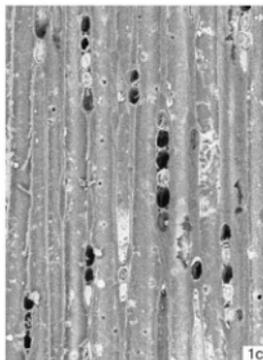
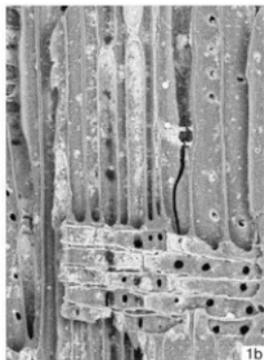
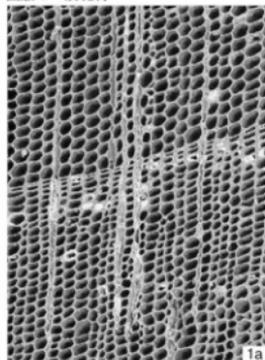
これらマキ属とクスノキ科は、いずれも現在の本地域に分布している樹種である。当時も調査区周辺に生育していた可能性が高く、利用していたことが推定される。当時の木材利用状況については、今後周辺の古植生に関する検討を行うことで再評価していきたい課題である。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- 野崎拓司・澄田直敏・後藤法宣, 2010, 城久遺跡群の発掘調査, 日本考古学, 29, 日本考古学協会, 137-146。
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉

樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材



1. マキ属 (土坑墓1号)
2. クスノキ科 (土坑墓4号)
a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
200 μ m: 1a, 2-3b, c
100 μ m: 1b, c

1. はじめに

遺跡から出土する自然遺物は、当時の人々の狩猟、漁撈や食生活を知る手掛かりとして、また、動物地理学的観点から、当時のその地域における動物相を知る上にも非常に貴重な資料となっている。

奄美諸島からの動物遺体の出土例は、縄文時代から近世まで30数ヶ所を数え、出土した動物は哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、甲殻類、棘皮類、魚類および貝類などがある。四方を海に囲まれた島嶼のために当然のことながら魚類や貝類が多いが、アマミノクロウサギ、ネズミ類、イヌ、イノシシ、ウシ、ウマおよびジュゴンなどの哺乳類も検出されている。

喜界町からの動物遺体の出土例は、これまで縄文前期の総合グランド遺跡、晩期の湾天神遺跡や伊実久貝塚、それに先山遺跡（7～12世紀）、提り遺跡（中世）、和早地遺跡（14～15世紀）などがあり、筆者らが調査した先山遺跡からはイノシシ、ウシ、ウマの遺体が検出されている。今回調査を依頼された大ウフ遺跡は、喜界町大字城久字大ウフにあり、県営畑地帯総合整備事業のために喜界町教育委員会が平成20年12月～21年3月まで発掘調査を行い、13～14世紀の遺構、遺物が出土した遺跡である。動物遺体はウシのみの出土で、発掘後方に持ち込まれたものであり、ここではウシの遺体の出土状況や出土量について、その概要を報告する。なお、計測可能な歯や骨についてはDrieschの方法に従いノギスを用いて測定を行い、筆者らの方法で年齢や体高の推定を試みた。

2. 出土動物種と出土量

大ウフ遺跡から出土した動物遺体は、全てウシのもので、総重量21273gであり、同定された資料の区別・遺構別出土量は第134表に示した。なお、細骨片のために骨の種類を同定できなかった資料は、すべてウシのものである。

まず、区・遺構別出土量は、そ・た・6区の溝状遺構20号が9887gで全体の46.5%で最も多く、次いでそ・7区・P521の6203g（29.2%）、ち・4区・包含層が2516g、そ・5区・溝状遺構18号（5842g）、ち・7区溝状遺構21号（783g）の順である。

3. ウシ遺体の出土状況と概要

1) そ・5区・溝18号（図版IIの3参照）

そ・5区の溝18号からは、右下顎の第二前臼歯から第三後臼歯（P₂、P₃、P₄、M₁、M₂、M₃）が検出され、第二後臼歯（M₂）には下顎骨の一部がみられるが、他は臼歯のみである。第二前臼歯から第二後臼歯の歯冠長と第一、二後臼歯の歯冠

幅を表2に示すが、各臼歯いずれも脆く、また、後臼歯の交合面は殆ど磨耗のない3歳以下の若い個体である。歯冠長から筆者らの方法で、臼歯長、下顎全長を求め、体高を推定すると123.1cmである。

2) そ・た・6区・溝20号（図版IIの1、2、4～7、9～11、13参照）

表1にはそ・た・6区・溝20号は一纏めにして表示しているが、ここでは取り上げにより溝20号ドット、溝20号一括、溝20号集積下一括、た・6区・溝20号一括に分けて記述する。

溝20号ドット：腰椎、左肩甲骨2、右脛骨、左踵骨の5点が出土し、腰椎は後位のもので両骨端の欠損した若い個体のものである。左側の肩甲骨は若い個体と成獣のもの2点検出されている。脛骨は右側の遠位2/1で、遠位端の幅と径は55.55x41.04mmで、これらの計測値から体高を推定すると110.7cmである。

溝20号一括：左上顎第三乳臼歯、胸椎、左肩甲骨、右脛骨が出土し、上顎乳臼歯の歯冠長と幅26.44x14.02mmで、3歳以下のものである。胸椎は前位の棘突起片や細骨片であり、左側の肩甲骨は小骨片である。右側の脛骨は遠位3/1で、遠位端の幅と径は57.12x44.97mmであり、推定体高112.4cmである。

溝20号集積下一括：右上顎骨、腰椎、左右肋骨、右腕骨、右中手骨、左右大腿骨など10点が出土している。右側の上顎骨は第二、三、四乳臼歯と萌出直後の第一後臼歯を有する資料で、3歳以下の若い個体である。腰椎や左右の肋骨は小片で、右大腿骨は骨頭部分のみである。右中手骨は遠位3/1の資料で、遠位端の幅と径は58.52 x 33.27mmであり、体高121.2cmと推定される。

た・6区・溝20号一括：第五頸椎、胸椎、左腕骨、右寛骨の4点が出土しており、計測可能な資料はなく、また、左腕骨は子牛のものである。

3) そ・7区（P521、図版Iの1～6参照）

そ・7区ビット521柱穴から出土した頭蓋骨は、恐らく環椎後頭関節から分離した後、柱穴に吻部を下にして埋葬したもので、表面からは左右、上下顎第三後臼歯が咬みあった状態で検出されている。また、頭蓋の後頭部や角、下顎枝などは割り採られて消失したのと思われる。柱穴を左側断面からみると、上、下顎の臼歯が咬み合い、臼歯は下顎骨の歯槽に取まった状態でみられる。上顎骨や鼻骨など顔面骨は脆く、原形をとどめておらず細骨片としてみられる（図版Iの1、2参照）。左側の上、下顎臼歯を取り除くと右側の上、下顎の臼歯が検出され、また、切歯先端部には切歯の小片が3

点検出される。次に臼歯についてその概要を述べると、左側の上顎臼歯は第二前臼歯～第二後臼歯、下顎臼歯は第二前臼歯～第三後臼歯があり、右側は上、下顎共に全臼歯を供えている。それらの歯冠長、幅および中心高は表2に示した。これらの歯冠長から体高を推定すると123.58 ± 0.46cmであり、これは現生の口之島野生化牛の雄とほぼ同じ大きさである。また、中心高より年齢を推定すると、5.5歳である。

4) た-7区・溝23号一括

ウシのものと思われる細骨片6点で、僅か12gの出土である。

5) ち-4区・包含層(図版Ⅱの8参照)

ち-4区からは左上顎第三乳臼歯、右腕尺骨、右脛骨の3点が出土し、右腕尺骨は遠位4/1の資料で、遠位端の幅と径は70.79x32.02mmであり、これらの計測値から体高110.2cmと推定される。右脛骨は骨幹の一部分で計測不可能である。

6) ち-7区・包含層一括、溝21号一括(図版Ⅱの12参照)

包含層一括：右肩甲骨、左上腕骨の2点が出土され、いずれの小骨片のため計測不可能である。

溝21号一括：左脛骨1点の出土で、骨幹中央部分でその幅と径は32.62 x 36.63mmである。

7) つ-6区・包含層

つ-6区から臼歯片、脛骨片、その他細骨片など126gが出土しているが、計測可能な資料はない。

8) せ-10区・P636(図版Ⅰの7～11参照)

図1の7に示すように頭蓋を下に、仰向けの状態で埋葬されており、図の下の一対が上顎臼歯で、上の一対が下顎臼歯である。頭蓋骨と下顎骨は臼歯が咬みあうことなく分離した形で検出されているが、初めから顎関節で頭蓋骨と下顎骨を分離して埋葬されたのか、埋葬後の土圧で分離したかはわからない。臼歯は左上顎第四前臼歯～第二後臼歯、右上顎第三前臼歯～第二後臼歯、左右下顎第二、三後臼歯である。計測が可能な上顎第二後臼歯、下顎第三後臼歯(第135表参照)から体高や年齢は121.1cm、4歳と推定される。これは現生の口之島野生化牛の雄の大きさに匹敵する。

4. 考察

奄美諸島からのウシの出土例は、宇宿貝塚、長浜金久遺跡、泉川遺跡、西郷貝塚、根原遺跡および先山遺跡などにみられ、時代的には7～14世紀が多い。本遺跡から出土したウシ遺体は、2箇所(柱穴)から頭骨、溝遺構からは頭骨片と四肢骨片が検出されている。P521柱穴の頭蓋骨は柱穴の底に鼻部を、後頭部を上にして埋葬されており、これまで九州では経験したことのない埋葬例である。一般に当時のウシの用

途は農耕や運搬に使役されていたと言われ、また、山口県周防国府跡の井戸から検出されたウシの頭骨は、雨乞いなどの祭祀に用いられたと考えられている。本遺跡のP521とP636柱穴から出土した頭骨は、その用途はよくわからないが、五穀豊穡や雨乞いなど祭祀に用いられた可能性も考えられる。また、本遺跡では若い個体があることから食料とした可能性も考えられるが、骨に解体痕などがみられないことから、食料としたかはわからない。

一方、本遺跡から出土したウシは、5歳前後と2歳前後の年齢で、推定体高110～123cmであり、これは現代の黒毛和種の3/2位の大きさである。また、わが国の在来牛である口之島野生化牛の雌(110.9 ± 3.4cm)と雄(122.0 ± 2.5cm)とほぼ同じ大きさであり、骨の形態も良く似ていることが示唆された。

ウシがいつ頃、どこからわが国へ渡来したかは明らかでないが、在来牛の祖先は、欧州系のウシが中国華北から朝鮮半島を経由して、弥生時代以降に民族の移動に伴って北部九州に入り、日本列島を南下、北上して伝播したと言われている。その末裔として現在の十島村の口之島野生化牛や萩市の見島牛にその姿をみることができる。奄美諸島から出土するウシも恐らく日本列島を南下したウシの一群である可能性が考えられる。

以上のことから、本遺跡を造った人々は、ウシを農耕、運搬用として飼育して農作物を生産して、今回は魚介類の遺物は持ち込まれていないが、海に囲まれた島故に、恐らく動物蛋白質源としては魚介類を採集して食していたことが想像される。

5. まとめ

喜界町大ウフ遺跡(13～14世紀)から出土したウシ遺体について調査したので、その概要を報告する。

1. ウシ遺体はそる区～せ-10区から出土し、その区別・遺構別出土状況は第134表に示した。出土総重量は2062.8gで、そ-6区・溝20号からの出土が988.7gで最も多く、次いでそ-7区・溝23号の555.8g、ち-4区・包含層の2546gの順である。
2. P521とP636の柱穴からは、ウシの頭骨が検出され、特にP521柱穴の頭骨は吻部を下に、後頭部を上にして埋葬されており、左右、上下の臼歯は咬み合わさった状態で出土している。このウシの年齢と体高は、5.5歳、123.5cmで雄ウシと推定される。P636の個体は臼歯のみが検出されている。
3. 本遺跡から出土したウシは、頭蓋骨や脛骨の数が7個体以上と推定され、乳臼歯を持つ若い個体から5歳前後の成牛と3歳以下の若牛であり、推定体高110～123cmである。これらは現生の口之島野生化牛とほぼ同じ大きさであり、骨の形態も類似している。
4. 大ウフ遺跡を造った人々は、漁撈の傍らウシを農耕や運搬用として飼育し、農作物を生産していたことが示唆される。

第 134 表 大ウフ遺跡出土のウシ遺体の区・遺構別出土量

出土区	遺 構	出 土 歯・骨	区別重量
そー5区	溝 18	右下顎骨(第一前臼歯～第二後臼歯)	84.2
そ・たー6区	溝 20	上顎骨(右第二乳臼歯～第一後臼歯) 左上顎 第二乳臼歯 頸椎 胸椎(4) 腰椎(2) 左肋骨(2) 右肋骨 左肩甲骨(3) 左右肋骨 右中手骨 右腕骨 右大腿骨(2) 左大腿骨 右脛骨(3) 左脛骨 その他頭蓋骨細骨片など	988.7
そー7区	P521	左上顎骨(第二前臼歯～第二後臼歯) 右上顎骨(前臼歯～第三後臼歯) 左右下顎骨(第二前臼歯～第三後臼歯) 頭蓋骨細骨片	620.3
たー7区	溝 23	細骨片	1.2
ちー4区	包含層	乳臼歯片 右橈尺骨 右脛骨	254.6
ちー7区	包含層	右肩甲骨 左上肋骨	31.7
	溝 21	左脛骨	78.3
つー6区	包含層	臼歯片 脛骨片 細骨片	12.6
せー10区	P636	左上顎第四前臼歯～第二後臼歯 右上顎第三前臼歯～第二後臼歯 左右下顎第二、三後臼歯	54.2
出土地点不明		細骨片	1.5
総 出 土 骨 量 (g)			2127.3

第 135 表 大ウフ遺跡出土の上、下顎臼歯の計測値 (mm)

	P ²			P ³			P ⁴			M ¹			M ²			M ³		
	歯長	歯幅	中心高	歯長	歯幅	中心高	歯長	歯幅	中心高									
上顎臼歯	P ²			P ³			P ⁴			M ¹			M ²			M ³		
そー6・P521																		
左	19.72			20.23	15.49		18.27	18.86		24.17	21.74		30.95	24.61	36.97			
右	17.20			18.00			18.15	18.04		22.00	20.61		30.88	21.65	37.49	32.19	21.43	35.88
せー10・P636										24.83			28.48			37.65		
左													26.33					
右													26.33					38.50
下顎臼歯	P ²			P ³			P ⁴			M ¹			M ²			M ³		
そー5・溝 18																		
右	13.48			20.66			20.90			28.67	37.13		31.83		45.35			
そー6・P521																		
左	12.15	18.51		21.00	11.67		22.46	14.88		26.81	14.48		27.40	14.13		40.42	14.96	42.81
右	12.49	19.15		21.69	10.25		22.49	13.67		23.66	14.37	17.72	27.73	14.50		40.75	14.85	43.99
せー10・P636													28.23			12.28		
左													27.27	12.00	38.01			
右													27.27	12.00	38.01			

P²～M³: 上顎第二前臼歯～第三後臼歯 P²～M³: 下顎第二前臼 第三後臼歯

参考文献

1. Driesch, A: A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum.
2. 鹿児島県教育委員会: 鹿児島県市町村別遺跡地名表, pp.1-175 (1977)
3. 金子浩昌他: 第2方形周溝墓西溝出土の家ウシ頭骨, 伊子皿子貝塚, pp.476-486, 港区伊皿貝塚遺跡調査会, 東京(1973)
4. 喜界町教育委員会: 先山遺跡, 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1), 36-37 (1987)
5. 並河鷹夫: 遺伝学より見た牛の家畜化と系統史, 日畜会報, 51 (4), 235-246 (1980)
6. 西中川 駿他: 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究, 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B) 研究成果報告書, pp1-197 (1991)
7. 西中川 駿他: 鹿児島県の縄文, 弥生遺跡出土の自然遺物-特に動物遺体について-, 鹿児島考古, 33, 1-13 (1999)
8. 西中川 駿他: 九州の縄文遺跡出土の哺乳類遺体, 鹿児島考古, 38, 53-64, (2004)
9. 芝田清吾: 日本古代家畜史の研究, pp.190-293, 学術出版会 (1969)
10. 在来家畜研究会編: アジアの在来家畜, pp.117-159, 名古屋大学出版会 (2009) (鹿児島大学名誉教授)

図版の説明

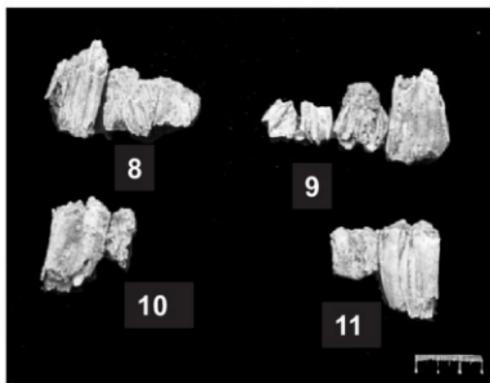
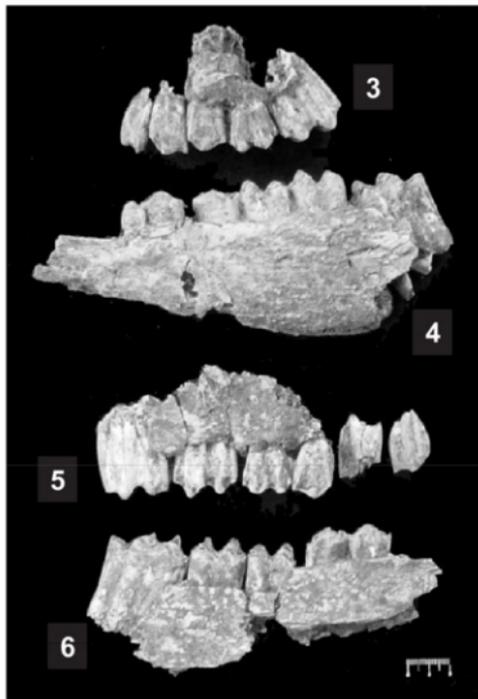
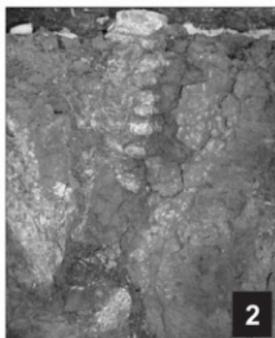
図版1 ウシ 1~6:そ・7区・P521 7~11:せ・7区・P636 (いずれも頬側面)

1. P 521 柱穴の上下顎骨 (左側)
2. 左側下骨を取り除く
3. 左上顎白歯 (左から第二~四前白歯, 第一, 二後白歯)
4. 左下顎骨 (左第二~四前白歯, 第一~三後白歯)
5. 右上顎骨 (右から第二~四前白歯, 第一~三後白歯)
6. 右下顎骨 (第二, 三, 四前白歯, 第一~三後白歯)
7. P 636 柱穴の上下, 左右の白歯
8. 右から右上顎第四前白歯~第二後白歯
9. 左から左第三前白歯~第二後白歯
10. 左から右下顎第一, 二後白歯
11. 左から左下顎第一, 二後白歯

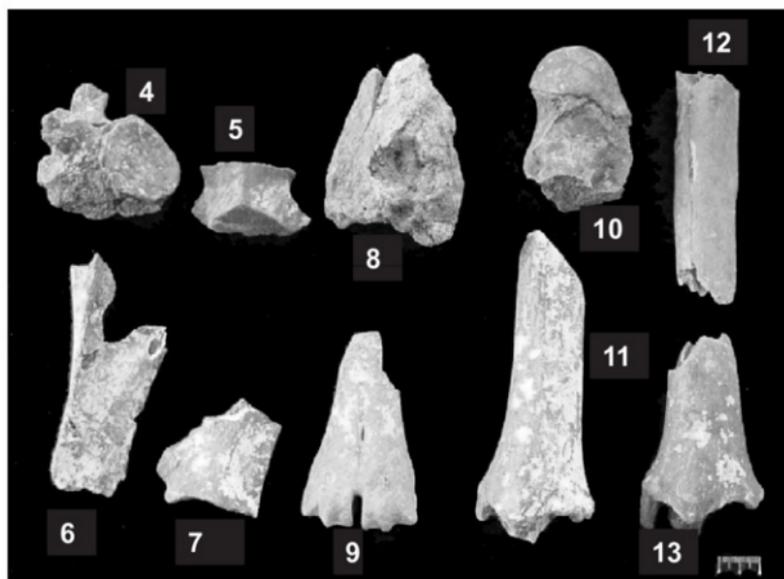
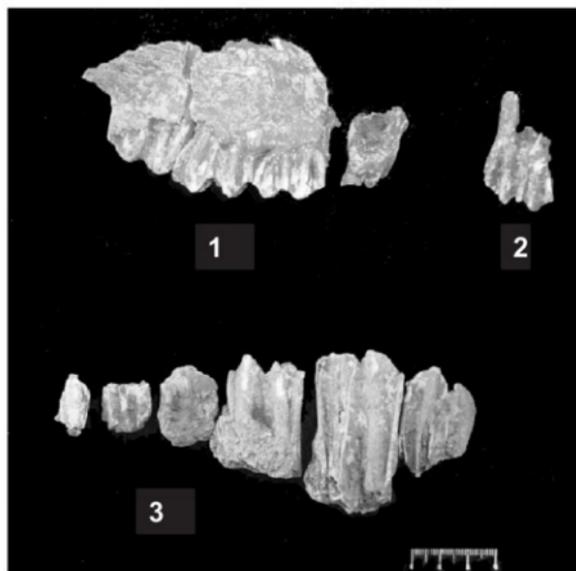
図版2 ウシ 1, 2:そ・6溝3 3:そ・5区・溝5 4:た・6区・溝3 5~7, 9~11, 13:そ・6区溝3 8:ち・4区 12:ち・7区

1. 右側上顎骨 (頬側面, 右から第二~四乳白歯, 第一後白歯)
2. 左側第三乳白歯
3. 右下顎白歯 (舌側面, 左から第二~四前白歯, 第一~三後白歯)
4. 第五頸椎
5. 後位頸椎
6. 左肩甲骨
7. 左肩甲骨
8. 右腕尺骨
9. 右中手骨
10. 右大腿骨
11. 右脛骨
12. 左脛骨
13. 右脛骨

图版 1



图版 2



1. はじめに

奄美諸島からの動物遺体の出土例は、縄文時代から近世までに30数ヶ所を数え、出土した哺乳類は、アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、イヌ、ウシ、ウマおよびジュゴンなどであり、その他貝類、魚類、ウミガメ、カニなどの出土が報告されている。一方、喜界町からの動物遺体の出土例は、これまで縄文前期の総合グランド遺跡、晩期の湾天神遺跡や伊実久貝塚、それに先山遺跡（7～12世紀）、掘り遺跡（中世）、和早地遺跡（14～15世紀）などからの報告がみられ、とくに先山遺跡からはイノシシ、ウシ、ウマの遺体が検出されている。また、前回は引き続き今回調査を依頼された大ウフ遺跡は、喜界町大字城久字大ウフにあり、県営畑地帯総合整備事業のために喜界町教育委員会が平成19年4月～10月と平成20年12月～21年3月まで発掘調査を行い、古代末から中世の遺構、遺物が出土した遺跡である。前回はウシのみの出土であったが、今回はウマやヤギなどが含まれており、ここではその出土状況や出土量について概要を報告する。なお、計測可能な歯や骨についてはDriesschの方法に従い測定を行い、ウシ、ウマについては筆者らの方法で年齢や体高の推定を試みた。

2. 動物遺体の出土量

平成19年度調査の大ウフ遺跡はA、B、C区からなり、調査区別、動物別の出土重量と骨片数は第136表に示した。出土した動物遺体はA区で32.4g（骨片数8個、以下同じ）、B区130.8g(5)、C区125.1g(7)で、総重量は288.3g(20)である。そのうち動物種が同定されたものは272.2g(20)で、微細骨片のために同定できなかったものが16.1gあった。また、出土動物種はウシが殆どで、全体の92.9%を占め、他に魚類のハリセンボン1点のみがみられた。

平成20、21年度調査の動物遺体は、え区からつ区および表土一括の10区から検出されており、その調査区別、動物別の出土重量と骨片数は第137表に示した。出土量の最も多いのはその区の1045.3g(64個)で、次いでた区の781.1g(5)、表土一括114.7g(6)、ち区40.9g、さ区39.7g、つ区28.3gの順であり、他は極めて少量である。総出土量は2105.0g(159骨片)で、そのうち動物種が同定されたものは、1954.1g(100個)である。なお、骨片数の中には微細骨片のため1袋を1個とカウントしたのものも含まれている。出土動物種はウシが1670.1(76個)で、全体の85.5%を占め、次いでウマ214.8g(10)で、ヤギ、イノシシ、ネズミおよびサメなどが少量含まれている。

3. 動物遺体の出土状況とその概要

平成19年度調査

1) A区（図版1の1参照）

A-2II一括から子ウシの右上顎第二前乳臼歯1個が検出され、その歯冠長と幅は17.4×10.1mmである。A-3IIb一括からはウシの臼歯片が出土しているが、細歯片のため歯の種類は同定できない。また、A-10IIaからの資料はウシのものであるが細骨片のため骨の種類は同定が不可能である。

2) B区（図版1の2～6、9参照）

B-3IIa一括からはウシの右上顎第三後臼歯と左下顎第二後臼歯が検出され、その歯冠長、幅、中心高は、それぞれ28.5×16.9×34.0mm、29.6×13.3×41.7mmである。右上顎第三後臼歯の歯冠長から筆者らの方法で、臼歯列長、頭蓋長を求め、体高を推定すると108.6cmで、中心高から年齢を推定すると6歳である。下顎第二後臼歯からのそれらは123.9cm、4歳と推定される。B-3IIb一括からは右上顎第二後臼歯1個が検出され、その歯冠長と幅は25.1×22.1mmである。B-4IIb一括からは右上顎第三後臼歯が出土し、その歯冠長と幅は27.9×22.8mmである。B-6IIbからはハリセンボンの上顎骨が検出されている。B-9IIa一括からは右上顎第四前臼歯が検出され、その歯冠長と幅は19.78×18.9mmである。他のB-2、6、8、10区からはウシの臼歯片が出土しているが細片のため歯の種類を同定することはできない。

3) C区（図版1の7、8参照）

C-4IIa一括からはウシの右下顎第三後臼歯が検出され、その歯冠長、幅、中心高は29.9×11.6×45.8mmであり、体高123.9cm、年齢5歳と推定される。また、C-9一括からは左腕骨の遠位端が出土している。C-5a、6IIa、7からはウシの下顎臼歯片がみられるが、種類を同定することはできない。

平成20、21年度調査

1) え区

え-3・4区表土から細骨片2.2gが出土している。ウシのものと思われるが、骨の種類は同定できない。

2) く区（図版1の10参照）

く-9区からはサメの歯1点が検出されており、最大長と歯根部の幅、径は21.5×13.7×5.4mmである。

3) け区（図版1の11～14参照）

け-98からサメの椎骨5点とウシの細骨片2点が出土しており、サメの椎骨は、ほぼ完全なもの2点と破片3点で、完全な椎骨の幅と径は30.7×28.2mmである。ウシは細骨片のため骨の種類は同定できない。

4) さ区 (図版Ⅰの15参照)

さ・8・9・10一括からウシの右上顎第三後臼歯1点が検出され、その歯冠長、幅、中心高は31.7×21.4×60.6mmであり、歯冠長から前述の方法で体高を求めると119.7cmで、中心高から3歳と推定される。さ-10包含層からはウシの臼歯片がみられる。

5) せ区 (図版Ⅰの16参照)

せ-4、8からウシの臼歯片とせ-11からウシの脛骨片など5点が出土しているが計測可能な資料はない。

6) そ区 (図版Ⅰの17～28、Ⅱの1～8参照)

そ-3溝8号からは、子牛の切歯、上顎乳臼歯、成牛の左右踵骨、寛骨片、大腸骨片、肋骨片、細骨片やネズミの右下顎骨など36点が出土している。ウシのほぼ完全な右踵骨の保存長は113.3mmで、これより筆者らの方法で体高を推定すると108cmであり、これは白之鳥野生化牛種とはほぼ同じ大きさである。ネズミの下顎骨は切歯を有し、ハタネズミの大きさで、形態はドブネズミに似ている(図版Ⅰの28)。そ-4からはウシの右下顎第三後臼歯、そ-4溝10号からはヤギの右上顎第二後臼歯が検出され、ウシの後臼歯の歯冠長と幅は27.8×19.1mmで、ヤギの後臼歯の歯冠長、幅、最大長は14.1×9.2×30.5mmであり、形状は現生のトカラヤギに似ている(図版Ⅰの27)。そ-5からはウシの臼歯片、指骨片、その他細骨片など7点が検出されている。そ-6溝20号からはウシの腰椎、左肩甲骨2点、左上腕骨2点片、細骨片など10点が出土しており、腰椎の最大長は58.9mmで、椎頭の幅と径は51.4×35.2mmである。肩甲骨の遠位端の径は54.6mm、上腕骨の最小径は40.3mmであり、これより骨長を推定し、体高を求めると112cmである。これらの他、そ-7からは牛の切歯片1点、そ-11IIaからはウシの左上顎第三後臼歯片と臼歯片の2点、そ-12からはウシの臼歯片と細骨片の2点、そ-98・99からはウシの臼歯片など3点が出土している。

7) た区 (図版Ⅱの9～24参照)

た-2Ⅰ層一括からウシの右肩甲骨と臼歯片の2点が検出され、肩甲骨頭の幅と径は51.7×22.1mm、関節窩の幅と径は58.0×49.3mmである。肩甲骨の計測値から体高を推定すると116cmである。た-3溝18号からはウシの手根骨片、左中手骨片、左第二、三指骨片、沢山の臼歯片と乳臼歯など23点が出土している。中手骨の遠位端の径は26.6mmであり、左下顎第二後臼歯の歯冠長と幅は28.6×12.9mmで、左下顎第三乳臼歯のそれらは35.3×22.3mmである。た-4からはウシの左下顎第二後臼歯を有する下顎骨片と臼歯片2点が検出され、た-6からはウシの前位の胸椎片1点と表土一括からはウシの胸椎、ウマの頸椎、右肋骨、左肋骨の3点とヤギの左下顎第一後臼歯とヤギのものと思われる右脛骨が出土している(図版Ⅱの22～24)。ウシ、ウマの資料は計測不可能であるが、ヤギの臼歯の歯冠長、幅、中心高は11.8×6.6×31.5mmであり、また、脛骨の中央幅と径は17.7×15.9mmである。た-7溝2号からはウシの第四趾末節骨1点の出土で、保

存長と幅は46.4×18.5mmである。た-9近世石敷面からはウマの左上顎切歯第二、三切歯が検出され(図版Ⅱの17、18)、これらの歯冠幅、径、最大長はそれぞれ15.1×11.5×63.5、16.7×8.9×62.2mmであり、8歳と推定され、形態はトカラウマに類似する。た-11溝20号からウシの長骨の細骨片など3点、た-12溝20号からは5点の細骨片が検出されているが、計測は不可能である。

8) ち区

ち-6・7溝21号からはウシの小骨片多数がみられ、ち-7からは細骨片が、ち-9、10からはウシの臼歯片が検出されているが、いずれも計測不可能である。

9) つ区

つ-4・5一括からはウマの切歯片、つ-6からはウシの臼歯片と細骨片が検出されている。つ-7一括からはウマの右上顎第二切歯が検出され(図版Ⅱの19)、その歯冠幅、径、最大長は14.6×10.2×60.7mmである。

10) 表土一括(区を表示なし、図版Ⅱの25～30参照)

区に記載のない表土一括からはウシ、ウマ、ヤギ、イノシシの遺体が検出され、ウシは左上顎第三後臼歯で、その歯冠長、幅、中心高は、26.8×25.5×48.9mmで、体高108.1cm、年齢4歳と推定される。ウマは左上顎第一後臼歯、右上顎第二後臼歯、左下顎第二前臼歯で、下顎第二前臼歯と上顎第二後臼歯の歯冠長、幅、中心高は、それぞれ28.0×13.1×19.3mm、26.9×25.5×48.9mmで、中心高より年齢を推定すると14歳と8歳であり、第二前臼歯歯冠長より臼歯列長、頭蓋最大長を求め、林田らの方法で体高を推定すると116cmである。また、ヤギは左上顎第一後臼歯が出土し、歯冠長と幅は12.9×8.6mmである。イノシシのものとと思われる右上腕骨は両骨端がなく、骨体最小径とは18.1×22.2mmで、現生のリュウキュウイノシシより大きい。

以上、大塚ク遺跡出土の動物遺体について述べたが、19年度調査区ではウシは4体以上、20・21年度ではウシは少なくとも8体以上で、ウマは歯のみの出土であるが4体以上と推測される。

4. 考察

大塚ク遺跡の前回の調査では、ウシの遺体のみの出土であったが、今回はウシの他、少量のウマ、ヤギ、イノシシの出土がみられ、また、ネズミの下顎骨片1点とサメの歯や椎骨などが検出されている。

奄美諸島からのウシの出土例は、宇宿貝塚、長浜金久遺跡、泉川遺跡、面縄貝塚、根原遺跡および先山遺跡などにみられ、時代的には7～14世紀が多い。本遺跡から出土したウシの遺体は、各調査区から出土しているが、定形骨は極めて少なく、臼歯片や長骨の一部と細骨片であり、同定するのに時間を要した。

前回は2ヶ所の柱穴から頭骨、溝状遺構からは頭骨片と四肢骨片が検出され、頭蓋骨は柱穴の底に鼻部を、後頭部を上

にして埋葬されており、これまで九州では経験したことのない埋葬例であったが、今回の出土状況はえ区からつ区まで、集中的にみられるのではなく、散逸的に出土している。

本遺跡から出土したウシは、3～6歳前後で、推定体高108～123cmであり、これは現代の黒毛和種の3/2位の大きさである。また、わが国の在来牛である口之島野生化牛の雄(1225±28cm)、雌(110.9±3.4cm)とはほぼ同じ大きさであり、骨の形態も良く似ていることが示唆された。本遺跡のウシの用途はよくわからないが、一般的には当時のウシは農耕や運搬に使役されていたと言われ、本遺跡では農耕や運搬の他に、乳白歯をもつ個体もみられたことから、子ウシの生産も行われていたことがうかがわれる。

一方、奄美諸島にウマの出土例は、笠利町の宇宿貝塚、和泊町の根原遺跡から白歯が出土し、また、喜界町の先山遺跡からは左上顎第二後臼歯、左下顎第二後臼歯、踵骨などが出土し、大きさは現生のトカラウマとはほぼ同じ大きさであったと報告されている。本遺跡のウマの臼歯の計測値から年齢と体高を推定すると、8～14歳で116cmであり、現生のトカラウマによく似たタイプのウマであったことが想像される。

ウシやウマがいつ頃、どこからわが国へ渡来したかは明らかでないが、在来牛の祖先は、欧州系のウシが中国華北から、ウマは蒙古系のウマが朝鮮半島を経由して、弥生時代以降に民族の移動に伴って北部九州に入り、日本列島を南下、北上して伝播したと言われている。その末裔として現在の十島村の口之島野生化牛や萩市の見島牛に、ウマは御崎ウマトカラウマにその姿をみることができる。奄美諸島から出土するウシやウマは恐らく日本列島を南下したウシやウマの系統である可能性が考えられる。

ヤギは鹿児島県本土では出土していないが、和泊町の根原遺跡から切歯、臼歯など6点が初めて出土し、その形状と大きさは現生のトカラヤギに類似していたことが報告されている。本遺跡のヤギも小型のものであることから、根原遺跡のものと同様に、トカラヤギとよく似た形質と大きさをもつヤギで、食用として飼育されていたのであろう。

イノシシは奄美の遺跡からはよく出土しており、その形態はリュウキュウイノシシ似て小型である。しかし、今回イノシシと同定した1点の資料は、リュウキュウイノシシよりも大きいことからブラと判断した方がよいのかもしれない。また、ネズミの切歯を有する下顎片1点が検出されているが、当時のものが後世の混入かはわからない。サメの歯や椎骨がみられたが当時の人々が食料としたものであろう。

以上のことから、本遺跡を遺した人々は、ウシを中心にウマも農耕、運搬用として飼育して農作物を生産して、海に囲まれた島故に、恐らく動物蛋白源としてはサメや魚介類を採集して食していたことが想像される。

5. まとめ

喜界町大ウフ遺跡(平成19年度、平成20・21年度調査、古代末～中世)から出土した動物遺体について調査したので、その概要を報告する。

1. 平成19年度調査区はA～C区からなり、動物遺体の出土量はA区32.6g、B区130.8g、C区125.1gで、総重量288.3g(骨片数30個)であり、各区の出土状況は第136表に示した。各区ともに殆どがウシの上、下顎の臼歯と破損した臼歯片で、B区からハリセンボンの上顎骨1点が出土している。ウシの臼歯の計測値から年齢を推定すると、3～5歳である。
2. 平成20・21年度調査区はえ区からつ区および表土一括からなり、動物遺体の出土量は総重量2105.0g(骨片数159個)で、最も多いのはその区1045.3g(64骨片)で、次いでた区の781.1gであり、他の区は少ない(表2参照)。出土した動物遺体はウシ、ウマ、ヤギ、イノシシ、ネズミおよびサメのものである。
3. ウシは、え区から表土一括まですべての調査区から臼歯片や細骨片が出土し、また、その区からは左右の踵骨や寛骨、大腿骨片が、た区からは肩甲骨、中手骨などが出土している。年齢は乳臼歯を持つ若い個体から6歳前後の成牛であり、また、推定体高108～123cmであり、大きい方は雄で、小さい方は雌である。これらは現生の口之島野生化牛とはほぼ同じ大きさであり、歯や骨の形態も類似している。
4. ウマは、た9区から左下顎切歯、つ7区のから右下顎切歯、表土一括から上、下顎切歯が出土し、これらの計測値から体高116cm、年齢8～14歳と推定され、現在のトカラウマと同じ大きさである。ヤギはその3区、た6区、表土一括から上、下顎臼歯、脛骨片が出土し、大きさはトカラヤギの大きさである。イノシシは上腕骨1点の出土であるが、現生のリュウキュウイノシシより大きい。ネズミはその3区から切歯を有する下顎片1点の出土で、ドブネズミの大きさである。
5. 大ウフ遺跡の資料から、当時の人々は、ウシを中心にウマも農耕や運搬用として飼育して農作物を生産し、動物蛋白源としては魚類やサメなど魚貝類を食していたことが想像される。

第 136 表 大フク遺跡 (19 年度調査) の調査区別、動物別出土量

		ウシ	ハジセンボン	種不明	調査区別出土量
A 区	A-2	6.7(2)		1.8(3)	8.5(5)
	A-3	4.0(1)		3.1(1)	7.1(2)
	A-10	16.8(1)			16.8(1)
B 区	B-2	2.9(1)			2.9(1)
	B-3	62.0(3)		4.2(2)	66.2(5)
	B-4	21.1(1)			21.1(1)
	B-6		4.5(1)	1.9(1)	6.4(2)
	B-7	2.0(1)			2.0(1)
	B-8	5.8(2)			5.8(2)
	B-9	18.2(2)			18.2(2)
	B-10	8.2(1)			8.2(1)
C 区	C-4	20.8(1)			20.8(1)
	C-5	1.7(1)		5.1(2)	6.8(3)
	C-6	10.7(1)			10.7(1)
	C-7	5.5(1)			5.5(1)
	C-9	81.3(1)			81.3(1)
動物別出土量		267.7(9)	4.5(1)	16.1(9)	288.3(9)

重量：g ()：骨片数。中には細骨片のため1袋を1個と数えたものも含む
種不明：細骨片のため特定不可能な資料。

第 137 表 大フク遺跡 (21 年度調査) の調査区別、動物種別出土量

出土区/動物種		ネズミ	イノシシ	ウシ	ヤギ	ウマ	サメ	種不明	調査区別出土量
え 区	え-3・4			2.2(1)					2.2(1)
く 区	く-98						0.4(1)		0.4(1)
け 区	け-98			2.0(2)			18.7(5)		20.7(7)
さ 区	さ-3			0.2(1)					0.2(1)
	さ-8・9・10			39.5(1)					39.5(1)
	せ-4			8.2(2)					8.2(2)
ぜ 区	ぜ-6							2.8(1)	2.8(1)
	ぜ-8			1.8(1)					1.8(1)
	ぜ-11			4.6(1)					4.6(1)
	そ-3	0.1(1)		534.8(9)			26.3(9)		561.2(9)
そ 区	そ-4			33.0(2)	3.8(1)				36.8(3)
	そ-5			89.3(4)			16.1(3)		105.4(7)
	そ-6			245.9(6)			21.1(4)		267.0(9)
	そ-7			2.0(1)					2.0(1)
	そ-11			23.5(1)				0.5(1)	24.0(2)
	そ-12							5.8(2)	5.8(2)
	そ-98・99			41.6(2)				1.5(1)	42.1(3)
	た 区	た-2			67.7(1)				1.4(1)
た-3			219.4(9)				49.3(8)	268.7(9)	
た-4			45.7(1)				2.4(1)	48.1(2)	
た-6			42.3(1)	22.8(3)	310.0(3)			175.1(7)	
た-7			11.1(1)					11.1(1)	
た-9						19.2(2)		19.2(2)	
た-11			28.4(1)				2.6(2)	31.0(3)	
た-12			142.2(3)				11.3(3)	153.5(6)	
た-97					5.3(1)			5.3(1)	
ち 区	ち-6・7			34.8(1)					34.8(1)
	ち-7							2.4(3)	2.4(3)
	ち-10			3.7(1)					3.7(1)
つ 区	つ-5・4					4.7(1)		1.7(1)	6.4(2)
	つ-6			9.0(1)				3.7(6)	12.7(7)
	つ-7						9.2(1)		9.2(1)
表土一括			15.8(1)	37.2(1)	2.3(1)	71.7(3)		2.0(1)	114.7(6)
動物別出土量		0.1(1)	15.8(1)	1670.1(9)	34.2(6)	214.8(9)	19.1(6)	150.9(9)	2105.0(159)

重量：g ()：骨片数。骨片数の中には、細骨片のため1袋を1個と数えたものも含む
種不明：細骨・歯片のため種を特定できないもの

参考文献

1. Driesch, A: A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ., USA, pp. 1-137 (1976)
2. 林田重幸・山内忠平: 馬における骨長より体高の推定法. 鹿大農学術報告, 4, 70-77 (1957)
3. 鹿児島県教育委員会: 鹿児島県市町村別遺跡地名表, pp. 1-175 (1977)
4. 金子浩昌他: 第2方形周溝墓西溝出土の家ウシ頭骨, 伊予里子貝塚, pp.476-486, 港区伊里御貝塚遺跡調査会, 東京 (1973)
5. 喜界町教育委員会: 先山遺跡, 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1), 36-37 (1987)
6. 並河鷹夫: 遺伝学より見た牛の家畜化と系統史, 日畜会報, 51 (4) 235-246 (1980)
7. 西中川 駿他: 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究, 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B) 研究成果報告書, pp.1-197 (1991)
8. 西中川 駿他: 鹿児島島の縄文, 弥生遺跡出土の自然遺物 -特に動物遺体について-, 鹿児島考古, 33, 1-13 (1999)
9. 西中川 駿他: 根原遺跡出土の動物遺体, 根原遺跡, 和泊町埋蔵文化財調査報告書, 4, 69-75 (2009)
10. 芝田清吾: 日本古代家畜史の研究, pp.190-293, 学術出版社 (1969)
11. 在来家畜研究会編: アジアの在来家畜, pp.117-159, 名古屋大学出版会 (2009) (鹿児島大学名誉教授)

図版の説明

図版1 1～8, 15～26: ウシ 9: ハリセンボン 10～14: サメ 27: ヤギ 28: ネズミ

1: A-2II一括 2: B-9II一括 3: B-3IIb 4: B-4IIb一括
5: B-3IIb 6: B-3IIa一括 7: C-4IIa一括 8: C-9一括 9:
B-6IIb 10: く-98E 11～ 14: け-98 15: さ-8, 9, 10一括
16: せ-11 17～23, 24: そ-4P 25: そ-5表土 26:
そ-11IIa 27: そ-4溝16, 28: そ-3溝18

1. 左上顎第二乳臼歯 2. 右上顎第四前臼歯 3. 右上顎第三後臼歯
4. 左上顎 第三後臼歯 5. 左上顎第二後臼歯 6. 左下顎第二後臼歯
7. 右下顎第三後臼歯 8. 左腕骨 9. 上顎骨
10. 歯 11～14. 椎骨 15. 右上顎第三後臼歯 16. 左脛骨
17. 右から左第一, 二切歯 18～20. 左上顎第二～乳臼歯
21～23. 右上顎第二～四乳臼歯 24～26. 左上顎第三後臼歯
27. 右上顎第二後臼 28. 右下顎骨

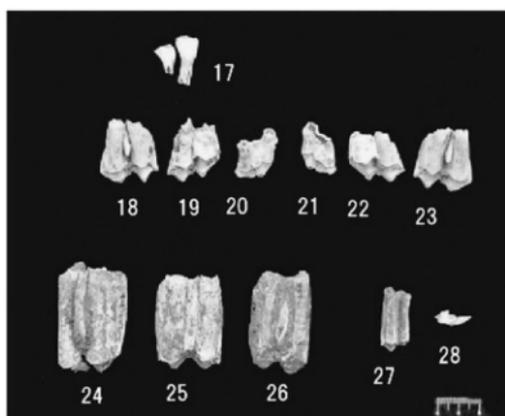
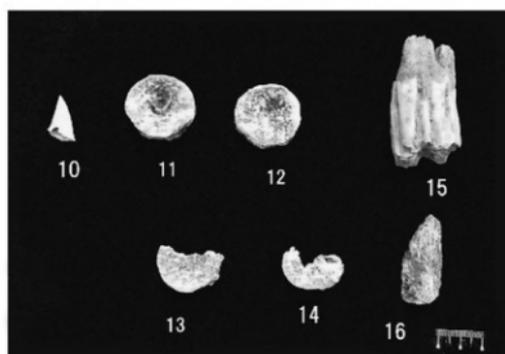
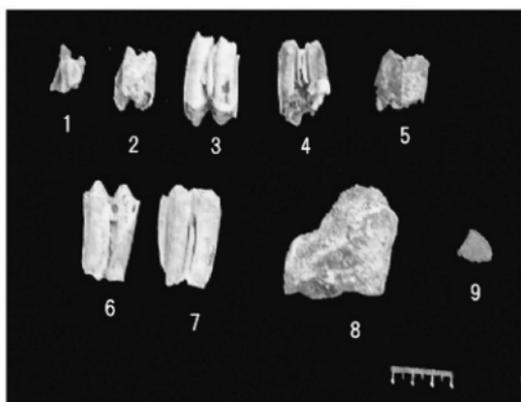
図版2 1～16, 25: ウシ 17～21, 26～28: ウマ 22～24: ヤギ 30: イノシシ

1: そ-6溝3 2, 5～8: そ-3溝18 3: そ-3溝12 4:
そ-6溝12 9～11, 15, 16: た-3溝18 12, 13: た-6一括

14: た-2溝落ち込 17, 18: た-9石敷面 19: つ-7一括
20～24: た-6溝3 25～30: 表土一括

1. 腰椎 2. 右肋骨 3. 左肩甲骨 4. 左上腕骨 5. 左寛骨 6. 左大腿骨 7. 右踵骨 8. 左踵骨 9. 右上顎第四乳臼歯 10. 左下顎第四乳臼歯 11. 左下顎第一後臼歯 12. 胸椎 13. 肋骨 14. 右肩甲骨 15. 右中手骨 16. 右第四趾末節骨 17. 左上顎第二切歯 18. 左上顎第三切歯 19. 右上顎第二切歯 20. 頸椎 21. 左脛骨 22. 左下顎第一, 二後臼歯 23. 右脛骨 24. 右脛骨 25. 左上顎第三後臼歯 26. 左上顎第一後臼歯 27. 左上顎第二後臼歯 28. 左下顎第二前臼歯 29. 左上顎第一後臼歯 30. 右上腕骨

图版 1



图版 2

